宮城県文化財調査報告書第181集

名 生 館 遺 跡
下草古城本丸跡ほか

平成11年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

宮城県では遠く旧石器に遡るものから、近世にいたるまで各時代の遺跡が数多く知られています。これらはいずれも私達の祖先が築き上げた歴史を究明してゆく上で不可欠な文化財であることはいうまでもありません。このような貴重な文化遺産を守り、後世に伝えることは、私達にとって大きな責務であると考えております。

近年においては、これまでの開発優先のあり方に対する反省から、文化財や自然を大切にしようとする動きが浸透しつつあります。こうした状況のなか、重要な遺跡を現状保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする動きが広がってきていることは、文化財保護思想のより一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では頻発する開発行為により、遺跡のいくつかは記録保存の名のもとに、減失する聞きにさらされているのも実情です。このことに対し、宮城県教育委員会では、各市町村教育委員会とともに、遺跡や所在や範囲等について関係者への周知を図りながら、開発工事とのかかわりが生じた際には、十分な協議・調整を重ね、可能な限り現状保存に努めているところです。

本書は、開発関係機関等との保存協議に基づき。平成10年度に国庫補助を得て実施した発掘調査および、その他の事業に伴う確認調査等の報告書を収録したものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、調査に際しては多大なるこ協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成11年3月

宮城県教育委員会教育長

遠 藤 嘉 彬

目　　次

平成10年度発掘調査の概要
名生館遺跡……1
下草古城本丸跡……81
寺下遺跡……117
白石城跡……131

例　　言

1．本書は宮城県が平成10年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査の報告書である。
2．各遺跡の発掘調査から調査報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3．各遺跡の保存協議や発掘調査に当たっては、開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
4．本書に使用した土色の記述は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を参照した。
5．本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
6．本書に使用した下記の地形図については併記の都市計画図を複製し使用した。
　白石城跡　第2図　白石市都市計画図（1/2,500）Ｘ－ＲＤ　45－1・35－3
7．本書の図中の座標値は、国家座標第Ⅹ系による。
8．本書は調査員全員の協議を経て、下記の者が執筆・編集した。

平成10年度発掘調査の概要	真山　悟
名生館遺跡	天野順陽
下草古城本丸跡	藤村博之
寺下遺跡	西村　力
白石城跡	古川一明

9．発掘調査、整理・報告書の作成に当たって、次の方々および機関からご助言ご教示をいただいた（五十音順・敬称略）。
　佐藤信行・中橋彰吾・藤沢敦・藤原二郎・本田泰貴
10．発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

平成10年度発掘調査の概要

宮城県教育委員会が平成10年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金(総事業費8,000千円、補助率50%)を得て実施した発掘調査は3ケ所、分布調査地域は2市4町である（表1）。

名生館遺跡は古川市大崎の台地上にある国指定史跡である。平成7年度に指定地の西～南側が県営ほ場整備事業とかかわったため。平成9年度に宮城県教育委員会が確認調査を実施した。その結果、古代～中世の遺構の存在が明らかになったので、関係機関と保存協議行い、工事の際、掘削を避ける方向での協力を得た。今年度はやむを得ず掘削される排水路部分を対象に事前調査を実施したもので、旧石器時代の細石刃石器群・弥生時代後期の住居跡・古墳時代の土器埋設遺構・円形周溝・古代の土壙墓・合わせ口甕棺・中世の溝跡などを発見している。

下草古城跡は黒川郡大和町鶴巣の沖積地にある遺跡で、伊達政宗の三男宗清の居城とされている平城跡である。この遺跡は昭和63年に県営ほ場整備事業にかかわりをもったため、宮城県教育委員会は平成3年度から発掘調査を進めている。そしてこれまで本丸と二の丸を除く周辺地区から、17世紀初頭頃の町並みの概要が明らかになり、加えて古代や古墳時代の遺構も検出している。今年度は本丸部分を対象に遺構の内容を把握するための確認調査を実施しており、主屋跡・塀跡・門跡・井戸跡などを検出する成果があった。なお当本丸部分は現状保存されることになっている。

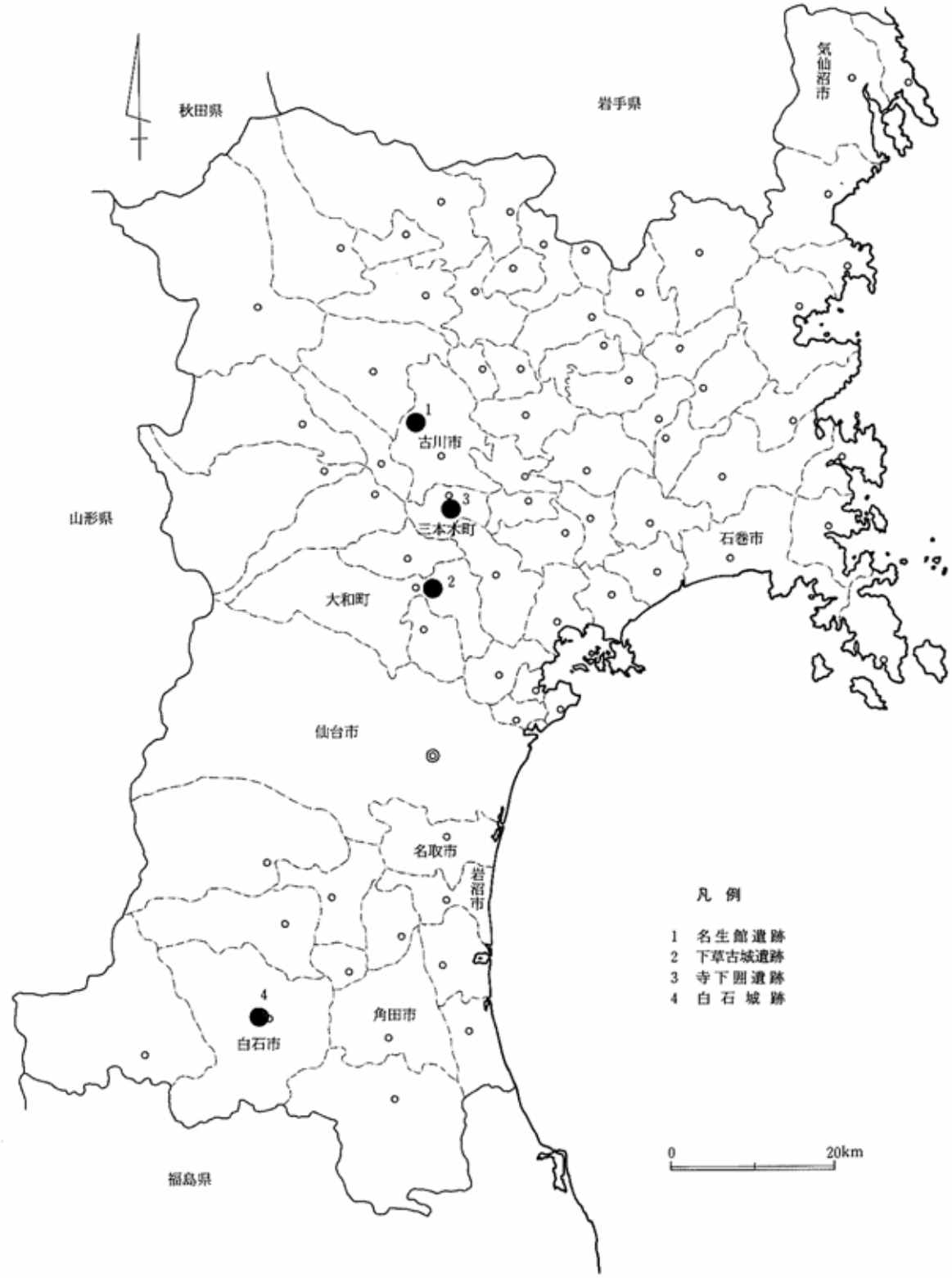
寺下遺跡は志田郡三本木町蟻ケ袋にある。鳴瀬川右岸の小丘陵上に立地する縄文時代の集落跡で、個人住宅建築に伴って調査を実施した結果、縄文時代中期の住居跡・炉跡・土壙・溝などを検出し、これまで明確でなかった当地域の縄文時代集落の一端が明らかになった。

このほか国庫補助事業以外のもので、県立高等学校体育館建設に伴って実施した白石城跡の確認調査結果も併せて収録している。

平成10年度国庫補助事業一覧

No.	遺跡名	所在地	調査種類	事業種類	開発担当者
1	名生館遺跡	古川市大崎	発掘調査	県営ほ場整備	古川農林振興事務所
2	下草古城跡	黒川郡大和町鶴巣字下草	確認調査	県営ほ場整備	仙台農林振興事務所
3	寺下遺跡	志田郡三本木町蟻ケ袋	発掘調査	住宅建築	個人
4	砂崎遺跡	登米郡迫町新田	確認調査	土取工事	
5	師山遺跡他	古川市他2市4町	分布調査	県営ほ場整備他	宮城県農政部

宮 城 県 全 図


秋田県
岩手県
気仙沼市
山形県
古川市
三本木町
大和町
石巻市
仙台市
名取市
岩沼市
角田市
白石市
福島県
凡 例
1 名生館遺跡
2 下草古城遺跡
3 寺下囲遺跡
4 白石城跡
0
20km

名 生 館 遺 跡

目　　次

第一章　遺跡の概要 1
　Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境 1
　Ⅱ．遺跡の歴史的環境 1
　Ⅲ．周辺の遺跡 3
第二章　調査に至る過程と調査方法 4
　Ⅰ．調査に至る過程 4
　Ⅱ．試掘調査の結果 4
　Ⅲ．本調査の方法 6
第三章　発掘調査の成果 8
　Ⅰ．基本層序 8
　Ⅱ．発見された遺構と遺物 9
　　１．A区　　７．G区
　　２．B区　　８．H区
　　３．C区　　９．Ⅰ区
　　４．D区　　10．J区
　　５．E区　　11．K区
　　６．F区
第四章　考　察 55
　Ⅰ．旧石器時代 55
　Ⅱ．縄文・弥生時代 55
　Ⅲ．古墳時代 57
　Ⅳ．古代 61
　Ⅴ．中近世 62
第五章　まとめ 63
引用・参考文献、写真図版 64

調 査 要 項

遺　跡　名：名生館遺跡（みょうだていせき）
　　宮城県遺跡地名表記載番号　27018
遺跡記号：ＰＪ
遺跡所在地：宮城県古川市大崎字名生館地内
調査原因：東大崎地区県営圃場整備事業
面　　積：発掘調査面積　約6,000㎡
調査期間：確認調査　平成8年（1996年）11月12日～11月29日
　　事前調査　平成10年（1998年）10月19日～12月18日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　確認調査　天野順陽、笠原俊哉
　　事前調査　後藤秀一、山田晃弘、村田晃一、天野順陽、藤村博之
調査協力：宮城県古川農林振興事務所
調査参加者：大場かつ子、笠原きえ子、笠原すみ子、笠原ましえ、笠原みよ子、加藤みき子、
　　鹿野しみ子、鹿野まき子、鹿野田雪子、鹿野田洋子、舘野信子、佐々木栄子、
　　佐々木ケイ子、佐々木はつえ、佐々木満智子、菅原たよ、高城キヨ子（五十音順）
整理参加者：大宮千賀子、鎌田惠子、柴田とみ子、森幸子

名 生 館 遺 跡

第一章　遺跡の概要

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境

名生館遺跡は古川市大崎字名生館・城内・名生北館・名生小野柄堂・名生上代・名生小館・弥栄に所在する。遺跡は大崎平野の北西端に位置し、ＪＲ陸羽東線東大崎駅の北西約１㎞にあたる（第１図）。

地形を概観してみる。江合川と鳴瀬川の沖積作用によって形成された大崎平野は県内最大の内陸盆地で東西約 13 ㎞、南北約 17 ㎞の大きさである。大崎平野の四周は主に第三系中新統および鮮新統からなる丘陵で、東は広渕丘陵、南は三本木丘陵、北は清滝丘陵が西から東へ延び、西は江合・鳴瀬川の両河川が形成した扇状地が段丘化した高位段丘面（通称：青木原台地）が発達し、北西から南東に舌状に延び、緩やかに傾斜（0.7～0.8 度）して沖積面下へ没している。高位段丘は第四紀更新世に噴出した淡紅色を呈する浮き石凝灰岩（鳴子―柳沢火砕流堆積物）を主体とした堆積物で構成される。沖積地との漸移付近では礫･砂などの河岸段丘堆積物から成り、肘折―尾花沢テフラ層を挟むところもある。

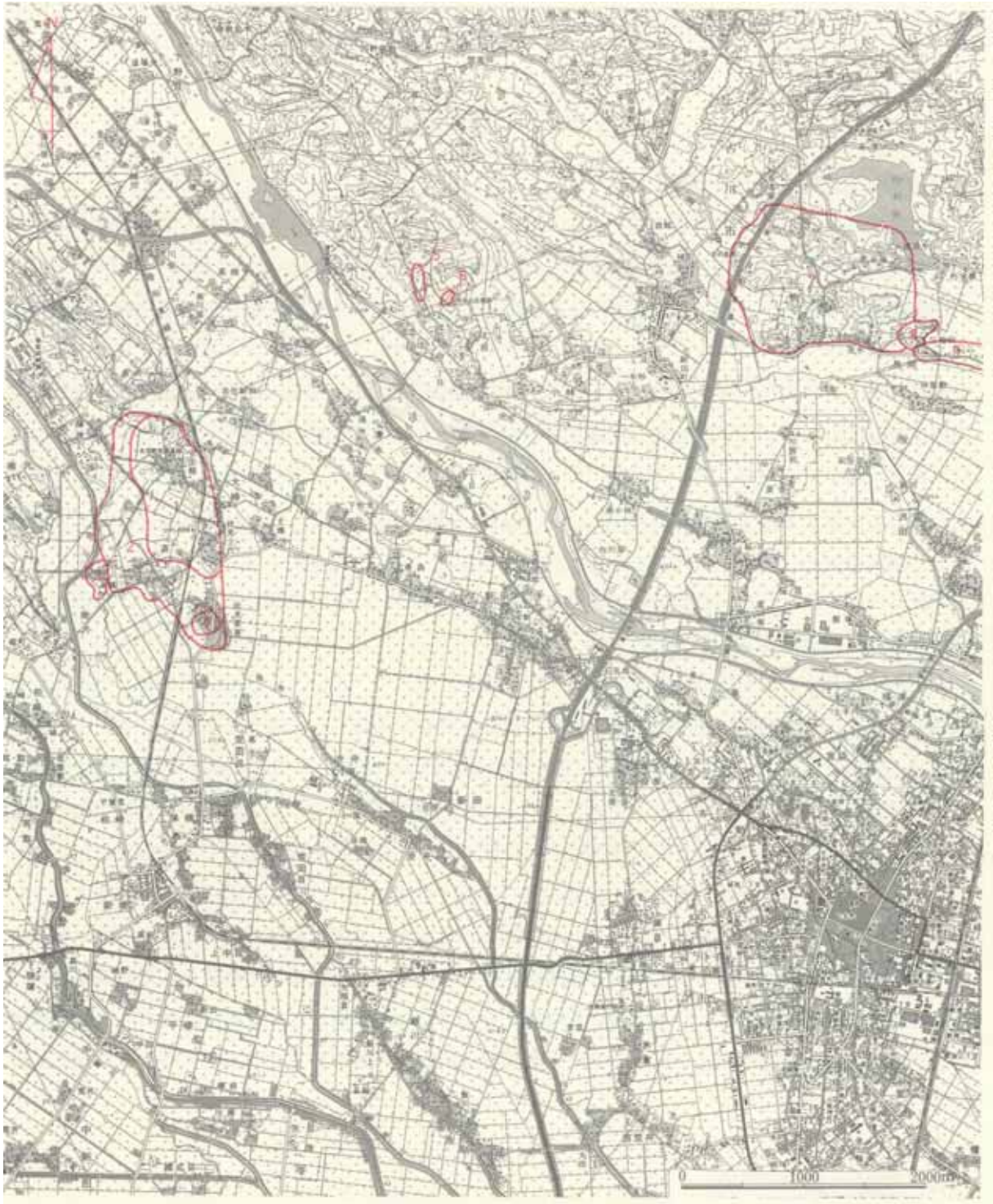
遺跡はこのような江合川右岸の高位段丘の南東端に立地している。標高は約 43～45m、沖積地との比高は約 10～12mを計る（第４図）。

本遺跡はこれまで地形的条件から、東限と北限は段丘崖まで、南隈は小館地区の南側に東から入り込む沢まで、一方、西限は段丘面が広く続き、その大部分が水田として利用されていることから地形からは不明瞭であるとしながらも、これに遺物の散布状況等を考慮して東西約 800m、南北約 1000mを遺跡の範囲と考えていた。そして、このなかでも政庁跡が確認されるなど官衙遺跡の性格が強い遺跡北東部の城内地区ほかは平成６年に国指定史跡に認定され、名生館官衙遺跡として登録された。

しかし、その後行なわれた本遺跡の試掘調査（天野・笠原：1997）や本遺跡の南東に位置する上代遺跡（菅原：1997）の調査結果などから、遺跡はさらに南方、西方に延びていることが確認され、本遺跡と上代遺跡は連続するものであると認識された（第２図）。さらに南西に位置する高幌遺跡（註1）とも地理的に接していることからこれらと連続する遺跡となる可能性もでてきた。ただし、試掘調査や上代遺跡や高幌遺跡で発見された遺構は一般集落に伴うものであり、官衙遺跡のものとは性格が異なる。

Ⅱ．遺跡の歴史的環境

本遺跡は現在古川市に属しているが、「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷にあたるとみられる小字「伏見」が本遺跡の南約１㎞にあることから、古代にはこの遺跡付近が玉造郡に属していたと考えられていた。実際、本遺跡内では古代の土器や瓦が散布し、このうち古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の二か所に集中している。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いが見られ、城内地区の瓦が多賀城創建より古いとされる山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦であった。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

１．名生館遺跡（名生館官衙遺跡含む）　２．上代遺跡　３．高候遺跡
４．伏見廃寺跡　５．小寺遺跡　６．国指定史跡大吉山窯跡　７国指定史跡 宮沢遺跡
８．三輪田遺跡　９．権見山遺跡

このようなことから本遺跡は玉造[illegible]の有力な擬定地としてあげられ、陸奥国府多賀城跡に関連する城[illegible]官衙遺跡の一つとして、昭和 55 年から宮城県多賀城跡調査研究所が継続的に調査を行ない、その後昭和 62 年からは古川市教育委員会が調査を引き継いでいる（宮城県多賀城跡調査研究所：1981～1986、古川市教育委員会：1987～1996）。

これまでの調査の結果、本遺跡は多賀城創建以前の 7 世紀後葉に設置された官衙跡でⅠ～Ⅳの官衙遺構の変遷が確認され、城内地区と小館地区でⅡ期（7 世紀末～8 世紀初頭）およびⅣ期（8 世紀後半～10 世紀初頭）の政庁の存在が明らかとなった。Ⅱ期官衙は和銅 6 年（713 年）に建郡された丹取郡の前身の評家もしくは丹取郡家、Ⅳ期官衙は神亀 5 年（728 年）前後に成立した玉造郡家に比定された。官衙の成立にあたっては多量の関東系土器の存在や、Ⅱ期郡庁院における瓦の特徴から関東地方からの移民が関与したと考えられている（進藤：1990、高橋・村田：1996）。

また、本遺跡は室町・戦国時代に奥州探題大崎氏の居城である名生城が築かれた場所でもある。城跡の規模や構造などの詳細は不明だが、随所に土塁や堀跡などが認められるほか、「大崎」「名生館」「城内」「小館」などの字名や「北館」「内館」「大館」「二の構」などの地名に当時の名残りをとどめている。

Ⅲ．周辺の遺跡

本遺跡の周辺には多賀城と密接な関係を持つ城[illegible]官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡などが多数存在する。

本遺跡の南約 1 ㎞には伏見廃寺がある。金堂跡とみられる乱石積み基壇が確認され、周辺からは名生館官衙遺跡Ⅱ期郡庁院と同笵、同類の瓦や多賀城創建瓦が多数出土しており、名生館官衙遺跡の付属寺院と考えられている（佐々木：1971、進藤：1990）。また、伏見廃寺から数百m北に位置する上代遺跡（菅原：1996）では律令支配の下で遂行された可能性が高い大規模な基礎事業を伴う水田跡が確認されたほか、関東系の土器や名生館官衙遺跡および伏見廃寺の創建期の瓦など 7 世紀末から 8 世紀初頭の遺物が出土し、居住域は確認されなかったものの官衙や寺院に関わる施設や集団の存在が推定された。

このほか、本遺跡の南西約 4 ㎞には玉造[illegible]あるいは色麻[illegible]の擬定地である城生遺跡とその付属寺院とみられる菜切谷廃寺がある。また、江合川を超えた東方約 5 ㎞には 8 世紀後半から平安時代にかけての城[illegible]官衙遺跡である宮沢遺跡があり、この宮沢遺跡の南東に接する三輪田遺跡からもロクロ挽き重弧文軒平瓦などの 8 世紀の瓦が出土している。

生産遺跡としては江合川を挟んで東方約 2 ㎞に大吉山窯跡群、南方約 10 ㎞には日の出山窯跡群があり多賀城創建期の瓦窯が営まれている。

このように本遺跡の周辺には多賀城創建前、創建期の城[illegible]官衙遺跡や生産遺跡が認められる。このことから 7 世紀末～8 世紀初頭ごろに多賀城から北へ約 40 ㎞離れた大崎平野北西部に律令国家の支配拠点が築かれたことは明らかであり、多賀城以北への律令支配の成立過程を知る上で重要な地域といえる。

（註 1）古川市教育委員会高橋誠明氏の御教示による。

第二章　調査に至る過程と調査方法

Ⅰ．調査に至る過程

平成８年度に、宮城県農政部農地整備課から古川市東大崎地区県営圃場整備事業の計画が持ち上がった。圃場整備事業の対象となる大崎地区・名生北館地区ほかは、当時遺跡としては登録されていなかったが、国指定史跡名生館官衙遺跡や中世の大崎氏の居城跡である名生城跡と隣接する地域であるため、これらに伴う遺構が引き続き存在することが予想された。このため圃場整備事業に先立ち、遺構・遺物の有無、遺跡の範囲、そして現水田面から遺構面までの深さなどを調べる試掘調査を行ない、事業計画に反映させるとともに、その後行なうこととなる事前調査の作業量を算出する基礎資料を得ることとなった。

Ⅱ．試掘調査

1．概要

試掘調査は平成８年 11 月 12 日～29 日に行なった。調査は圃場整備事業で道路および水路となる部分を対象にトレンチ調査を行なった。調査対象面積：約 37,500 ㎡、トレンチ調査面積：約 3,000 ㎡、トレンチ総数：198 本である。（第４図）。

2．遺構の分布状況と確認面

ほぼ全域で遺構が確認された。遺構が連続して認められなかったのは、調査区北西部の岩出山町との境界付近（No.118～126、No.170～184）と西端部（No.93～96、No.144～148）のみである。

遺構確認面は床土下の地山面（黄色シルト層）である。この間に黒色または褐色の粘土質シルト層や、盛土層を挟むところもある。また、遺構面までの深さはさまざまであるが、名生館官衙遺跡、名生城跡が立地する北側の段丘付近や東大崎駅付近が約 20～40㎝と浅くなる傾向にあった。一方、遺構が認められなかった No.120～126 付近は 80㎝前後と深くなっている。

3．遺構の密度と種類

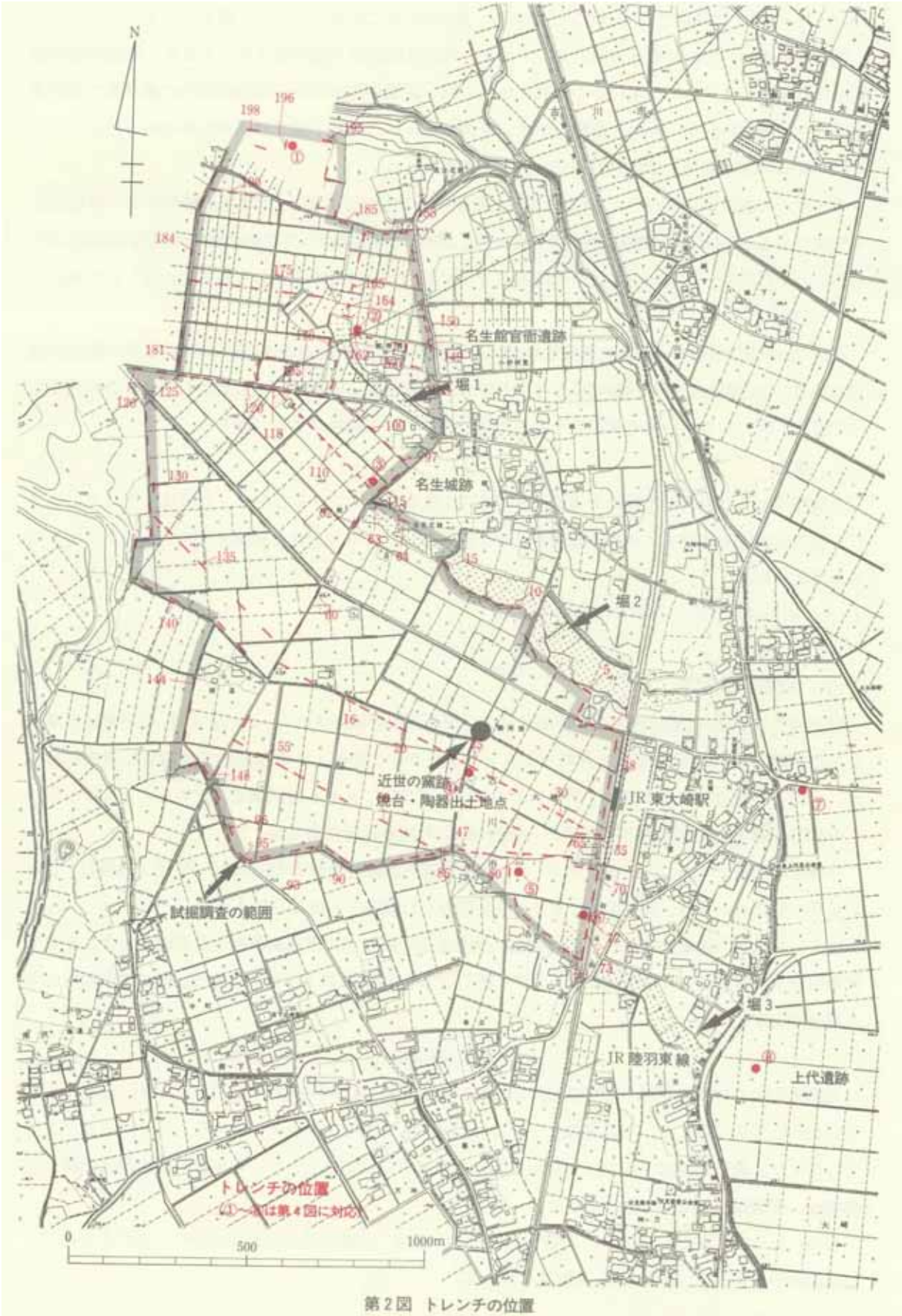
遺構の数は東大崎駅付近が比較的多い傾向にあったものの、全体的に密度が薄い。しかし、連続して遺構が認められることから、遺跡の範囲は広く、全体的には相当数の遺構が存在しているものと予想される。

遺構の種類は掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壙などである。溝跡、土壙は全域で認められるが、掘立柱建物跡、竪穴住居跡は北側の段丘付近や東大崎駅付近に認められ、遺構面まで比較的浅いところに分布する傾向にある。

《中世の堀跡について》

今回の対象地には現地形から中世名生城跡に伴う堀跡と推定されるところが３か所あり（第２図の堀①～③）、付近のトレンチでそのプランが確認され、ある程度その延びが明かとなった。

堀①は幅約 20mの東西方向のものである。現状は西側ほど幅が狭く 10mほどになっているが、No.164 の調査の結果、幅約 20mを保ち No.164 まで延びていることがわかった。しかし、その西側にある No.163・


N
名生館官衙遺跡
堀1
名生城跡
堀2
近世の墓跡
焼台・陶器出土地点
JR 東大崎駅
試掘調査の範囲
堀3
JR 陸羽東線
上代遺跡
トレンチの位置
(1)～(4)は第4図に対応
0
500
1000m

第2図　トレンチの位置

164・170・171では確認されていないことから、No.164付近で終息するものと考えられる。

堀②は幅約 20～30mの東西方向のものである。現状は西側ほど幅が狭くなっており、No.15 以西は現状からは判断しにくいが、No.15 から No.62 にかけて沼、湿地が認められ、No.62 の方向に延びることが予想された。調査の結果、No.64 で堀跡のプランを確認したが、No.62・63 では認められなかった。このことから No.64 付近の湿地まで堀跡が延びていたと考えられる。

堀③は上代遺跡から延びてくる幅約 30mの東西方向のものである。ＪＲ陸羽東線付近までは現状から明確であるが、ＪＲ陸羽東線以西は不明である。調査の結果、No.72・73 で幅約 20mの堀跡を確認した。しかし、それ以西、以北のトレンチでは確認できず No.72・73 付近で終息しているのかもしれない。

《窯跡について》

道路・水路部分の調査に直接は関係ないが、東大崎駅から西へ約 500m地点、No.25 から北へ約 50m地点の農道、用水路に近世の窯跡に伴うものと思われる焼台と、陶器片が多数散乱している。現段階では詳細は不明であるが、大崎窯跡または名生館窯跡である可能性がある（註 2）。

4．遺物

古墳時代および古代の土師器や須恵器が平箱で 1 箱分出土しているのみで、大半は古代のものであり、竪穴住居跡が確認された東大崎駅付近で比較的多い。このことから遺構も古代のものが中心となると考えられる。

（註 2）東北陶磁資料館本田泰貴氏の御教示による。

III．本調査の方法

確認調査の結果、圃場整備事業対象地のほぼ全面に遺構が確認された。これを受け、圃場整備事業のうち田面部分は 1m未満の盛土で対応することとなったが、道路・水路部分は発掘調査の対象となった。ただし、道路部分は未舗装で削平も遺構面に及ばないことから確認調査に留めることとなった。

今年度の調査対象は遺跡の北西部で、岩出山町との境界付近にあたる。

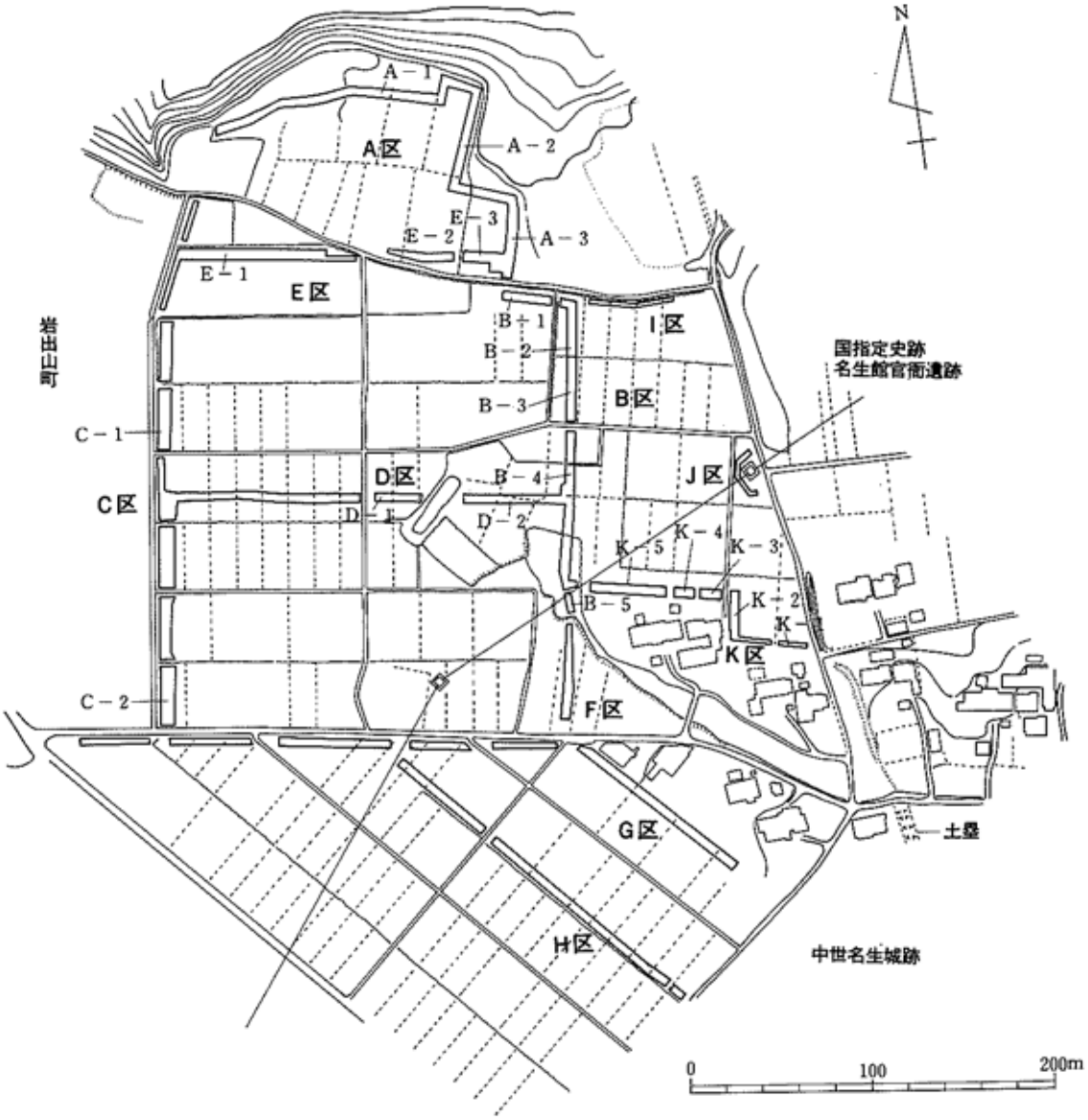
調査区は細長く、かつ広範囲に及ぶため、主に現道や農道を境にA区、B区…K区と分割し、さらに畦畔を境にＡ－1 区、Ａ－2 区などのように細分した調査区もある（第 3 図）。

検出した遺構の測量にあたり、Ｅ区南側に座標原点を設定し、国家座標軸を基準線とした。そして座標原点から遺構までの距離および方向を、例えばN120、E30 のように表わした。原点の座標値は次の通りである。

Ｘ＝－154100.000　　Ｙ＝5300.000

遺構平面図は遺構の種類や密度などに応じて 1/20 または 1/100 平面図を作成した。また、必要に応じて 1/20 断面図を作成した。写真記録については 35 ㎜、6×7 モノクロ・カラーリバーサル写真によって行なった。調査は平成 10 年 10 月 19 日から開始し、12 月 18 日に終了した。本年度の調査対象面積は約 6500 ㎡、発掘面積は約 6000 ㎡であった。

なお、Ａ－1 区のＳX2～ＳD7 付近は 11 月上旬に急遽、水路部分の設計変更が行なわれたため、一部旧設計時の調査区（約 100 ㎡）も精査している。


N
A－1
A区
A－2
E－3
E－2
A－3
E－1
E区
B－1
I区
B－2
国指定史跡
名生館官衙遺跡
B－3
B区
C－1
D区
B－4
J区
C区
D－1
D－2
K－5
K－4
K－3
B－5
K－2
K－1
K区
C－2
F区
G区
土塁
H区
中世名生城跡
0
100
200m

第３図　調査区

第三章　発掘調査の成果

Ⅰ．基本層序

本遺跡は江合川右岸の高位段丘面に立地している。この高位段丘は第四紀更新世に噴出した淡紅色を呈する浮き石凝灰岩（鳴子ー柳沢火砕流堆積物）を主体とした堆積物で構成されているが、低地との漸移部分は礫・砂などから成り、遺跡付近では肘折ー尾花沢テフラ層（肘折軽石層）も認められる（宮城県古川市：1986）。今回、前述した浮き石凝灰岩（鳴子ー柳沢火砕流堆積物）までの層序を調べることはできなかったが、遺跡の北西端のＡ－1区ＳＸ100旧石器集中地点（地点①）の基本層序と図示した7地点（地点②～⑧）の遺構確認面（基本層序Ⅲ層）の標高を示した（第4図）。なお、地点⑦⑧は本遺跡南東の沖積地との漸移部分に位置するに上代遺跡1ｄ区、6ａ区（菅原：1997）の層序を模式化したものである。

Ⅰ層：10ＹＲ2/2　黒色　シルト。表土・耕作土層。大部分がしまりのない黒ボク土である。Ⅱ層との境界に部分的に漸移層がある。

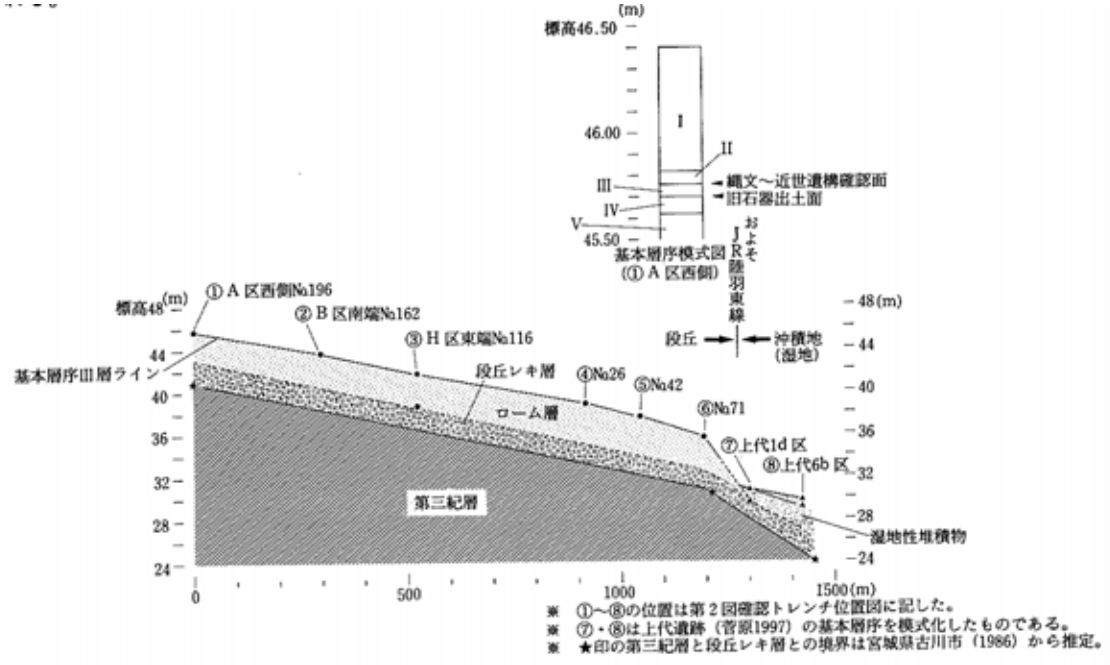
Ⅱ層：肘折ー尾花沢テフラ層（肘折軽石層）で、部分的に認められるものである。

Ⅲ層：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　ソフト・ローム層。縄文時代～近世の遺構確認面

Ⅳ層：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　ソフト・ローム層。旧石器確認面。Ⅲ層よりしまりあり。

Ⅴ層：10ＹＲ6/4　にぶい黄褐色　ハード・ローム層。

遺跡全域に認められ、縄文時代以降の遺構確認面となる基本層序Ⅲ層の標高を比較してみると、北西端の地点①から緩やかに南東に向かって傾斜し、ＪＲ陵羽東線付近の地点⑦から地点⑧に向かって沖積地下に没していくのがわかる。これは遺跡が立地している高位段丘面の地形を示していると考えられる。



第4図　基本層序

Ⅱ．発見された遺構と遺物

今回の調査で、後期旧石器時代から近世まで各時代の遺構・遺物が確認された。遺構確認面は後期旧石器時代が基本層序Ⅳ層、縄文時代から近世は基本層序Ⅲ層である。

発見された遺構は竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡 13 棟、溝跡 108 条、土壙 82 基、井戸跡 23 基、土器埋設遺構 5 基、旧石器集中地点１か所などである（第１表→54 ページ）。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器類、石器、石製品、土製品、金属製品、古銭など整理用平箱で 10 箱ある。

遺構・遺物の出土状況は調査区によって大きく異なる。まず、調査対象区域の北西端にあたるＡ区では旧石器時代から近世までの遺構が確認され、竪穴住居跡や土壙、土器埋設遺構などを中心に遺物が出土している。また、東側の名生館官衙遺跡に近いＢ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区では古墳時代から中近世の遺構が確認され、溝跡などから遺物が少量出土している。一方、西側、南側にあたるＣ～Ｈ区では弥生時代から近世の遺構・遺物が確認されたが、南・西に行くにしたがって徐々に遺構の数が少なくなる。出土遺物もほとんどないため所属時期が不明な遺構が多い。

このように、調査区北西端のＡ区や名生館官衙遺跡に近いＢ・Ｉ～Ｋ区で比較的遺構・遺物が多く、南・西側のＣ～Ｈ区に行くほど遺構・遺物が少なくなる傾向が認められた。

以下、調査結果を記述するが、調査区が細長くかつ広範囲に及ぶことや、前述したように各区によって遺構・遺物の出土状況が大きく異なることから、Ａ区、Ｂ区…Ｋ区の順に調査区ごとに説明する。なお、遺構確認のみ行なったＥ・Ｇ・Ｉ・Ｊ区は概要の記述と平面図、出土遺物のみを図示した。

1．A区

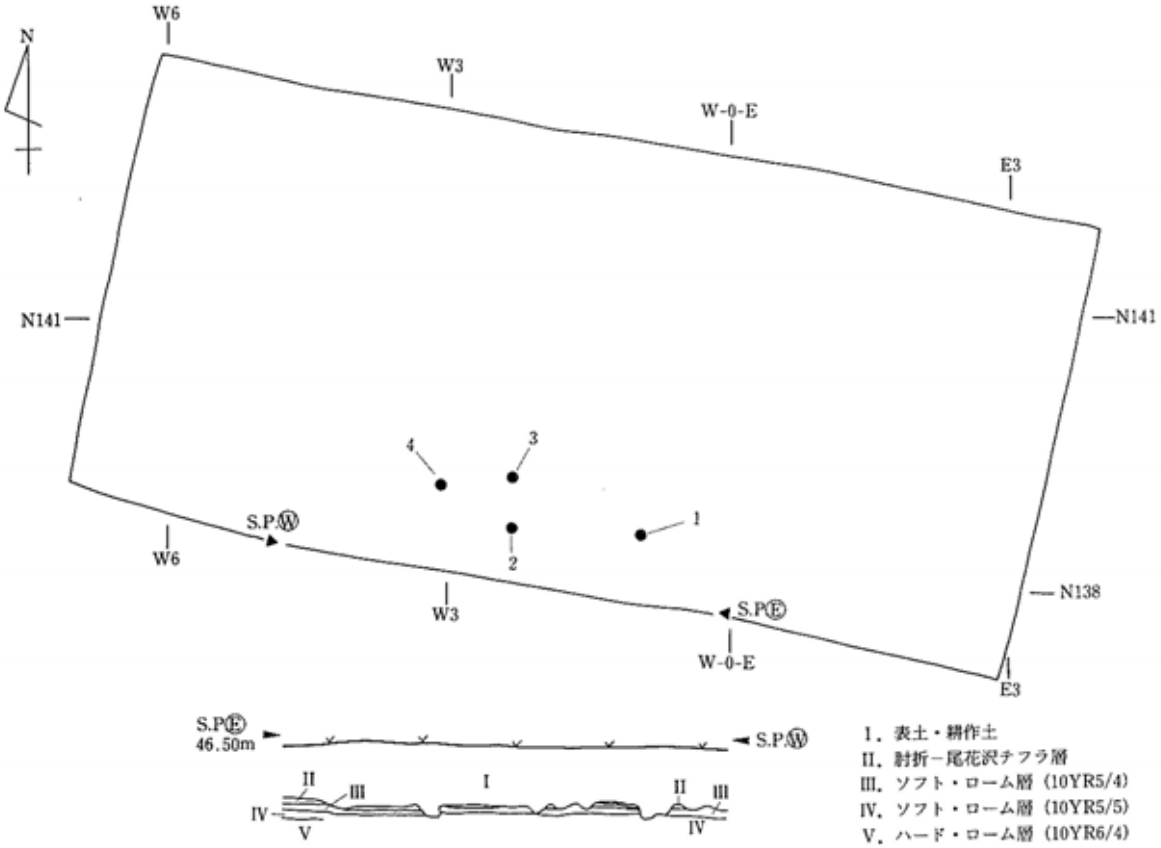
遺跡北西端の調査区で、畦畔等で３区に細分される（第７・８図Ａ－１区～Ａ－３区）ある。旧石器時代～近世までの遺構・遺物が確認された。遺構は調査区全体に認められるが密度は高くない。以下、時代ごとに遺物が出土した遺構を中心に記述する。

(1)　旧石器時代

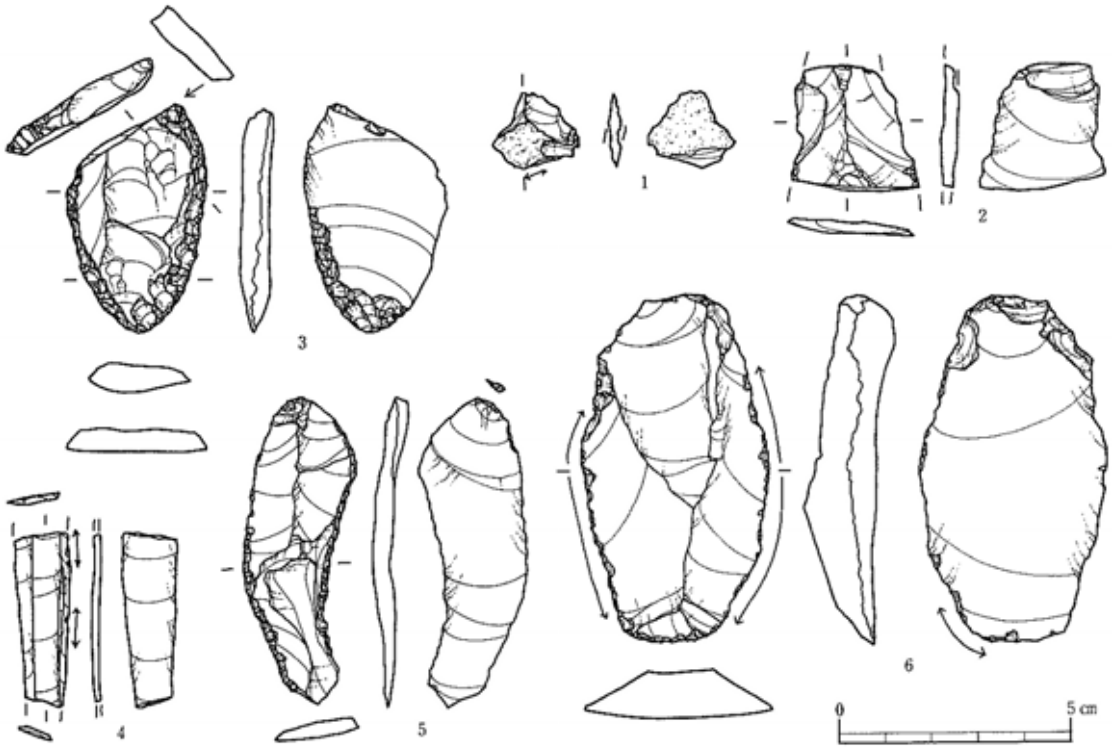
【ＳＸ100 旧石器集中地点】

Ａ－１区 No.139、W2 付近の基本層序Ⅳ層から旧石器４点が出土した（第５・６図）。このほかに付近の木の根による攪乱層からも１点出土している。３点は基本層序Ⅳ層上面から出土したが、田の１点はⅢ層中に含まれていた。これは肉眼では観察されなかったがなんらかの撹乱により石器がⅢ層中に浮き上がったためと考えられる。Ⅲ・Ⅳ層は肘折－尾花沢テフラ層（Ⅱ層）の下位にあるいわゆるソフト・ローム層であり、いわゆるハード・ローム層はⅤ層以下になる。４点は 2m×0.5mの範囲にごくまばらに分布する。

石器はすべて珪質頁岩製で、同一母岩と見られるものはない。１は焼けはじけた剥片で、背面下端の折面に微細剥離が認められる。残存長 1.6 ㎝、幅 1.8 ㎝。２は末端に折面がある剥片で両側縁に折面を切る微細剥離がある。打面は腹面の剥離と同時にはじけて失われている。残存長 2.7 ㎝、幅 2.6 ㎝、厚さ 0.3 ㎝。３は荒屋型彫刻刀形石器である。背面全周縁と腹面基部に二次加工が加えられ、彫刻刀面は右肩から斜めに２面作り出されている。彫刻刀打面付近には彫刻刀面から加えられたと見られる小

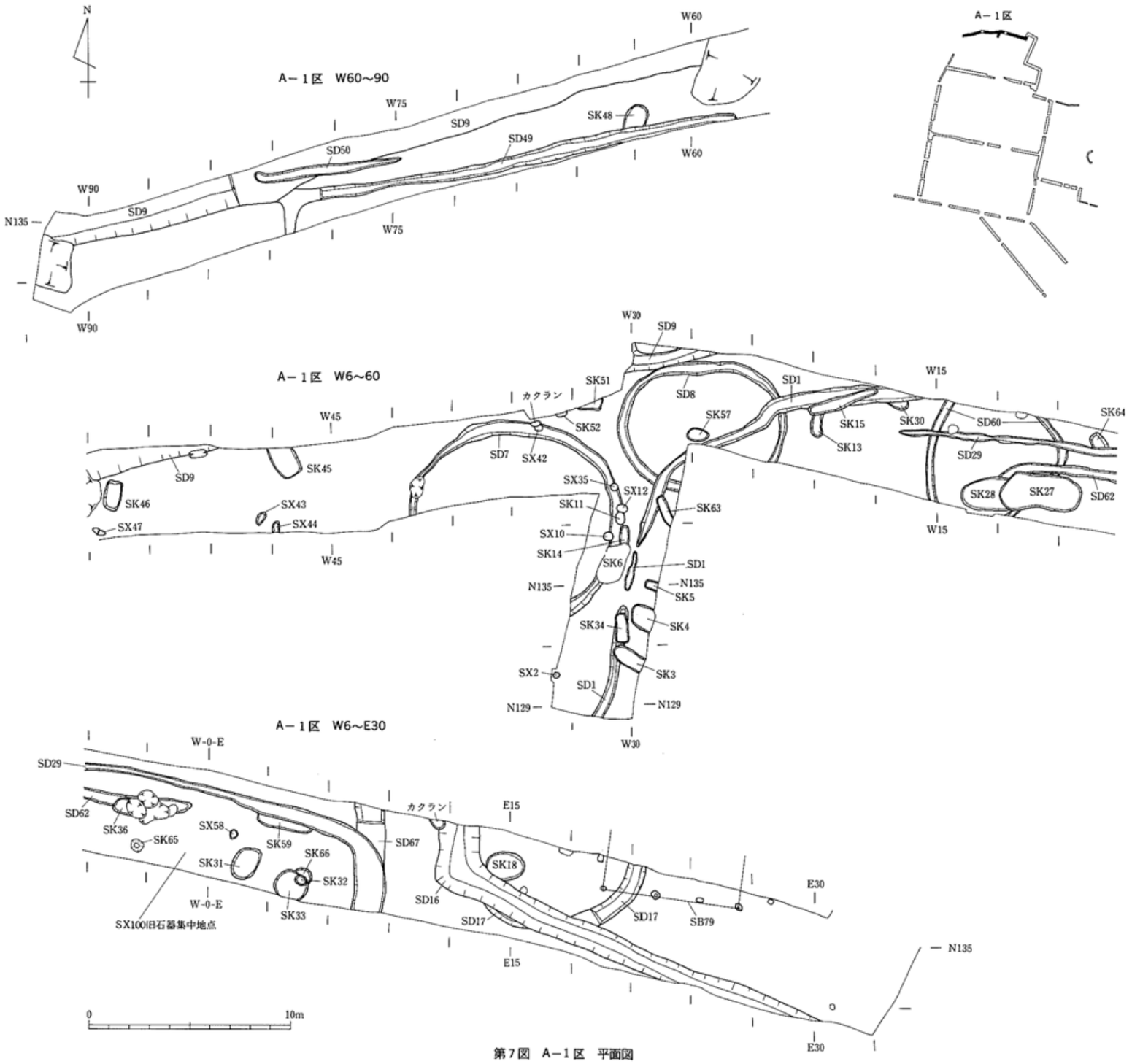


第5図　SX100 旧石器集中地点

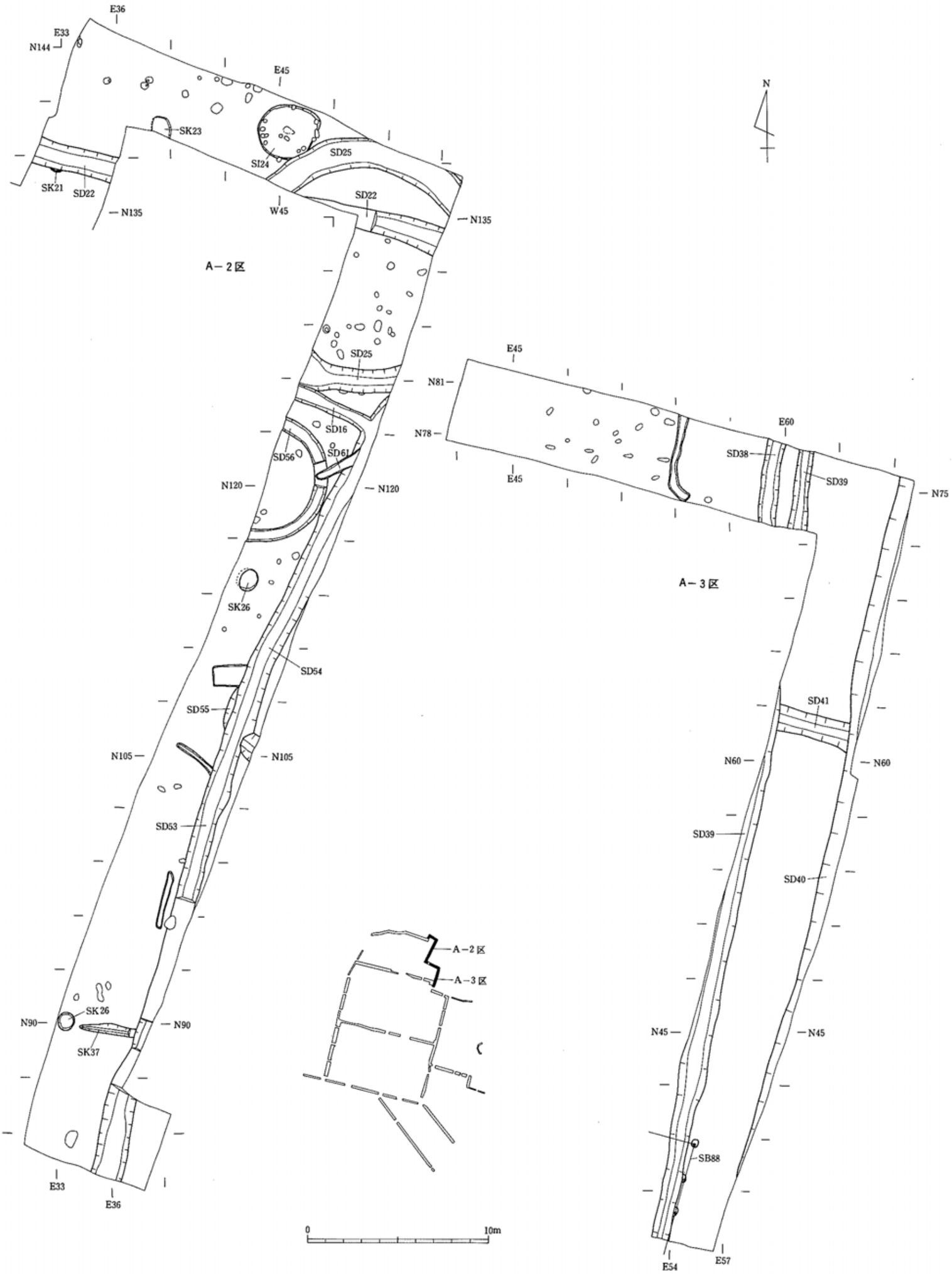


5 はカクラン、6 は SK18 出土
（写真図版 5 － 1 ～ 6）

第6図　SX100 出土石器ほか


A－1区 W60～90
A－1区 W6～60
A－1区 W6～E30
A－1区
N
W60
W75
W90
W45
W30
W15
W-0-E
E15
E30
N135
N129
SD9
SD50
SD49
SK48
SD1
SD8
SD7
SD60
SD29
SD62
SD67
SK51
SK52
SK57
SK15
SK13
SK30
SK64
SK28
SK27
SK45
SK46
SK47
SK43
SK44
SX42
SX35
SX12
SK11
SX10
SK14
SK6
SK63
SK5
SK4
SK34
SK3
SX2
SK18
SD16
SD17
SB79
SX58
SK59
SK66
SK31
SK32
SK33
SK65
SX100旧石器集中地点
カクラン
0
10m

第7図 A－1区 平面図



第8図　A－2区、A－3区平面図

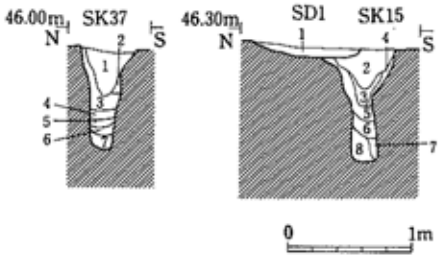
剥離があるが、これらは腹面からの調整に切られるので、彫刻刀面の再生の際にそのための打面を作り直していることがわかる。基部周辺の二次加工の角度は浅い。長さ 4.9㎝、幅 3.0 ㎝、厚さ 0.5 ㎝。4 は細石刃である。上下両端に折面が見られ、平面右側縁の微細剥離はこれを切る。現存長 3.7㎝、幅 1.1 ㎝、厚さ 0.14㎝と大形である。5 は攪乱層出土のスクレイパーである。背面両側縁に二次加工が見られ、右側縁は急角度である。左側縁では末端の折面を切っている。素材は縦長剥片であるが、背面には横方向の剥離面が見られる。長さ 6.5㎝、幅 3.0㎝、厚さ 0.5 ㎝。

6 はA－1 区N138、E15 にあるＳK18 出土のエンド・スクレイパーである。端部の二次加工は細かく浅い角度で加えられている。基部腹面には鋸歯状の剥離が加えられ、素材の打面は細調整が加えられたもので、厚く大きいものであったと予測される。珪質頁岩製、長さ 7.5 ㎝、幅 4.0 ㎝、厚さ 1.5 ㎝。なお、6 が出土した周辺をハード・ローム層まで掘り下げてみたが、他には何も出土しなかった。

(2)　縄文時代

Ｔピット 2 基が検出された（第 9 図）。

【ＳK15Ｔピット】N142、W20 で確認された。ＳD1・ＳK13 より古い。規模は長径 3.50m、短径 60㎝で平面形は長楕円形を呈する。断面形はV字形で深さは 96㎝である。堆積土は 7 層に分けられるが、基本的に地山粒・ブロックを少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。



第 9 図　SK15・37T ピット断面図

【ＳK37Ｔピット】N90、E33 で確認された。ＳD53 より古い。規模は長径 3.10m以上、短径 60 ㎝で平面形は長楕円形を呈する。断面形はV字形で深さは 80 ㎝である。堆積土は 7 層に分けられるが、基本的に地山粒・ブロックを少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。

(3)　弥生時代

竪穴住居跡 1 軒が検出された（第 10 図）。

【ＳＩ24 住居跡】

［位置・重複］N141、E45 で確認された。ＳD25 より古い。

［平面形・規模］規模は長径 3.5m、短径 3.0mで、平面形は東側が直線的ではあるが、全体的には不整円形を呈する。

［堆積土］6 層に分けられる。1～5 は住居廃絶後の自然流入土で、地山粒・ブロックを含む黒色または黒褐色からなる。6 は掘方埋土で地山ブロックが主体である。

［壁］地山のにぶい黄褐色シルトを壁にしている。壁は緩やかに立ち上がり、高さは北西壁で 20 ㎝である。

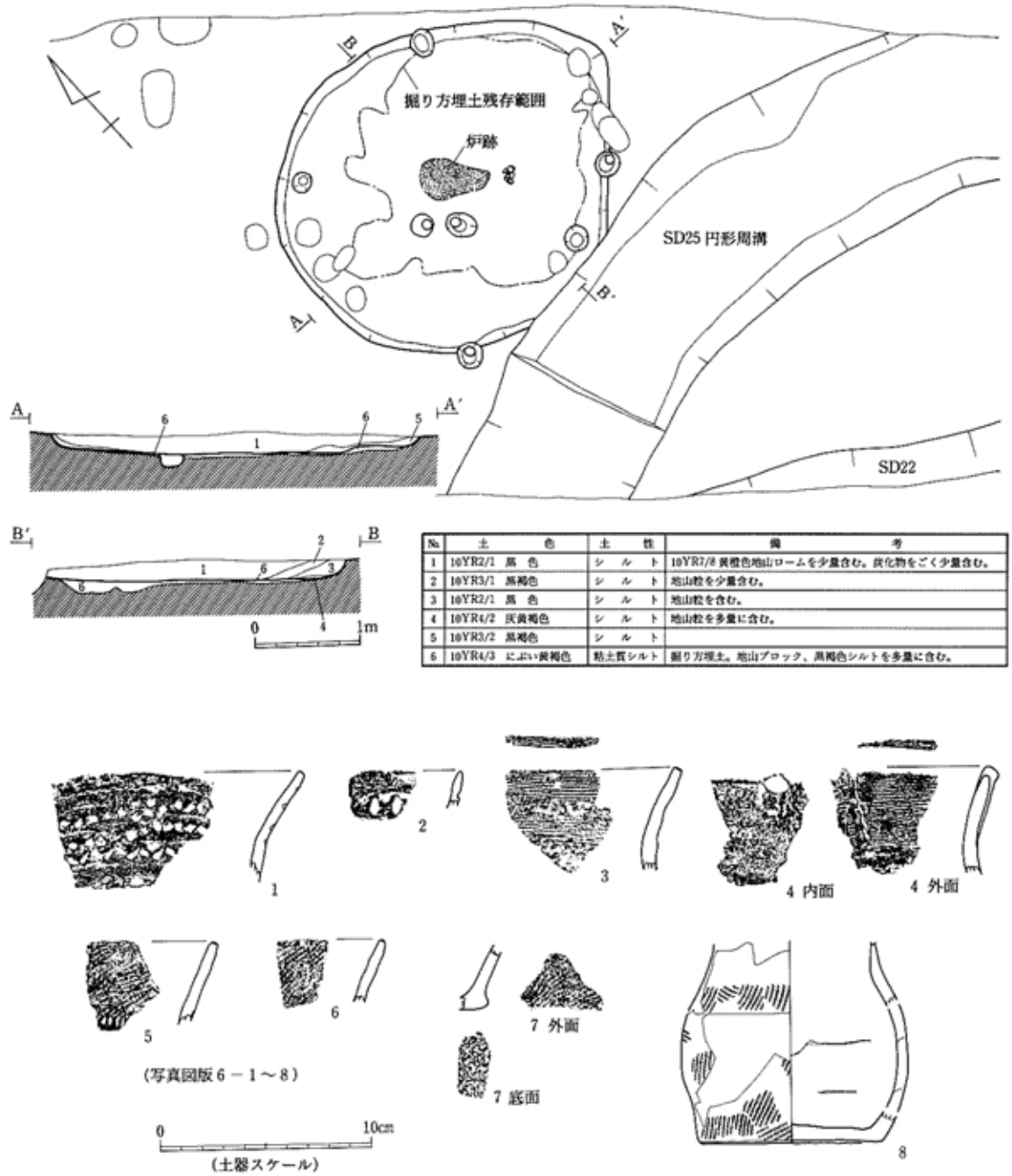
［床面］南西壁と北東壁付近が中央より 10㎝ほど高くなっているほかは、ほぼ平坦である。掘方埋土の地山ブロック主体のにぶい黄褐色シルトを床としている。

［柱穴］7 個確認された。位置的には、壁際で確認された柱穴 5 個はほぼ東西南北の対角線上にあり、

東側には近接して 2 個認められた。また、炉の南側では 2 個の柱穴が並んで検出された。

［地床炉］住層のほぼ中央に東西 70 ㎝×南北 40 ㎝の範囲で焼土、炭化物が認められた。掘方はなく、硬化面も認められなかったが、2～3 ㎝ほど床面に熱が及んだ範囲がわずかに赤色化していた。

［出土遺物］床面および堆積土から平箱 1 箱分出土しているが、大半が堆積土に含まれていたものである。いずれも弥生土器の細片で、撚糸文や縄文、抑圧縄文、刺突文、沈線文が施されたものである。第 10 図 1～8 は口縁部・底部資料で特徴的な文様をもつものであるが、全体の器形が分かるものはなく、器種も不明なものが多い。以下、文様を中心に説明する。



No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒色	シルト	10YR7/8 黄橙色地山ロームを少量含む。炭化物をごく少量含む。
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	地山粒を少量含む。
3	10YR2/1 黒色	シルト	地山粒を含む。
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	地山粒を多量に含む。
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	
6	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	掘り方埋土。地山ブロック、黒褐色シルトを多量に含む。

第10図　SI24 住居跡平面図・断面図出土遺物

1・2 は交互刺突文が施されるものである。1 は口縁部上部にR撚糸原体を横位に抑圧し、その下に竹管による交互刺突文を三段に施文したものである。ただし、部分的には交互刺突文にならず、単に円形竹管刺突文になっているところもあるなど雑な施文である。また 2 は交互刺突間に挟まれた部分が波状に盛り上がっている。3・4 は地文がR撚糸を横位に施文したもので口唇部にも施文している。さらに 4 は粘土貼付による浮文上にＲＬ縄文原体を押圧している。5・6 は地文がＬＲ縄文を横位に施文したもので、口唇部にも同じ原体を押圧している。また、5 には細かい刻み目状の沈線文が加わる。7・8 は壷の底部である。地文はＬＲ縄文を横位に施文したもので、底面にも認められる。8 は器形がくびれる部分は磨り消している。また、施文方向がずれるなど全体的に雑である。

(4)　古墳時代

円形周溝 6 条、土壙 9 基、土器埋設遺構 5 基が確認された。遺構はＡ－1 区W30 付近に集中している。

①　円形周溝跡

【ＳＤ7 円形周溝】（第 11 図）

［位置・重複］N133～142、W30～41 で確認した。ＳＫ3～6・11・14・34・36・48、ＳＸ2・10・12・35・42 と重複し、これらより古い。また風倒木により 2 か所攪乱されている。

［平面形・規模］全体約 2/3 を検出した。規模は溝の心心で直径 10.3mの円形を呈する。

［溝の形態・規模］溝の上幅は一部 25㎝と狭い部分もあるが、ほぼ 60～75 ㎝である。深さは最も残りが良いところで 12 ㎝である。断面形は内周側の壁が比較的急に立ち上がり、外周側は緩やかに立ち上がる傾向にある。また、底面の幅は狭くほぼ平坦である。

［溝内堆積土］溝内堆積土は 2 層に分けられるが、両層とも黒褐色シルト主体の自然流入土で下層の方が地山粒・ブロックを多く含む。また、流入方向は位置によって偏りはなく、溝の両側から流入している。

［出土遺物］堆積土から縄文土器、弥生土器、土師器、石器（黒曜石石核・スクレイパー・剥片、流紋岩剥片）などが出土している（第 13 図 1～4）。

【ＳＤ8 溝跡】（第 11 図）

［位置・重複］N123～130、W22～30 で確認した。ＳＤ1・9 より古く、ＳＫ57 との関係は不明である。

［平面形・規模］全体の約 3/4 を検出した。規模は溝の心心で長径 8.0m、短径 6.0mの楕円形を呈する。

［溝の形態・規模］溝の上幅は一部 30㎝と狭い部分もあるが、ほぼ 50～60 ㎝、下幅は約 10㎝である。深さは最も残りが良いところで 40 ㎝である。断面形は両壁が緩やかに立ち上がるＵ字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

［溝内堆積土］溝内堆積土は 3 層に分けられる。1・2 層は黒色シルト主体の自然流入土で地山粒を少量含む。3 層は地山ブロックを多量に含み地山崩落土と思われる。また、流入方向は位置によって偏りはなく、溝の両側から流入している。

［出土遺物］出土遺物はない。

【ＳＤ60 円形周溝】（第 7 図）

［位置・重複］N127～130、W9～15 で確認した。ＳＤ29、ＳＫ27・28 より古い。

［平面形・規模］全体の約 1/3 を検出した。規模は溝の心心で短径 6.0m、長径は不明だがおよそ 7.0m程度、平面形は不整円形になるものと思われる。

［溝の形態・規模］溝の上幅は 40㎝、下幅 35㎝前後、深さは最も残りが良いところで 10㎝である。断面形は両壁が緩やかに立ち上がるＵ字形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。

［溝内堆積土］溝内堆積土は黒色シルト主体の地山粒を少量含む自然流入土で、底面付近にわずかに残る程度である。

［出土遺物］出土遺物はない。

【ＳＤ17 円形周溝】（第 7 図）

［位置・重複］N133～138、E15～21 で確認した。ＳＫ18 より新しく、ＳＤ16 より古い。ＳＢ79 との関係は不明である。また、木の根に一部攪乱されている。

［平面形・規模］全体の約 1/5 を検出した。正確な規模・平面形は不明だが、溝の心心で直径 8.5m程度の円形を呈するものと思われる。

［溝の形態・規模］北壁断面で観察すると、溝の上幅は 1.20m、下幅 40㎝、深さ 54 ㎝である。断面形は内周側の壁にわずかに段が付くが、全体的には緩やかに立ち上がり上部はやや開く。底面はほぼ平坦である。

［溝内堆積土］溝内堆積土は 9 層に分けられる。いずれも黒色または黒褐色シルト主体の地山粒を少量含む自然流入土であるが、下層の 6～9 は地山ブロックも多量に含み、内周側から流入している堆積状況である。

［出土遺物］出土遺物はない。

【ＳＤ25 円形周溝】（第 8 図）

［位置・重複］N126～138、W45～54 で確認した。ＳＩ24 より新しく、ＳＤ16 より古い。ＳＤ22 との関係は不明である。

［平面形・規模］全体の約 1/3 を検出した。正確な規模・平面形は不明だが、溝の心心で直径 13.0mの円形を呈するものと思われる。

［溝の形態・規模］断面で観察すると、溝の上幅は 2.40m、下幅 1.80m、深さ 50㎝である。断面形は両壁とも緩やかに立ち上がり上部はやや開く。底面はほぼ平坦である。

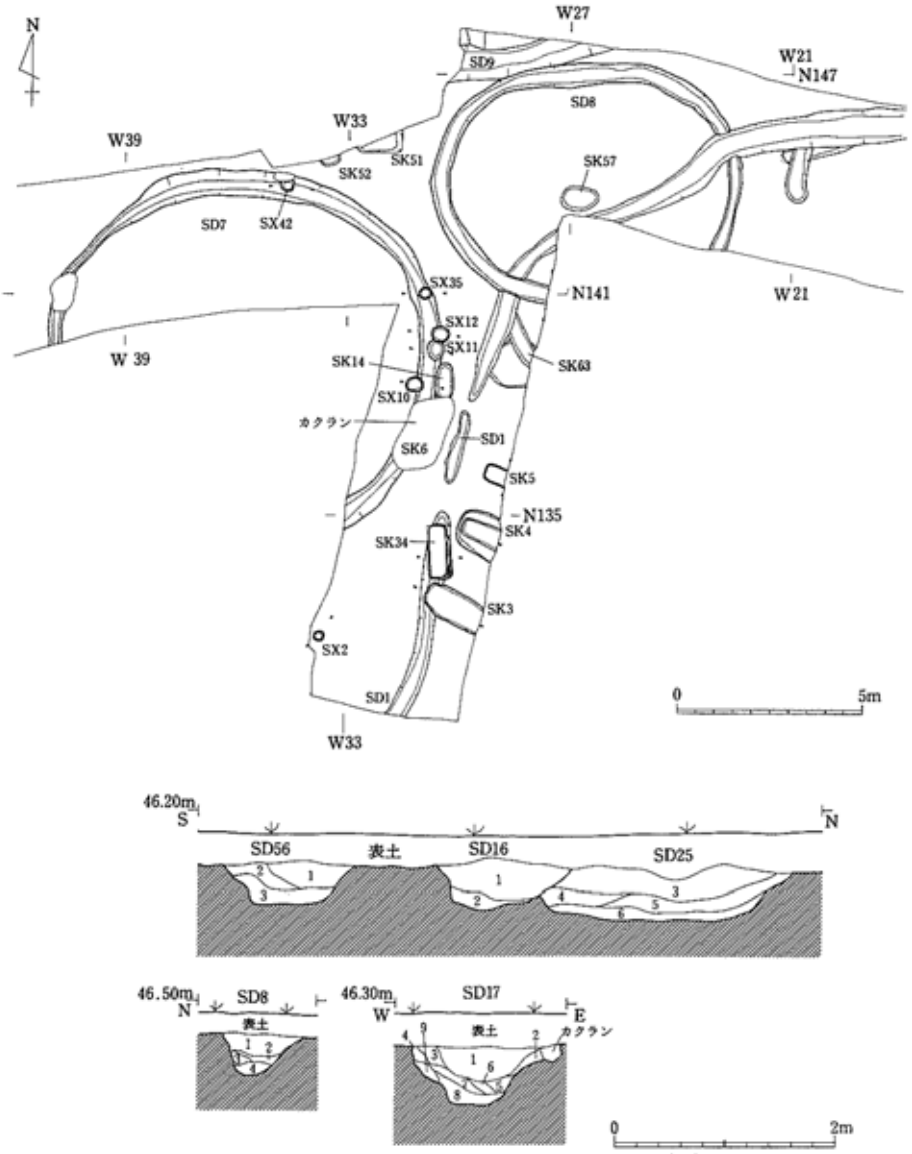
［溝内堆積土］溝内堆積土は 4 層に分けられる（第 11 図 3～6）。3～5 は黒色または黒褐色シルト主体の地山粒を少量含む自然流入土であるが、6 は地山粒・ブロック主体を多量に含み、締まりがある。溝内堆積土は内周側から流入した堆積状況にある。

［出土遺物］出土遺物はない。

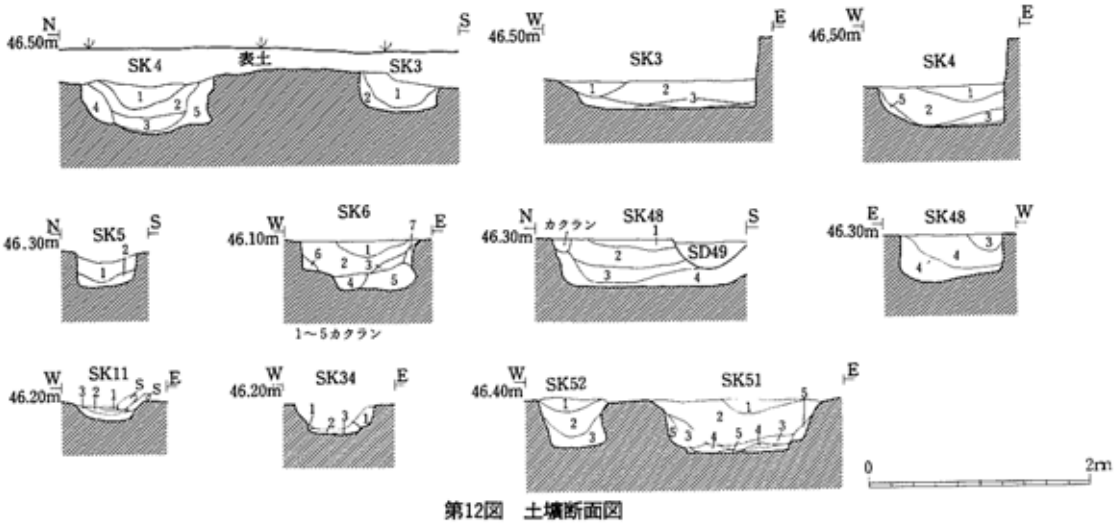
【ＳＤ56 円形周溝】

［位置・重複］N117～123、E45～48 で確認した。ＳＤ61 より古い。

［平面形・規模］全体の約 1/2 を検出した。規模は溝の心心で直径 6.6mの円形を呈すると思われる。



第11図　SD7 円形周溝付近の平面図（上）・断面図（下）



第12図　土壙断面図

［溝の形態・規模］西壁断面で観察すると、溝の上幅は 1.20m、下幅 60 ㎝、深さ 40 ㎝である。断面形は内周側の壁に弱い段が認められるが、緩やかに立ち上がり上部はやや開く。底面はほぼ平坦である。

［溝内堆積土］溝内堆積土は 3 層に分けられる（第 11 図 1～3）。1～2 は黒色シルト主体の地山粒を少量含む自然流入土であるが、3 は地山粒・ブロック主体を多量に含み、締まりがある。溝内堆積土は内周側から流入した堆積状況にある。

［出土遺物］出土遺物はない。

② 土壙

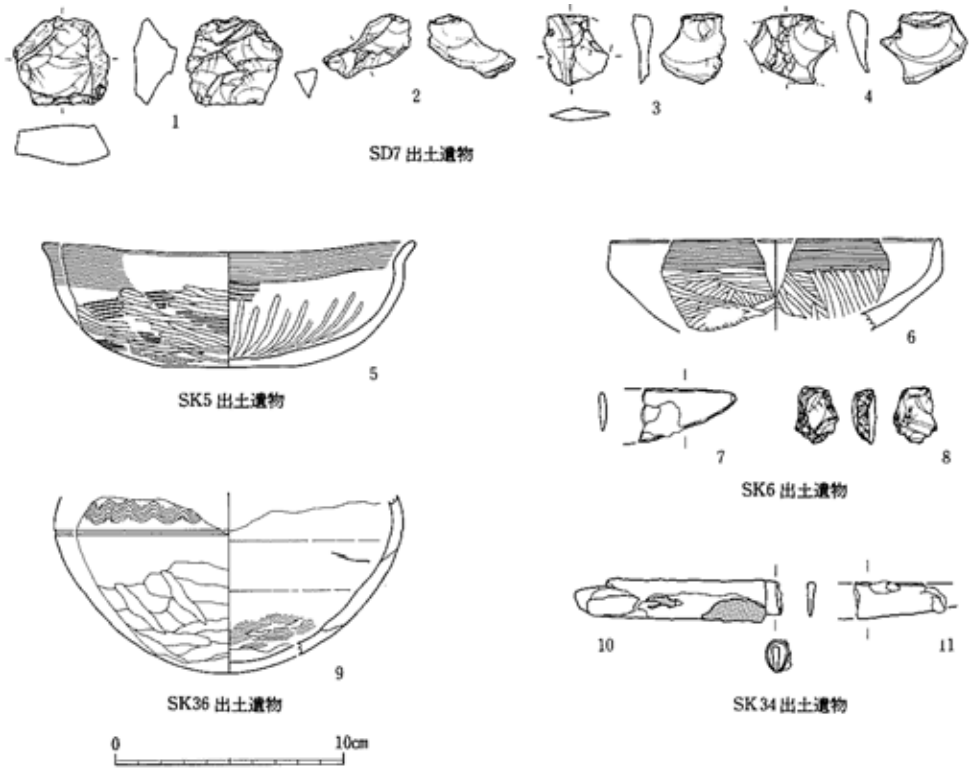
【ＳK3 土壙墓】

［位置・重複］N132、W30 で確認した。ＳD1 より古い。

［形態・規模］長径 1.64m以上、短径 80 ㎝で平面形は長方形を呈するものと思われる。断面形は両壁とも直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦で、深さは 36 ㎝である。全体的に箱形を呈する。

［堆積土］堆積土は 2 層に分けられる。1～2 は黒褐色シルト主体の地山粒を少量含む自然流入土であるが、2 の方が地山粒・ブロックを多く含む。

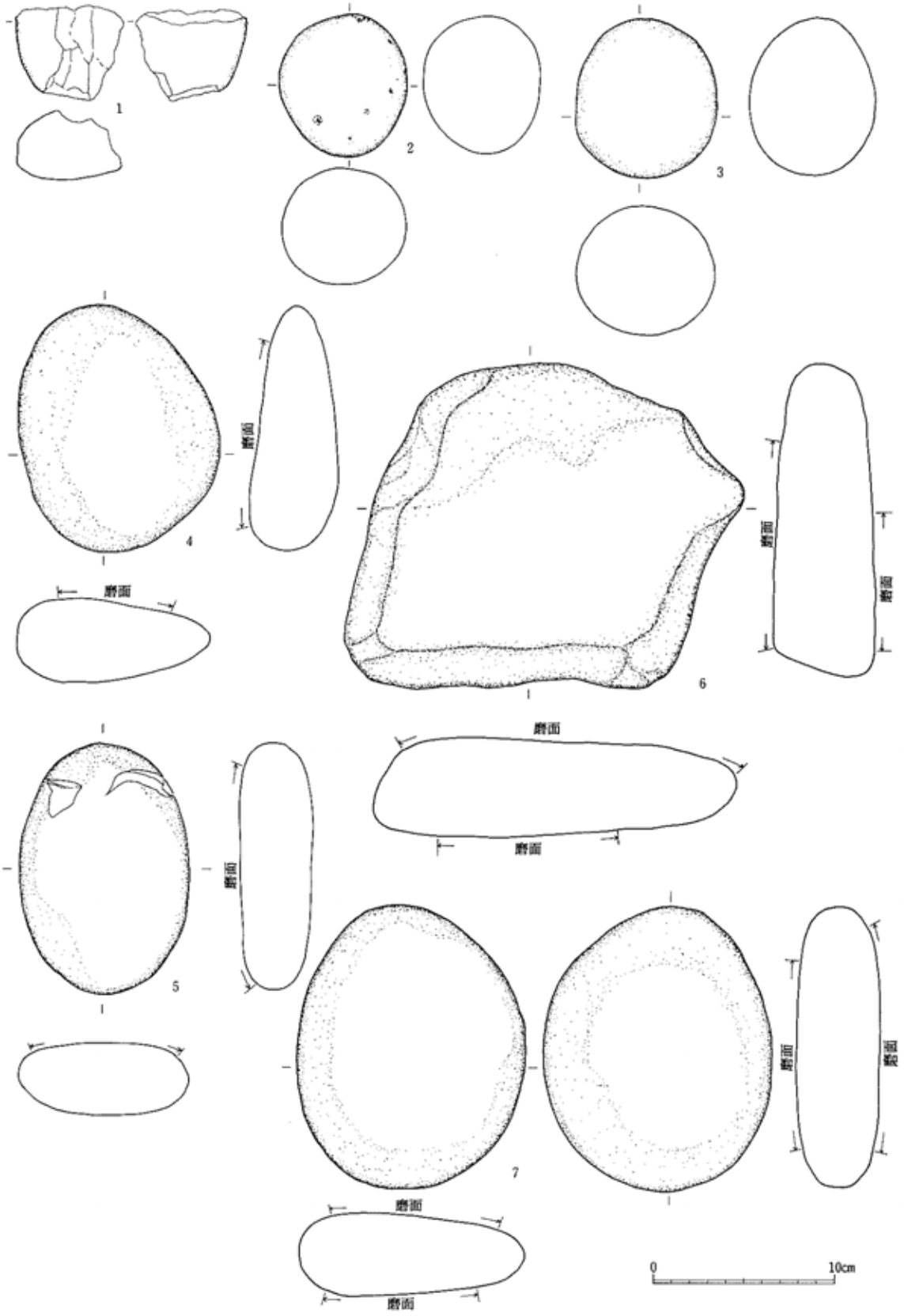
［出土遺物］土師器細片が少量出土している。



№	種　別	出土地点	特　徴	写真図版
1	石器　石核	SD7 遺構確認	長さ3.9cm、巾4.1cm、厚さ1.8cm。黒曜石。スクレイパー転用。	5－8
2	石器　剥片	SD7 遺構確認	長さ2.7cm、巾3.8cm、厚さ0.9cm。黒曜石。	5－9
3	石器　剥片	SD7	長さ3.1cm、巾(2.1cm)、厚さ0.7cm。流紋岩。	5－10
4	石器　剥片	SD7	長さ(3.1cm)、巾(3.7cm)、厚さ0.7cm。頁岩。	5－11
5	土師器　坏	SK5	口径16.4cm、底径6.6cm、器高5.5cm。外面［口］ヨコナデ［体］ハケメ→粗いミガキ　内面［口］ヨコナデ［体］ナデ成型→放射状ミガキ。内外面赤彩。	6－13
6	土師器　坏	SK6	口径14.4cm、器高(5.5cm)。外面［口］ヨコナデ［体］ミガキ　内面［口］ヨコナデ→［体］ミガキ。	
7	鉄製品　小刀	SK6	残存長4.2cm、最大幅2.3cm、厚さ0.3cm。	9－3
8	石器スクレイパー	SK6	長さ2.6cm、巾1.7cm、厚さ0.9cm。黒曜石。	
9	須恵器ハソウ	SK36	最大径15.4cm、残存高7.3cm。胴最大径部に逆三角形の沈線文。胴上部に櫛描波状文。TK208。	6－14
10	鉄製品　刀子	SK34	刀部。残存長4.0cm、最大幅1.6cm、厚さ0.3cm。11と同一個体。	9－1
11	鉄製品　刀子	SK34	柄部。残存長9.1cm、幅1.7cm、茎（金属部）1cm×1.4cm、（木質部）1.3cm×1.7cm。錆付着。10と同一個体。	9－2

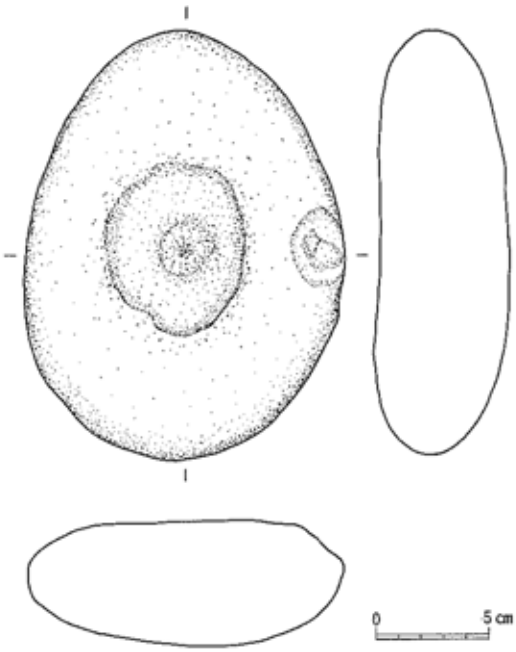
第13図　SD7・土壙出土遺物

【ＳＫ4 土壙墓】
［位置］N134、W30 で確認した。
［形態・規模］長径 1.20m以上、短径 1.16mで、平面形は長方形を呈するものと思われる。断面形は北壁・西壁は緩やかに立ち上がり、南壁はややオーバーハングして直立気味に立ち上がる。底面は中央付近に軽い段が付き、周辺より約 10 ㎝低くなっている。深さは最も深いところで 42㎝ である。
［堆積土］堆積土は 5 層に分けられる。1～3 は黒褐色シルト主体の地山粒を含む自然流入土であるが、4・5 は地山ブロック主体である。
［出土遺物］土師器細片が少量出土している。
【ＳＫ5 土壙墓】
［位置］N136、W130 で確認した。
［形態・規模］長径 60 ㎝以上、短経 56㎝ で、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形は両壁とも直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。深さは 30 ㎝である。
［堆積土］堆積土は 2 層に分けられる。1･2 とも黒色シルト主体で地山粒を含む自然流入土であるが、2 の方が地山粒を多く含む。
［出土遺物］土師器坏が出土している（第 13 図 5）。
【ＳＫ11 土壙墓】
［位置・重複］N137、W32 で確認した。ＳＤ7 より新しい。大部分は倒木痕の攪乱で壊されている。
［形態・規模］規模はおよそ長径 2.0m、短径 80㎝ と推定され、平面形は長方形を呈するものと思われる。断面形は底面付近は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。深さは約 40 ㎝である。
［堆積土］堆積土は 7 層に分けられるが、1～5 は攪乱層、6・7 がＳＫ6 の堆積土の一部で黒色シルト主体で地山粒を含む自然流入土である。
［出土遺物］土師器坏、小刀、黒曜石製スクレイパーが出土している（第 13 図 6～8）。
【ＳＫ11 土壙】
［位置・重複］N139、W32 で確認した。ＳＤ7 より新しく、ＳＸ12 より古い。
［形態・規模］規模は長径 60 ㎝、短径 42 ㎝、平面形は楕円形を呈する。断面形は両壁とも緩やかに立ち上がるＵ字形を呈する。底面は幅が狭いが平坦である。深さは 24 ㎝である。
［堆積土］堆積土は底面付近にわずかに認められる程度で、地山粒を多量に含む黒褐色土である。
［出土遺物］底面から磨り石 7 点、凹石 1 点が出土している（第 14 図、第 15 図）。
【ＳＫ34 土壙墓】
［位置・重複］N135、W30 で確認した。ＳＤ1 より古い。
［形態・規模］長径 1.44m、短径 58 ㎝で、平面形は長方形を呈する。断面形はＳＤ1 大部分を壊されているため不明な点が多いが、両壁とも直立気味に立ち上がるものと推定されるが、南東隅は一部底面より 7 ㎝高い段が付いている。底面は平坦である。深さは 24㎝ である。全体的に箱形であったと推定される。
［堆積土］堆積土は底面付近にわずかに認められる程度で、地山粒・ブロックを多量に含む黒褐色土



第14図　SK11 出土磨石

（写真図版10－１～７）



第15図　SK11 出土くぼみ石　（写真図版10－８）

である。

［出土遺物］南東隅の段上（地山面）に刀子が置かれており、木質の柄部分には漆が付着している（第13図10・11）。

【ＳK36 土壙】

［位置・重複］N141、W3 で確認した。ＳD62 より古く、また、木の根で攪乱されている。

［形態・規模］規模は長径 1.00m以上、短径 80 ㎝で、平面形は楕円形を呈するものと思われる。断面形は両壁とも緩やかに立ち上がり底面は平坦である。深さは 13 ㎝である。

［堆積土］堆積土は黒褐色シルト主体の自然流入土である。

［出土遺物］須恵器甕が出土している（第 13 図 9）。

【ＳK48 土壙墓】

［位置・重複］N138、W63 で確認した。ＳD49 より古い。

［形態・規模］規模は長径 1.90m以上、短径 1.10mで、長楕円形を呈する。断面形は両壁が直立気味に立ち上がる。底面は東側が 10 ㎝ほど低くなっている。深さは 44 ㎝である。全体的に箱形である。

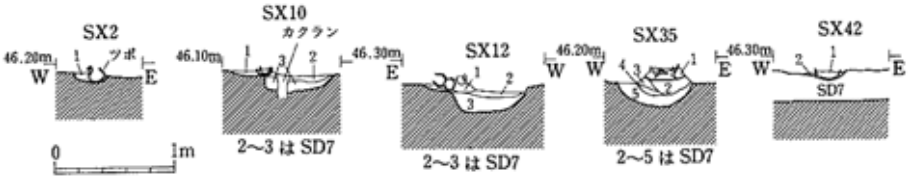
［堆積土］堆積土は 5 層に分けられる。1～3 は黒褐色～暗褐色シルトで地山粒を少量含む自然流入土で 4～6 は地山粒・ブロック主体のしまりのない自然流入・崩落土である。

［出土遺物］6 層から刀子の破片が出土している。

【ＳK51 土壙墓】

［位置］N144、W33 で確認した。

［形態・規模］規模は長径 1.50m、短径 65㎝ で、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形は両壁とも底面付近に段が付き、直立気味に立ち上がり、上部はやや開く。底面は平坦である。深さは 50 ㎝である。



第16図　土器埋設遺構断面図

［堆積土］堆積土は5層に分けられる。1～4は黒褐色～暗褐色シルト主体で、地山粒・ブロックを少量含む自然流入土で、5は地山ブロック主体のしまりがある土である。

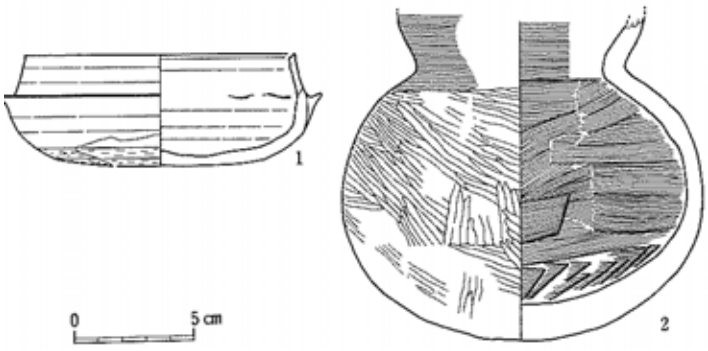
［出土遺物］出土遺物はない。

③土器埋設遺構

【ＳＸ2 土器埋設遺構】

［位置・重複］N131、W31で確認した。木の根に撹乱されている。

［形態・規模］掘り方底面がわずかに残っている程度で、規模は直径22㎝の円形、断面形は緩やかに立ち上がるU字形を呈し、深さ8㎝である。



［埋設状況］底面から土師器壷と須恵器蓋坏が出土している（第17図1・2）。土師器甕は内外面赤彩されており、須恵器蓋坏が蓋をした状態で出土した。地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト質粘土で埋め戻されている。

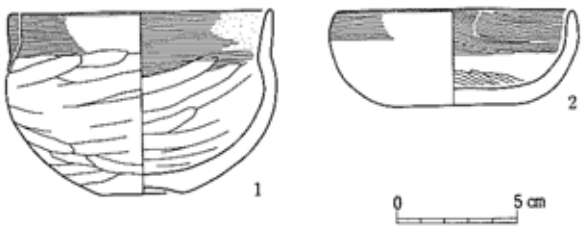
No	種別	出土地点	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	底部	胎土	備考	写真図版
1	須恵器蓋坏	Po－1	1/2	11.2	4.4	4.6	ロクロナデ、底部回転ケズリ	ロクロナデ	平底		TK208	6－18
2	土師器 壷	Po－2	4/5	(10.2)		(13.7)	[口～体]ヨコナデ[体]ミガキ	[口]ヨコナデ[体]ナデ	丸底	中粒	内外面赤彩	6－19

第17図　SX2 出土土器

【SX10 土器埋設遺構】

［位置・重複］N137、W31で確認した。ＳＤ7円形周溝より新しい。

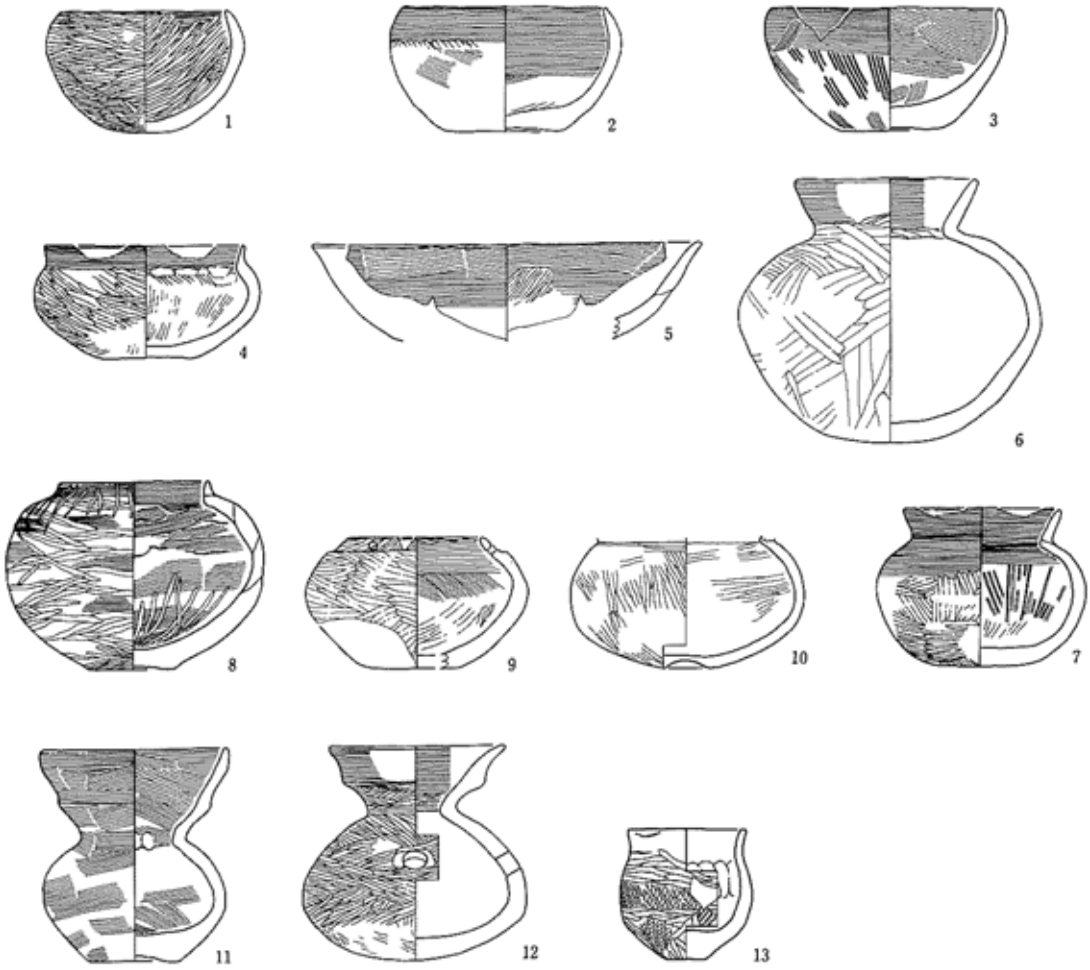
［形態・規模］掘り方底面がわずかに残っている程度で、規模は直径40㎝の円形。断面形は緩やかに立ち上がり、深さ3～4㎝である。



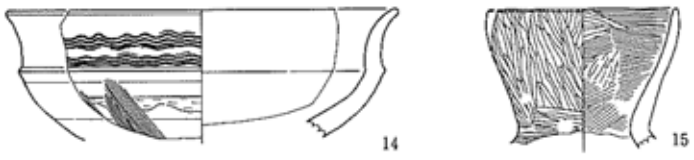
［埋設状況］底面から内外面赤彩された土師器坏が重なって出土している（第18図1・2）。地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

No	種別	出土地点	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	底部	胎土	備考	写真図版
1	土師器 坏	SX10	2/3	10.8	3.6	7.6	[口]ヨコナデ[体]ナデ[底]ケズリ→ナデ	[口]ヨコナデ[体]ナデ	平底	中粒	内外面赤彩、摩耗	6－20
2	土師器 坏	SX10	1/1	9.8	5.2	4.0	[口]ヨコナデ	[口]ヨコナデ[体]ミガキ	平底	細粒		6－21

第18図　SX10 出土土器



SX12 出土土器



SX12 付近確認面出土土器

0 10cm

No	種別	出土地点	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	底部	胎土	備考	写真図版
1	土師器 坏	Po−1	1/2	7.4		5.4	[口〜体]細かいミガキ	[口〜体]ヨコナデ→ミガキ	丸底	中粒		7−1
2	坏	Po−5	2/3	8.8	5.2	5.6	[口]ヨコナデ[体]ナデ、一部ミガキ	[口〜体]ヨコナデ、[底]粗いナデ	平底	中粒		7−2
3	坏	Po−9	4/5	10.1	4.2	5.5	[口]ヨコナデ[体]ハケメ	[口]ヨコナデ[体〜底]ナデ	平底	中粒		7−3
4	坏	Po−4	3/4	8.8	3.8	5.1	[口]ヨコナデ→ミガキ[体]ナデ→ミガキ	[口]ヨコナデ[体]ナデ→指オサエ→ミガキ	平底	中粒	内外面赤彩	7−4
5	高坏			17.2		(4.2)	[坏]ヨコナデ	[坏]ヨコナデ→ミガキ		細粒	内外面赤彩	7−5
6	壺	Po−11	1/1	8.0		11.9	[口]ヨコナデ[頸]一部ミガキ[体]ミガキ	[口]ヨコナデ[頸]ミガキ[体]ナデ	丸底	細粒	内外面赤彩	7−6
7	壺	Po−3	4/5	6.8		7.1	[口〜体上]ヨコナデ[体〜底]ミガキ	[口〜体]ヨコナデ[体〜底]ハケメ→ミガキ	平底	細粒		7−7
8	短頸壺	Po−6	2/3	6.6	3.8	8.4	[口]ヨコナデ→ミガキ[体]ナデ→ミガキ	[口]ヨコナデ→ミガキ[体]ナデ→ミガキ	平底	細粒	内外面赤彩	7−8
9	短頸壺	Po−1	1/2	5.8	3.8	5.8	[口]ヨコナデ→ミガキ[体〜底]ナデ→ミガキ	[口]ヨコナデ→ミガキ[体〜底]ナデ→ミガキ	平底	細粒	内外面赤彩。1孔	7−9
10	壺	Po−1	1/3		2.0	(1.7)	[体]ミガキ	[体]ミガキ		細粒	内外面赤彩	7−10
11	長頸壺	Po−8	1/1	8.2	4.0	9.4	[口]ヨコナデ[体]ナデ	[口]ヨコナデ・ナデ[体]ナデ	平底	細粒	内外面赤彩	7−11
12	甕	Po−12	1/1	7.8		9.6	[口]ヨコナデ→ミガキ[体]ナデ→ミガキ	[口〜頸]ヨコナデ→ミガキ[体]ナデ	丸底	細粒	内外面赤彩。	7−12
13	ミニチュア土器		1/2	5.3	1.6	5.8	[体]ミガキ、RL縄文、L縄文	[体]ナデ	平底	細粒		7−13
14	須恵器無蓋高坏	確認面	1/5	17.4		(1.7)	櫛描波状文	自然釉のため調整不明		細粒	TK23。在地産	7−14
15	土師器長頸壺	確認面	1/5	8.4		(4.4)	[口]ミガキ[頸]ヨコナデ→ミガキ	[口]ナデ→ミガキ（マメツ）		細粒	内外面赤彩	7−15

第19図　SX12 出土土器

【ＳＸ12 土器埋設遺構】

［位置・重複］N140、W30 で確認した。ＳＤ7 円形周溝より新しく、ＳＸ11 より古い。

［形態・規模］掘り方底面がわずかに残っている程度で、規模は直径 40 ㎝の円形、断面形は緩やかに立ち上がり、深さ 3～4 ㎝である。

［埋設状況］底面から土師器 13 点が折り重なるように一括出土している（第 19 図 1～13）。地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで埋め戻されている。1～4 は坏、5 は高坏、6・7 は小形壷、8・9 は短頸壷、11 は長頸壷、12 は 甕 、13 は鉢のミニチュア土器である。4～12 は内外面赤彩されている。13 は胴部最大径部に帯状にＲＬ縄文を施文し、胴下部にはＲＬ縄文・Ｌ縄文を施文している。

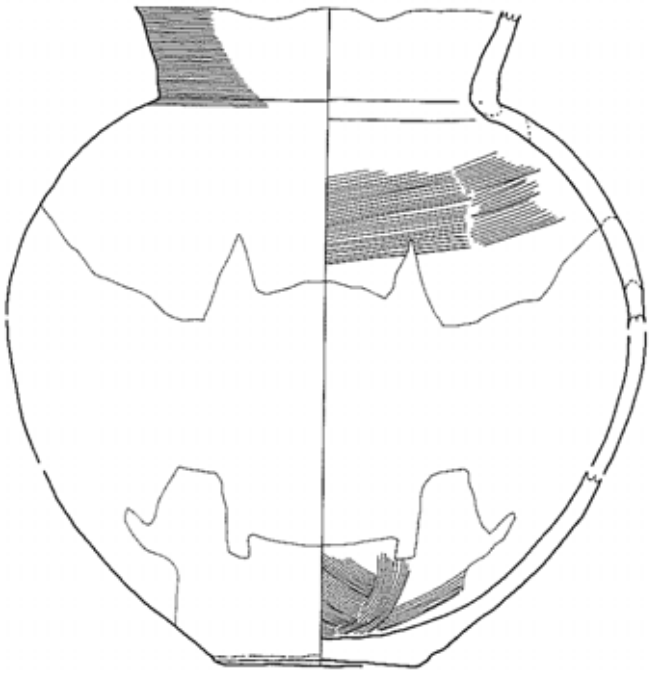
また、ＳＸ12 付近の遺構確認面で須恵器無蓋高坏と内外面赤彩された土師器長頸壷の頸部が出土している（第 19 図 14・15）。ＳＸ12 に伴うものかもしれない。

【ＳＸ35 土器埋設遺構】

［位置・重複］N141、W30 で確認した。ＳＤ7 円形周溝より新しい。

［形態・規模］掘り方底面がわずかに残っている程度で、規模は直径 24 ㎝の円形、深さ 6㎝ である。

［埋設状況］底面から土師器甕が出土している（第 20 図）。甕は内外面赤彩され甕の底部に口縁部が逆さまに入れられていた。地山粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。



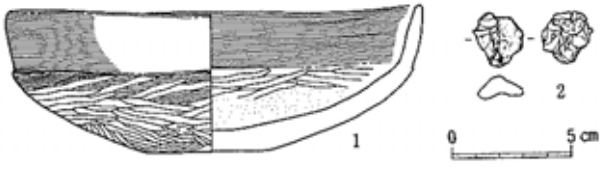
第20図　SX35 出土土器

【ＳＸ42 土器埋設遺構】

［位置・重複］N144、W34 で確認した。ＳＤ7 円形周溝より新しく、また木の根に攪乱されている。

［形態・規模］掘り方底面がわずかに残っている程度で、規模は直径 34㎝ の円形を呈するものと思われ深さ 3～4 ㎝である。

［埋設状況］底面から須恵器蓋を模倣した土師器坏、黒曜石剥片石器が出土している（第 21 図 1・2）。1 は内外面赤彩されている。地山粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。



第21図　SX42 出土遺物

No	種別	出土地点	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	底部	胎土	備考	写真図版
1	土師器 甕	SX35	1/4		8.4	(27.6)	[口]ヨコナデ	[体]ナデ	平底	中粒		6－22

第20図　SX35 土器観察表

No	種別	出土地点	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土	備考	写真図版
1	土師器 坏	SX42	1/1	17.2	5.2	6.0	[口]ヨコナデ[体]ケズリ→ミガキ	[口]ヨコナデ[体]ミガキ	平底	細粒内外面赤彩。模倣坏	6－23
2	剥片	SX42		長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。黒曜石。火ハネ。							

第21図　SX42 土器観察表

(5)　古代

土壙3基、合口甕棺1基が確認された。

【ＳＫ23 土壙】

［位置］N141、W57 で確認した。

［形態・規模］規模は長径1.00m以上、短径98㎝で、平面形は不整長方形を呈するものと思われる。

［断面形］東壁は底面から20㎝のところで段を形成し、比較的急に立ち上がる。西壁はオーバーハングして直立気味に立ち上がり、上部はやや開く。

［堆積土］堆積土は5層に分けられる。1～5とも黒色または黒褐色シルト主体の自然流入土で、4・5には壁際の地山崩落土・流入土が含まれる。

［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器坏が出土している（第22図1）。

【ＳＫ45 土壙】

［位置］N144、W48 で確認した。

［形態・規模］規模は長径1.80m以上、短径1.26mで、平面形は西辺がやや膨らむ長方形を呈するものと思われる。

［断面形］両壁とも比較的急に立ち上がり、底面は多少の凹凸が認められる。深さは60㎝である。

［堆積土］堆積土は7層に分けられる。1～5は黒褐色または暗褐色シルト主体の自然流入土で、6・7は地山崩落土・流入土が主体となる。

［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器坏が出土している（第22図2）。

【ＳＫ46 土壙】

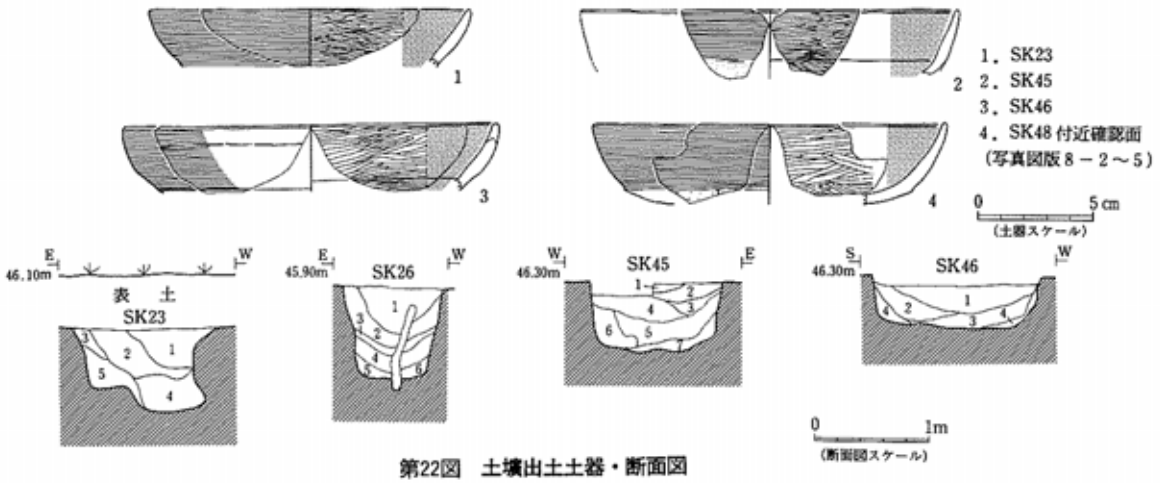
［位置］N142、W55 で確認した。

［形態・規模］規模は長径1.80m以上、短径1.26mで、平面形は西辺がやや膨らむ長方形を呈するものと思われる。

［断面形］両壁とも比較的急に立ち上がり、底面は多少の凹凸が認められる。深さは60㎝である。

［堆積土］堆積土は7層に分けられる。1～5は黒褐色または暗褐色シルト主体の自然流入土で、6・7は地山崩落土・流入土が主体となる。

［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器坏が出土している（第22図3）。



第22図　土壙出土土器・断面図

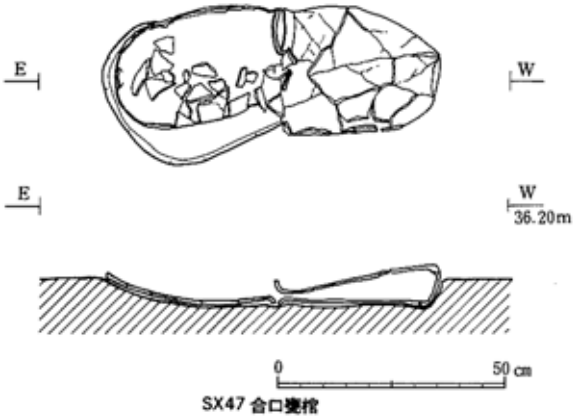
【ＳＸ47 合口甕棺】

［位置］N142、W57 で確認した。

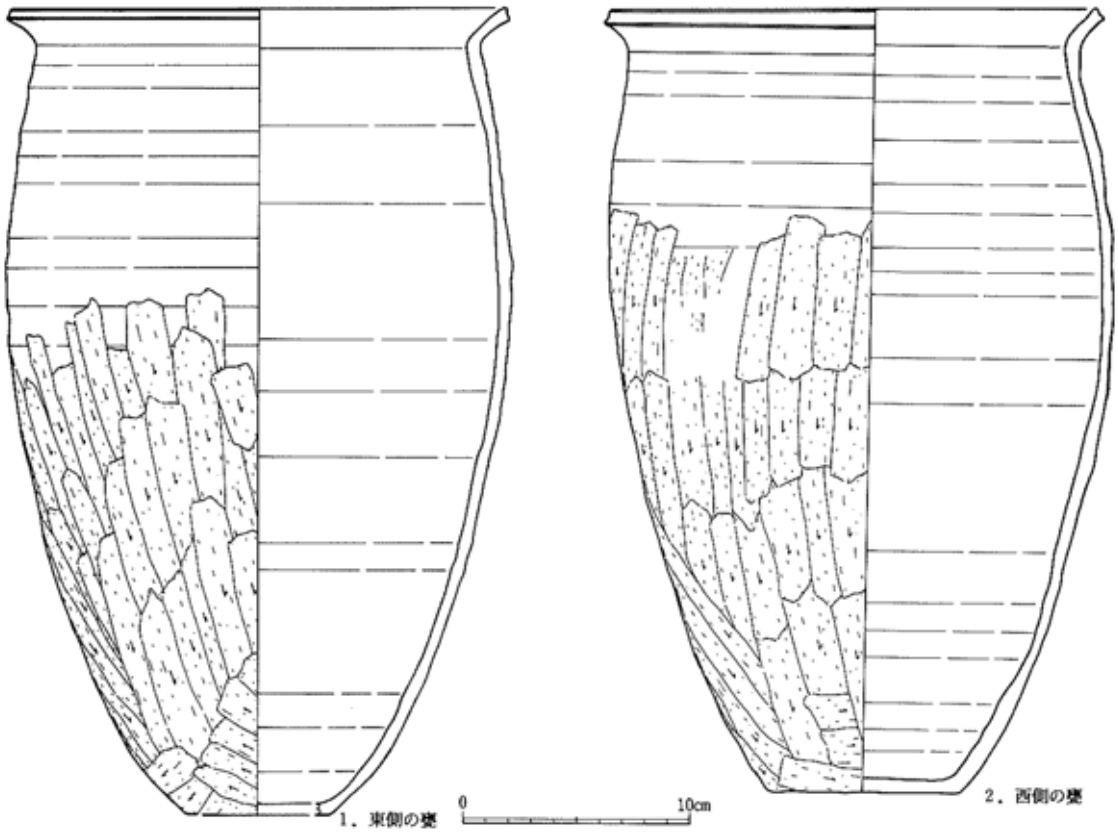
［掘り方形態・規模］規模は長径 1.50m、短径 60 ㎝の楕円形で、長軸は北西－南東方向である。

［掘り方断面形］甕の器形に合わせるように東壁は緩やかに立ち上がり、西壁は比較的急に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、深さは 10 ㎝である。

［埋設状況］掘り方底面からロクロ調整の土師器長胴甕が口を合わせ、上から潰された状態で出土した（第 23 図 1・2）。埋土は甕棺の下には認められなかったが、割れた甕棺の中に汚れた地山粒を含む黒褐色シルトが認められた。出土した甕はいずれも煮炊具としては使用されていない。



SX47 合口甕棺



第23図　SX47 出土遺物

(6)　中近世

溝跡 17 条を確認した（ＳＤ1・9・16・22・27・29・39～41・49・50・53～55・62・67）。このうちＳＤ9・16・40・27・54 からは中近世の遺物が出土している（第 25 図）。しかし、他の溝跡は出土遺物はなく正確な所属時期が不明であるが、本遺跡の中近世の遺構に特徴的な締まりのない黒褐色主体の堆積土であることなどからおおよそ中近世と考えられるものである。

規模はＳＤ9・16 が幅 1.5～2.0m、深さ 1.0～1.5mを計り比較的大きい溝跡である以外は、幅 1.0m前後、深さ 30～40 ㎝程度の小規模な溝である。溝の方向は東－西方向のもの（ＳＤ9・22・41・62）、南－北方向のもの（39・40・49・50・53～55・67）、東－西から南－北方向に曲がるもの（ＳＤ1・16・29）がある。また、ＳＤ39・40 は平行しながら南のＢ－1 区に延びている。

【ＳＤ16 溝跡】

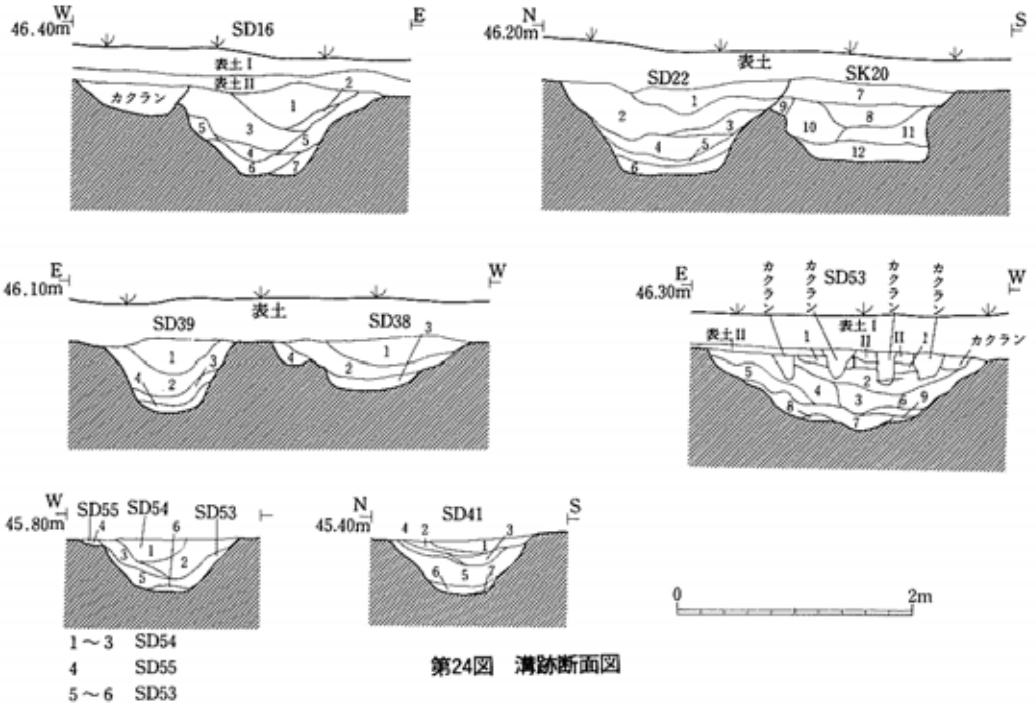
［位置・方向］N126～138、E12～55 で確認された溝跡で南北方向から東西方向に方向を変える。40m分検出した。

［重複］ＳＤ17・25、ＳＫ18 より新しく、ＳＤ55 と同時期である。また木の根に攪乱されている

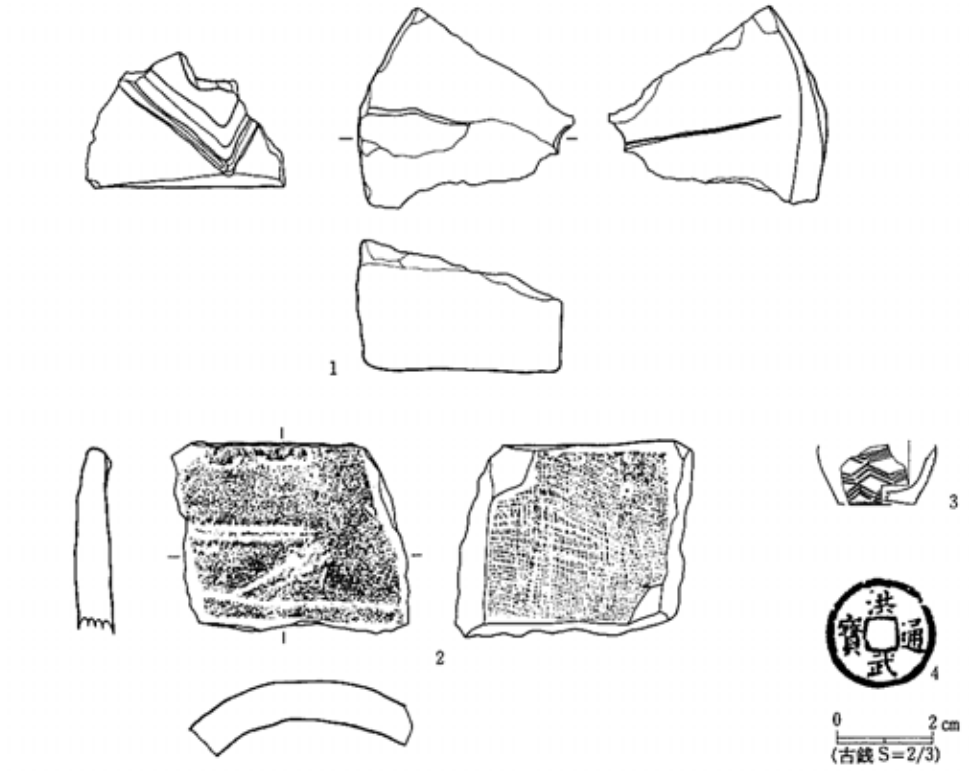
［断面形・規模］西ほど規模が大きくなる。まずＥ付近の西壁で観察すると、上幅 1.24m、下幅 65 ㎝で南壁は直立気味に立ち上がり、北壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があり南側が低くなる。つぎにＥ12 付近の北壁で観察すると、上幅 1.80m、下幅 50 ㎝で、底面から緩やかに立ち上がり上部はやや開く。底面は平坦で、深さは 80 ㎝である。また、底面レベルはＥ12 付近が標高 45.10m、E48 付近が標高 45.30mであることから、下流ほど規模を拡大して東→西→北方向へ水を流したものと考えられる。

［堆積土］E12 付近の北壁で観察すると、堆積土は 7 層に分けられる。1～7 層とも暗褐色または黒褐色シルトを主体とし、地山粒を少量含む自然流入土である。7 はさらに地山崩落土を含む。

［出土遺物］天目茶碗の破片、石臼上臼が出土している。そのほか、古代の瓦や弥生時代桝形囲式期のミニチュア土器が流れ込んでいる（第 25 図 1～3）。



第24図　溝跡断面図



1．SD16　茶白上白
2．SD16　平瓦
3．SD16　弥生土器（ミニチュア鉢）
4．SD 9　古銭（洪武通宝）
5．SD27　天目茶碗
6．SD40　擂鉢
7．SD54　擂鉢
8．SD54　石白下白
（写真図版9・10）

第25図　溝跡出土遺物

【ＳＤ39 溝跡】

［位置・方向］N72～78、E61 で確認され、さらに南に延びる南北溝跡である。ＳＤ38・40 と平行する（近世陶器が出土したＳＤ40 の詳細はＢ区で記述する）。

［重複］ＳＢ88 より新しい。

［断面形・規模］N72 付近の断面で観察すると、上幅 1.12m、下幅 50 ㎝で両壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央がやや低くなり、深さは 62 ㎝である。底面レベルはN36 付近が標高 5.02m、N72 付近が標高 44.98mとわずかに北側が低く、南→北方向へ水を流したものと考えられる。

［堆積土］堆積土は 4 層に分けられる。1～3 層は黒褐色または黒色シルトを主体とし、地山粒・ブロックを少量含む自然流入土である。4 は地山粒・ブロック主体の地山流入・崩落土である。

［出土遺物］出土遺物はない。

【ＳＤ53 溝跡】

［位置・方向］N82～126、E36～39 で確認され、さらに南に延びる南北溝跡である。

［重複］ＳＫ37 より新しく、ＳＤ54・55 より古い。また、木の根に攪乱されている。

［断面形・規模］N81 付近の断面で観察すると、上幅 2.40m、下幅 1.20mで東壁が多少段が認められるものの全体的に緩やかに立ち上がる。底面は中央がやや低くなるがほぼ平坦で、深さは 80 ㎝である。底面レベルはE82 付近が標高 45.20m、N105 付近が標高 45.10mであることから南→北方向へ水を流したものと考えられる。

［堆積土］堆積土は 9 層に分けられる。1～7 層は黒褐色シルトを主体とし、地山粒・ブロックを少量含む自然流入土である。8・9 地山ブロック主体の地山崩落土である。

［出土遺物］陶器碗の破片が出土している（第 25 図 5）。

【ＳＤ54 溝跡】

［位置・方向］N105～126、E42～45 で確認され、N105 付近で東西方向から南北方向に曲がる。

［重複］ＳＤ53・55 より新しい。

［断面形・規模］N105 付近の断面で観察すると、上幅 1.22m、下幅 20 ㎝、両壁は多少段が認められるが緩やかに立ち上がり上部は開く。底面は中央が低くなり、深さは 52㎝である。

［堆積土］堆積土は 3 層に分けられる。1～3 層は黒褐色シルトを主体とし、地山粒を少量合む自然流入土である。1 はしまりがなく、掘り直されている可能性がある。

［出土遺物］陶器磁の破片が出土している（第 25 図 7～8）。

【ＳＤ55 溝跡】

［位置・方向］N105～126、E42～45 で確認され、N105 付近で東西方向から南北方向に曲がる。

［重複］ＳＤ53 より新しく、ＳＤ54 より古い。

［断面形・規模］大半がＳＤ54 に壊されているため全容は不明だが、規模は上幅 1.30m、下幅 80 ㎝、深さは 20 ㎝程度と推定される。

［堆積土］堆積土は 1 層で、黒褐色シルトを主体の地山粒を少量含む自然流入土である。

［出土遺物］出土遺物はない。

2．B区

A区南側の調査区で畦畔により5区に細分される（第27図B－1～B－5区）。掘立柱建物跡4棟、跡21条、土壙11基、井戸跡8基が確認された。遺構は特に偏りはなく全体的に認められるが密度は低い。また、調査区が狭いため掘立柱建物跡や溝跡などは全容が不明である。遺物は一部の遺構からある程度まとまって出土しているに過ぎないため、遺物から遺構の所属時期がわかるものは少ない。しかし、時期不明の遺構については堆積土の特徴などからいずれも中近世のものと考えられる。

(1)　古墳時代

土壙1基、溝跡1条がある。

土壙

【ＳＫ130ａ～ｄ粘土採掘抗跡】

Ｂ－4 区Ｓ90、Ｅ75 付近で規模や平面形が様々な土壙の集合体が確認された。遺構確認面は基本層序Ⅲ層であるが、湿地の近くということもあり白色粘土化している。土壙はそのまとまり方からＳＫ130ａ～ｄとした。ＳＫ130ａ～ｄは規模は異なるものの同じ様相を呈していることから、記述は最も規模の大きいＳＫ130ａについて行なう。

［重複］ＳＤ131より新しい。

［平面形・規模］長径5.4m、短径4.0mの不整形をしている。

［断面形］断面形は凹凸が著しく、規則性も認められない。深さは最も深いもので55㎝、浅いものは10㎝程である。

［堆積土］堆積土は1層で、地山ブロック主体で黒褐色シルトを含む自然流入土である。

［出土遺物］土師器坏と甕が出土している（第26図1～3）。

溝跡

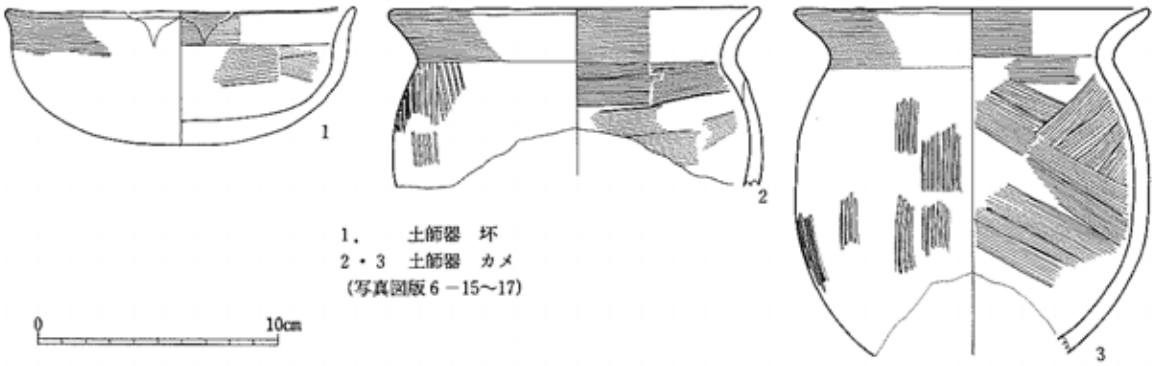
【ＳＤ131溝跡】

［位置・重複］Ｂ－4区Ｓ90、Ｅ75で確認された。ＳＫ130ａより古い。

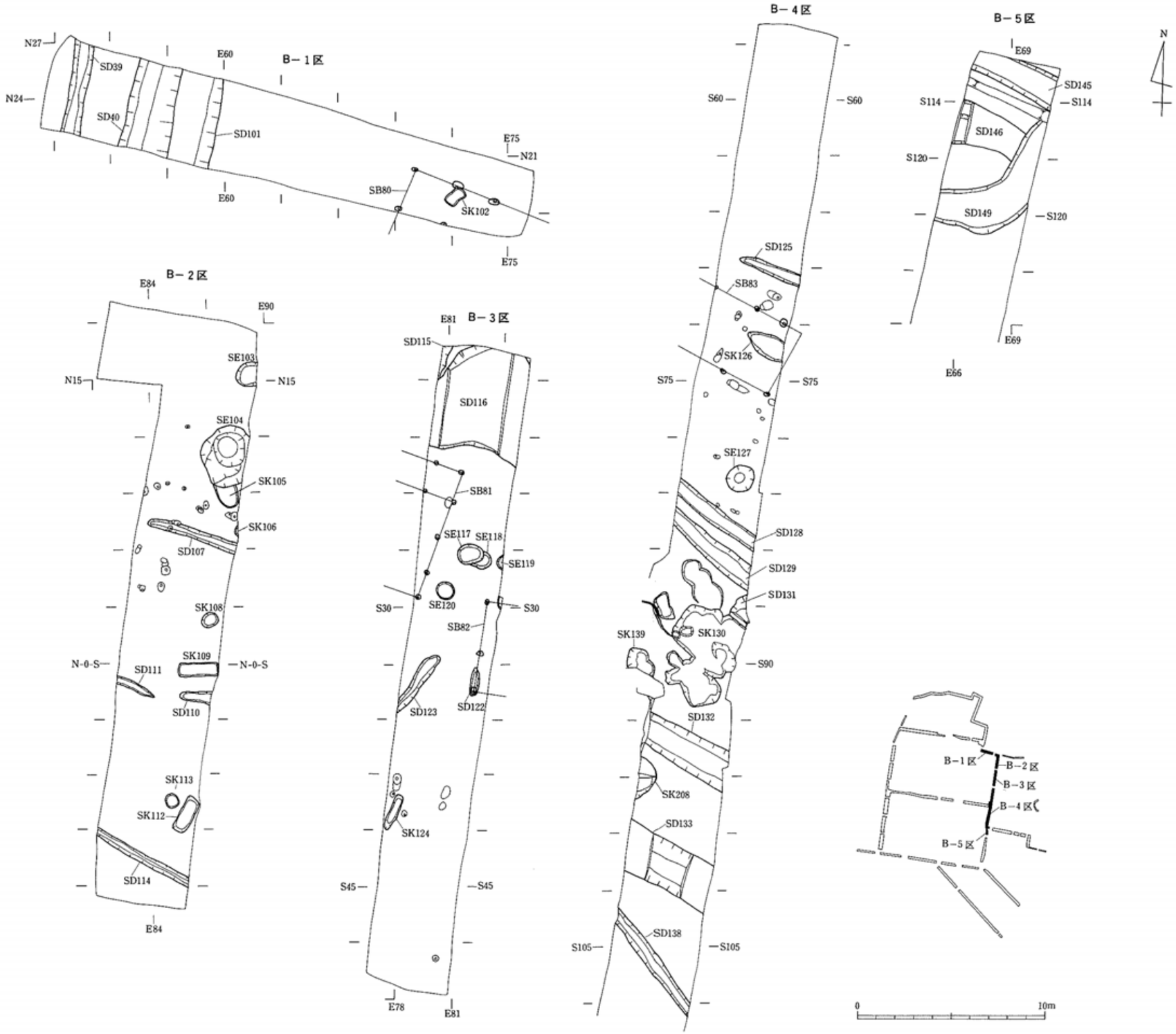
［規模・断面形］規模は上幅1.36m、下幅は1.12mである。断面形は両壁が比較的急に立ち上がり、底面が平坦な逆台形状を呈する。深さは25㎝である。

［堆積土］堆積土は1層で、黒褐色シルト主体で地山粒・ブロックを含む自然流入土である。

［出土遺物］土師器甕の破片が出土している。



第26図　SK130出土土器


B－1区
B－2区
B－3区
B－4区
B－5区
N
N27
N24
E60
E75
N21
SD39
SD40
SD101
SB80
SK102
E84
E90
N15
SE103
SE104
SK105
SK106
SD107
SK108
SK109
N-0-S
SD111
SD110
SK113
SK112
SD114
E81
SD115
SD116
SB81
SE117
SE118
SE119
SE120
S30
SB82
SD123
SD122
SK124
S45
E78
S60
SD125
SB83
SK126
S75
SE127
SD128
SD129
SD131
SK139
SK130
S90
SD132
SK208
SD133
S105
SD138
E69
SD145
S114
SD146
S120
SD149
E66
B－1区
B－2区
B－3区
B－4区
B－5区
0
10m

第27図　B区平面図

(2)　古代

溝 2 条がある。ＳＤ132･133 溝跡は規模、断面形が類似し、平行して北西－南東方向に延びる溝跡である。ＳＤ133 の堆積土には灰白色火山灰が入る。

【ＳＤ133 溝跡】

［位置］Ｂ－4 区N102、E72～75 で確認された。Ｄ－2 区まで延びる。

［規模・断面形］西壁で観察すると、規模は上幅 2.36m、下幅は 80㎝である。断面形は両壁が緩やかに立ち上がり、上部はやや開く。深さは 82 ㎝である。

1・2　漆器椀（内外面黒漆）
（写真図版10－23～24）

第28図　SD133 出土遺物

［堆積土］堆積土は 6 層に分けられる。1～6 は黒褐色～褐灰色の砂および粘土質シルトからなる自然流入土である、5・6 は地山粒・ブロックを多量に含み、さらに 6 は灰白色火山灰を含む。

［出土遺物］中近世のものと思われる漆器が流れ込んでいる（第 28 図）。

(3)　近世

溝跡、井戸跡、土壙、掘立柱建物跡が確認された。

溝跡

溝跡は 16 条ある（ＳＤ39･40･101･107･111･114･116･123･125･128･129･138･145･146･149）。このうちＳＤ40・101・116 が幅 3～5m深さ 1m前後の大溝、ＳＤ145・146・149 が湿地付近の幅 2m前後のプランが不明瞭な浅い溝である以外は、幅 1m以下、深さ 10～20 ㎝の小溝で堆積土は締まりのない黒褐色シルト主体である。方向はＳＤ39・40・101 が南－北方向、ＳＤ116 が北西－南東方向から北東－南西方向にほぼ直角に曲がり、他はほぼ北西－南東方向である。

【ＳＤ101 溝跡】

［位置］Ｂ－1 区N18～27、E60 で確認された。さらに北、南に延びる。

［重複］ＳＤ40 より古い。

［規模・断面形］規模は上幅はＳＤ40 に壊され不明だが、およそ 3.00mと推定され、下幅は 2.25mである。断面形は両壁が緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形状を呈する。深さは 80 ㎝である。

［堆積土］堆積土は 2 層に分けられる。1 は黒褐色の砂質シルトの自然流入土で、2 は地山ブロック主体で黒褐色シルトを含む人為的埋土である。

［出土遺物］陶器（甕･碗･摺鉢）、石製品（石臼下臼･石鉢､石斧･砥石）が出土している（第 30 図）。

【ＳＤ116 溝跡】

［位置］Ｂ－3 区N16～22、E81 で確認された。南東から南西方向に曲がり、さらに延びる。

［重複］ＳＤ115 より新しい。

［規模・断面形］規模は上幅は 5.20m、下幅は 2.25mである。断面形は両壁がオーバーハングして直立気味に立ち上がる。底面が平坦で、深さは 60 ㎝である。

［堆積土］堆積土は2層に分けられる。1～2とも締まりのない黒褐色シルト主体で、地山ブロックを含む自然流入土である。

［出土遺物］陶器（端反小形碗・天目茶碗）、金属製品（釘）が出土している（第29図2～4）。

井戸跡

8基確認された。いずれも直径が1.20m前後で、平面形が円形を基調とするものである。B－3区に多く見られる。

【SE120溝跡】

［位置］B－4区S30、E81で確認された。

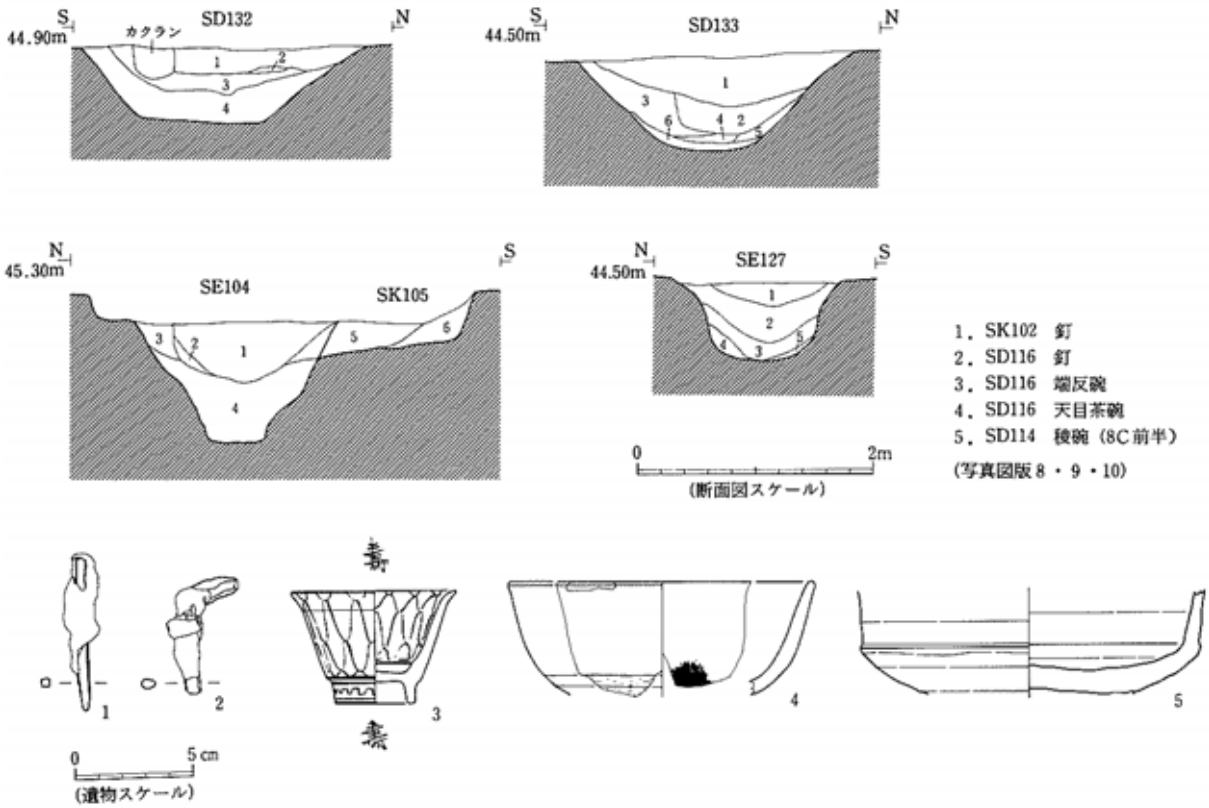
［規模、平・断面形］規模は長径1.00m、短径92㎝で、平面形は楕円形を呈する。断面形は両壁が直立気味に立ち上がり、底面が平坦なU字形である。深さは54㎝である。

［堆積土］堆積土は1層で、地山ブロックを含むしまりがない黒褐色砂質シルトである。

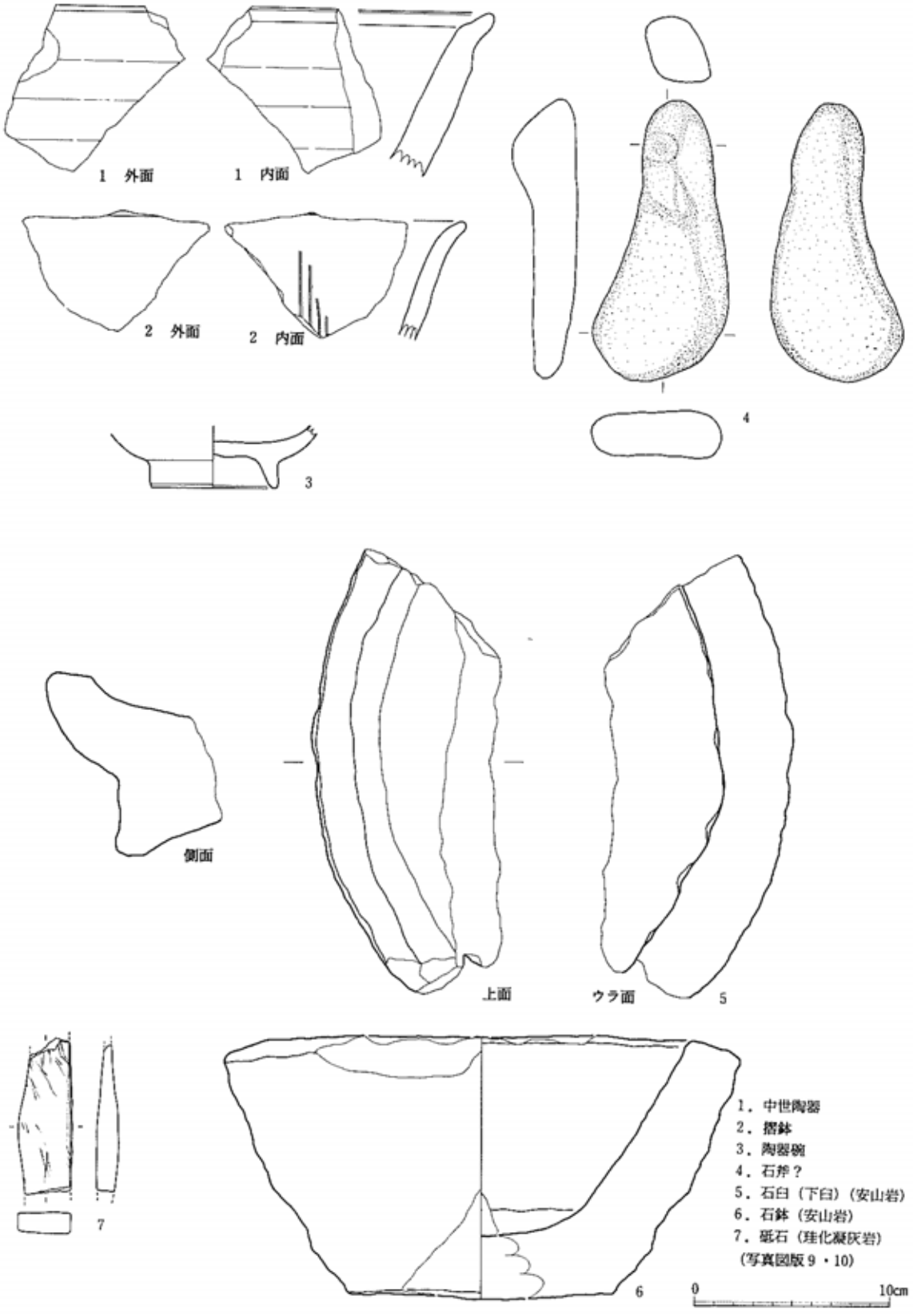
［出土遺物］陶器高台付皿の破片が出土している。

土壙

8基確認された。直径1m前後で円形を呈するもの（SK102・108・109・113）、長径2m前後で長方形を呈するもの（SK105・112・124）、長径2m以上で不整形のもの（SK126）に分けられるが、分布、属性に偏りは見られない。深さはいずれも浅く10㎝前後のもので、堆積土は締まりのない黒褐色シルトを主体とする。



第29図　B区断面図・出土遺物（近世）



第30図　SD101 出土遺物

掘立柱建物跡

4 棟確認された。いずれも建物跡の一部を検出したに過ぎない。方向は南北方角の柱筋で見てみると北で 10～15 度東に傾いているが、4 棟ともおおよそ同じ方向である。柱穴は直径 30㎝ 前後の円形を基調としており、埋土は黒褐色シルト主体で少量の地山ブロックを含む。

3．C区

遺跡北西端の南北方向の調査区で、畦畔によりさらに 7 区画に細分される。遺構は北から 2・3 番目（C－1 区、C－2 区）と南端の調査区（C－3 区）でのみ確認された（第 31 図）。発見された遺構は、C－2・3 区では土壙が 13 基集中して確認され、C-3 区では東西溝 1 条が検出されただけである。遺構の時期は土壙群や溝の堆積土に灰白色火山灰を含むことからいずれも古代のものと考えられる。

土壙

N21～S12 の約 30mの範囲に 13 基の土壙が集中している。このうちN14～21 は平面形が長径 1.5m前後、短径 1.0m前後の楕円形を呈する小規模な土壙（SK211～216）が集中しているのに対し、この南側のN9～S12 では長径 2.0m、短径 1.5m前後の楕円形または隅丸方形を呈する比較的大きい土壙（SK217～223）が分布する傾向がある。深さも前者が 15～30 ㎝で、後者は 60㎝ 前後である。堆積土はいずれも底面や壁際に地山粒が多少含まれる締まりのない黒～暗褐色土であり、層中に灰白色火山灰が認められる。

【SK211 土壙】

［位置］C－1 区N19、W138 で確認された。

［規模、平・断面形］規模は長径 1.20m、短径 70 ㎝で、平面形は楕円形を呈する。断面形は両壁がオーバーハングして立ち上がり上部がやや開く。底面は平坦で、深さは 30㎝ である。

［堆積土］堆積土は 3 層で、1 は灰白色火山灰層、2・3 は黒褐色シルト主体の自然堆積層である。

【SK223 土壙】

［位置］C－2 区S12、W138 で確認された。

［規模、平・断面形］規模は（東壁の観察で）長径 2.40m、短径 70 ㎝以上で平面形は楕円形を呈すると思われる。断面形は底面が平坦で両壁が緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。深さは 60㎝ である。

［堆積土］堆積土は 7 層で、1～3 は黒褐色～灰黄褐色の締まりのないシルト、4 は灰白色火山灰、5～7 は黒～暗褐色の粘土質シルト主体の自然堆積層である。

溝跡

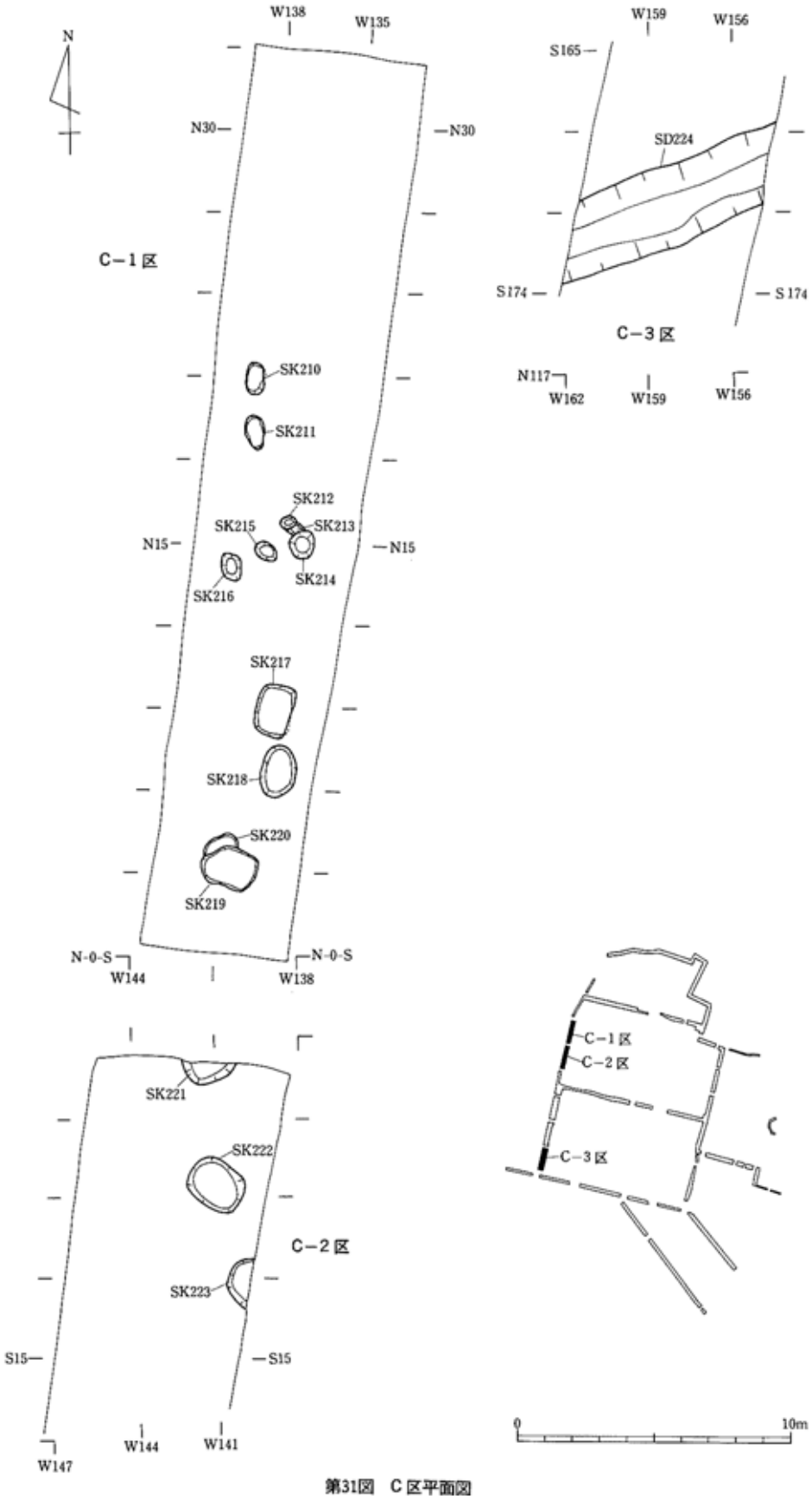
【SD224 溝跡】

［位置］C－3 区S174、W153～161 で確認された東西溝である。さらに東、西に延びる。

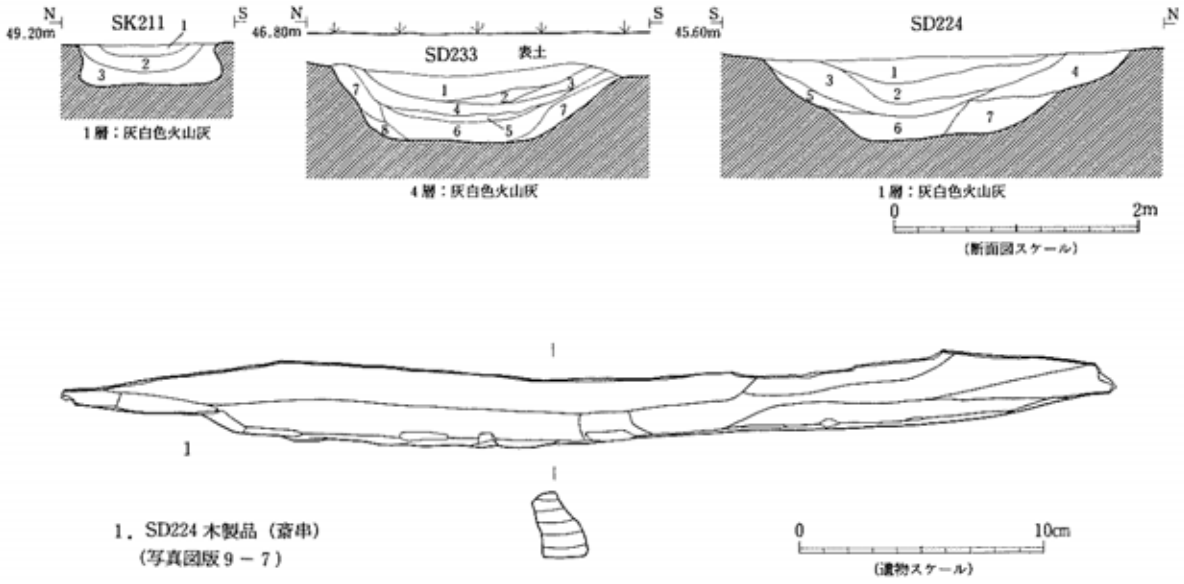
［規模・断面形］規模は上幅は 3.00m、下幅は 1.20mである。断面形は途中軽い段が付くものの両壁が緩やかに立ち上がる。底面もほぼ平坦で、深さは 70 ㎝である。

［堆積土］堆積土は 7 層に分けられる。1 は灰白色火山灰層、2～7 は地山ブロックを含む黒褐色シルト主体の自然流入土である。

［出土遺物］底面から斎串が出土している（第 32 図）。


N
W138
W135
N30
N30
C－1区
SK210
SK211
SK212
SK215
SK213
N15
N15
SK214
SK216
SK217
SK218
SK220
SK219
N-0-S
W144
N-0-S
W138
W159
W156
S165
SD224
S174
S174
C－3区
N117
W162
W159
W156
SK221
SK222
C－2区
SK223
S15
S15
W147
W144
W141
C－1区
C－2区
C－3区
0
10m

第31図　C区平面図



第32図　C 区断面図・出土遺物

4．D区

B・C区を結ぶ東西方向の調査区で、農道と沼を境に 3 区に細分されるが、遺構は農道東側のD－1、D－2 区で確認された（第 33 図）。検出された遺構は溝跡 9 条と土壙 7 基で、このうちＳD132・133、ＳK139 はB区と重複する（ＳD132・133 はB区で説明）。

溝跡は①幅 1～1.5m、深さ 15～20 ㎝の浅い溝（ＳD136・140～142・144）と、②幅 2～2.5mの比較的深い溝（ＳD132・133・135・137）がある。土壙は①規模は長径 1～7mとさまざまだが、平面形が楕円形・不整形、深さ 10㎝ 前後で底面に凹凸があり、堆積土に地山ブロックを多量に含む黒褐色からなるもの（ＳK139・148ａ～ｇ）と、②長径 1m前後、短径 70 ㎝～1m、深さ 15～20 ㎝で底面が平らで、堆積土は締まりのない黒褐色シルト主体のもの（ＳK139、147・149・207）に分けられる。

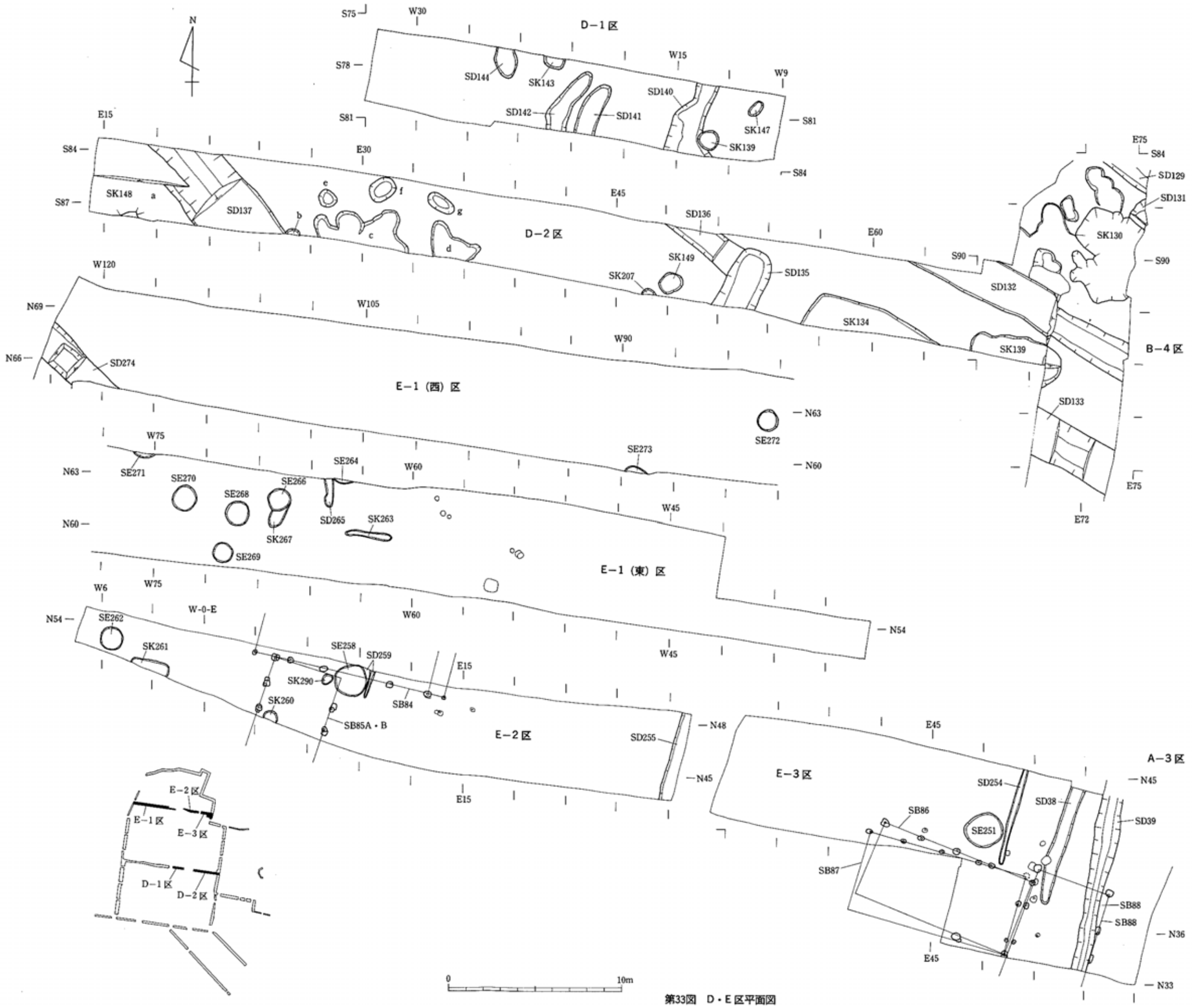
遺物は 135 から中近世のものが少数出土し中近世と考えられる以外は時期が不明であるが、土壙の①に分類されたものは、B区で確認されたＳK130 粘土採掘坑（古墳時代）と近接していることや形態も類似していることから同様に古墳時代と思われる。また、ＳD135 と連絡し直角に曲がるＳD136 はＳD135 と一連のものと思われ、同じく中近世と思われる。そのほかの遺構についても他の調査区同様堆積土の特徴などから中近世のものと考えたい。

【ＳD135・136 溝跡】（第 34 図）

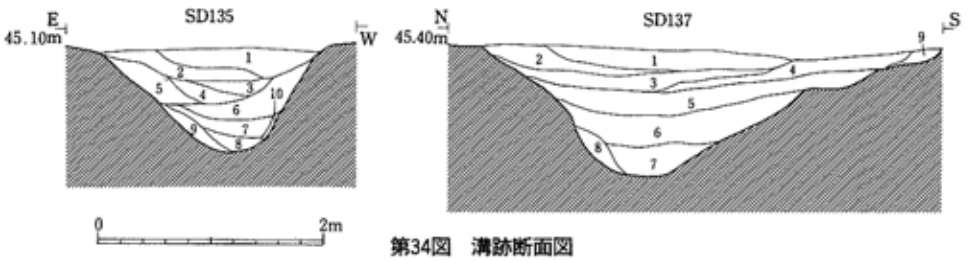
［位置］D－2 区N87、E54 付近で直角に曲がる溝跡である。南北方向がＳD136、東西方向がＳD135 である。さらに北、西に延びる。

［規模・断面形］ＳD135 南側断面で見てみると、規模は上幅は 2.30m、下幅は 1.40mである。断面形は底面中央が窪み、東壁は緩やかに、西壁は比較的急に立ち上がり全体的にU字形を呈する。深さは 1.00mである。

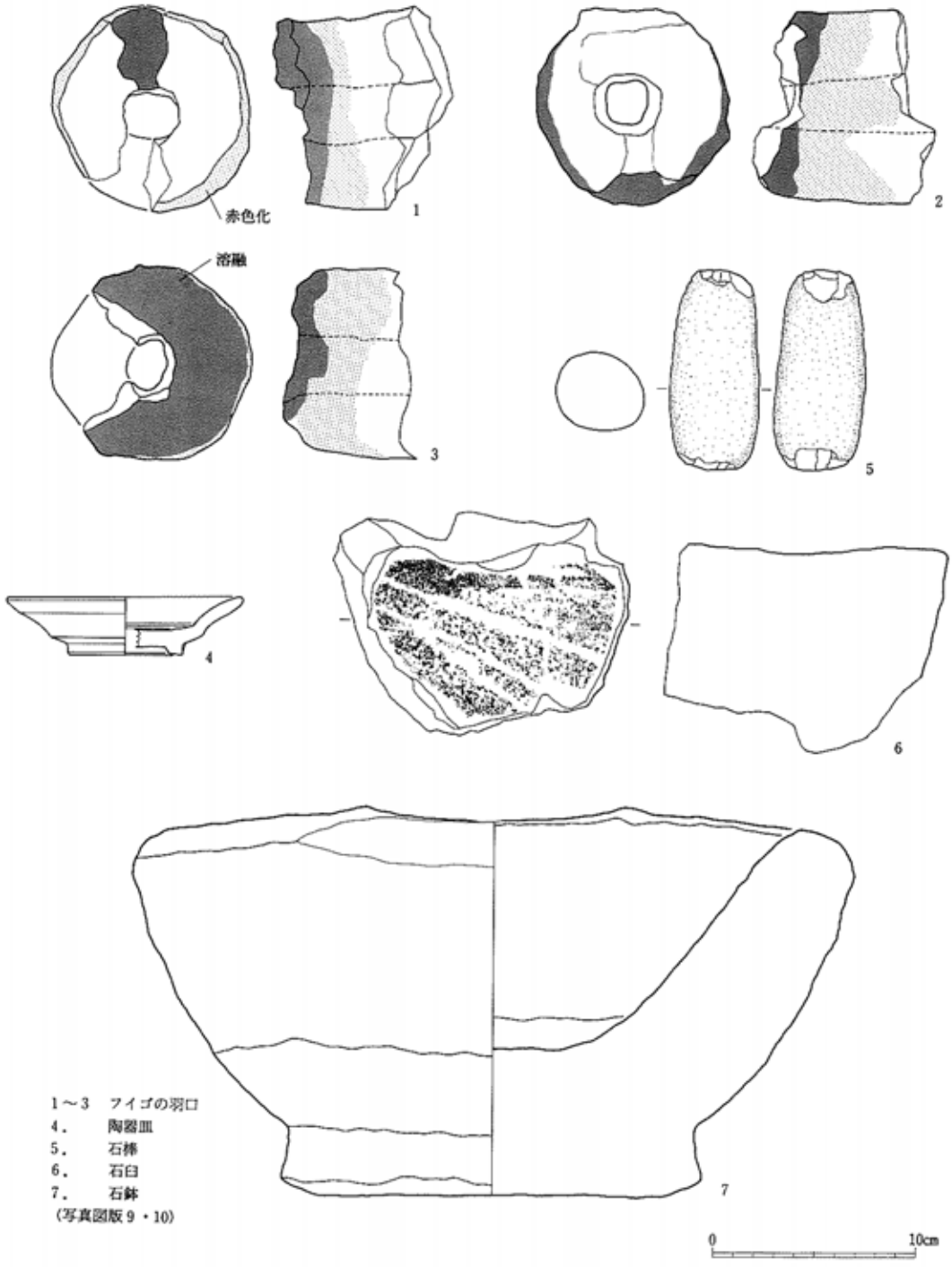
［堆積土］堆積土は 10 層に分けられる。1～10 とも黒褐色～褐灰色の粘土または粘土質シルト主体の


N
D−1区
D−2区
E−1（西）区
E−1（東）区
E−2区
E−3区
A−3区
B−4区
S75
S78
S81
S84
S87
W30
W15
W9
W120
W105
W90
W75
W60
W45
W6
W-0-E
E15
E30
E45
E60
E75
E72
N69
N66
N63
N60
N54
N48
N45
N36
N33
S90
SD144
SK143
SD140
SD142
SD141
SK147
SK139
SK148
SD137
SD136
SK149
SK207
SD135
SK134
SD132
SK130
SD129
SD131
SD133
SD274
SE272
SE273
SE271
SE270
SE268
SE266
SE264
SD265
SK263
SK267
SE269
SE262
SK261
SE258
SD259
SK290
SK260
SB84
SB85A・B
SD255
SD254
SD38
SD39
SB86
SE251
SB87
SB88
0
10m

第33図　D・E区平面図



第34図　溝跡断面図



第35図　SD135 出土遺物

自然流入土である。
［出土遺物］土製品（フイゴの羽口）、石製品（石皿、石棒、石臼）、陶器（高台付皿）が出土している（第 35 図）
【ＳＤ137 溝跡】
［位置・重複］Ｄ－2 区 87、Ｅ18～25 付近で確認された南北溝跡である。ＳＫ148 より新しい。
［規模・断面形］規模は上幅は 3.80m、下幅は 60 ㎝である。断面形は底面中央が窪み、両壁は緩やかに立ち上がり上部は大きく開くＵ字形である。深さは 1.12mである。
［堆積土］堆積土は 9 層に分けられる。1～8 とも地山ブロック（白色粘土）を含む黒褐色～灰褐色のシルト～砂から成る自然流入土である。
［出土遺物］出土遺物はない。

5．E区

Ａ区南端とＣ区北端を結ぶ東西方向の調査区で、農道、畦畔により 3 区に細分される（第 33 図Ｅ－1～Ｅ－3 区）。Ｅ区は確認調査であることから遺構の概要のみ記述する。

掘立柱建物跡 5 棟、溝跡 8 条（ＳＤ38･39 はＡ区で記述）、井戸跡 11 基、土壙 5 基が確認された。遺構の密度は全体的に低いが、東側のＥ－2 区、Ｅ－3 区で比較的遺構が多い。

掘立柱建物跡

東側のＥ－2 区、Ｅ－3 区でまとまって認められる。建物の全容が分かるものはないが、現状から規模は桁行 3～4 間×梁行 1～2 間程度と思われるが、ＳＢ84 のように桁行 5 間で東廂が付く比較的大きな建物跡もある。また、ＳＢ85 はほぼ同位置で建て替えられ（ＳＢ85Ａ･Ｂ）、ＳＢ86･87 も多少ずれるが建て替えられたものかもしれない。柱穴は長径 30～50 ㎝と比較的小さく、平面形は円形または不整円形を呈する。埋土は地山ブロックを含む黒～暗褐色シルトが主体である。

井戸跡

井戸跡はＥ－1～Ｅ－3 区で検出されたが、Ｅ－1 区に比較的多く認められる。規模は直径 1.4m前後の円形を呈するもの（ＳＥ262～264･266～273）と直径 2.0m前後の不整円形を呈するもの（ＳＥ251･258）に大別され、前者が多い。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトが主体である。

溝跡

溝跡はＥ－1～Ｅ－3 区で検出されたが、Ｅ－3 区ＳＤ38･39･254 がほぼ平行してまとまって認められる以外はまばらである。方向はＥ－1 区のＳＤ274 が北西－南東方向で、他はほぼ南－北方向である。規模は上幅が 1.0m以下のもの（ＳＤ38･254･255･259･265･274）と上幅 1.5～2.0mのもの（ＳＤ39･274）があり、前者が多い。堆積土は締まりのない黒褐色シルトである。

土壙

土壙はＥ－2 とＥ－3 区で 2 基づつ検出された。平面形は円形（ＳＫ260）、不整円形（ＳＫ290）、長方形（ＳＫ261）、楕円形（ＳＫ267）、長楕円形（ＳＫ263）とさまざまであり、このうちＳＫ263 はＴピットと思われる。規模はＳＫ260・290 が長径 80～90㎝で、ＳＫ261・263・267 が長径 1.6～2.6mである。堆

積土は地山ブロックを含む黒～暗褐色シルトが主体である。

6．F区

B区の南に続く調査区である（第 36 図）。溝跡 4 条、土壙 1 基、柱穴を確認したが全体的に遺構は少ない。遺構の確認状況は、溝跡は調査区北側、土壙は中央、柱穴は南側で確認されるなど遺構により偏っている。また、調査区北側は後世の削平を受けているため溝跡は痕跡的に認められるに過ぎない。柱穴も全体的に残りが悪く、木の根などとの判別が困難なものも多い。出土遺物はない。

土壙

【ＳＫ172 粘土採掘坑】

調査区中央で確認された。規模は東西 3.4m、南北 4.0mで、平面形は不整形である。底面は凹凸が著しく、複数の土壙の集合体であると考えられる。深さはおおよそ 15～20 ㎝であるが最も深いところは 40 ㎝である。また、5～10 ㎝掘り下げると地山のローム層が白色粘土化していることから、この白色粘土の採取を目的としたものと考えられる。堆積土は白色粘土ブロックを多量に含む黒褐色土である。出土遺物はない。

7．G区

Ｆ区南東の調査区であるが確認調査であるため遺構の概要を記す。溝跡 8 条、土壙 2 基、柱穴列 2 列が確認された（第 36 図）。全体的に遺構の数は少なく密度も低い。

溝跡

溝跡は規模が上幅 1.2mのもの（ＳＤ173）と上幅 70～80 ㎝のもの（ＳＤ175～178・181・182・208）がある。方向は南－北方向のもの（ＳＤ173・175・178・179・181）、北東－南西方向のもの（ＳＤ176・177・208）、東－西方向のもの（ＳＤ182）がある。なお、ＳＤ181 とＳＤ182 は規模堆積状況が類似していることから、ほぼ直角に曲がる一連の溝である可能性がある。堆積土は締まりのない黒～黒褐色シルトからなる自然堆積土である。

土壙

土壙は 2 基とも直径 80㎝ の円形を呈するものである。堆積土は締まりのない黒～黒褐色シルトからなる自然堆積土である。ＳＫ174 から近世の摺鉢の破片が出土している。

柱穴列

2 列とも調査区中央で近接して確認された。ＳＡ89 は 1 間分、ＳＡ90 は 3 間分検出したが両者とも一部を検出したものと思われ、このうちＳＡ89 は掘立柱建物跡になる可能性が高い。方向は両者とも北側柱列で東－西方向である。柱間間隔はＳＡ89 が 2.70m、ＳＡ90 が 1.80～2.20mである。柱穴はいずれも 30～50 ㎝の円形を呈し、埋土は地山粒を含む黒～黒褐色シルト主体である。

8．H区

G区南側に平行する調査区である。堀跡、溝跡、土壙が確認された(第 37 図)。全体的に遺構の数は

少なく密度も低いが、土壙は調査区東端に集中している。H区で確認された遺構は出土遺物や重複関係、堆積土などにより、縄文・弥生時代、古代、中近世のものに分けられる。

(1) 縄文・弥生時代

土壙

【ＳＫ196～202・204 粘土採掘坑】

調査区東端で土壙 8 基（ＳＫ196～202･204）が確認された。このうちＳＫ199～202 は断面で観察されたものである。出土遺物がある遺構はＳＫ196・198・204 だけであるが、形態や堆積状況などが類似していることからこれらはほぼ同時期のものと考えられる。

規模は、全容が分かるものはＳＫ204 だけであるが、長径 2.0～3.0mの方形または不整形を呈するもの（ＳＫ196～198･204）と平面形は不明だが規模がおおよそ 1.00～1.20mのもの（ＳＫ199～202）がある。深さは 20～40 ㎝で底面は比較的平坦である。この付近は地山が白色粘土化していることから、これらの土壙は白色粘土の採取を目的としたものと考えられる。堆積土は白色粘土ブロックを多量に含む黒褐色シルトからなる。遺物はＳＫ198･204 からＲＬ縄文が施された土器、ＳＫ196 から弥生土器、剥片石器（珪質頁岩）が各 1 点出土している（第 37 図 3～4）。

(2) 古代

溝跡 1 条が確認された。

溝跡

【ＳＤ189 溝跡】

［位置・重複］調査区中央で確認された南北溝跡である。ＳＤ188 より古い。

［規模・断面形］規模は上幅は 1.42m、下幅は 62 ㎝である。両壁とも途中に軽い段が形成されおり、底面から途中の段まで比較的急に、上部は緩やかに開くように立ち上がる。底面は平担で、深さは 70㎝である。

［堆積土］堆積土は 9 層に分けられる。1～5 は黒褐～褐色シルトで、1 に灰白色火山灰ブロックを含む。6～9 はにぶい黄褐～褐色砂質シルトで、8・9 には地山崩落土を含む。1～9 は自然堆積層である。

［出土遺物］出土遺物はない。

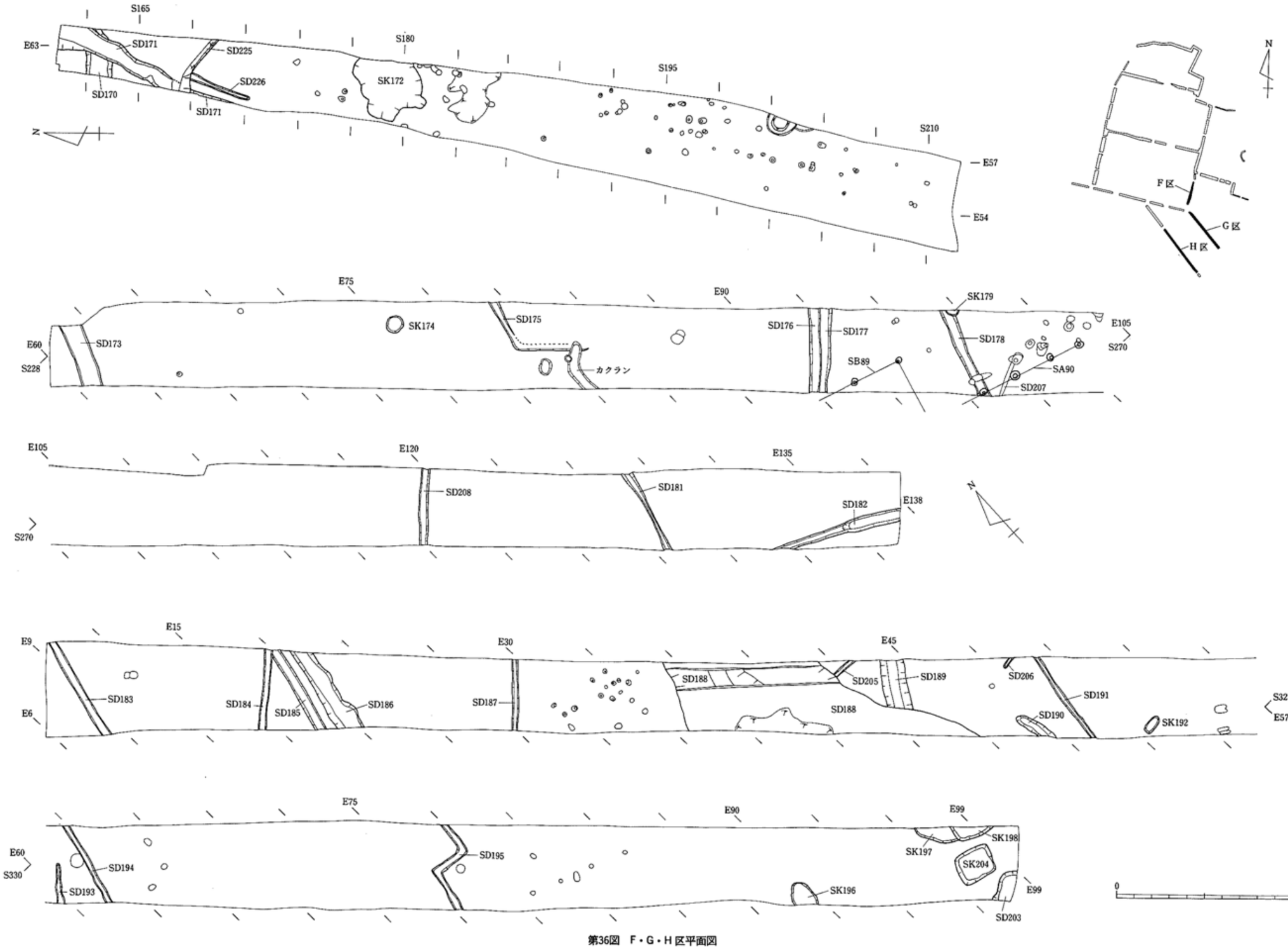
(3) 中近世

堀跡 1 条、溝跡 13 条、土壙 1 基が確認された。中近世の遺構は全体的に締まりのない黒褐色シルト主体の堆積土からなる。

堀跡

【ＳＤ203 堀跡】

位置的に中世名生城に伴う堀跡で、堀の北西端部が確認された（第 2 図の堀②にあたる）。ＳＤ203 堀跡は現状から幅 40m程度と推定でき、今回はその一部が検出されただけである。断面で観察する限りでは堆積土は 3 層に分けられる。1～3 は地山粒を含む締まりのない黒褐色シルトからなる自然堆積土である。出土遺物はない。



第36図　F・G・H区平面図

溝跡

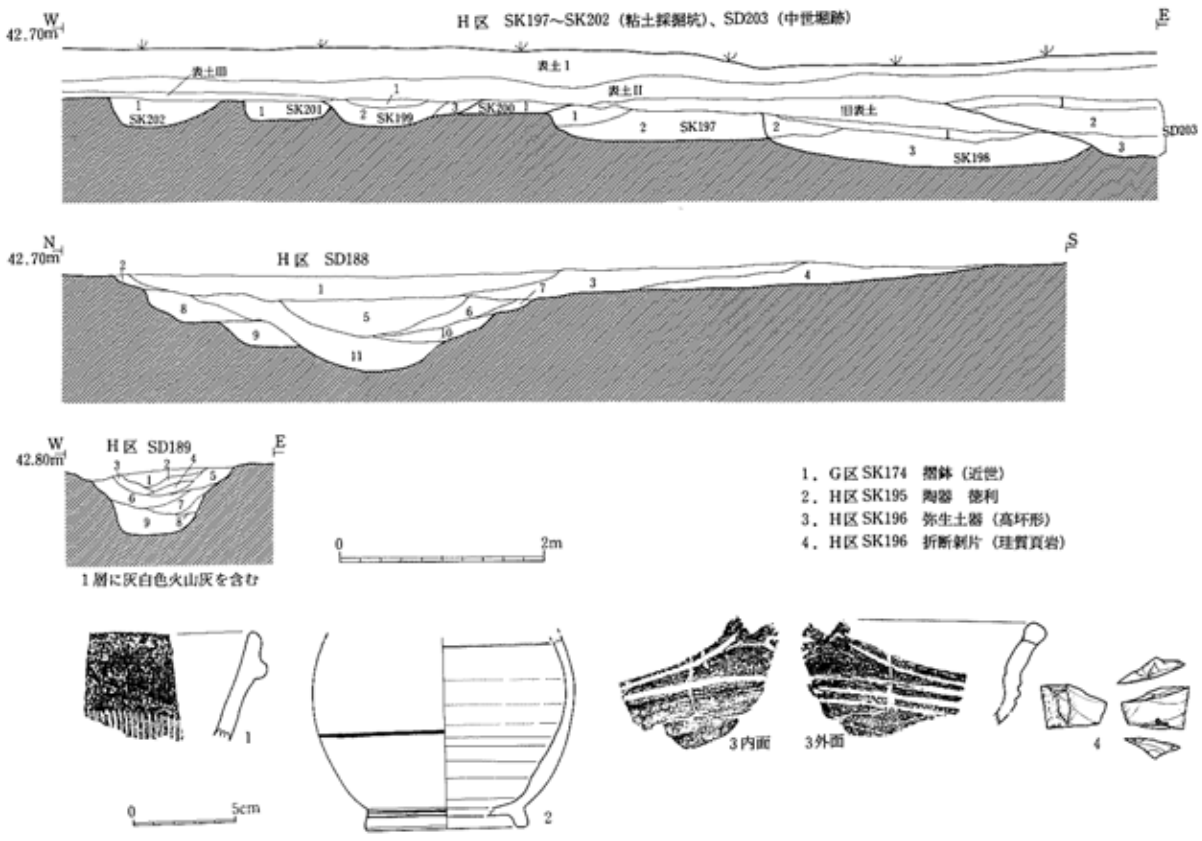
溝跡は13条確認されたが、このうちＳＤ188･195は出土遺物などから中近世のものと考えられるが、他はＳＤ195と堆積土や溝の規模が類似していることから、おおよそ中近世と思われるものである。

溝跡は規模が上幅10.0mのもの（ＳＤ188）、上幅1.5mのもの（ＳＤ186）、50㎝前後のもの（ＳＤ183～185･187･190・191･193～195）があり、ほとんどが幅50㎝ほどの小規模な溝跡である。なお、ＳＤ188は最上層が薄く、幅広く堆積しているため幅10mを計るが、断面形から判断すると本来は幅3m程度の溝跡と推定される。深さはＳＤ188が1.0mを計るほかは5～20㎝と浅い。方向は南－北方向のもの（ＳＤ183･185･186･188･190･191･194･195）、北東－南西方向のもの（ＳＤ184・187）、東－西方向のもの（ＳＤ205･206）があり南－北方向のものが多い。また、ＳＤ195はジグザグに方向を変えている。堆積土はいずれも締まりのない黒～黒褐色シルトからなる自然堆積土である。遺物はＳＤ195から陶器の破片が出土している（第37図2）。

土壙

【ＳＫ192】

調査区中央で確認された。規模は長径1.0m、短径50㎝で平面形は隅丸長方形を呈する。断面形は底



第37図 H区断面図・出土遺物

部中央がやや窪み、壁が急に立ち上がるU字形を呈する。深さは32㎝である。堆積土は締まりのない黒褐色シルトからなる自然堆積土である。出土遺物はない。

9．Ⅰ区

遺跡北東にあたり国指定史跡名生館官衙遺跡に接する調査区である。Ⅰ区は確認調査であることから遺構の概要のみ記述する。

溝跡7条、土壙3基、柱穴少数を確認した（第38図）。遺構の検出状況は、溝跡は調査区全体、土壙は中央、柱穴は西側で認められるなど、土壙、柱穴は偏って分布している。出土遺物はない。

溝跡

溝跡は幅4.0mのもの（ＳD278）、幅1.5～2.0mのもの（ＳD275･283）、幅50㎝前後のもの（ＳD276･277･279･283･284）があり、幅50㎝前後のものが多い。方角は南－北方向のもの（ＳD275･278･283･284）、東－西方向のもの（ＳD279）、北東－南西方向から北西－南東方向に向きが変わるもの（ＳD276･277）がある。堆積土は黒褐～暗褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

土壙

土壙は全容が分かるものはない。直約径1mのもの（ＳK280）と約2.0～2.5mのもの（ＳK281･282）がある。平面形はいずれも円形を呈するものと思われる。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐～暗褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

柱穴

柱穴は調査区西側に集中しているが、いずれも直径 20～30 ㎝の円形を呈する小規模なもので、柱痕跡が明確なものは少ない。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐～暗褐色シルトを主体としている。

10．Ｊ区

遺跡東側の国指定史跡名生館官衙遺跡との境界付近にあたる調査区で、鉄塔を取り囲むように設定されている。Ｊ区も確認調査であるため遺構の概要のみを記述する。

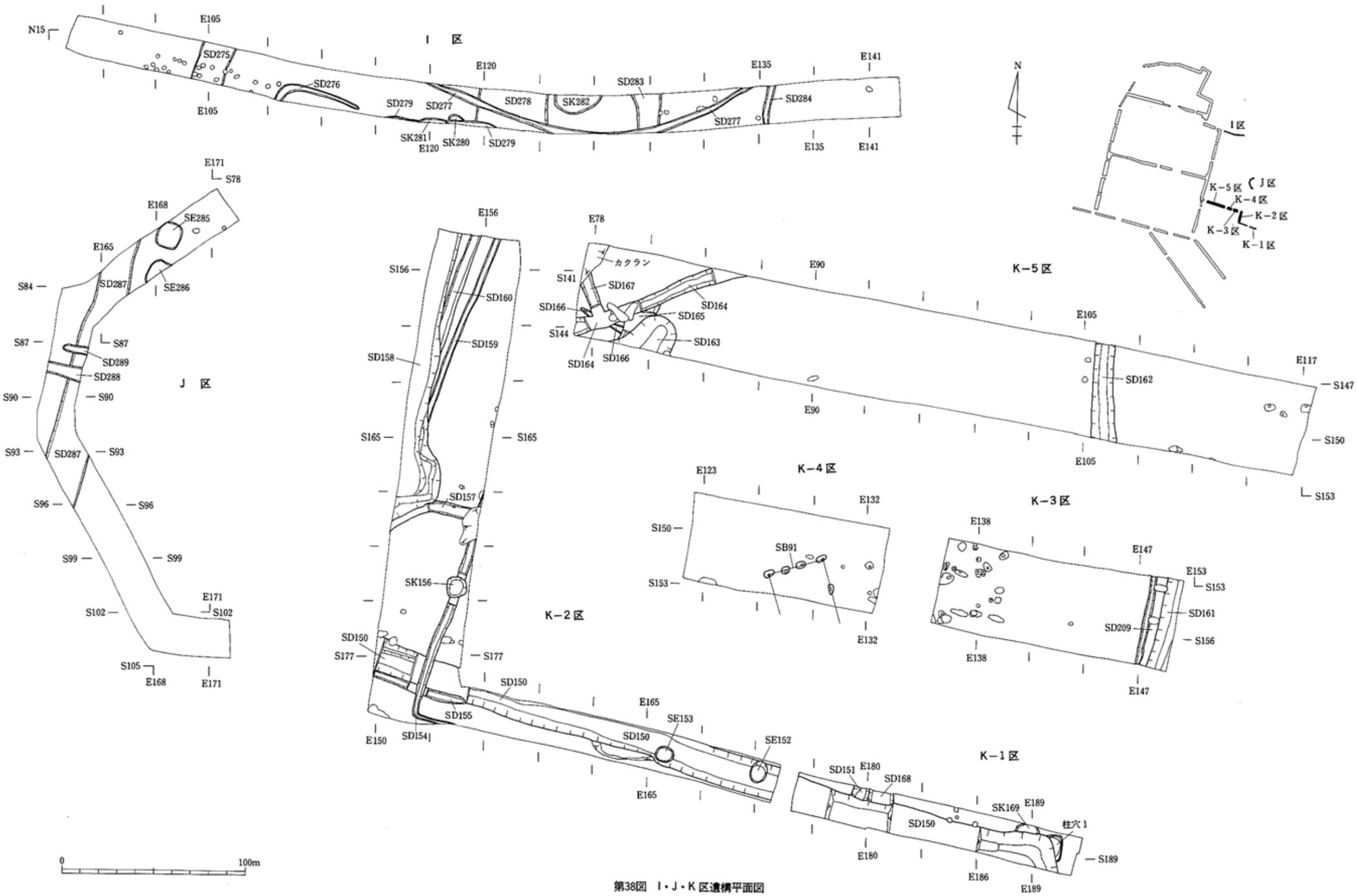
溝跡3条、井戸跡2基を確認した（第38図）。遺構は調査区北側に偏って認められる。出土遺物はない。

溝跡

溝跡は幅2.0mで南－北方向のもの（ＳD287）と幅50㎝前後で東－西方向もの（ＳD298･289）があり、後者が新しい。堆積土は黒褐～暗褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

井戸跡

ＳE285・286とも長径1.5mの隅丸方形を呈する堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐～暗褐色シルトを主体とする自然堆積土である。



第38図　I・J・K区遺構平面図

11．K区

Ｆ区東側の調査区で、畦畔により 5 区に細分される（第 38 図Ｋ－1 区～Ｋ－5 区）。発見された遺構は掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 16 条、井戸跡 2 基、土壙 3 基、柱穴で、調査区全体に認められたものの遺構の数は少なく、密度も低い。このうち遺構の時期が分かるものは、近世陶器が出土しているＳＤ150 と形態的に古代の掘立柱建物跡の可能性がある柱穴（柱穴 1）のみである。また、遺物はＳＤ150 から近世の擂鉢、石臼下臼と流れ込みと思われる古代の土師器甕が出土しているに過ぎない（第 40 図）。

Ｋ区で確認された遺構はＳＤ150 以外は時期が不明であるが、ＳＤ150 との重複関係から見てみると、①ＳＤ150 より新しいもの（ＳＤ153･154、ＳＫ156）、②ＳＤ150 より古いもの（柱穴 1、ＳＤ151･168･169、ＳＥ152･153）、③新旧が不明のもの（ＳＢ1、ＳＤ157～167･207）に大別される。このうち①は近世以降に位置づけられ、②③についても柱穴 1 以外は堆積土が①に類似していることからおおよそ近世のものと考えられる。

掘立柱建物跡

【ＳＢ91 建物跡】

Ｋ－3 区で確認された。桁行 1 間以上×梁行 3 間の南北棟建物跡と思われる。柱穴は長径 50～60 ㎝の、短径 20～40 ㎝の長楕円形、不整円形で、柱間間隔は桁行が 1.8m、梁行が 1.0～1.2mである。

【柱穴 1】

Ｋ－1 区東端で確認された柱穴である。約 1/2 がＳＤ150 に壊されている。柱穴 1 は掘り方の規模が長径 142 ㎝、短径 18 ㎝で、平面形は隅丸長方形と推定される。柱穴の長軸方向はほぼ南北方向である。断面形は底面がほぼ平坦で両壁が比較的急に立ち上がる逆台形を呈する。深さは最も残りがいいところで 73㎝ である。柱穴は抜き取られている。掘り方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルト、抜き穴には褐色砂質シルトが堆積していた。

溝跡

溝跡は①幅 2mで深さ 1m前後のもの（ＳＤ150･158･163）、②幅 1mで深さ 20～30 ㎝のもの（151･161･162･164･165･168･169）、③幅 50～70 ㎝で深さ 5～20㎝ のもの（ＳＤ153･154･157･159･160･166･167･209）があり、幅 1m以下で深さ 20～30 ㎝のものが大半である。堆積土は　が地山ブロックを少量含む黒～暗褐色粘土質シルトが主体の自然堆積土であるのに対し、②③は締まりのない黒～黒褐色シルトからなる自然堆積土である。方向はほとんどが南－北方向で、そのほかはＳＤ150 が調査区東端で東－西方向から南－北方向に曲がり、また、調査区西端のＳＤ164 は北東－南西方向、ＳＤ164 と一連のＳＤ165 がそれと直交する北西－南東方向である。

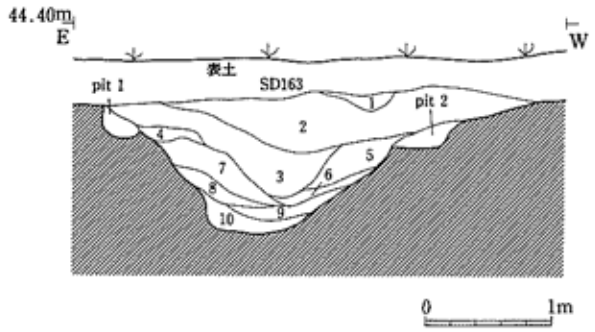
井戸跡

2 基とも規模が長径 1.20m、短径 90 ㎝、深さ 1.10mで、平面形は楕円形を呈する。断面形は大半をＳＤ150 に壊されているため不明である。堆積土も両者とも底面付近が暗褐色粘土質シルトの自然堆積土である。

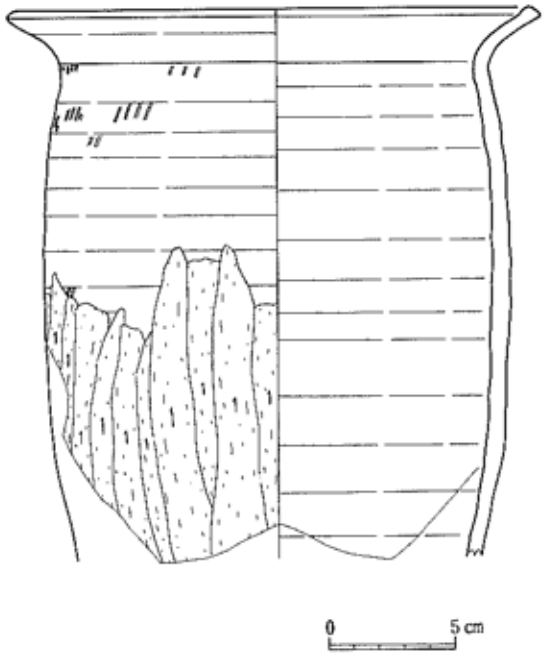
土壙

土壙 3 基確認されたが、このうち全容が分かるものはＳＫ156 のみで、他の 2 基（ＳＫ168･169）は全

体の1/4が検出されたに過ぎない。SK156は規模が長径1.10m、短径1.00m、深さ30㎝で、平面形は不整円形、断面形は底面が平坦で両壁が比較的急に立ち上がる逆台形を呈する。SK168・169は深さはともに30㎝であるが、平面形はおよそ長径60㎝前後の楕円形と推定される。



第39図　SD163断面図



第40図　SD150出土遺物

区	SD	SK	SB	SX	SE	SI	計
A区	23	33	1	10		1	68
B区	19	11	4		8		42
C区	1	14					15
D区	7	54					12
E区	5	5	5		11		26
F区	4	1					5
G区	8	2	2				12
H区	14	6					20
I区	7	3					10
J区	3				2		5
K区	17	2	1		2	22	
計	108	82	13	10	23	1	237

第1表　確認された遺構

第四章　考　察

今回の調査で旧石器時代、縄文～弥生時代、古墳時代、古代、中近世の遺構・遺物が確認された。以下、時代毎に考察する。

Ⅰ．旧石器時代

肘折－尾花沢テフラ層下位のソフト・ローム層より細石刃石器群が出土した。石器総数は木の根による撹乱からの出土品を含めて5点と少数である。石材は全てが良質な珪質頁岩で、組成は荒屋型彫刻刀形石器・細石刃・スクレイパー・剥片である。荒屋型彫刻刀形石器の発見は県内では小野田町薬来原№.2遺跡（佐藤･山田：1991）に続き2遺跡目となった。本石器群はごくわずかな資料であるが、東北地方太平洋側における､北方系細石刃石器群の一つの姿として把握されるべきものと考えられる。

Ⅱ．縄文～弥生時代

縄文～弥生時代のものには竪穴住居跡、土壙（Ｔピット・粘土採掘坑）がある。ＳK196 粘土採掘坑がH区で確認された以外は遺跡北西部のＡ区・Ｅ区で確認された。

1．竪穴住居跡

Ａ－2区N140、E45で竪穴住居跡1軒（ＳＩ24）が確認された。遺物は床面および堆積土から弥生土器、石製品が出土している。ここではまず、弥生土器の特徴から年代を検討し、その後若干の考察を加えたい。

(1)　弥生土器の特徴と年代

弥生土器は竪穴住居跡の床面および堆積土から平箱1箱弱が出土しているが、いずれも破片資料であり、ほとんどが器種、器形が不明なものである。このうち特徴的に文様をもつ口縁部、底部資料を図示した（第10図1～8）。

出土土器の文様は、施文部位ごとに

《口唇部》

①押圧縄文

②刻み目文

《口縁部》

③円形竹管による交互刺突文

④複合口縁（外面から内面にかけて浮文状の粘土貼付文＋撚糸押圧文）

⑤撚糸押圧文

⑥刻み目文

がある。また、地文は胴部破片資料を含めてみてみると、

《口唇部》

⑦撚糸文

《口縁部》
⑧横位ＬＲ・ＲＬ縄文
⑨横位・縦位撚糸文（条間が狭いものと広いものがあり、前者が多い）
《底面》
⑩ＬＲ縄文
がある。

宮城県でこのような特徴をもつ土器は、一迫町上ノ原Ａ～Ｃ遺跡（佐藤ほか：1978）、利府町郷楽遺跡（庄子ほか：1990）、仙台市原遺跡ＳＩ4 住居跡（平間：1998）、名取市清水遺跡（丹羽：1981）、瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤澤：1983）、などの出土土器に類例が見られ、弥生時代後期天王山式期に位置づけられている。

ところで、福島県では天王山式の後続型式として踏瀬大山式が設定されており、①複合口縁、②複合口縁下端の棒、竹箸、指頭圧痕による列点文、③口唇部の縄文圧痕、刻み目文、④複合口縁外面に縄文を施すもの、⑤文様は沈様文（直線、連弧文、鋸歯文、波状文）を体上半に施文、⑥天王山式土器ほど明確な交互刺突文が認められない、などの特徴をもつことが示されている（中村：1976）。

今回ＳＩ24 住居跡から出土した土器は、文様的特徴から天王山式期に位置づけられたが、やや崩れた交互刺突文や口唇部の縄文圧痕、刻み目文などが認められることから、天王山式期でも新しい段階か後続する踏瀬大山式期に位置づけられるものかも知れない。しかし、今回提示できた資料は少数の破片資料で、一部の文様から述べているにすぎないことから可能性を述べるに留め、今後良好な資料が得られた時点で改めて検討したい。

つぎに竪穴住居跡の構造を見てみる。県内において天王山式期の竪穴住居跡が確認されたのは、①一迫町上ノ原Ａ遺跡竪穴住居跡（佐藤ほか：1978）、②利府町郷楽遺跡第 19 号住居跡（庄子ほか：1990）、③仙台市原遺跡ＳＩ4 住居跡（平間：1998）、④同遺跡ＳＩ5 住居跡、⑤本遺跡ＳＩ24 住居跡の 5 例である。これらの 5 住居跡の属性を第 2 表にまとめた。

平面形は馬蹄形、隅丸長方形、不整円形のものがあるが、規模は長径が 3.5～4.25m、短径が 3.0～4.0 mと大差なく、また長径と短径の長さがほぼ同じになる傾向がある。壁は②が急に立ち上がるほかは緩やかに立ち上がる。周溝は②にのみ認められる。

床面は①～③が地山面を、④⑤が掘り方埋土を床面としており、いずれもほぼ平坦である。床面には①②⑤がそれぞれ 3 か所、2 か所、1 か所に地床炉が認められる。位置は東、南、中央とさまざまである。③④は確認されていない。

柱穴は③が 24 個と多く確認されているが、他は 7～12 個である。このうち①については不明だが、

遺跡名	平面形	規模(m)	壁の立ち上がり	周溝	床面	柱穴の数・位置	炉
①上ノ原Ａ遺跡竪穴住居跡	馬蹄形	東西4.2×南北4.0	比較的緩い	なし	地山面 平坦	7個(主4)、西に集中	地床炉3か所（東側）
②郷楽遺跡第19号住居跡	隅丸長方形	南北3.8×東西3.6	急に立ち上がる	全周	地山面 平坦	12個(主4)、対角線上	地床炉2か所（南側）
③原遺跡 SI 4 住居跡	不整円形	東西3.6×南北2.9	比較的緩い	なし	地山面ほぼ平坦	24個(主4)、対角線上	確認されず
④原遺跡 SI 5 住居跡	隅丸長方形	東西4.25×南北3.3	比較的緩い	なし	掘方埋土はぼ平坦	10個(主2)、対角線上	確認されず
⑤名生館遺跡 SI24 住居跡	不整円形	東西3.5×南北3.0	比較的緩い	なし	掘方埋土平坦	7個(主5)、対角線上	地床炉1か所（中央）
湯舟沢遺跡If 住居跡	円形	直径4.0	やや急に立ち上がる	なし	地山面 平坦	12個	地床炉1か所（中央）

第 2 表　竪穴住居跡の特徴

他は壁際の対角線上に位置する柱穴を主柱穴と考えている。

以上が県内における天王山式期の住居跡 5 例の概要である。細部に多少の違いはあるが、(1) 長径、短径が 3.0～4.0m前後の小規模な住居跡であること、(2) 地床炉であること、(3) 地山面または掘り方埋土を床面とすること、(4) 柱穴は 7 個以上確認されほぼ対角線上に主柱穴が認められることなどが共通点としてあげられ、なかでも本遺跡のＳＩ24 住居跡は原遺跡ＳＩ4 住居跡に平面形、規模、構造などに強い類似性が認められる。

また、近県の当該期の住居跡には岩手県湯舟沢遺跡 1ｂ・1ｃ・1ｆ住居跡（桐生ほか：1986）がある。このうち全容がわかるものは1ｆ住居跡だけであるが、3 つの住居跡はいずれも直径 4.0m前後の円形を呈すると考えられている。1ｆ住居跡は壁際に 12 個の柱穴が認められること、地山面を床面とし平坦であること、地床炉であることなど、宮城県の 5 例と類似しており興味深い。

2．土壙

土壙は 12 基確認され、形態から粘土採掘坑（ＳK196～202）とＴピット（ＳK15･37･263）に分けられる。

粘土採掘坑と考えられるＳK196～202 はH区東端に集中して認められ、付近の白色粘土の採取を目的とした一連のものと考えられる。遺物はＳK196 からおおよそ縄文晩期から弥生時代にかけてのものと考えられる波状口縁部の頂部が二又になる高坏形土器、ＳK200 からは縄文土器（ＬR縄文）が 1 点づつ出土している。Ｔピットは出土遺物はなく明確な時期は不明であるが、特徴的な形態からおおよそ縄文～弥生時代のものと考えたい。

III．古墳時代

1．遺構の分類

古墳時代の遺構には円形周溝跡、土壙、土器埋設遺構があり、このうち円形周溝跡と土壙は規模や形態などにより細分される。

Ａ．円形周溝跡

ａ．幅 1m以下で断面形が浅い皿型もの（ＳD7・8・60）

ｂ．幅 1～2mで断面形が逆台形を呈するもの（ＳD17・25・56）

Ｂ．土壙

ａ．平・断面形とも長方形で土壙墓と考えられるもの（ＳK3・4・5・6・34・48・51）

ｂ．平面形は不整形で底面は凹凸が著しいもので粘土採掘坑と考えられるもの（ＳK130・139・148ａ～ｇ・172）

ｃ．平面形は楕円形で断面形は浅い皿形で性格不明のもの（ＳK11・14・36・57）

Ｃ．土器埋設遺構（ＳX2・10・12・35・42）

各分類はいずれも特徴的な形態であることや近接して認められることなどから、ある程度狭い時間幅で存在していた一連のものと考えられる。

2．遺物・遺構の年代

土器は土壙、土器埋設遺構から合計19点出土しているが、そのうち13点がＳＸ12土器埋設遺構から出土のもので、他は1～2点が出土しているだけである。そのため、ここではまずＳＸ12土器埋設遺構出土土器の年代の検討を行ない、その後、その他の遺構から出土した土器の年代を考えることとする。

(1) ＳＸ12土器埋設遺構出土土器

土師器坏、高坏、壷、甕、ミニチュア土器があり、その特徴は次のようになる（第19図）。

【坏】

Ａ：口径8～10㎝の小型のもので、底部から内弯気味に立ち上がる椀状のもの。

①丸底のもの（1）。

②平底のもの（2～3）。

Ｂ：体部に膨らみをもち、口縁部は短く外反するもので、内面に稜が認められる（4）。

【高坏】坏部が口径17㎝、逆台形状のもの（5）。

【壷】

Ａ：器高12～14㎝の中型の壷で、底部は丸底、体部はやや潰れた球形、口縁部は外傾するもの（6）。

Ｂ：器高7㎝の小型の壷で底部は平底、体部はやや潰れた球形、口縁部は外傾するもの（7）。

Ｃ：器高6～8㎝の小型の短頸壷で、底部は平底のもの。

①口縁部が直立し、体部は潰れた球形のもの（8）

②口縁部が内傾し、体部は算盤玉状のもの（9）

③口縁部が外傾し、体部は玉葱形で、底部中央に窪みのあるもの（10）

Ｄ：器高9㎝の小型の長頸壷で、口縁部に段が付き、体部は潰れた球形、底部は平底のもの（11）。

【甕】器高9㎝の小型のもので、口縁部は強い段が付き、体部は玉葱状で体部上部に円孔が認められるもの（12）。

【ミニチュア土器】器高6㎝、底部は平底、体部は膨らみをもち口縁部は外反する鉢形のもの（13）

これらの特徴をもつ土器は村田町新峯崎遺跡土壙（阿部ほか：1980）、仙台市藤田新田遺跡ＳＩ16・21・201住居跡（岩見：1994）などの出土土器に類例が見られ、古墳時代中期の南小泉式に位置づけられている（氏家：1957）。南小泉式については近年多くの細分案（丹羽：1983、加藤：1989、古川・白鳥：1991、藤沢：1992、村田：1998）が示され、このうち加藤（1989）は2段階、丹羽（1983）は3段階に分けている。

ＳＸ12土器埋設遺構出土土器を見てみると、坏が加藤の2段階、丹羽のＢ群土器以降に多く見られることや、土師器甕が5世紀後半の陶邑ＴＫ208型式の須恵器甕の模倣であることなどから、南小泉式期でも新しい要素をもっていると言え5世紀後半でも新しい段階に位置づけられる。

(2) その他の以降の年代

①ＳＸ2土器埋設遺構

須恵器蓋坏と土師器壷がある（第17図1・2）。壷は器高12～14㎝で、底部は丸底、体部はやや潰れた球形、口縁部は外傾するもので、須恵器蓋坏は口径11㎝、口唇部はシャープで、内縁に凹線が巡

るものである。蓋坏は陶邑ＴＫ208 型式と考えられることから南小泉式期 5 世紀後半に位置づけられる。

⑩ＳＸ10 土器埋設遺構

坏 2 点がある（第 18 図 1～2）。いずれも口径 8～10㎝、平底のもので、体部に膨らみをもち、口縁部は長く直立気味に立ち上がる鉢形のもの（1）と底部から内弯気味に立ち上がる椀状のもの（2）がある。（1）は類例に乏しいが、（2）は細部の調整・器形が若干異なるが古川市名生館遺跡ＳＩ433（白鳥･後藤：1986）、同名生館官衙遺跡ＳＩ1351（古川市教育委員会：1995）に類例が見られ、6 世紀前半に位置付けられる。

③ＳＸ35 土器埋設遺構

甕 1 点がある（第 20 図）。器高約 29㎝の大型の甕で、底部は突出した平底、体部は球形、口縁部は外傾し､最大径は体部にある｡このような特徴をもつ甕は仙台市藤田新田遺跡ＳＩ245(岩見:1995)、村田町新峯崎遺跡出土土器（阿部ほか：1991）などに類例が見られ加藤の 2 段階に相当し 5 世紀後半に位置づけられる。

④ＳＸ42 土器埋設遺構

須恵器蓋を模倣した土師坏が 1 点ある。このような特徴をもつ土器は名生館遺跡ＳＫ430（白鳥･後藤：1986）、名生館官衙遺跡ＳＩ1217（古川市教育委員会：1991）、駒米遺跡ＳＩ11（佐藤：1998）などの出土土器に類例が見られる。その編年的位置は前二者は南小泉式と住社式との間に入る独立した型式なのか住社式に含まれるのかを検討課題としているが、6 世紀前半としている。これについて古川・白鳥（1991）は名生館遺跡ＳＫ430 出土土器を南小泉式に後続し、住社式先行する資料としている。また、駒米遺跡ＳＩ11 出土土器は 5 世紀後半～6 世紀前半ごろに位置づけており、この土師器坏は 5 世紀後半から 6 世紀前半にかけてのもの考えられる。

⑤ＳＸ12 土器埋設遺構付近確認面出土土器

須恵器無蓋高坏、土師器長頸壷がある（第 19 図 14･15）。須恵器無蓋高坏は口縁部は外反し口縁部と体部の境に強い段が付くもので、口縁部には櫛描波状文が二段認められる。陶邑ＴＫ23 型式と考えられ 5 世紀後半に位置づけられる。土師器長頸壷は加藤の 2 段階に相当すると思われ、5 世紀後半に位置づけられる。

⑥ＳＫ36 土壙

須恵器聰1 点がある（第 13 図 9）聰の肩が張る特徴から陶邑ＴＫ208 型式に比定され、5 世紀後半に位置づけられる。

ＳＫ5・6 土壙墓、ＳＫ130 粘土採掘坑

ＳＫ5・6 からは土師器坏が各 1 点（第 13 図 5･6）、ＳＫ130 からは土師器坏 1 点と甕 2 点（第 26 図）が出土している。これらは南小泉式期に普遍的にみられるもので、大きく南小泉式期とする。

3．遺構の変遷と年代

出土土器の検討からいずれの遺構も大きくは古墳時代中期南小泉式期の範疇に含まれるものであることがわかった。これを遺構ごとに見てみると、土壙墓､粘土採掘坑は 5 世紀代、土器埋設遺構は 5

世紀後半から6世紀前半ごろのものなる。また、円形周溝跡は年代がわかる出土遺物はないが、重複関係を見てみると一連の土器埋設遺構より古いことから、5世紀後半以前のものとなる。

ところで、円形周溝跡については県内でも性格不明なものや円形周溝跡墓となるものなどが確認されているが、その多くは古墳時代前期塩釜式の後半に見られる。このことから、今回確認された円形周溝跡もおおよそこの時期のものと思われる。

上記の遺構のうちＳK130 粘土採掘坑がＢ－4 区に位置するほかは、Ａ－1 区のW30 付近に集中しており、Ａ－1 区における古墳時代の遺構は、円形周溝跡（古墳時代前期塩釜式期後半ごろ）→土壙墓･一連の土器埋設遺構（古墳時代中期南小泉式期、5世紀後半～6世紀前半）と変遷していることが明かとなった。

4．各遺構の性格

円形周溝跡

ａ．幅1m以下で断面形が浅い皿型もの（ＳD7・8・60）とｂ．幅1～2mで断面形が逆台形を呈するもの（ＳD17・25・56）がある。位置的にはａはＡ－1 区W30 付近、ｂはＡ－2 区Ｅ15～54 にまとまって認められる。このうちａについては性格が不明であるが、ｂは墳丘は認められないものの、周溝内側から流入した地山ブロック混じりの堆積土が認められることや、逆台形状のしっかりとした掘り方をもつこと、などから古墳の可能性は捨て切れない。しかし、周溝の一部を検出しただけであり、積極的に古墳と決める資料がないことから可能性を指摘するに留めたい。

土器埋設遺構

Ａ－1 区でに集中して確認され、掘り方底面に土器が埋設されていたものである。ＳX12 で13 点まとまって出土した以外は1～2 点の出土である。出土した土器はＳX2 で須恵器蓋坏、ＳX12 付近確認面で無蓋高坏が出土している他はすべて土師器である。これらの性格は、土師器19 点のうち大型壷、椀状の坏、ミニチュア土器以外の高坏、壷、 [illegible]など16 点が内外面とも赤彩されていることや、ほぼ同時期と考えられる土壙墓群と近接していることなどから、祭祀的なものと推定されるが、詳細は不明である。

また、ＳX12 から出土したミニチュア土器は鉢形で、体部最大径部に帯状に横位のＲＬ縄文、底部付近に縦走縄文を意識した可能性があるＲＬ縄文、そしてＬ縄文が施文されたものである。特に縦走縄文は弥生時代後期に特徴的に認められることから、この時代の土器を意識して作られたものかもしれないが、本遺構との時間差が大きいことや、類例に乏しいことなどから、現役階ではこの土器の由来については不明である。

土壙

土壙は形態や出土遺物などから土壙墓、粘土採掘坑、一般的に見られる土壙に分けられた。

土壙墓はＡ－1 区W30 に集中しており、この付近が南小泉式期の墓域であることがわかった。このうちＳK34・48 からは刀子が出土している。埋葬形態はＳK4・51 が断面形、堆積状況から木棺が据えられていたと思われるが、他は不明である。

粘土採掘坑は白色粘土の採掘を目的としたものと考えられる。使用目的は良質な粘土であることか

ら土器製作を主な目的としたものと推定される。

一般的に見られる土壙については性格不明であるが、ＳＫ11 には底面に使用痕が認められる擦り石、窪み石などの石製品が入れられ、また、位置的に土壙墓や祭祀に関係すると思われる土器埋設遺構と近接していることから、なんらかの意図があって埋めたもの可能性があるが、詳細は不明である。

5．遺構に伴う黒曜石製石器ついて

今回、ＳＤ7 付近遺構確認面、ＳＸ42 土器埋設遺構から黒曜石製石器がそれぞれ 2 点、1 点出土している。黒曜石製石器については大崎平野以北多く分布し、南限が仙台平野であること（村田：1997）や、続縄文文化と関係があること（興野：1983、佐藤信行：1984）などが指摘されている。大崎平野西端に位置する本遺跡も南小泉式期に北海道系文化と関係があったものと考えられるが詳細は不明である。また、本遺跡と同時期の出土例としては、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡、多賀城市山王遺跡町地区（村田ほか：1998）がある。

Ⅳ．古代

1．ＳＸ47 合口甕棺墓

Ａ－1 区北西部N142、W57 で確認され、掘り方内に長胴甕 2 個体が横位に口縁部を合わせた状態で検出されたものである。その特徴は次の通りである。

①段丘の縁辺に位置し、近隣に居住域はない。

②掘り方の平面形は長径 73㎝、短径 34㎝ の楕円形で、深さは 15㎝ である。掘り方の長軸方向は磁北から約 45 度西に偏し、北西－南東方向である。

③掘り方の長軸方向にロクロ使用の土師器長胴甕 2 個体が横位に口縁部を合わせた状態で検出された。甕棺の総長は 73㎝ である。

④掘り方向、甕内からは 2 個体の甕以外に出土遺物はない。また、周辺部にもこの遺構に伴う遺物および施設は確認されていない。

一般集落において土師器甕が口縁を合わせた状態で横位に埋設された例は、県内では仙台市安久東遺跡で 2 例（仙台市教育委員会：1976）、築館町佐内屋敷遺跡で 1 例（宮城県教育委員会：1978）、高清水町手取遺跡（宮城県教育委員会：1974）、多賀城市高崎遺跡で 2 例（高倉：1989）があり、また斎藤・沼山（1974）は岩手県江釣子村本宿羽場遺跡、水沢市上野遺跡、胆沢町松原遺跡、秋田県秋田市秋田城に前述した手取遺跡を加えた 5 遺跡出土例を報告している。

これらの出土例に共通する点は、ａ．土師器の甕が使用されていること、ｂ．横位に埋設されていること、ｃ．掘り方をもつこと、ｄ．居住域からやや離れて位置していること、ｅ．長軸方向が南北方向を示すものが多いことなどがあげられ、性格については乳幼児甕棺と考えられている。

本遺跡のＳＸ47 も、方向が北西－南東方向を示す以外は一致することから、乳幼児甕棺と考えたい。遺構の時期は甕の特徴から 9 世紀前半と考えられる。また、埋葬者が属していた集落、つまり 9 世紀前半ごろの住居跡・建物跡は今回の調査区では確認されていないが、本遺跡の東側にあたる名生館官衙遺跡城内地区などで 8 世紀後半～9 世紀前半ころの住居跡が確認されている（古川市教育委員会：

1991）ことから、居住域と距離をおいて埋葬した可能性がある。なお、甕棺は他に確認されていないため段丘縁辺にあたるA区西側付近が墓域となっていたかについては不明である。

2．灰白色火山灰が入る遺構について

堆積土に灰白色火山灰が入るものは、B区ＳD133、C区ＳD224、H区ＳD189 溝跡とC区で確認された一連の土壙群（ＳK210～223）があり、おおよそ10世紀前葉ころと考えられるものである。

溝跡はいずれも一部が検出されただけで不明な点が多いが、湿地の近くに位置していることから湿地への排水溝などの性格が予想される。また、C区ＳD224の底面から残存状況は悪いが斎串と思われる木製品が出土しており、詳細は不明だが近くで祭祀を行なった後、捨てられたものかもしれない。

一連の土壙群は地山が白色粘土化したところに集中していることから、白色粘土の採掘坑と考えられる。使用目的は良質な粘土であることから土器製作などの用途が推定される。

3．そのほかの遺構

ここでは上記した遺構以外で古代の遺物が出土した遺構を一括する。いずれも堆積土中から1点出土したものである。A区ＳK23・45・46土壙からはいずれも破片資料であるが非ロクロ土師器内黒坏が出土しており、8 世紀前半のものと考えられる。これらの土壙は前述した古墳時代南小泉式期の土壙墓と近接し、また形態も類似しているが、8 世紀の土器が出土していることや積極的に土壙墓とする資料がないことから性格は不明とする。B区ＳD114からは須恵器稜碗が出土しており、8世紀前半のものと考えられる。ただし、ＳD114の年代は堆積土の特徴から中近世のものと考えている。

Ⅴ．中近世

中近世の遺物が出土している遺構は、A区ＳD27・39・40・54溝跡、B区ＳD101・116・135溝跡・ＳE117・120井戸跡、K区ＳD150・158溝跡である。

溝跡は幅3～5mのもの（ＳD101･116）と幅1m前後のもの（ＳD27・39・40・54・135・150・158）があり、堆積土が締まりのない黒褐色シルトを主体としている点が共通している。このうちＳD150溝跡はK区の東端で東西方向から南北方向に直角に曲がることから、主にＳD150 の南側を区画する溝跡と考えられる。また、ＳD39溝跡とＳD40溝跡はA～B区にかけてほぼ平行して延びていることや両溝間に遺構が存在しないことなどから道路側溝の可能性がある。しかし全容が不明なことや溝の間隔が南側ほど狭くなっていくなどの疑問点もあり可能性を指摘するに留めたい。そのほかの溝の性格については不明である。

井戸跡はB・E・K区で確認され、このうち出土遺物があるのはＳE117･120 だけであるが、いずれも直径約1.20～1.50m前後の円形、楕円形でＳE117･120井戸跡とほぼ同規模であること、構造も素掘りで同じであること、堆積土が締まりのない黒褐色シルトを主体としていることなど共通点が認められることから、今回確認された井戸跡の多くは中近世のものと思われる。

なお、今回の調査区には出土遺物や特徴がないため所属時期が不明な溝跡や土壙、掘立柱建物跡が多数みられる。これらの多くは、前述した中近世に属する遺構と同様に堆積土が締まりのない黒褐色シルトを主体としていることから、中近世もしくはそれ以降の可能性が高いと思われる。

第五章　まとめ

① 今回の調査で旧石器時代・縄文～弥生時代、古墳時代中期、古代、中近世の遺構が確認された。

② Ａ－1 区では旧石器時代の石器 7 点が出土した。このうちＳＸ100 旧石器集中地点から出土した荒屋型彫刻刀形石器は県内では、2 遺跡目の出土例となる。

③ Ａ－2 区では弥生時代後期天王山式期の竪穴住居跡が確認された。天王山式期の住居跡は県内で 5 例目である。

④ 古墳時代のものは円形周溝跡、土壙墓、土器埋設遺構などがある。このうち土器埋設遺構は赤彩された土器が出土していることなどから、Ａ－1 区付近で祭祀的行事が行なわれたことが明らかとなった。ＳＸ12 土器埋設遺構からは赤彩された土器 13 点が一括出土した。

⑤ 古代のものには掘立柱建物跡、溝跡、合口甕棺墓などがある。掘立柱建物跡は柱穴の一つを確認しただけであるが、掘り方の大きさから比較的大きな建物跡である可能性が高い。位置的にも国指定史跡名生館官衙遺跡との境界で確認されていることから、官衙遺構との関連が注目される。

遺跡北西部のＣ区ＳＤ224 からは斎串と思われる木製品が出土した。周辺で祭祀が行なわれた可能性があり、今後の調査予定の遺跡西側の調査結果に注目したい。

合口甕棺墓は集落から離れたＡ－1 区で確認されたが、この付近が墓域となっていたかについては不明である。

⑥ 中近世のものには溝跡、井戸跡などがあるが、出土遺物が少ないことや調査区の関係で一部の検出に留まっていることなどから遺構の性格や遺構のセット関係をつかめるものは少ない。このうちＨ区東端で確認されたＳＤ203 は大規模であることや、堀跡と推定されている一段低くなっている地形の延長に当たることなどから、中世大崎氏の居城跡名生城に伴う堀跡の一部と考えられる。また、Ａ・Ｂ区で確認された平行する南北溝跡ＳＤ39・40 は道路側溝の可能性がある。

⑦ Ｂ～Ｄ・Ｆ・Ｈ区の湿地近くで白色粘土の採取を目的とした粘土採掘坑が確認された。時期はＦ区ＳＫ172 は不明だが、Ｈ区は縄文晩期～弥生時代ころ、Ｂ・Ｄ区は古墳時代、Ｃ区は 10 世紀前葉ころのものと縄文時代から古代までこの付近の土を利用して土器を作っていたことがわかった。また、粘土を採取する場所は時代によって異なっているが、今回は確認できなかったが集落の在り方を反映したものかも知れない。

引用・参考文献

相沢清利（1990）：「山王遺跡－第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集
赤澤靖章（1990）：「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第138集
河部正光・赤澤靖章（1983）：「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集
阿部博志・千葉宗久（1980）：「台ノ山遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第62集
阿部恵・須田良平・岩見和泰（1991）：「新峯崎遺跡」『村田町文化財調査報告書』第9集
天野順陽・笠原俊哉（1997）：「名生館官衙遺跡の周辺」『第23回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
荒井　格（1991）：「鴻ノ巣遺跡」『仙台市文化財調査報告書』148集
石川俊英ほか（1987）：「高崎遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第12集
石川俊英（1989）：「高崎遺跡調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第19集
石川俊英（1992）：「山王遺跡－15次調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第29集
伊東信雄（1950）：「東北地方の弥生文化」
岩見和泰（1991）：「合戦原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第140集
岩見和泰（1994）：「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第163集
氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』東北史学会
加藤道男（1982）：「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集
加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
後藤秀一ほか（1996）：「山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－」『宮城県文化財調査報告書』第171集
斎藤尚巳・沼山源喜治（1974）：「東北地方の合口埋甕遺構について」『北奥古代文化第6号』
佐々木茂禎（1971）：「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56－3
佐藤甲二（1985）：「南小泉遺跡－第12次発掘調査報告－」『仙台市文化財調査報告書』80集
佐藤信行（1978）：「上ノ原Ａ遺跡－弥生後期の住居跡－」『迫町文化財調査報告書』第3集
佐藤則之・山田晃弘（1991）：「薬來山麓遺跡群」『宮城県文化財調査報告書』第140集
佐藤則之・菅原弘樹（1993）：「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集
佐藤憲奉（1998）：「駒米遺跡」『小牛田町文化財調査報告書』第3集
庄子敦ほか（1990）：「利府町郷楽遺跡」『宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集』
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一・加藤道男（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集
縄文文化検討会（1988）：『「東北地方の弥生式土器の編年について」』
進藤秋輝（1986）：「多賀城創建をめぐる問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
進藤秋輝（1990）：「多賀城創建以前の律令支配の様相」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』
菅原弘樹（1997）：「上代遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第173集
菅原弘樹・吾妻俊典（1994）：「山王遺跡Ⅰ－古墳時代中期遺物包含層編－」『宮城県文化財調査報告書』第161集
須藤　隆（1990）：「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』
仙台市教育委員会（1976）：「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集
高橋誠明・村田晃一（1996）：「陸奥国における7世紀の様相」『飛鳥・白鳳時代の諸問題Ⅰ』国際古代史シンポジウム実行委員会
千葉孝弥（1992）：「山王遺跡－第12次発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第30集
丹羽　茂（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集
丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集
平間亮輔（1998）：「原遺跡－第1・2次発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第229集
福島県立博物館（1993）：『企画展　東北からの弥生文化』
藤田定一（1951ａ）：『天王山遺跡の調査報告』
藤田定一（1951ｂ）：『天王山式土器の模様図集』
古川一明・白鳥良一（1991）：「土師器の編年　東北」『古墳時代の研究』6
古川市教育委員会（1987～1996）：「名生館官衙遺跡Ⅶ～ⅩⅥ」『古川市文化財調査報告書』第6～13・19・21集』古川

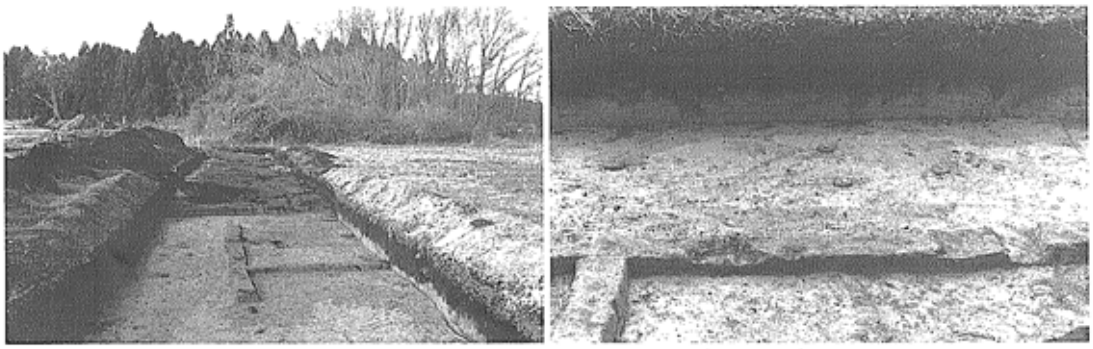
市教育委員会
宮城県教育委員会（1974）：「手取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集
宮城県教育委員会（1977）：「船渡前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第49集
宮城県教育委員会（1978）：「佐内屋敷遺跡」『宮城県文化財調査略報－昭和52年度分－』第53集
宮城県多賀城跡調査研究所（1981～1986）：「名生館遺跡Ⅰ～Ⅵ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第6～11冊
宮城県古川市（1986）：『古川市土地分類調査（細部調査）報告書』
村田晃一ほか（1998）：「山王遺跡町地区の調査」『宮城県文化財調査報告書』第175集
弥生時代研究会（1990）：『「天王山式期をめぐって」の検討会　記録集』

写 真 図 版

A区　ＳＸ12 土器埋設遺構出土土器

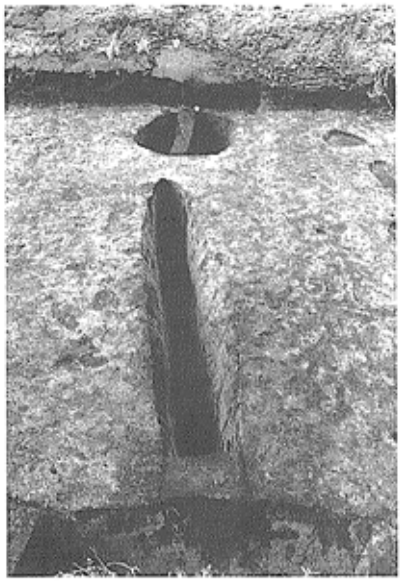
A区　ＳＤ７ 円形周溝・ＳＸ12 土器埋設遺構付近

写真図版１



A区　SX100旧石器集中地点（左：東から，右：北から）

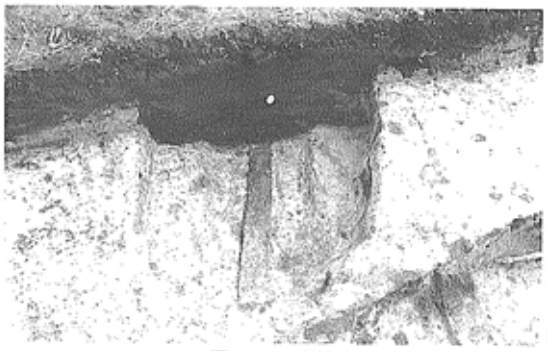
A区　SK15Tピット



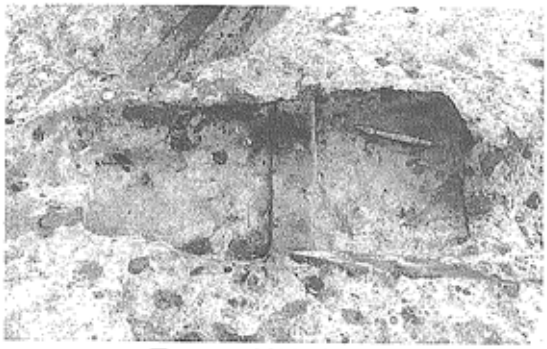
A区　SK37Tピット

A区　SI24住居跡（南西から）

写真図版2



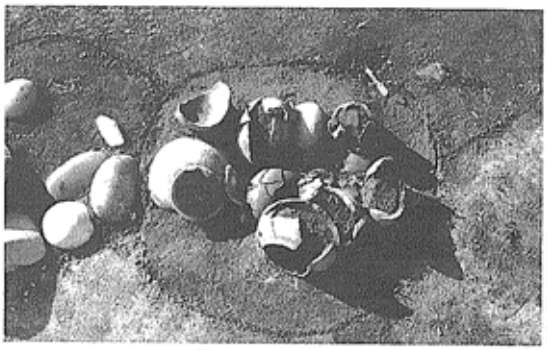
A区　SK5 土壙墓



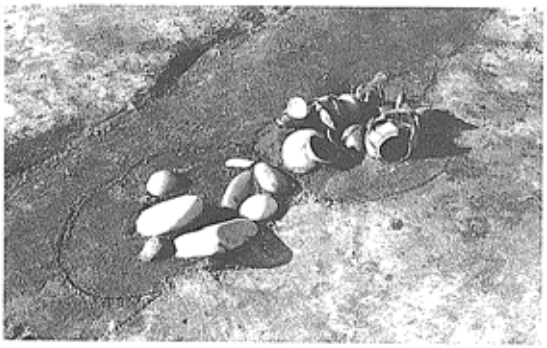
A区　SK34 土壙墓（刀子出土）

A区　SX2 土器埋設遺構

A区　SX10 土器埋設遺構

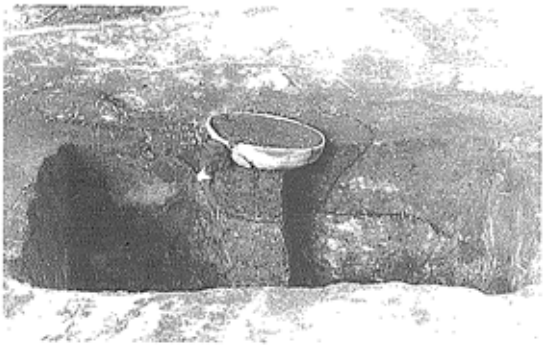


A区　SX12　SK11



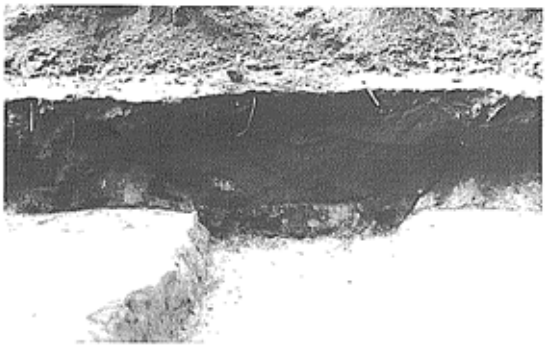
A区　SX12・S K11

A区　SX35 土器埋設遺構



A区　SX42 土器埋設遺構

A区　SD17 円形周溝断面

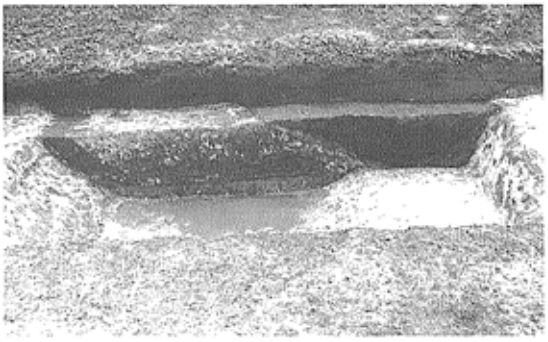


A区　SD56 円形周溝断面

写真図版 3

A区　SX47 合口甕棺

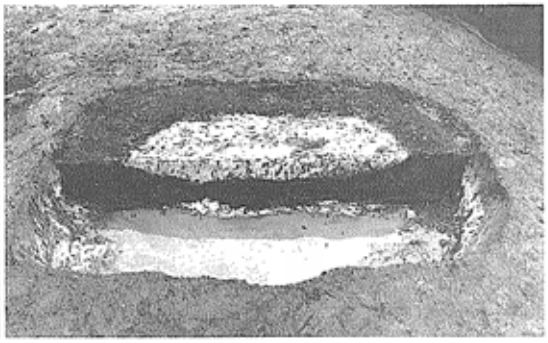
B-3・B-4区（北から）



B区　SD40・101 溝跡断面

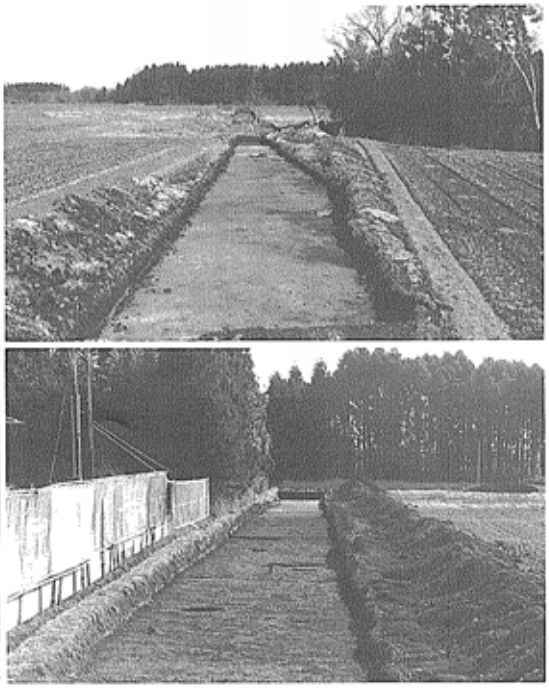
B区　SK130 粘土採掘坑

C区　SK221～223 粘土採掘坑



C区　SK222 断面

D-2区（東から）

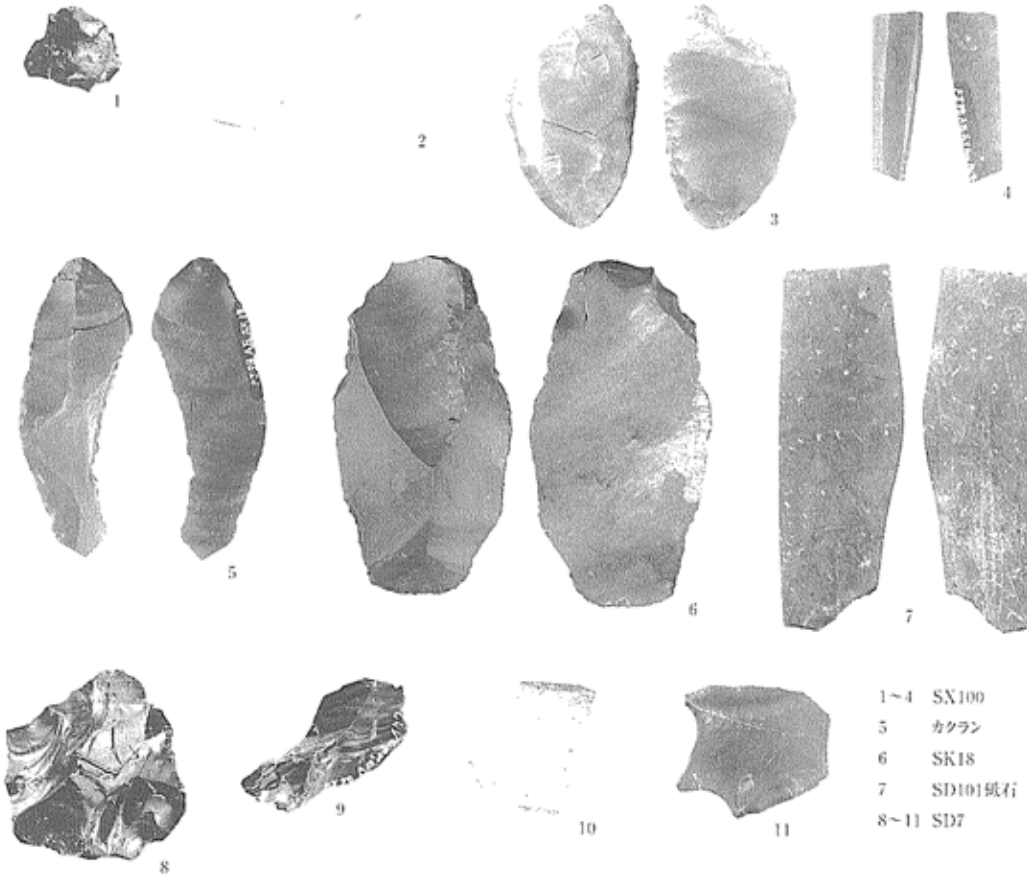


上：F区全景（南から）
下：G区全景（北から）

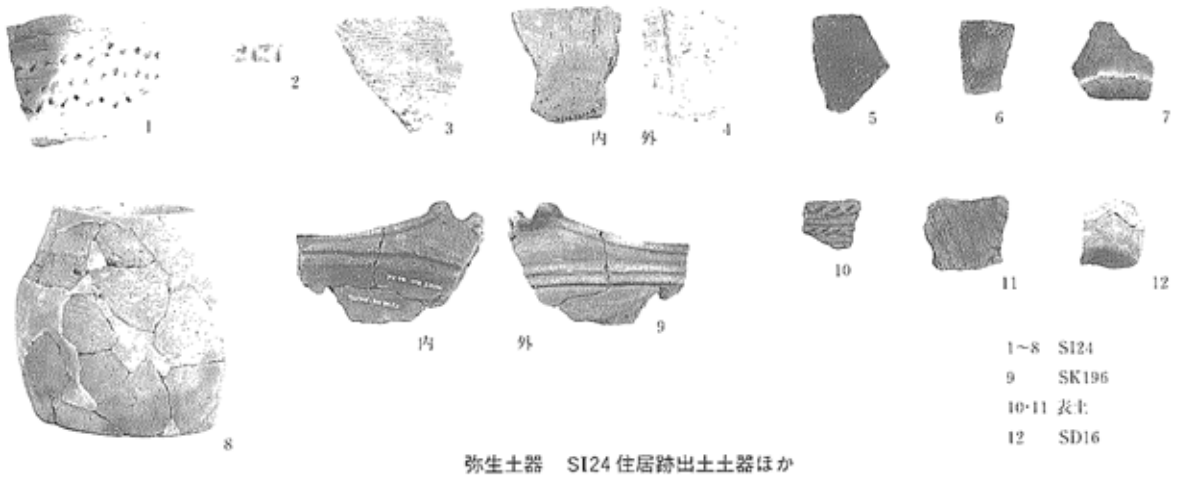
写真図版 4

H区　全景（北西から）

H区　西側確認状況（東から）

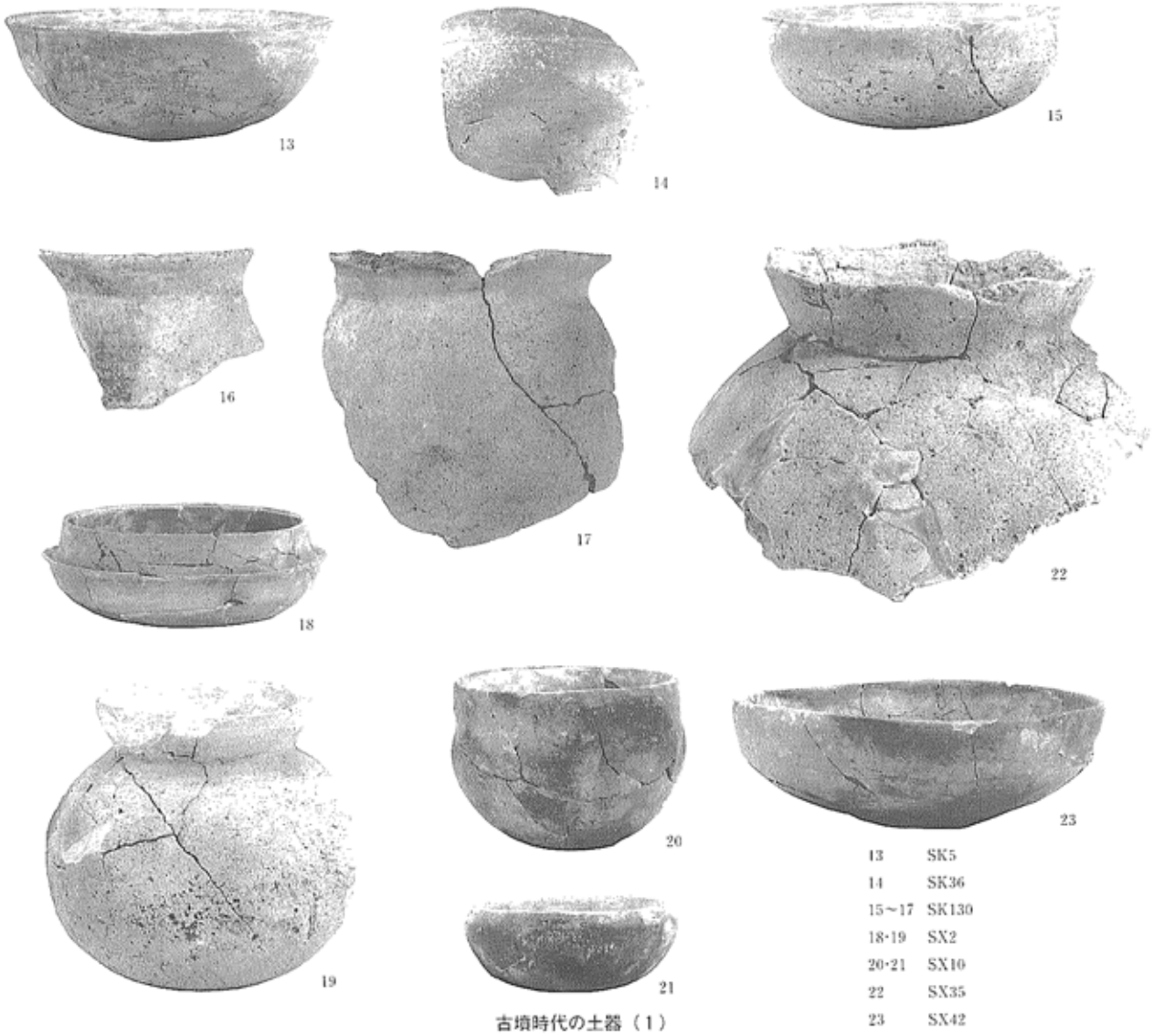


A区　SX100旧石器集中地点出土石器ほか



1～8　SI24
9　SK196
10･11　表土
12　SD16

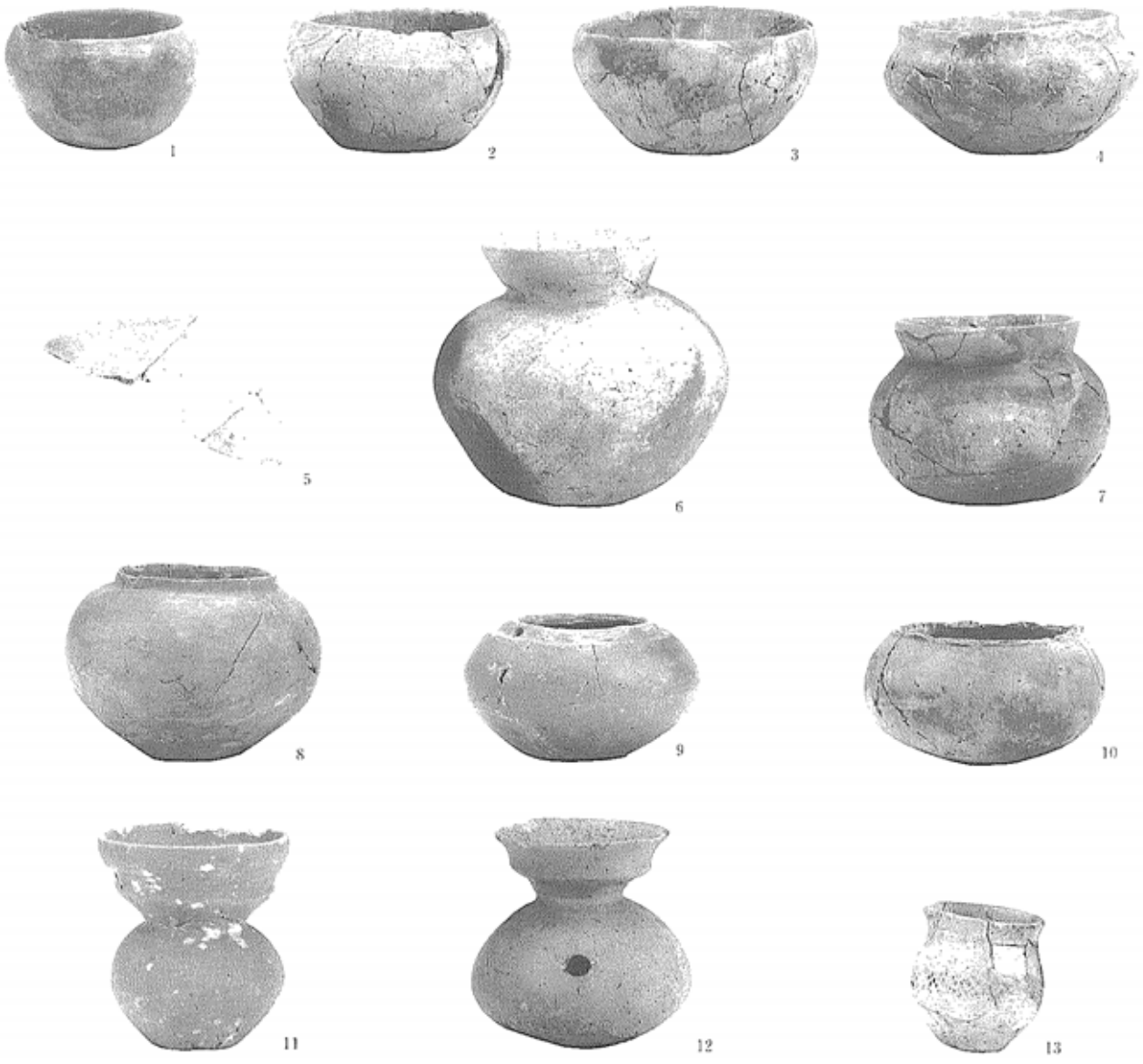
弥生土器　SI24 住居跡出土土器ほか



13　SK5
14　SK36
15～17　SK130
18･19　SX2
20･21　SX10
22　SX35
23　SX42

古墳時代の土器（1）

写真図版 6

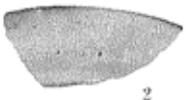


SX12 土器埋設遺構出土土器

SX12 付近確認面出土土器

古墳時代の土器（２）

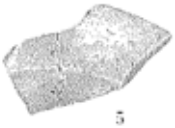
1



2

3

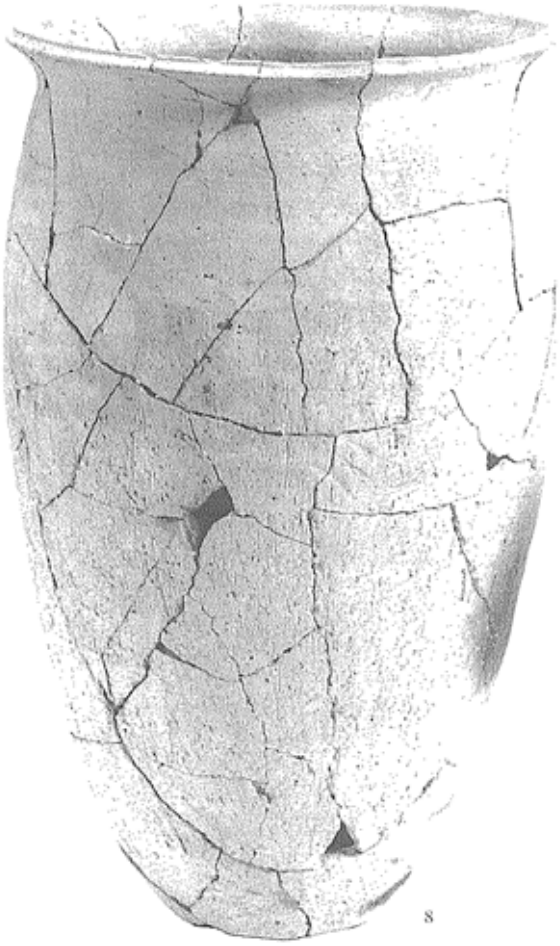
4



5

6

7

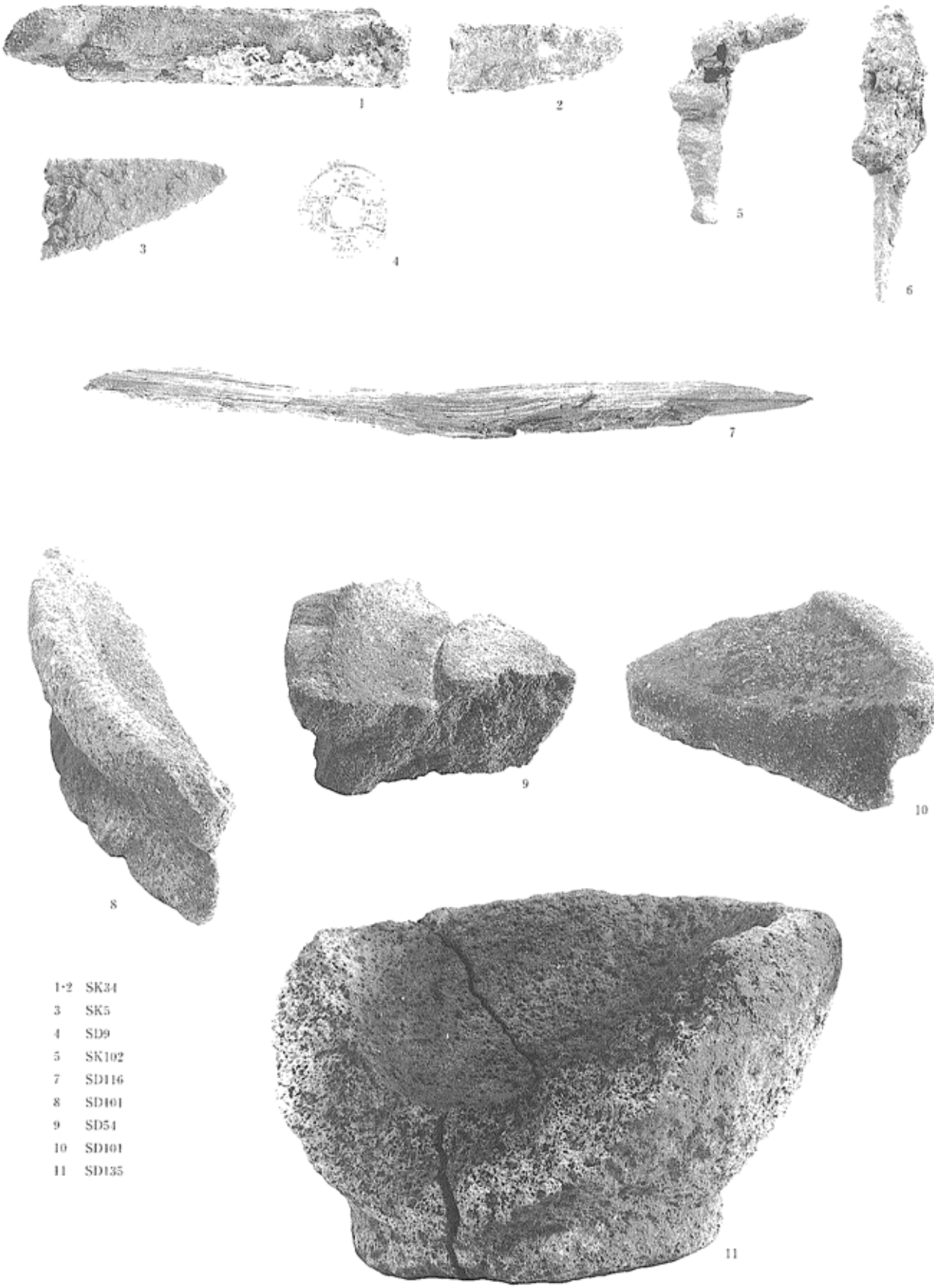


8

古代の土器

1 SD114
2 SK23
3 SK45
4 SK46
5 SK48
6 SD150
7·8 SX47

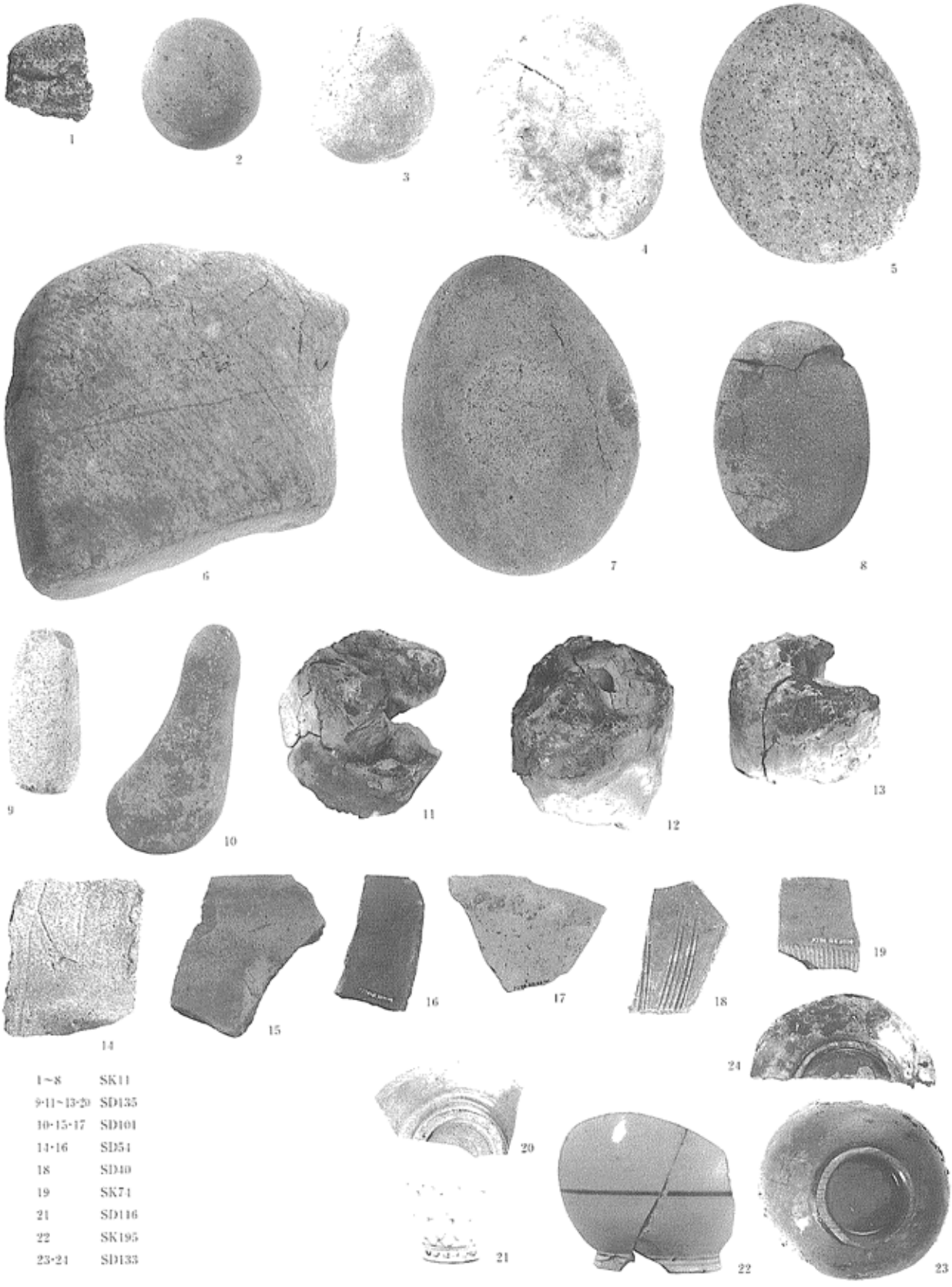
写真図版 8



1・2　SK34
3　SK5
4　SD9
5　SK102
7　SD116
8　SD401
9　SD54
10　SD401
11　SD135

金属製品・木製品・石製品（1～6　S=1／1　7～11　S=1／3）

写真図版 9



1~8	SK11
9·11~13·20	SD135
10·15·17	SD101
14·16	SD54
18	SD40
19	SK71
21	SD116
22	SK195
23·21	SD133

SK11 出土遺物、中近世の遺物

写真図版10

下 草 古 城 本 丸 跡

目　　次

第一章　遺跡の概要 …… 81
　Ⅰ．遺跡の位置 …… 81
　Ⅱ．遺跡の現状 …… 82
　Ⅲ．文献上の下草古城跡 …… 82
第二章　発掘調査 …… 84
　Ⅰ．調査に至る過程 …… 84
　Ⅱ．調査の目的 …… 84
　Ⅲ．調査の方法と経過 …… 84
第三章　基本層序と発見された遺構・遺物 …… 85
　Ⅰ．基本層序 …… 85
　Ⅱ．発見された遺構・遺物 …… 86
第四章　考　察 …… 102
参考・引用文献 …… 106
　写真図版

調 査 要 項

遺　跡　名：下草古城跡（しもくさこじょうあと）
　　宮城県遺跡地名表記載番号 23068
遺 跡 記 号：ＯＧ
遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣下草
調 査 原 因：県営圃場整備事業
対 象 面 積：約 10,000 ㎡
調 査 面 積：約 3,340 ㎡
調 査 期 間：平成 10 年（1998 年）8 月 24 日～10 月 24 日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：真山　悟、後藤秀一、山田晃弘、村田晃一、天野順陽、藤村博之
調 査 協 力：大和町教育委員会、宮城県農林振興事務所、大和東部土地改良区
調査参加者：浅野豊吉、岡　重三、奥山　勲、斉藤柳子、佐藤邦子、佐藤芳子、志賀野ふさ
　　高橋かね子、高橋　隆、高橋とき子、高橋つよ子、千葉　宗、馬場栄久、横田よし子
　　若生孝子（五十音順）

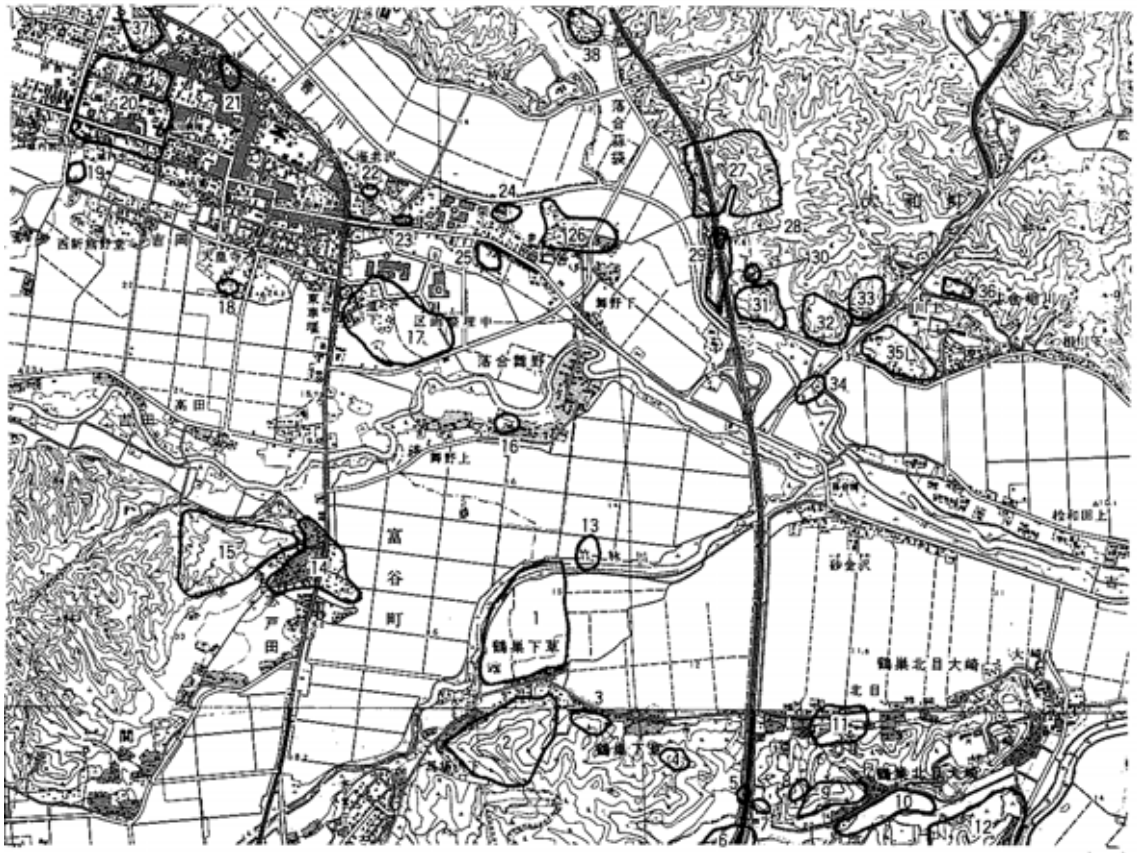
下 草 古 城 本 丸 跡

第一章　遺跡の概要

Ⅰ．遺跡の位置

下草古城跡は、黒川郡大和町鶴巣下草に所在する。大和町の中心部、吉岡から南東に3㎞のところに位置する（第１図）。

奥羽山脈・船形連峰に端を発した吉田川とその支流である善川、竹林川は、徐々に高度を下げ周辺を解析しながら東流する。大和町の中心部、吉岡から舞野、下草付近では、吉田川に、北西から善川、南西から竹林川が合流しており、広く沖積地が広がっている。遺跡は竹林川が合流する地点から 1.5㎞程上流にあり、標高 13～15m の自然堤防とその周辺に位置する。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	下草古城跡	集落跡・城跡	古墳・古代・中近世	14	三ケ森遺跡	包含地	奈良・平安	27	御所館跡	包含地	中世
2	鶴巣館跡	城跡	中世	15	鮎取遺跡	城跡	中世	28	新田古墳1・2	古墳	古墳後
3	追遺跡	包含地	古代	16	上舞野B遺跡	包含地	古代	29	八谷館跡	城跡	中世
4	観音堂、小塚跡	小塚	中世・近世	17	一里塚遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	30	新田古墳3号	古墳	古墳後
5	日光山遺跡	墓・祭祀遺跡	奈良・平安・中世・近世	18	天王寺遺跡	包含地	平安	31	八谷古城跡	城跡	中世
6	勝負沢遺跡	包含地	縄文中・平安	19	東遺跡	包含地	古代	32	大沢遺跡	包含地	古代
7	日光山西小塚	小塚		20	吉岡城跡	城跡	近世	33	上ノ山遺跡	包含地	平安
8	日光山小塚群	小塚	中世	21	安楽院遺跡	包含地	縄文中・後	34	相川堰防遺跡	包含地	縄文・古代
9	別所横穴古墳群	古墳	古墳	22	姥老沢遺跡	包含地	縄文中	35	熊野遺跡	包含地	古代
10	別所遺跡	包含地	古代	23	糸繰遺跡	包含地	縄文・古代	36	塚越遺跡	包含地	古代
11	寺東遺跡	包含地	古代	24	西盛田遺跡	包含地	平安	37	中興寺遺跡	包含地	縄文後
12	天神館跡	包含地・城跡	縄文・中世	25	常崎遺跡	包含地	奈良	38	岩下遺跡	包含地	古代
13	上舞野A遺跡	包含地	縄文・古代	26	吉川遺跡	包含地	古代				

第１図　遺構の位置と周辺の遺構

Ⅱ．遺跡の現状と推定される城郭構造

遺跡の範囲は東西 500m以上、南北約 600mで、北西に開く扇形を呈する（第 2 図）。遺跡の北と西は竹林川に画され、竹林川に沿った部分は河川改修によって原形を失っている。南は鶴巣館が立地する丘陵に接している。一方、東側は沖積地が広がっている。圃場整備が行われているため現在の地形から遺跡の東端は明瞭ではないが、平成 4 年度の調査で東端は 8･10 区付近であることが確認された。遺跡の現状は水田や畑であり、標高の低い部分は水田、それよりも一段高い平坦な部分は畑として利用されている。

これらを詳細に見てみると、遺跡の南側は水田が広範囲に広がっているのに対して、北側は一段高い畑の部分が広がり、それらを二重に取り囲むように細長い水田部分が認められる。これは城跡の地割りを反映するものであり、高い部分は本丸や二の丸、低い部分は堀という北端中央の畑部分を中心とした城郭配置の様子が明瞭に残存している。

Ⅲ．文献上の下草古城跡

下草古城については、享保 13 年（1728 年）の『仙台領古城書立之覚』などに記載され，『大和町史』（遠藤・伊藤：1975）にまとめられている。

まず、城主、年代については、伊達政宗の三男で、伊達家の重臣であった飯坂家の後を継いだ宗清が宮城郡松森村から慶長 15 年（1610 年）に下草に移り、元和 2 年（1616 年）に吉岡に移るまで数年間住んだとされている（遠藤･伊藤：1975）。また、飯坂家の牌所で、現在吉岡にある「天王寺」の『書上』によると、この寺は飯坂家に従って福島県伊達郡飯坂村から宮城郡松森村に移り、さらに、宗清に一年遅れて、慶長 16 年（1611 年）に下草に移り、そして元和 2 年に吉岡に移ったことが記され、前記述を裏付けている。

規模は、『仙台領古城書立覚書』によると、

「平　古城　東西四十六間、南北六十八間。但四方ニ土手形上口八間之堀アリ西北ハ川　東南ハ幅四間長二百八十間ノ堀アリ」

とある。これは本丸部分が東西約 80m、南北約 120m、本丸の四方には幅約 14mの内堀が巡り、西・北側は竹林川が流れ、東・西側には幅約 7m、長さ約 500mの外堀があると解せ、現地形から推定できる城の構造・規模とほぼ一致する。

なお、文献に記された「下草古城」の城主、年代、規模・構造については上述の通りであるが、これまでの調査結果から宗清が「下草古城」に居城する以前にも町並みが存在していた可能性が高いことが指摘されている。（須田：1992･1993）。また、『伊達治家記録』（平：1973）にも、宗清が「下草古城」に居城する以前の天正 18・19 年（1590・1591）の大崎葛西一揆平定の時にも「下草城」「下草館」の名前が数回現れ、伊達政宗や蒲生氏郷らが立ち寄っていることが記されている。この「下草城」「下草館」と「下草古城」が同一のものであるならば「下草古城」の年代が約二十年遡ることになり、調査結果と矛盾しない。しかし、『伊達治家記録』などに現れる「下草城」「下草館」は 16 世紀末という年代からも中世の山城である「鶴巣館」を指している可能性もあり、「下草城」「下草館」と「下草古城」が同一のものであるかは不明である。

第２図　遺跡の全景とこれまでの調査区

第二章　発掘調査

Ⅰ．調査に至る過程

下草古城跡の調査は鶴巣下草地区の圃場整備に先立つものである。調査は平成3年度の確認調査に始まり、平成4年度から宮城県教育委員会が主体となって道路・水路部分および面工事によって削平される高まり部分を対象に継続的に行ってきた。平成8年度からは、大和町教育委員会に調査を引き継ぎ、以後は大和町教育委員会が主体となって調査を進めている。平成3年度からの調査区は着手順に1区～31区というように数字を付してある（第2図）。

これまでの調査によって多数の遺構が確認されているが、ほとんどが中近世のもので掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、道路跡等が認められ、城下町の様子が明らかになっている。また遺構は部分的に10時期以上の変遷を示し、比較的長期に渡って存続していたことも判明している。遺物も17世紀初頭頃のものが中心となっているが、16世紀・17世紀以降のものも出土している。このことから、これらの遺構は宗清が居城した1611～1616年までの数年間に残されたものではなく、この時期を中心に時間幅をもつことは確定的となっている。その他少数ながら、平安時代の竪穴住居跡・水田跡・遺物包含層や、古墳時代前期塩釜式期の土器集中地点等が確認されている。

Ⅱ．調査の目的

今回の調査は、本丸付近の圃場整備事業に伴う確認調査で、①宗清の居館跡の位置と規模、②入り口の位置、③区画施設の有無、④内堀の規模を明らかにすることを目的として調査を行った。

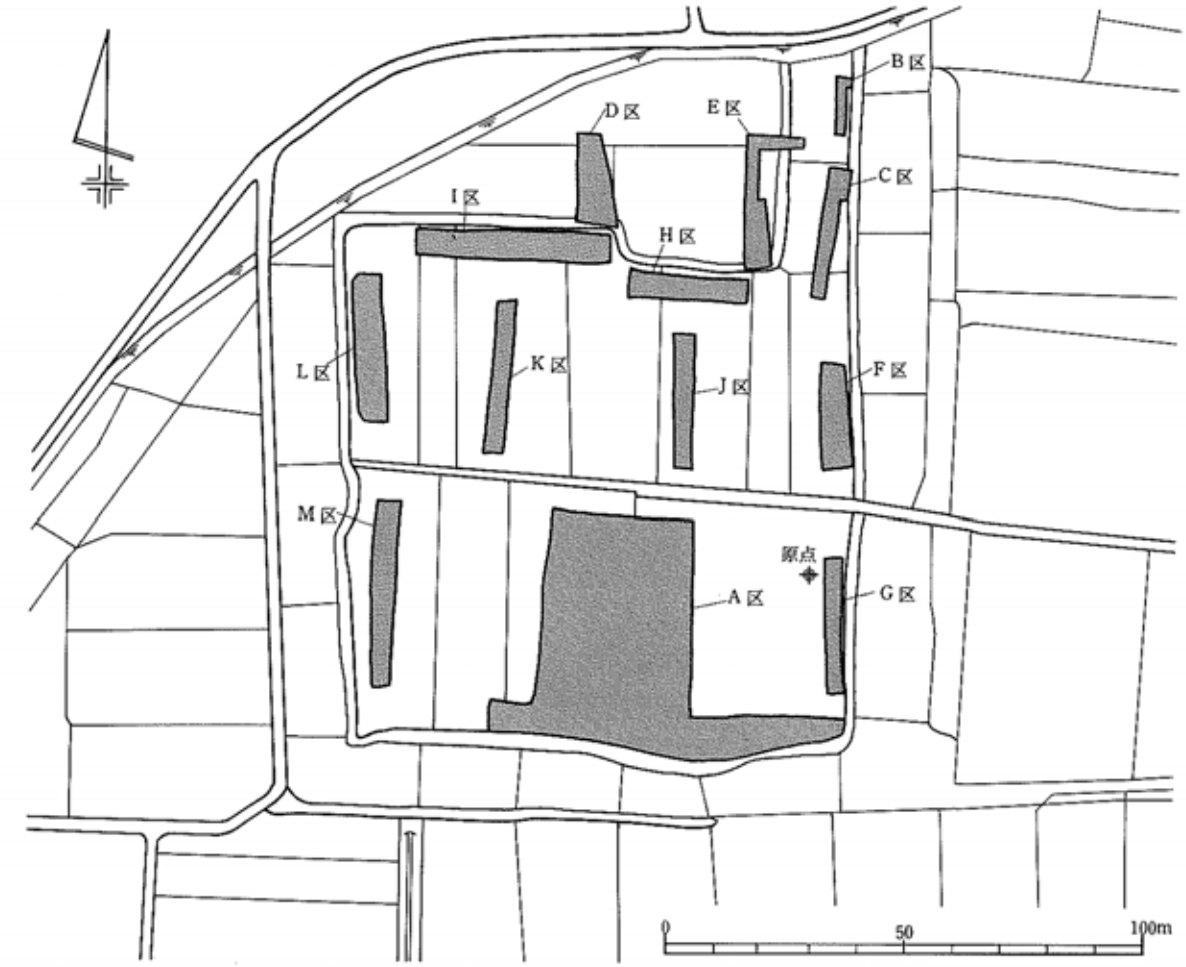
Ⅲ．調査の方法と経過

調査は、本丸の範囲と区画施設の有無・入り口の位置などを確認するために本丸と推定されている高まり部分の縁辺でトレンチ調査をすることから始まった。本丸端部に8本のトレンチ（B、C、F、G、H、I、L、M区）を設けた結果、後世に本丸中央から端部に押された土が各辺で50㎝～1mほど認められ、多少拡張されていた状況であったが、当時とほぼ変わらない地形であることが分かってきた。本丸の範囲が判明した後、続けて中央部の様子を見るために本丸中央部に3本のトレンチ（A、J、K区）を設けた。その結果、K区からは遺構が検出されず、J区は遺構が希薄だった一方、A区から多数の遺構が検出され大規模な柱穴も数カ所で確認された。この柱穴は建物跡になると思われたため、その全容が現れるところまでA区の拡張を行い、その後、A区を中心に調査を進めた。最後に、A区の調査が終了する見通しがついたため、本丸の外側で一段低くなっている内堀と推定されてる部分に調査区（D、E区）を設け、内堀の規模を確認した（第3図）。

調査にあたり、調査区南東に基準点を設け、3m×3mのグリッドを設定した。基準点の国家座標は次の通りである。

基準点：国家座標X＝－175100　　Y＝＋6450

精査した遺構は、設定したグリッドをもとに簡易遣り方測量、平板測量による平面図を作成し、必要に応じて断面図を作成した。写真記録については35㎜白黒・カラーリバーサル写真、6×7白黒・カラーリバーサル写真によって行った。また調査がほぼ終了した10月22日に航空写真撮影、調査最終



第3図　調査区位置図

日である10月24日に現地説明会を行い約100名の参加を得た。

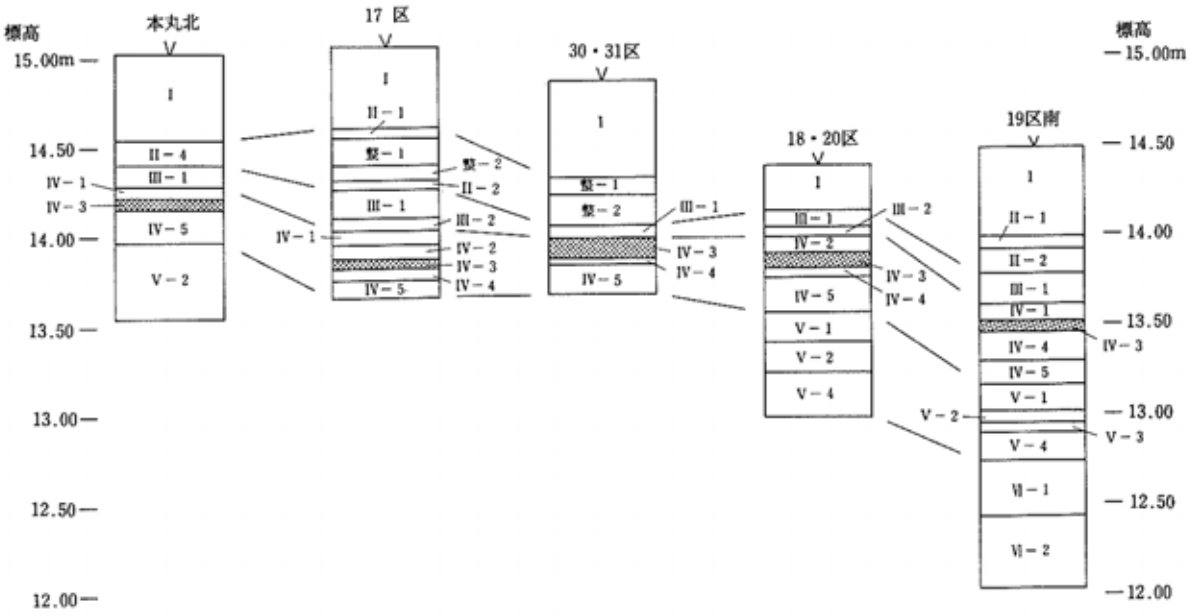
第三章　基本層序と発見された遺構・遺物

Ⅰ．基本層序

本遺跡は竹林川右岸に広がる沖積地に位置しているため、各区・各地点で堆積状況が若干異なる。しかし、堆積状況が良好な地点で層序を観察すると、多少の違いはあるものの、基準となる層を中心に各区でほぼ同じ層序を示している。

層はⅠ層～Ⅵ層に大別でき、さらに細分される（第4図）。出土遺物から年代が分かっているものは、Ⅰ層：現代、Ⅱ層：近世、Ⅳ層：古代、Ⅴ層：古墳時代である。Ⅲ層、Ⅵ層は不明であるが、概ねⅢ層は灰白色火山灰降下以降～中近世、Ⅵ層は古墳時代塩釜式期以前に位置づけられる。

遺跡全体に広がるⅣ－3 層の灰白色火山灰を基準に柱状図をみてみると、遺跡の北西部から南東部にかけて標高が低くなっていくことがわかる。今年度の調査区である本丸部分がもっとも標高が高く、19区南との比高は約0.7mとなっている。これは本遺跡を取り囲むように流れている竹林川右岸の自



層No.	時代	土色		土性	備考
Ⅰ－1	現代				現代の水田床土、耕作土、盛土、表土。
Ⅱ－1	近世	10YR4/4	褐色	シルト	同色の砂質シルトを少量含む。
整－1		2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	整地層。炭化物を少量含む。
整－2		10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	2.5Y5/3オリーブ褐色砂質シルトを多量に含む。
Ⅱ－2		2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	
Ⅲ－1	古代	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	
Ⅲ－2		2.5Y5/3	黄褐色	シルト	漸移層。
Ⅳ－1		2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	灰白粒をごく少量含む。
Ⅳ－2		2.5Y5/1	黄灰色	シルト	灰白色火山灰層との漸移層。
Ⅳ－3		灰白色火山灰			10C前半。
Ⅳ－4		2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	17区 SX455遺物包含層。(9C前半)
Ⅳ－5		2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	
Ⅴ－1		2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
Ⅴ－2		2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	同色の砂質シルトを含む。
Ⅴ－3	古墳	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	炭化物をごく少量含む。
Ⅴ－4		5Y4/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	18・24区塩釜式土器出土層、炭化物をごく少量含む。しまりあり。4C。
Ⅵ－1		5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	同色の粘土質シルトをごく少量含む。
Ⅵ－2		2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	しまりあり。

第4図　基本層序模式図

然堤防の地形を反映していると考えられ、また、本丸・二の丸は地形的に高い場所を選んで構築されたものといえる。

Ⅱ．発見された遺構・遺物

○発見された遺構

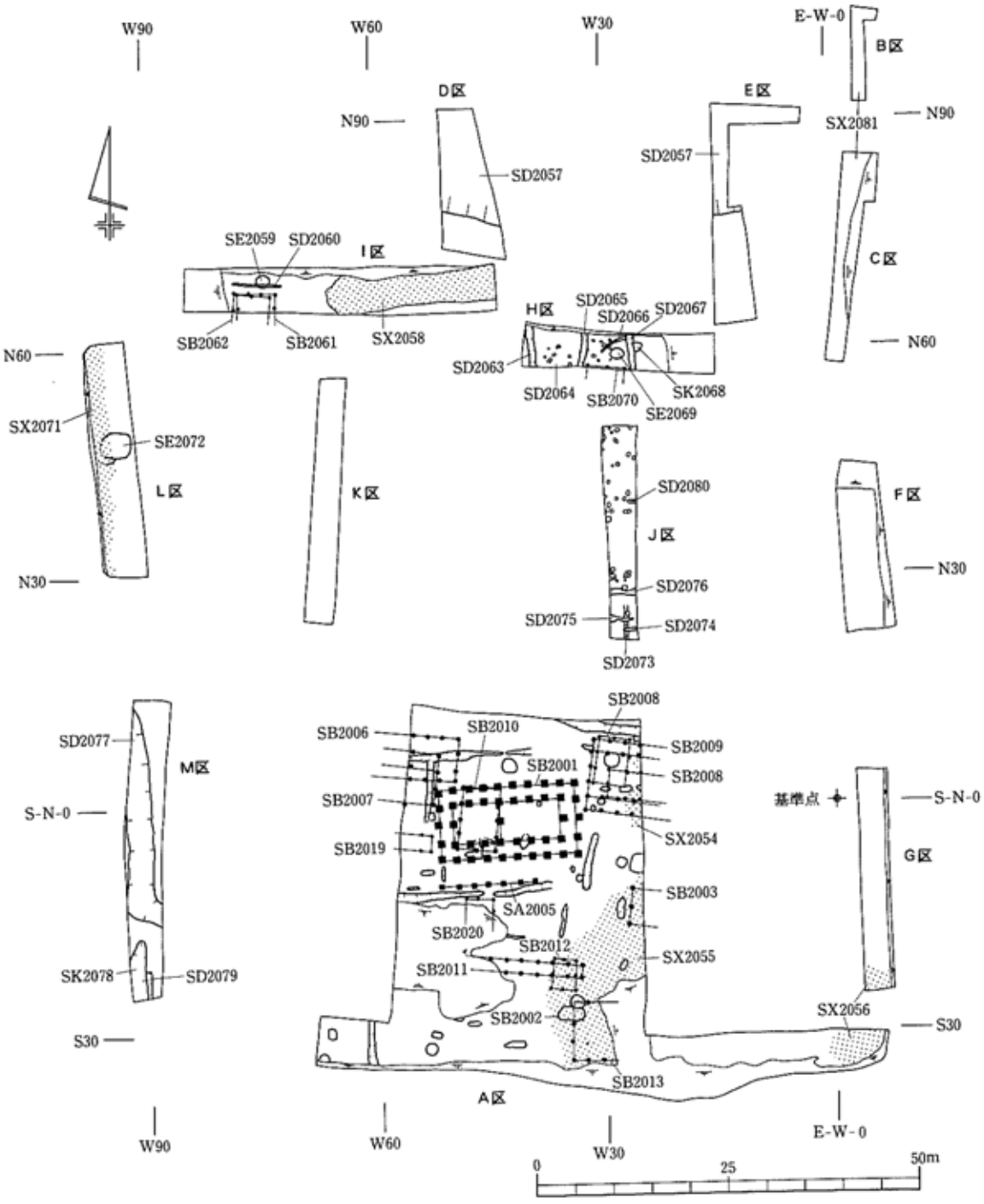
今回の調査は大半がトレンチによる確認調査でA～M区に区分けしている。遺構はトレンチを拡張したA区をはじめ、H、I、J、L、M区で検出され、B、C、F、K、G区では確認されていない。このことから、本丸内の遺構は東部と西部にほとんど存在せず、中央南部のA区に集中し、そこから中央北部のにかけて点在している状況であるといえる。本丸全体で検出された遺構は、整地層5カ所、掘立柱建物跡16棟、門跡1棟、塀跡1条、溝跡24条、井戸跡9基、土壙23基、通路跡などがある。

以下、遺構の説明を行うが、各遺構ごとに属性表（第2表～第4表）を作成したため、主なものを記述していく。

①A区（第5・8図）

整地層

3カ所確認された。SX2054は調査区北東隅付近に南北15m、東西5mの範囲で認められた。厚さ数cm～十数cm、黄褐色シルトで、北東に向かって厚くなる。基本層序Ⅱ－2層上面に広がり、整地層上面からは掘立柱建物跡、溝跡、土壙などが確認された。SX2055は中央南部に南北25m、東西12mの広範囲に認められた。厚さ2cm～40cm、褐色、黒褐色土のシルトで、東に向かって厚くなる。基本層序



第5図　遺構全体図

Ⅱ－2 層上面に広がり、整地層上面からは掘立柱建物跡、門跡、井戸跡、土壙が確認された。なお、整地層内には炭化物や焼土ブロックが認められた。ＳＸ2056 は本丸南東隅で南北 15m、東西 8mの範囲で認められた。厚さは不明であるが黒褐色シルトで、基本層序Ⅱ－2 層上面に広がる。

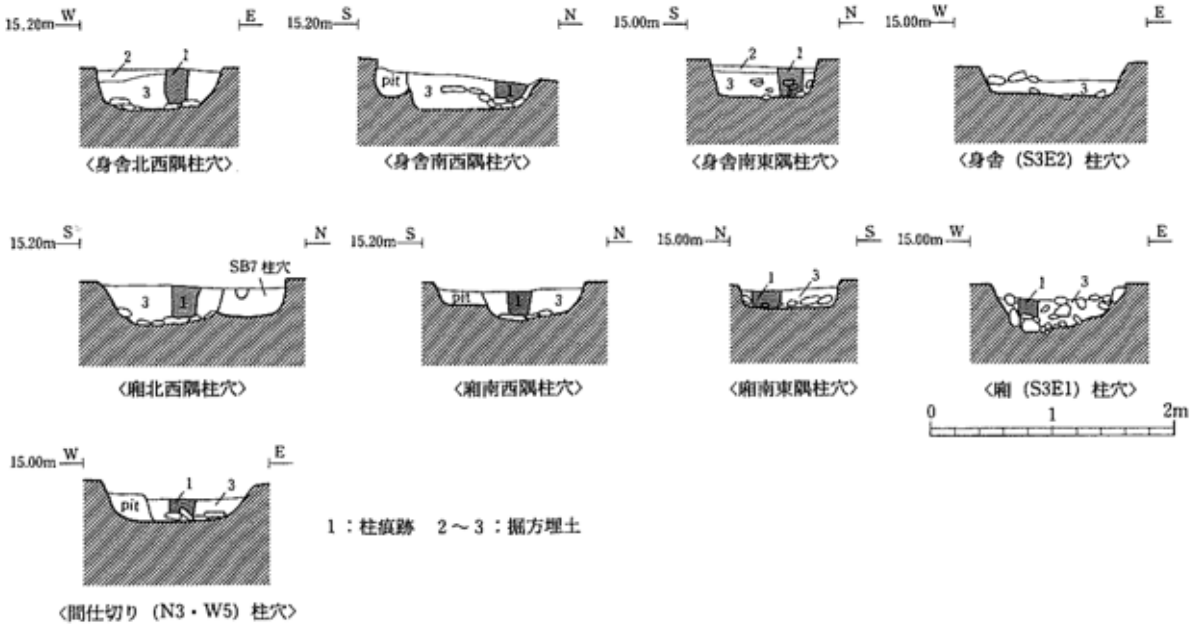
調査区は削平されているため、これらの整地層が残存していない区域に位置する遺構については、整地層の上面、下面いずれに属するかは不明である。

掘立柱建物跡

【ＳＢ2001 建物跡】（第 6・7 図）調査区北部中央で検出した東西 9 間、南北 4 間の東・西・南・北廂付の床束をもつ東西棟建物跡で、身舎の西から 3 間目に間仕切りがある。柱穴は地山面（基本層序Ⅱ－2 層）で身舎 19 カ所、廂 26 カ所、床束 3 カ所を検出し、この中の身舎 18 カ所、廂 25 カ所、床束 3 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ2007・ＳＢ2010・ＳＤ2031・ＳＫ2032・ＳＫ2033・ＳＫ2041 と重複し、これらよりも新しい。

柱間寸法は、桁行が北側柱列で身舎、廂の出ともにほぼ 2m等間で総長 18m、梁行が西妻で北から北廂の出 2m、2.5m、2.5m、南廂の出 2mで、総長 9mである。床束は棟通り下に 3 個の柱穴を配したもので柱間寸法は西から 4.1m、4.1m、3.5mである。建物の方向は西妻でみると北で約 3 度西に偏している。柱穴は身舎、廂ともに長径 0.8～1.4m、短径 0.7～1.2mの隅丸長方形を基調とし、深さは確認したもので 22～40㎝、柱痕跡は径 18～24 ㎝の円形である。また床束柱は平面形が長径 35～50 ㎝、短径 26～40 ㎝の不整形で柱痕跡は径 12～15 ㎝の円形である。埋土は暗灰黄色シルトが主体で身舎・廂の柱穴掘方底面にはこぶし大の根石が密に敷かれ、柱痕跡の下には礎板が据えられているものもある。

遺物は掘方埋土から根石として転用された石臼（第 14 図 16）や鉄釘（第 14 図 10）、中世陶器片が出土している。



第 6 図　SB2001 建物跡柱穴断面図

第7図　SB2001 建物跡・SA2005 塀跡

【ＳＢ2003 建物跡】調査区東側中央部で西側柱列のみ検出した南北２間、東西１間以上の建物跡で、東部は調査区外になる。柱穴はＳＸ2055 整地層上面で３カ所検出し、全ての柱穴で柱痕跡を確認している。

柱間寸法は、北から 2.6m、2.2mで、総長 4.8m、東西は 1.8m以上である。建物の方向は北で約 6 度東に偏している。柱穴は径 80～90㎝の円形を呈し、深さは 50～52 ㎝である。柱痕跡は径 20 ㎝前後の円形である。埋土は黒褐色シルトが主体でさらに細分できる。

【ＳＢ2006 建物跡】調査区北西隅で検出した南北３間、東西４間以上の東西棟建物跡で、西部は調査区外になる。柱穴は地山面で 10 カ所検出し、９カ所で柱痕跡を確認している。ＳＤ2015 よりも古いが、ＳＢ2007 との新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が北側柱列東から 2.2m、2.1m、1.9mで総長 6.2m以上、梁行が東妻で北から 1.9m、3.6m（２間分）で総長 5.5mである。建物の方向は東妻でみると北で約８度東に偏している。柱穴は長径 52～78 ㎝、短径 50～70 ㎝の楕円形で、柱痕跡は径 12～16 ㎝の円形である。

【ＳＢ2007 建物跡】調査区北西隅で検出した南北３間、東西１間以上の北廂付の建物跡で、西部は調査区外になる。柱穴は地山面で身舎５カ所、廂２カ所を検出し、この中の身舎３カ所、廂１カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ2001・ＳＤ2015 より古いが、ＳＢ2006 との新旧関係は不明である。

柱間寸法は、東西が 3.7m以上、南北が東側柱列で北から廂の出 2.2m、2.4m、2.1mで総長 6.7mである。建物の方向は東側柱列でみると北で約８度東に偏している。柱穴は身舎・廂ともに同規模で長径 70～92 ㎝、短径 50～80㎝の隅丸長方形を基調とし、深さは身舎で確認したもので 28 ㎝である。柱痕跡は径 14～16㎝の円形である。

【ＳＢ2008 建物跡】調査区北東隅で検出した南北３間、東西２間の南北棟建物跡である。柱穴は地山面で９カ所検出し、この内８カ所で柱痕跡を確認している。ＳＫ2025 よりも古いが、ＳＢ2009・ＳＢ2018 との新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が西側柱列で北からほぼ 2m等間で、総長 6m、梁行が北妻で西から 2.05m等間で総長 4.1mである。建物の方向は西側柱列でみると北で約７度東に偏している。柱穴は径 22～46 ㎝の円形を基調とし、柱痕跡は径 10～18 ㎝の円形である。

【ＳＢ2009 建物跡】調査区北東隅で検出した南北５間、東西４間以上の南・北廂付の東西棟建物跡と思われ、東部は調査区外になる。柱穴は地山面およびＳＸ2054 整地層上面で身舎 10 カ所、廂８カ所を検出し、この中の身舎６カ所、廂６カ所で柱痕跡を確認している。ＳＫ2022・ＳＫ2027 よりも古く、ＳＥ2023 よりも新しいが、ＳＢ2007・ＳＢ2018 との新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が身舎北側柱列でほぼ 2m等間で、総長 6m以上、梁行が西妻で北から、廂の出（1.4m）、（2m）、2.1m、2.1m、廂の出 1.8mで、総長約 9.4mである。建物の方向は西妻でみると北で約７度東に偏している。柱穴は身舎・廂ともに同規模で、長径 40～65 ㎝、短径 35～52 ㎝の楕円形を基調とし、柱痕跡はいずれも径 15～22 ㎝の円形である。遺物は掘方埋土内から時期不明の灰釉陶器片が１点出土している（写真図版６－６）。

【ＳＢ2010 建物跡】調査区北部中央よりやや西側で検出した南北４間、東西２間の南北棟建物跡であ

第8図　遺構配置図1（A・G区）

る。柱穴は地山面で 11 カ所検出し、この中の 8 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ2001 よりも古く、ＳＫ2032 よりも新しい。

柱間寸法は、桁行が西側柱列でほぼ 2m等間で、総長 8m、梁行が南妻で東から 2.6m、（2.5）m、総長約 5.1mである。建物の方向は西側柱列でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は長径 60～85 ㎝、短径 40～62 ㎝の楕円形を呈し、柱痕跡は径 14～19 ㎝の円形である。

【ＳＢ2011 建物跡】調査区中央南部で検出した東西 6 間以上、南北 1 間の東西棟建物跡で、西部は破壊されている。柱穴は地山面およびＳＸ2055 整地層上面で 13 カ所検出し、この中の 12 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ2012 と重複し、これよりも古い。

柱間寸法は、桁行が北側柱列で東から 1.8m、2.2m、1.9m、2.1m、2.1m、1.9mで、総長 12m以上、梁行が東妻で 1.5mである。建物の方向は東妻でみると北で約 6 度東に偏している。柱穴は長径 35～60 ㎝、短径 30～50 ㎝の楕円形を基調とし、深さは確認したもので約 28 ㎝である。柱痕跡は径 10～17 ㎝の円形である。埋土は黒褐色シルトが主体で地山ブロックを含む。

【ＳＢ2012 建物跡】調査区中央南部で検出した南北 2 間、東西 1 間の南北棟建物跡である。柱穴は地山面およびＳＸ2055 整地層上面で 6 カ所検出し、全てで柱痕跡を確認している。ＳＢ2011 と重複し、これよりも新しい。

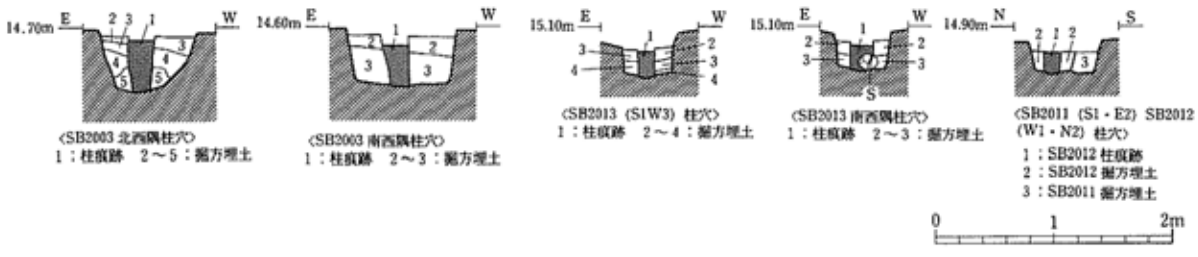
柱間寸法は、桁行が西側柱列で北から 1.9m等間で、総長 3.8m、梁行が北妻で 2.9m、南妻で 3.2mとやや歪みがある。建物の方向は西側柱列でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は長径 32～56㎝、短径 27～38 ㎝の楕円形を呈し、深さは確認したもので約 30 ㎝である。柱痕跡は径 12～14㎝ の円形である。埋土は黒褐色シルト主体で褐色シルトブロックを含む。

【ＳＢ2013 建物跡】調査区中央南端よりやや東側で検出した南北 3 間、東西 3 間以上の建物跡で、東部は破壊されている。柱穴はＳＸ2055 整地層上面で 6 カ所検出し、その中の 5 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＥ2044 よりも古いが、ＳＢ2002 門跡との新旧関係は不明である。

柱間寸法は西側柱列で南から 2.5、2.4m、（2.7m）で、総長約 7.6m、南側柱列で西から 1.7m、2.1mで、総長 3.8m以上である。建物の方向は西側柱列でみるとほぼ真北である。柱穴は長径 32～88 ㎝、短径 28～42 ㎝の楕円形を基調とし、深さは確認したところで 32～40 ㎝である。柱痕跡は径 14～20 ㎝の円形である。埋土は黒褐色シルトが主体で地山ブロックの量で細分される。

【ＳＢ2018 建物跡】調査区北東隅で検出した東西 2 間以上、南北 1 間の東西棟建物跡である。柱穴は地山面およびＳＸ2054 整地層上面で 6 カ所確認し、その中の 4 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ2008・ＳＢ2009 と重複しているが、新旧関係については不明である。

柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から 2.1m、（2m）、総長 4.1m以上、梁行が西妻で（3.6m）であ



第 9 図　SB2003・2011・2012・2013 建物跡柱穴断面図

る。建物の方向は西妻でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は長径 28～54 ㎝、短径 20～34 ㎝の楕円形を呈し、柱痕跡は径 10～16 ㎝の円形である。

【ＳＢ2019 建物跡】調査区中央西端で検出した南北 1 間、東西 1 間以上の東西棟建物跡で、西部は破壊されている。柱穴は地山面で 4 カ所検出し、全てで柱痕跡を確認している。

柱間寸法は、桁行が北側柱列で 1.4m、総長 1.4m以上、梁行が 2mである。建物の方向は東妻でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は長径 32～46 ㎝、短径 28～34㎝ の楕円形を基調とし、柱痕跡は径 10㎝ 程の円形である。

【ＳＢ2020 建物跡】調査区中央西側で検出された東西 2 間、南北 1 間以上の建物跡で、南部は破壊されている。柱穴は地山面で 4 カ所検出し、全てで柱痕跡を確認している。

柱間寸法は、北側柱列で南から 1.5m、2.0m、総長 3.5m、東側柱列で 1.4m、総長 1.4m以上である。建物の方向は東側柱列でみるとほぼ真北である。柱穴は長径45～58㎝、短径40～43㎝の楕円形を呈し、柱痕跡は径 12～16 ㎝の円形である。

塀跡

【ＳＡ2005 塀跡】（第 7 図）調査区中央西よりで検出された塀跡で、ＳＢ2001 と平行して東西方向に並ぶ。柱穴は地山面で 7 カ所検出したが全ての柱が抜き取られており、検出したのは抜き取り痕である。

柱間寸法は、ＳＢ2001 と同様 2m等間と思われ、検出長は約 12mである。方向は東で約 3 度北に偏している。柱穴・柱痕跡の規模は不明であるが、抜き取り穴の規模は長径 98～140 ㎝、短径 34～50 ㎝の楕円形で、深さは確認したもので約 30 ㎝である。

門跡

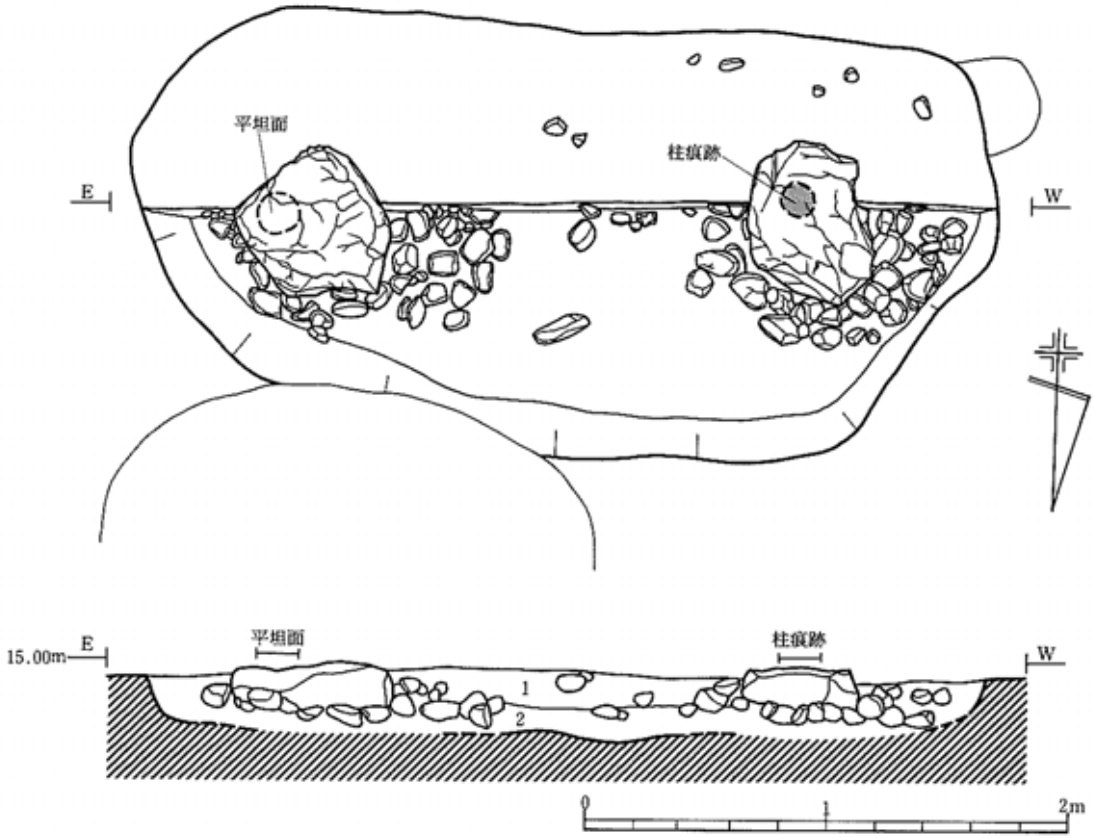
【ＳＢ2002 門跡】（第 10 図）調査区南端で検出した東西 1 間の門跡で、ＳＸ2055 整地層上面で検出した。ＳＢ2013・ＳＥ2044 と重複するが、新旧関係は不明である。門跡の掘方は、長径約 3.5m、短径約 1.8mで、平面形は楕円形を呈する。深さは約 30 ㎝で、底面にこぶし大の根石が密に敷かれ、その上面に約 1.5m離れて礎石が 2 個据えられている。礎石は長径約 60 ㎝、短径約 40㎝、高さが約 20㎝ の大きさで、上面はほぼ平らな面となっている。西側の礎石には柱が据えられていた痕跡が認められ、痕跡は径約 16 ㎝の円形である。東側の礎石には痕跡が認められないが、上面に径約 20㎝ の平坦部分があることからその面が痕跡と推測される。門の間隔は柱が据えられていた痕跡の位置からおおよそ 1.8mと推定される。埋土は 2 層認められ、1 層は地山ブロックを含む暗褐色シルトで、2 層は地山ブロック、炭化物を含む黒褐色シルトである。遺物は堀方埋土から鉄滓が出土しているのみである。

溝跡

溝跡は調査区内で 10 条検出した。ここでは遺物が出土しているものやを中心に記述することにする。

【ＳＤ2004 溝跡】調査区中央東よりの地山面で検出された。ＳＫ2043 と重複し、それよりも新しい。溝は上幅 0.8～1.1mで、長さは 7.8mである。方向は北で約 11 度東に偏している。遺物はかわらけの皿 1 点出土している（第 14 図 2）。

【ＳＤ2014 溝跡】調査区北東隅の地山面およびＳＸ2054 整地層上面で検出し、北西側と南東側とも調査区外に延びる。ＳＫ2021 と重複し、それよりも新しい。



第10図　SB2002 門跡

検出長は約 11mで、溝の上幅は 1.2～1.5mである。方向は西で約 8 度北に偏している。堆積土は焼土や炭化物を多量に含む自然堆積土である。遺物はかわらけの皿の破片が数点出土している。

【ＳＤ2015 溝跡】調査区北西側の地山面で検出し、西側は調査区外に延びる。ＳＢ2006・ＳＢ2007・ＳＫ2030 と重複し、それらよりも新しい。

検出長は途切れるものの約 16mで、東側は削平によって破壊され、西側は調査区外に延びる。溝は途中で南方向へ分岐し、約 8m延びる。上幅は 0.4～1.2mで底面幅は確認したところで 25～80㎝である。深さは約 10 ㎝で断面形は緩やかな「U」字状を呈する。方向は東西方向の溝は東で約 3 度北に偏しており、南北方向の溝は北で約 6 度東に偏している。堆積土は 1 層で自然堆積土である。遺物は中世陶器の破片が出土している。

【ＳＤ2016 溝跡】調査区中央西側の地山面で検出し、西側は調査区外に延びる。

検出長は途切れるものの約 21mで、東側は削平により破壊され、西側は調査区外に延びる。上幅は 0.5～1.4mで底面幅は確認したところで 60～70 ㎝である。深さは約 15 ㎝で断面形は緩やかな「U」字形を呈する。方向は東で約 3 度北に偏している。堆積土は 1 層で自然堆積土である。

井戸跡

調査区内で 6 基検出した。確認面は地山面のもの(5 基)とＳＸ2056 整地層上面のもの(1 基)がある。この内、重複関係のあるものは 2 基あり、ＳＥ2023 井戸跡がＳＢ2009 建物跡よりも古く、ＳＥ2044 井

戸跡がＳＢ2013 建物跡よりも新しいことのみが明らかになっている。井戸跡は調査区内にまばらに点在し、本丸の末端部に位置するものもある。平面形は円形を基調とし、規模は直径が最大 2.1m、最小 1.3mで、最も多いのは 2m前後のものである。

土壙

調査区内で 22 基検出した。確認面は地山面のもの（18 基）、ＳＸ2054 整地層上面のもの（2 基）、ＳＸ2055 整地層上面のもの（2 基）がある。地山面で確認したものの中でＳＫ2038 についてはＳＸ2055 整地層よりも古いことが調査区壁の観察によって明らかになっている。土壙は調査区内に広く点在しているが、北西隅付近に同規模のものが並んで位置している。平面形が楕円形を基調としたものが多く、規模は最大のもので長経 2.8m、短径 1m、最小のもので長径 82㎝、短径 70㎝ であるが、長径 1.3～1.7m、短径 50 ㎝前後の規模のものが最も多い。中には炭化物が多量に混入しているものもある。

②B区～M区（第 5・11 図）

A区以外の調査区については、遺構が希薄であるため一括して主なものを記述していく。

整地層

Ｉ区とＬ区の 2 カ所で検出した。ＳＸ2058 整地層はＩ区の東半部で東西約 22.5m、南北 4.8mの範囲で確認された。溝状に窪んでいるところを整地しているもので、厚さは最大約 40 ㎝である。ＳＸ2071 整地層はＬ区西部全域で確認されたもので、東部は攪乱によって破壊されている。厚さは約 10 ㎝ほどで黒色土と灰白色火山灰のブロックが混入している。いずれの整地層上面からも遺構は検出していない。

掘立柱建物跡

【ＳＢ2061 建物跡】Ｉ区西側で検出した東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟建物跡と思われ、南部は調査区外になる。柱穴は地山面で 6 カ所検出し、全てで柱痕跡を確認している。ＳＢ2062 と重複し、それよりも古い。

柱間寸法は、桁行は北側柱列で西から 1.6m、1.7m、1.7mで総長 5m、梁行は東妻で 1.7m、総長 1.7m以上である。建物の方向は東妻でみるとほぼ真北である。柱穴は直径 20～45 ㎝の円形を呈し、柱痕跡は径 10 ㎝の円形である。

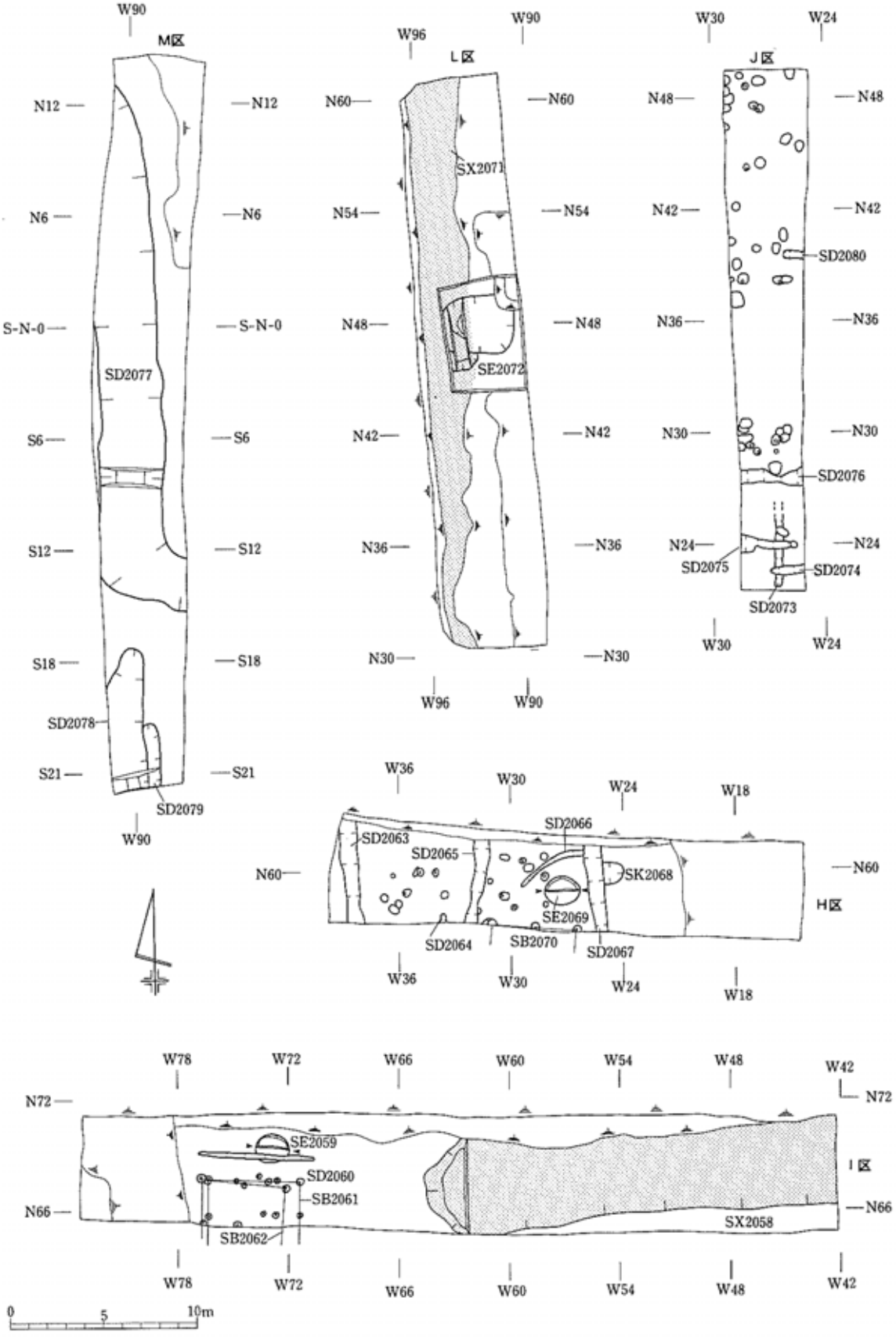
【ＳＢ2062 建物跡】Ｉ区西側で検出した東西 2 間、南北 1 間以上の建物跡で、南部は調査区外になる。柱穴は地山面で 4 カ所確認し、全てで柱痕跡を確認している。ＳＢ2061 と重複し、それよりも新しい。

柱間寸法はいずれも 2.3m等間で、総長は東西 4.6m、南北 2.3m以上になる。建物の方向は西側柱列でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は長径 30～46㎝、短径 26～40 ㎝の楕円形を基調とし、柱痕跡は径 10 ㎝の円形である。

【ＳＢ2070 建物跡】H区央央南端で検出した東西 2 間、南北 1 間以上の建物跡と思われ、南側に展開するものと推測される。柱穴は地山面で 3 カ所で検出し、その中の 2 カ所で柱痕跡を確認している、柱間寸法は 2.2m等間とみられ、方向は東で約 5 度南に偏している。柱穴の規模は不明であるが、柱痕跡は約 10㎝ ほどの円形である。

溝跡

H区（5 条）、Ｉ区（1 条）、Ｊ区（5 条）、M区（3 条）から検出している。ほとんどが東西方向ま



第11図　遺構配置図２（H・I・J・L・M区）

たは南北方向で上幅が 40～80 ㎝ほどのものである。M区で検出したＳＤ2077 溝跡はM区北側から南に延び、Ｓ－15 付近から東西方向に曲がる大溝で、上幅約 3.3m、底面幅約 1.5m、深さ約 1mの規模を持ち、断面形は逆台形状で途中から埋め戻されている。ＳＤ2078 溝跡もほぼ同様の規模で、途中で埋め戻されている。これら以外は小溝であるが、Ｉ区で検出したＳＤ2060 溝跡は、ＳＢ2061 北側柱列と方向を揃える幅約 25 ㎝、長さ約 6mの溝である。

井戸跡

【ＳＥ2072 井戸跡】Ｌ区中央の地山面で検出した。ＳＸ2071 整地層よりも古い。掘方が短軸 3.2m、長軸 4m以上で平面形が隅丸方形とみられる。精査を行っていないため井戸の構造・規模などは不明であるが、井戸枠を持つものとみられる。

【ＳＥ2059 井戸跡】（第 12 図）Ｉ区中央西側の地山面で検出した素掘りの井戸である。ＳＤ2060 よりも古い。平面形は円形を呈し、径は 1.6m、深さ約 1mである。断面形は漏斗状である。堆積土は 5 層に細分され、いずれも自然堆積土である。

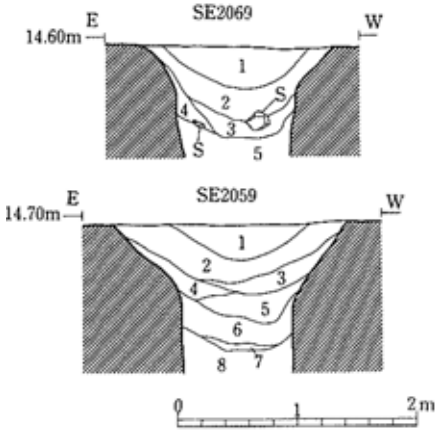
【ＳＥ2069 井戸跡】（第 12 図）Ｈ区中央の地山面で検出した素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、径 2m、深さ 1.3mである。断面形は漏斗状である。堆積土は 8 層に細分され、1 層は自然堆積土で、その他は人為的埋土である。

内堀［ＳＤ2057］（第 13 図）

内堀の位置はほぼ現状から確認できる一段低い水田部分と推定されていたため、本丸北側にＤ区とＥ区を設定したところ、内堀であることが明らかとなった。内堀は南側の立ち上がりのみを検出し、幅は 15m以上である。北側については近年の河川改修・築堤工事により原地形が失われているため検出できなかった。水田の床土直下で堀の底面を確認し、深さは数㎝であったが、本丸の遺構面からみると深さ 1.2m前後（標高 13.8m）となる。

通路跡［ＳＸ2081］（第 13 図）

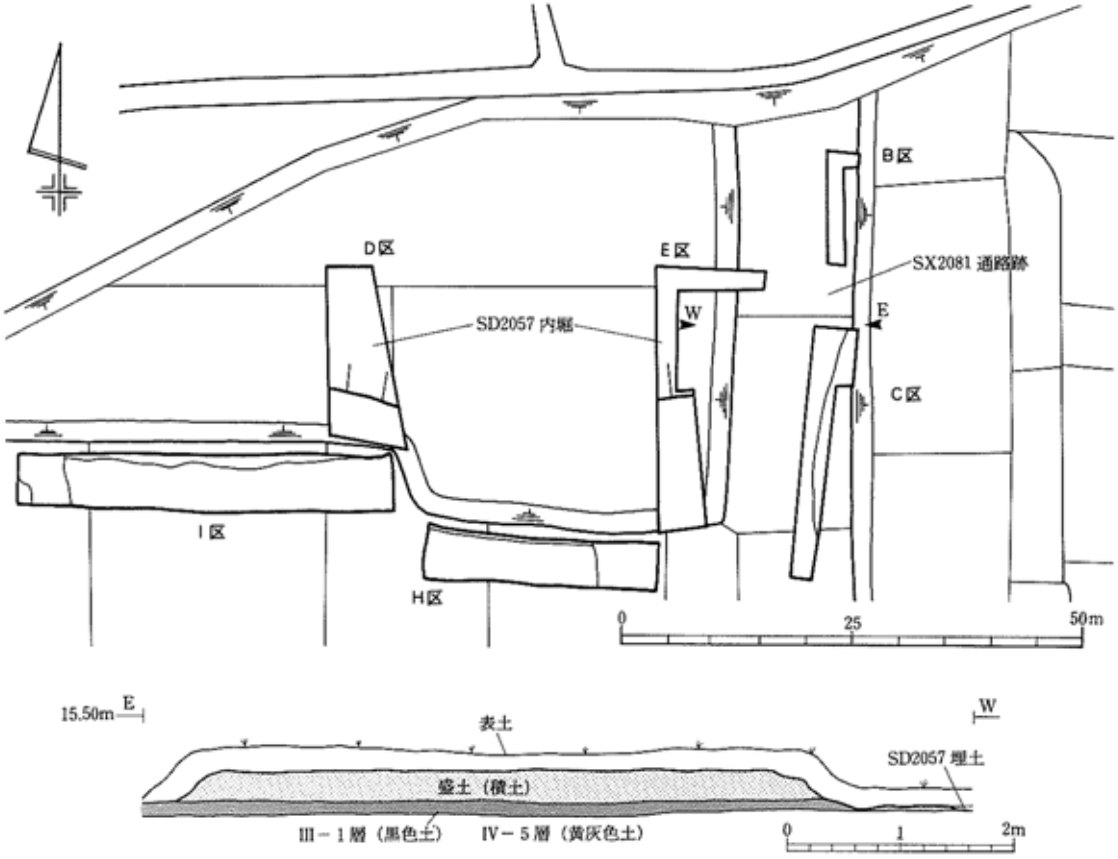
本丸北東隅から内堀を横断するかたちで北側に延びる幅約 6m、長さ約 20mの高まり部分にＢ区とＣ区を設定したところ、基本層序Ⅲ－1 層上面に約 30 ㎝の積み土をしていることが判明した。調査区が狭いものの遺構などが検出されないことなどから、通路として利用されていたと思われる。



層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。
2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物若干と地山ブロック多量を含む。
3	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物を少量含む。
4	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	炭化物を少量含む。
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多量に含む。グライ化。

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒少量と炭化物多量を含む。
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物と地山ブロックを含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物と地山ブロックを少量含む。
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少量含む。
5	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む。
6	黒褐色(2.5Y3/1)	粘質シルト	植物繊維を多く含む。
7	黒褐色(2.5Y3/2)		スクモ層。
8	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	粘質シルト	グライ化。

第12図　SE2059・2069 断面図



第13図　内堀（SD2057）通路跡（SX2081）

区	掘立柱建物跡	門跡	塀跡	井戸跡	溝　跡	土壙	通路跡	整地層	計
A	13	1	1	6	10	22		3	56
B・C							1		1
D・E					1(内堀)				1
G								(1)	(1)
H	1			1	5	1			8
I	2			1	1			1	5
J					5				5
L				1				1	2
M					3				3
計	16	1	1	9	25	23	1	5	81

第１表　発見された遺構数

区	遺構No.	位　置	長さ(m)	幅(m)	方向	重　複・備　考
A	SD2031	W45　S 5	2.4以上	0.3~0.5	東東－北西	SK2032より新、SB2001より古、SB2010との関係は不明。
A	2034	W55　S11	1.8	0.2~0.3	東－西	
A	2036	W51　S 9	2.1	0.3~0.5	南－北	深さ約30cm、断面形「U」字形。
A	2040	W35　S15	4.5	0.4~0.6	南－北	
A	2045	W42　S18	2.5以上	0.2~0.4	東－西	深さ約5cm、断面形「U」字形。
A	2051	W50　S30	6.0以上	0.7~1.4	南－北	深さ約10cm、断面形緩やかな「U」字形。
H	2063	W38　N60	5.6以上	0.7~1.0	南－北	
H	2064	W34　N62	0.5以上	0.3~0.4	南－北	
H	2065	W32　N60	4.5以上	0.4~0.9	南－北	
H	2066	W28　N60	4.0以上	0.2~0.3	東西－北東	SD2067より古い。
H	2067	W26　N61	4.7以上	0.6~1.0	南－北	SD2066・SK2068より新しい。
J	2073	W27　N24	4.0以上	0.4	南－北	SD2074・SD2075より古い。
J	2074	W25　E25	1.8以上	0.3~0.5	東－西	SD2073より新しい。
J	2075	W27　N24	2.7以上	0.4~1.0	東－西	SD2073より新しい。
J	2076	W27　N27	3.3以上	0.3~1.0	東－西	
M	2079	W89　S20	3.5以上	0.7以上	南－北	SD2078より古い。
J	2080	W26　N49	1.1以上	0.3~0.4	東－北	

第２表　溝跡属性表

区	遺構No.	位　置	平面形	長径(m)	重　複・備　考
A	SE2023	W28　N 5	円形	2.1	SB2009より古い。SB2008との関係不明。
A	2029	W42　N 5	円形	2.1	
A	2037	W27　S 8	円形	1.4	
A	2044	W34　S26	楕円形	1.7×2.1	SB2013より新しい。SB2002との関係不明。
A	2050	W53　S32	円形	1.8	
A	2053	W57　S34	円形	1.8	

第３表　井戸跡属性表

区	遺構No	位置	平面形	長径(m)	短径(m)	重複・備考	区	遺構No	位置	平面形	長径(m)	短径(m)	重複・備考
A	SK2017	W27 S21	楕円形	1.5	0.8		A	2038	W25 S 8	不整形	2.5	1.2以上	SX2055下面。
A	2021	W25 N 8	隅丸長方形	1.2	0.6以上	SX2054上面、SD2014より古い。	A	2039	W27 S14	不整形	2.9	0.9	SX2055上面。
A	2022	W33 N 7	不整形	1.6	0.6	SB2009より新しい。	A	2041	W28 SN0	不整形	0.8	0.5	SB2003より古い。堆積土に炭化物を多く含む。
A	2024	W29 N 2	楕円形	1.4	0.7	SB2009・SB2018との関係不明。	A	2042	W34 S 9	不整形	0.9	0.5以上	堆積土に炭化物を多く含む。
A	2025	W27 N 2	隅丸長方形	1.7	0.8	SX2054上面、SB2048より新しい。SB2005との関係不明。	A	2043	W33 S10	不整形	1.2	0.8	SD2004より古い。堆積土に炭化物を多く含む。
A	2026	W25 N 2	楕円形？	0.6以上	0.6	SX2054上面、SB2009-SB2018との関係不明。	A	2046	W42 S32	不整形	2.7	0.8	堆積土に炭化物を多く含む。
A	2027	W30 SN0	不整形	1	0.9	SB2009より新しい。	A	2047	W47 S29	楕円形	1.7	0.6	堆積土に焼土・炭化物を多量に含む。
A	2028	W33 S 1	円形	0.8	0.8	SB2009との関係不明。	A	2048	W49 S28	楕円形	1.6	0.3以上	堆積土に焼土・炭化物を多量に含む。
A	2030	W52 S 2	不整形	1.1以上	0.8以上	SD2015より古い。	A	2049	W52 S30	隅丸長方形	1.3	0.7	
A	2032	W46 S 6	不整形	2.4以上	1.2	SB2001・SB2010・SD2035より古い。	A	2052	W66 S30	隅丸長方形	1.4	1.1	
A	2033	W40 S 5	楕円形？	1.9以上	0.9	SB2001より古い。	H	2068	W25 N60	楕円形	1.1以上	1.1	SB2047より古い。
A	2035	W53 S 9	楕円形	1.7	0.7								

第4表　土壙属性表

○出土遺物

遺物はかわらけ、陶磁器、鉄製品、石製品、古銭などが極少数出土したのみである。

【かわらけ】（第14図1～3）いずれも皿で3点ある。ロクロを使用したもの（1）としていないもの（2～3）が認められ、いずれも最終調整で内外面にヨコナデが施されている。

【陶磁器】施釉陶器、染付磁器、青磁などがある。

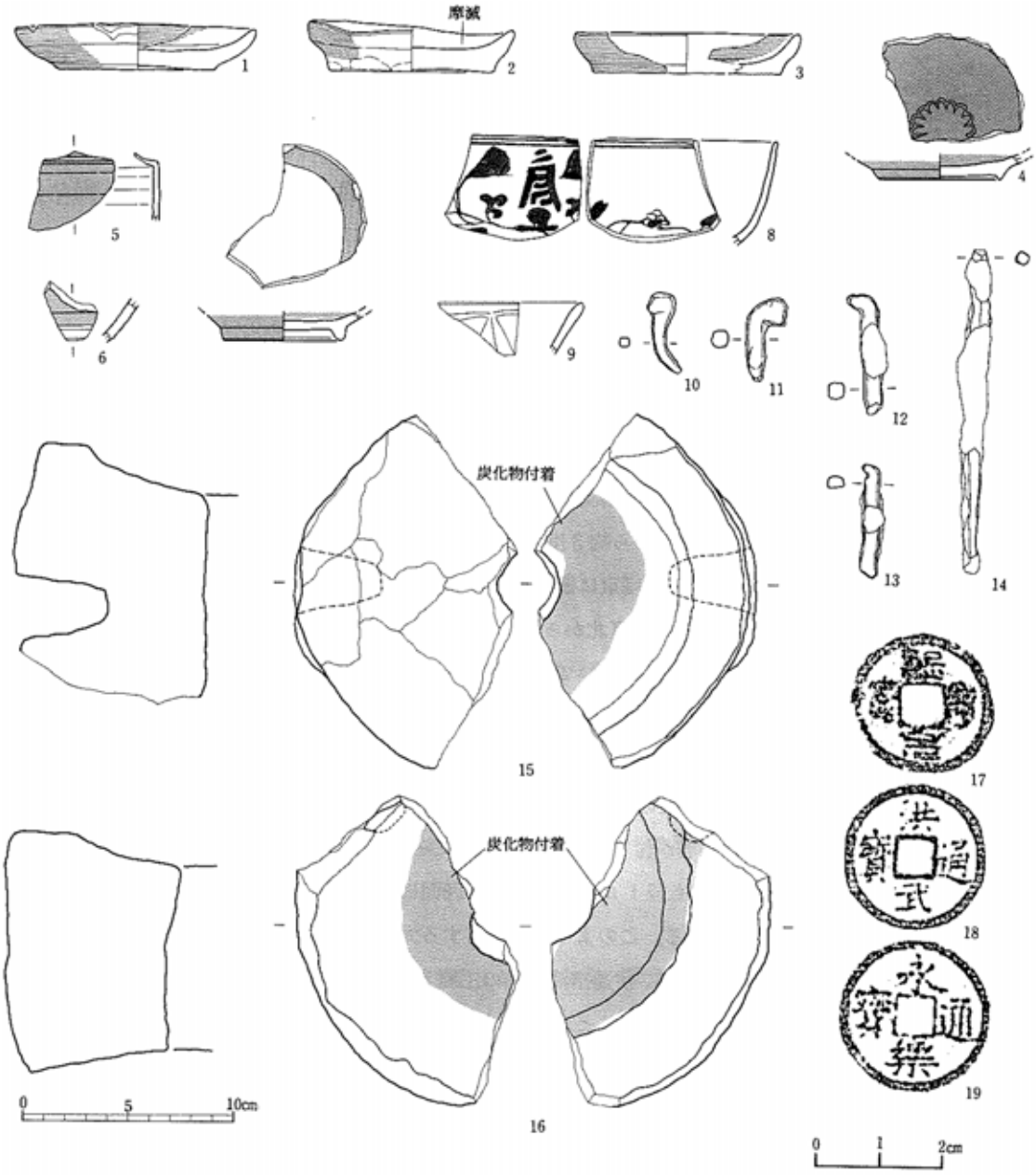
［施釉陶器］（第14図4～7）4は内面底部に菊の印花が押印されている皿、5は肩付きの茶壺でいずれも瀬戸産とみられる。6は天目茶碗、7は内面に釉剥ぎが認められる皿であるが産地は不明である。色調は5・6が黒色の鉄釉で、4は灰オリーブ色、7は灰白色の灰釉である。

［染付磁器・青磁］（第14図8・9）8は草花文が施された中国産の染付磁器で、9は青磁の碗？である。

【鉄製品】（第14図10～14）いずれも釘である。完形のものがなく全容は不明であるが、断面形は長方形あるいは方形である。

【石製品】（第14図15・16）いずれも石臼の上臼である。石材は安山岩で炭化物が付着している。

【古銭】（第14図17～19）熙寧元寶（17）、洪武通寶（18）、永楽通寶（19）、がある。



第14図　出土遺物

No.	種別	区	出土地点	法量・特徴	写真図版
1	かわらけ 皿	J	遺構確認面	口径11.4cm・底径7.3cm・器高2.2cm。内外面：ロクロナデ→ヨコナデ。底部：回転糸切り。	6－1
2	かわらけ 皿	A	SD2004 堆積土	口径9.8cm。底径7.6cm。内面：摩滅。外面：ヨコナデ→ナデ。	6－2
3	かわらけ 皿	H	遺構確認面	口径(10.8cm)。底径(9.0cm)・器高1.9cm。内外面：ヨコナデ。	6－3
4	施釉陶器 皿		表採	灰釉。高台径5.4cm。内面：見込み部に花文の印刻。貫入著しい。産地：瀬戸・美濃。年代：16末～17初。	6－4
5	施釉陶器 壺	A	遺構確認面	胴付きの茶壺。鉄釉。産地：瀬戸？。年代：16後。	6－7
6	施釉陶器 碗	J	遺構確認面	天目茶碗。鉄釉。	6－5
7	施釉陶器 皿	A	遺構確認面	灰釉。高台径5.4cm。内面に釉剥ぎ有り。産地・年代不明。	6－9
8	染付磁器 碗	I	遺構確認面	口径(11.4cm)。内面：圏線２本、見込み部に草花文。外面：圏線２本、全体に草花文。産地：中国。年代：16末。	6－10
9	青　磁 碗	A	遺構確認面	法量不明。外面に花弁のような凹凸有り。	6－8
10	鉄製品 釘	A	SB2001 掘方埋土	残存長4.0cm。径0.5～1.2cm。断面形：正方形。	6－14
11	鉄製品 釘	A	遺構確認面	残存長4.0cm。径0.6～0.8cm。断面形：正方形。	6－17
12	鉄製品 釘	A	遺構確認面	残存長5.8cm。径0.7～0.8cm。断面形：正方形。	6－16
13	鉄製品 釘	J	遺構確認面	残存長5.5cm。径0.6～0.8cm。断面形：長方形。	6－15
14	鉄製品 釘	A	遺構確認面	残存長15.7cm。径0.6～0.9cm。断面形：正方形。	6－13
15	石製品 上臼	J	遺構確認面	直径約22cm。高さ12.3cm。受け皿部深さ2.2cm。把手取付け孔(1辺3.1cm、深さ4.3cm)。表に炭化物付着。石材：安山岩。	6－11
16	石製品 上臼	A	SB2001 掘方埋土	直径約20cm。高さ12.1cm。受け皿部深さ1.6cm。側面に把手取付け孔。表と裏に炭化物付着。石材：安山岩。	6－12
17	古銭 熙寧元寶	A	遺構確認面	銭径2.3cm・内径1.9cm・孔径0.6cm・重さ2.5g、書体：篆初、初鋳年：熙寧元/1068、北宋時代の渡来銭。	6－18
18	古銭 洪武通寶	A	遺構確認面	銭径2.3cm・内径2.0cm・孔径0.6cm・重さ2.9g、書体：楷書、初鋳年：洪武元/1368、明時代の渡来銭。	6－19
19	古銭 永楽通寶	A	遺構確認面	銭径2.5cm・内径2.1cm・孔径0.6cm・重さ1.9g、書体：楷書、初鋳年：永楽6/1408、明治時代の渡来銭。	6－20

第14図　出土遺物

第四章　考　察

今回の調査では本丸から整地層、掘立柱建物跡、門跡、塀跡、溝跡、井戸跡、土壙、通路跡などが確認され、内堀についても規模が確認されている。

以下、主要な遺構・遺物について考察を行った後、本丸の様子について若干の考察を加えることにする。

Ⅰ．発見された遺構

【掘立柱建物跡】全体で 15 棟確認された。A区以外は狭い調査区であるため全容が明らかになったものはないが、建物跡は今回調査対象となった本丸部の東側と西側には分布しておらず、本丸の中央部南端から北端にかけて集中していると推測される。これらの建物跡はその方向から①真北から 6～8 度東に振れるもの（11 棟）、②真北から約 3 度西に振れるもの（1 棟）、③真北方向のもの（3 棟）に大別され、大部分が真北から 6～8 度東に振れるものである。建物の重複関係からみると最低 5 時期の変遷が示され、建物の方向でみると真北から西に振れるＳＢ2001 が最も新しく、真北方向の建物群が最も古くなる。これまでの調査成果においても概ね 3 方向の建物群に大別されており、今回確認された建物跡もそれらの建物群に含まれるものとみられる。

ところで、これまでの下草古城跡の調査で検出された掘立柱建物跡は、桁行 3～4 間、梁行 1 間程の小規模のものが中心で最大規模のものでも 6 間×4 間の建物跡である。しかし、今回確認されたＳＢ2001 建物跡は、東西南北に廂が付き、間切りと床束を有する桁行 9 間、梁行 4 間の大規模な建物跡である。さらに柱穴がいずれも径 1m前後で、掘方底面に根石が密に敷かれている状況から相当格調高い建物であったと推測される。このような床を有する大規模な建物跡が他に検出されなかったことから考えると、ＳＢ2001 建物跡は、伊達宗清居館の主屋と考えるのが妥当と思われる。建物は建て替えがなく比較的短期間の存続であったことがうかがえ、17 世紀初頭に数年間だけ居城していたという文献上の記録とも矛盾しないものである。

【塀跡】ＳＢ2001 建物跡の南側約 3.6mで確認された塀跡である。塀は柱がいずれも抜き取られているが、ＳＢ2001 建物跡と方向を揃えることや建物跡との位置関係から目隠し塀であったと思われる。

【門跡】本丸南端部で検出された門跡である。門に取り付く区画施設などは確認されず、どの建物跡に付随するものかは不明であるが、掘方底面に根石が敷き詰められ、50 ㎝前後の礎石が据えられていることから考えると格調ある門といえる。また、柱が据えられていたとみられる痕跡を結ぶとほぼＳＢ2001 建物跡と方向を揃えることなどを考えると、居館の主屋（ＳＢ2001）と同時期に存在していたと考えられる。

【溝跡】全体で 24 条確認された。本遺跡の溝の性格は、主に区画施設、道路側溝、取水・排水施設と考えられているが、調査区が狭く全体像が不明なため性格のわかるものは少ない。

比較的長く検出された溝が、ＳＤ2077、ＳＤ2015、ＳＤ2016 である。これらの溝は、ＳＥ2001 と方向を揃えていることから建物跡と関連性があるとも考えられるが、削平や調査区の関係上その性格などは不明である。

ＳＤ2060 はＳＢ2061 と方向を揃え、ＳＢ2061 の北側柱列の総長よりもやや長さがあることから、ＳＢ2061 の雨落ち溝と思われる。

【整地層】5 カ所検出された。このうちＳＸ2054 とＳＸ2055 は上面から掘立柱建物跡などの遺構が検出されており、建物跡が構築される以前の整地であることがわかる。これらは基本属序Ⅱ－2 層に広がるることや同一方向の建物跡が確認されていることから、基本的には一連の整地層であったと思われる。また、ＳＸ2056 についても上面から遺構が確認されていないものの基本層序Ⅱ－2 層に広がることからＳＸ2054・2055 と一連と考えられ、これらの整地層は本丸南東部分に南北 45m以上、東西50mの範囲に広がっているものと推測される。真北から東に振れる建物が確認される整地層は遺跡の随所に認められ、ＳＸ2054・2055・2056 整地層もこれらと一連のものとみられる。ＳＸ2058・2071 は窪んでいるところを埋め戻して、平坦面を造り出しているものである。

Ⅱ．遺物

今回の調査では、かわらけ、陶磁器類、鉄製品、石製品、古銭などが出土した。極少数であり、さらに年代のわかるものも少ない。

陶磁器類には施釉陶器、染付磁器、青磁などがある。瀬戸産とみられる肩付きの茶壺は 16 世紀後半、瀬戸・美濃産の皿は 16 世紀末～17 世紀初頭、染付磁器は 16 世紀末に位置づけられる。この内、肩付の茶壺は調査地点が本丸であることを再認識させる遺物である。

古銭は、熙寧元寶、洪武通寶、永楽通寶があり、いずれも中国から輸入されたものである。

その他の遺物は具体的な年代は不明であるが、下草古城の時代である 17 世紀頭頃を中心とした年代に求められよう。

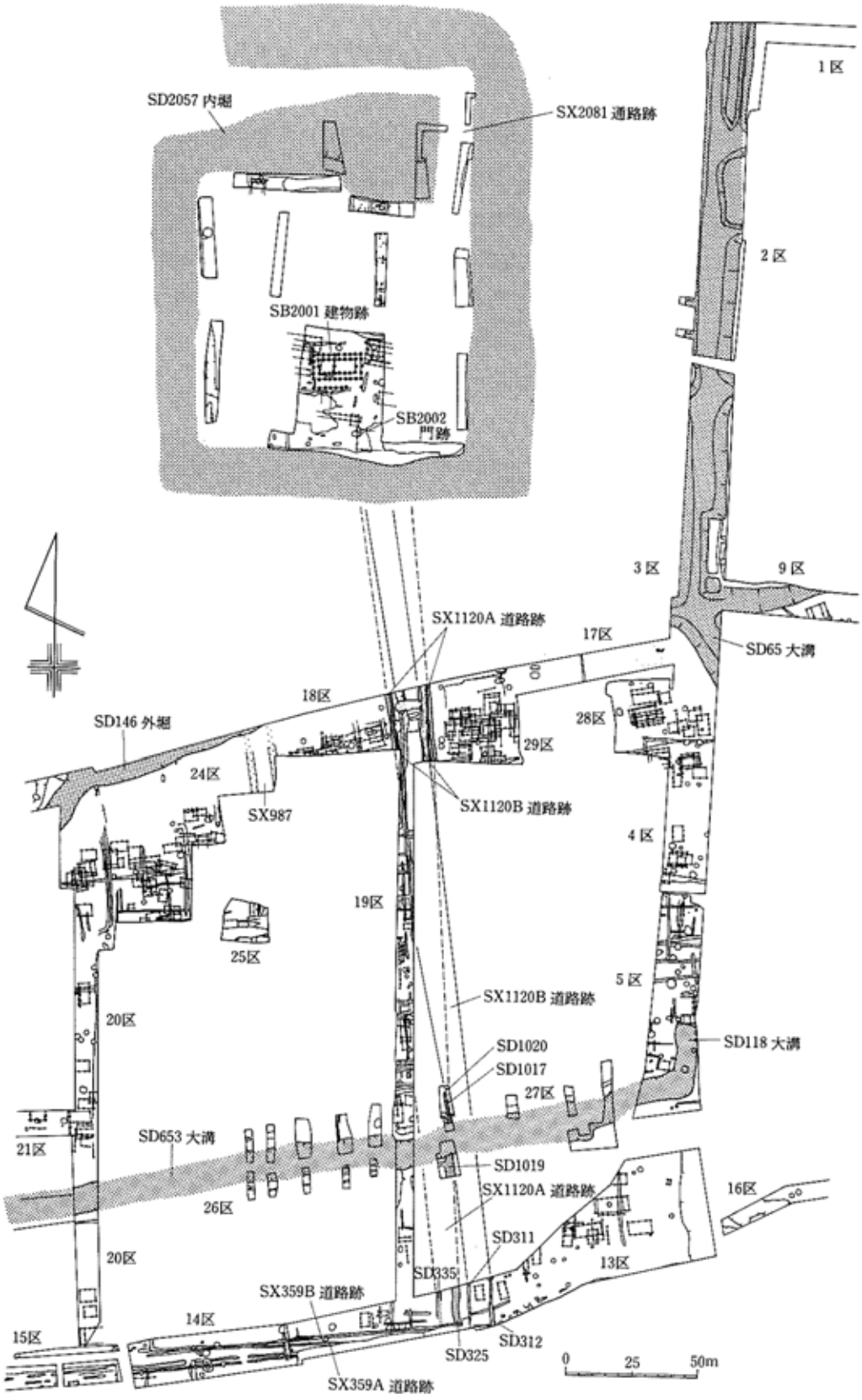
Ⅲ．本丸の様子と遺跡の構造

今回の調査によって本丸の様子がある程度明らかになった。そこで明らかになった範囲で本丸の構造について考察してみたい。

これまでは、現状から東西約 100m、南北 96～102mのほぼ正方形の高まり部分が本丸で、その周囲を取り囲む幅約 14mの一段低い部分が内堀と推定されていた。調査した結果、本丸はほぼ現状と同規模の範囲であることがわかった。内堀についてもＤ・Ｅ区で確認されたことからほぼ現状通りに巡っていると思われ、現在確認できる地形はほとんどが当時の地形を反映しているもので、良好に残存していたといえる。

宗清の居館は、本丸の中央南側に位置している。主屋は桁行 9 間、梁行 4 間の四面廂付の東西棟である。間仕切り柱や床束柱が確認されたことから、床を有する建物であったといえる。また柱穴掘方底面には根石が密に敷かれていることから相当格の高い建物であったことが推測される。主屋の南側には目隠し塀が方向を揃えて位置する。またさらに南側には門が位置していることから、何らかの施設により区画されていた可能性もある。部分的な調査であったため、全体像は不明な部分が多いが、これらの他に同時期とみられる建物跡は今回確認されておらず、本丸内に 1 棟のみが存在していた可能性も考えられる。

本丸の入り口については南端で門跡が検出されたことにより、南側にあったことは明らかである。



第15図　SB2002 門跡と道路跡の位置関係

その他は不明であるが、北側で確認された通路跡も出入り口として利用されていた可能性も考えられる。またこれまでの調査において、現状で道路として利用されているところは過去においても道路とであることが多く、そのことから考える東側の農道が出入り口であった可能性もあるであろう。

南端の門は内堀際に位置していることから、さらに南側に内堀を越えるための橋の存在が考えられるが、未調査である。しかしながら、これまでの調査区と併せてみると平成7年度の24区の調査で確認されたＳＸ1120道路跡の延長上に門が位置していることが判明した（第15図）。このことは橋の存在を裏付けるとともに本丸を中心とした区画整理が行われていたことが推測されうるものである。今までの調査結果からＳＸ1120を軸に町並みが形成されていた時期の存在は明らかであり、下草古城時代の城下が形成されていたとも考えられる。

今回の調査により、本丸・内堀の規模、居館（主屋）の規模と位置、出入り口の位置などについては、明らかにすることができた。また、宗清が城に移り住む以前に、町並みが形成されていたことが確実となり、最低5時期の変遷が確認されたことから、比較的長期に渡って遺構が存続していたことが明確となったといえる。

Ⅳ．まとめ

1. 本丸の範囲が明確になり、内部から宗清の主屋、塀跡、門跡のほか、掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、井戸跡などの遺構が確認された。
2. 宗清の主屋は、東西9間、南北4間の四面廂付き東西棟で、本丸中央南部に位置している。また、そこから南側約20mのところで門跡を検出した。
3. 本丸を取り囲む一段低い部分は内堀であることが明確となり、本丸北東端から内堀を横切るように北へ延びる高まりは、あらかじめ内堀を掘る際に若干掘り残され、さらに積み土をして造られた通路跡であることが明らかとなった。
4. 本丸南端で検出した門跡は、平成7年度に城下である調査区24区で確認された道路跡の延長上にあたり、本丸を中心とした計画的な町造りがなされていたことが推測される。
5. 今回の調査によって宗清が下草に移り住む以前の掘立柱建物跡が確認され、下草古城が構築される以前に比較的長期に渡り町並みが形成されていたことが明らかとなった。

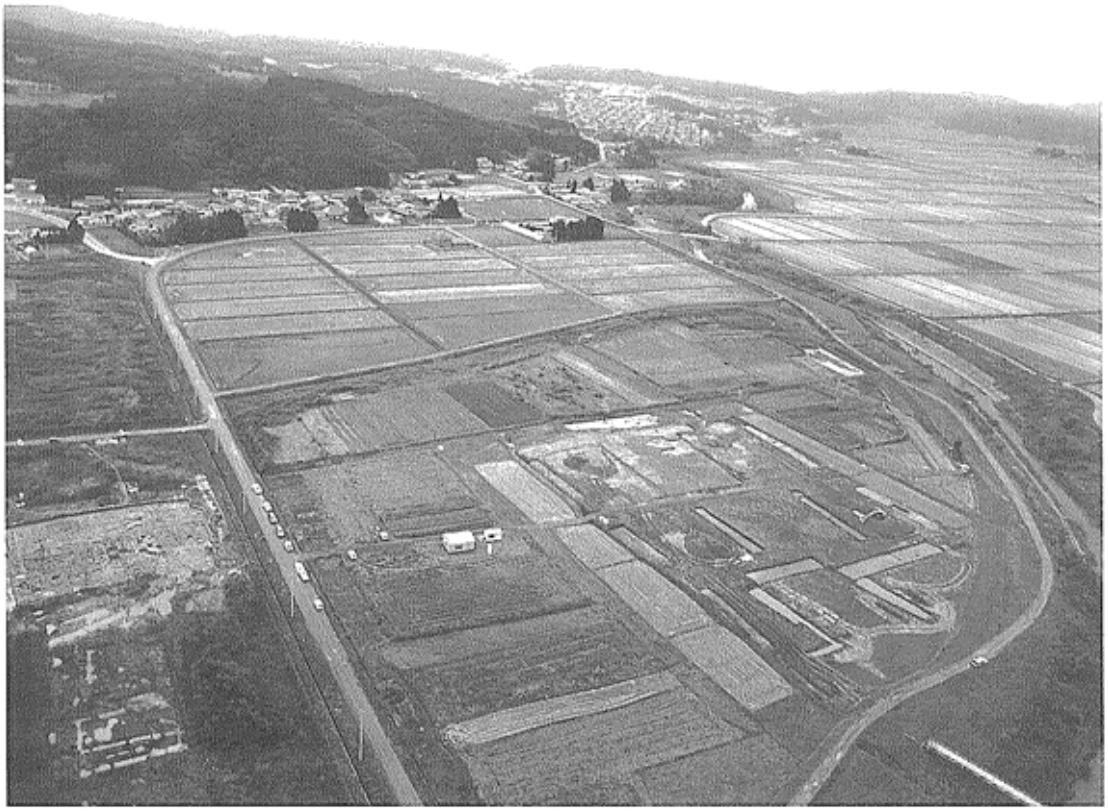
参考・引用文献

天野　順陽（1994）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第160集
天野　順陽（1995）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第166集
天野　順陽（1996）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第169集
伊藤厳・伊藤信ほか（1975）：「大和町史上巻」
佐野　養吉（1980）：「黒川氏の氏實」『仙臺郷土研究』Ｐ641～646、仙台郷土研究会
須田　良平（1992）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第146集
須田　良平（1993）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第154集
平　　重道（1973）：「伊達治家記録二」宝文堂
渡辺信夫・大藤修ほか（1977）：「大和町史下巻」
永井久美男（1994）：「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」、兵庫埋蔵銭調査会

写 真 図 版

遺跡全体写真　　昭和23年撮影　国土地理院

図版 1

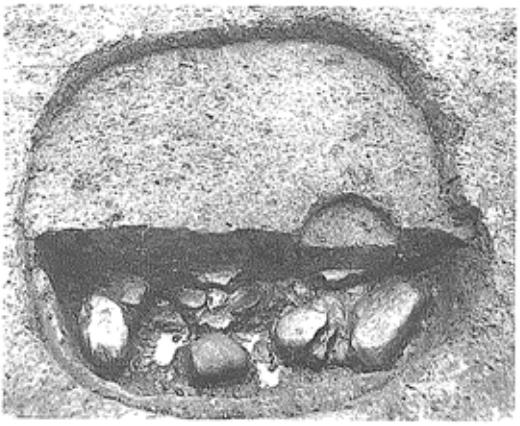


調査区遠景（北東から）

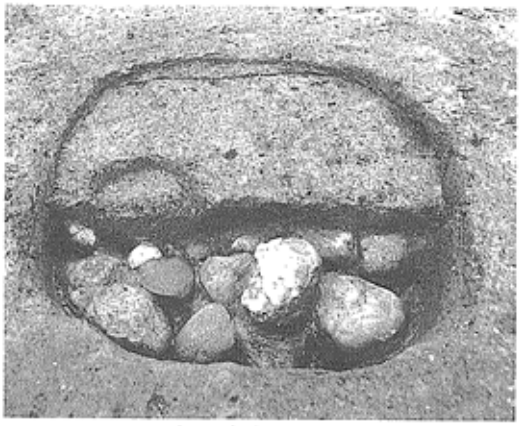
A区全景（北から）

写真図版 2

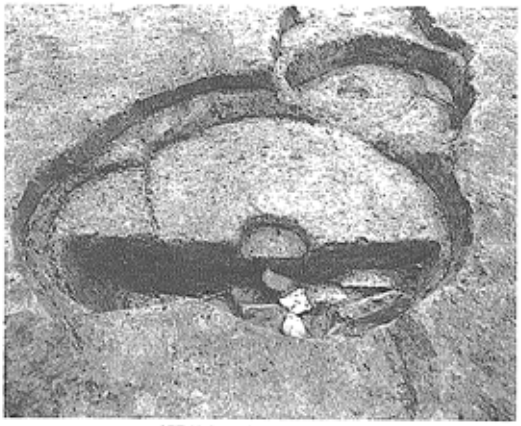
SB2001 建物跡（西から）



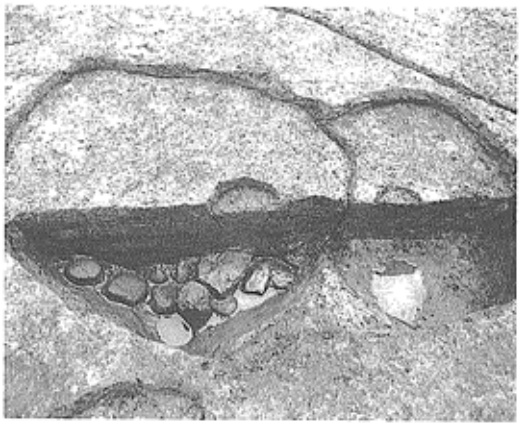
SB2001（S2E2）柱穴断面（東から）



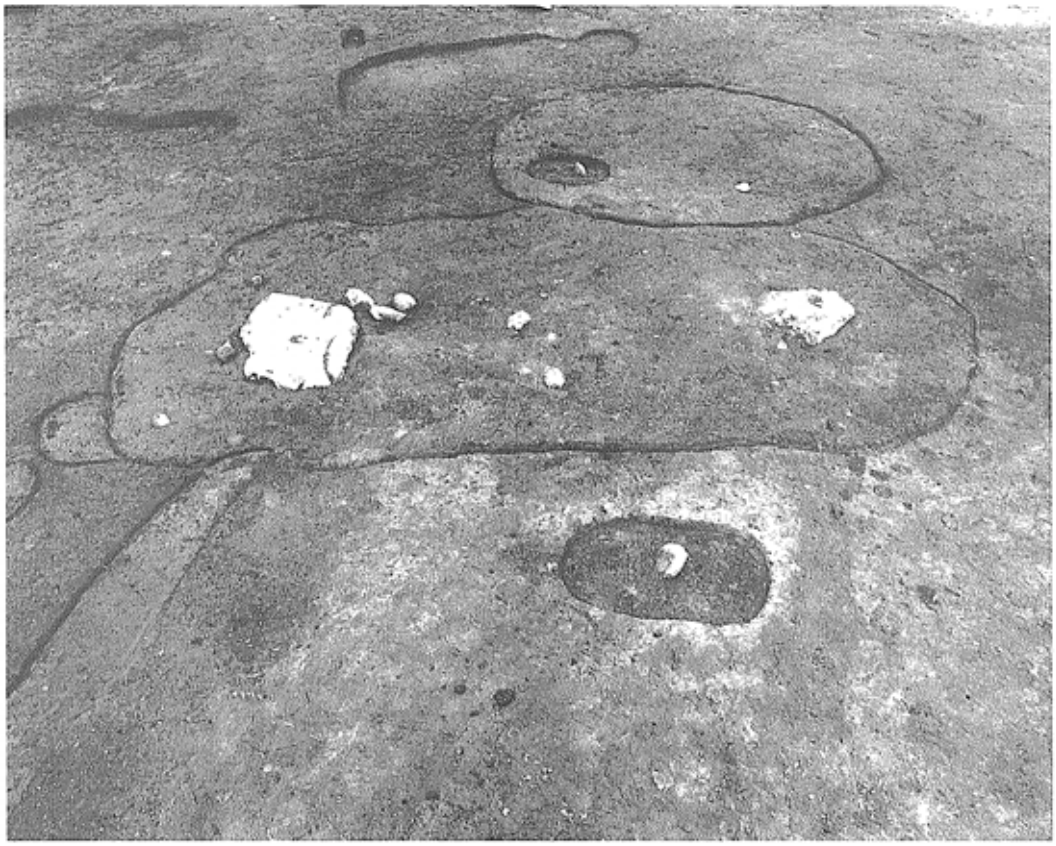
SB2001（S1E1）柱穴断面（西から）



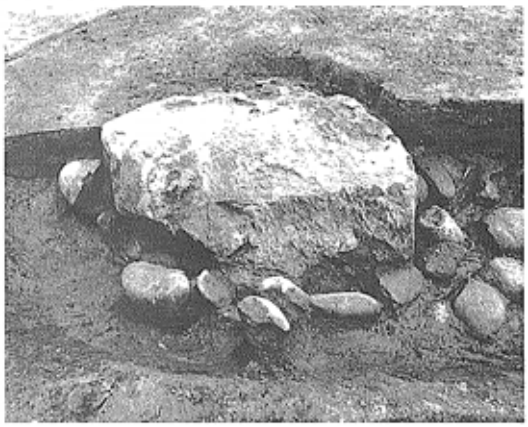
SB2001（間仕切り）柱穴断面（南から）



SB2001・2007 柱穴断面（東から）

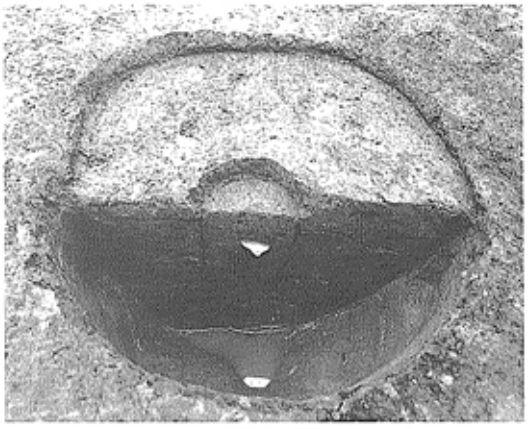


SB2002 門跡（南から）

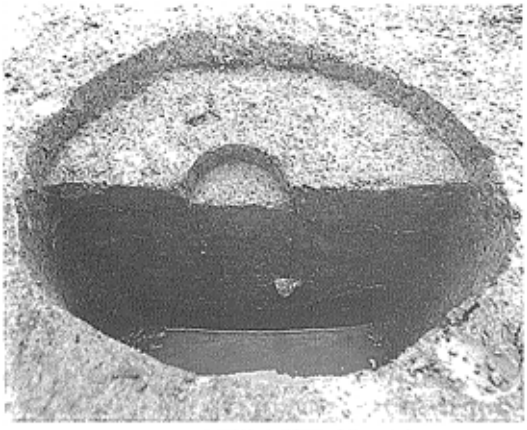


SB2002 東側礎石（北から）

SB2002 西側礎石（北から）

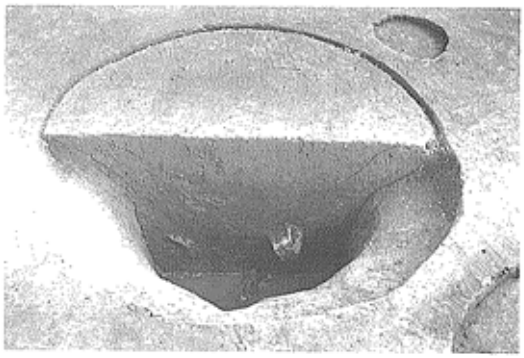


SB2003 北西柱穴断面（北から）

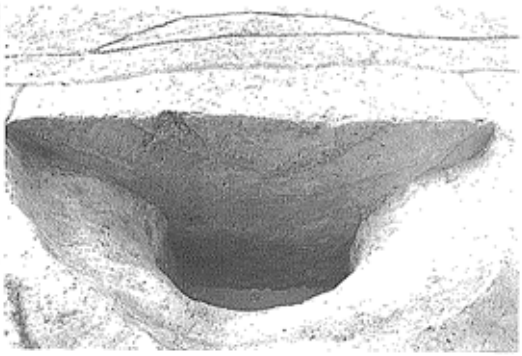


SB2003 南西柱穴断面（北から）

写真図版 4



SE2059 断面（北から）



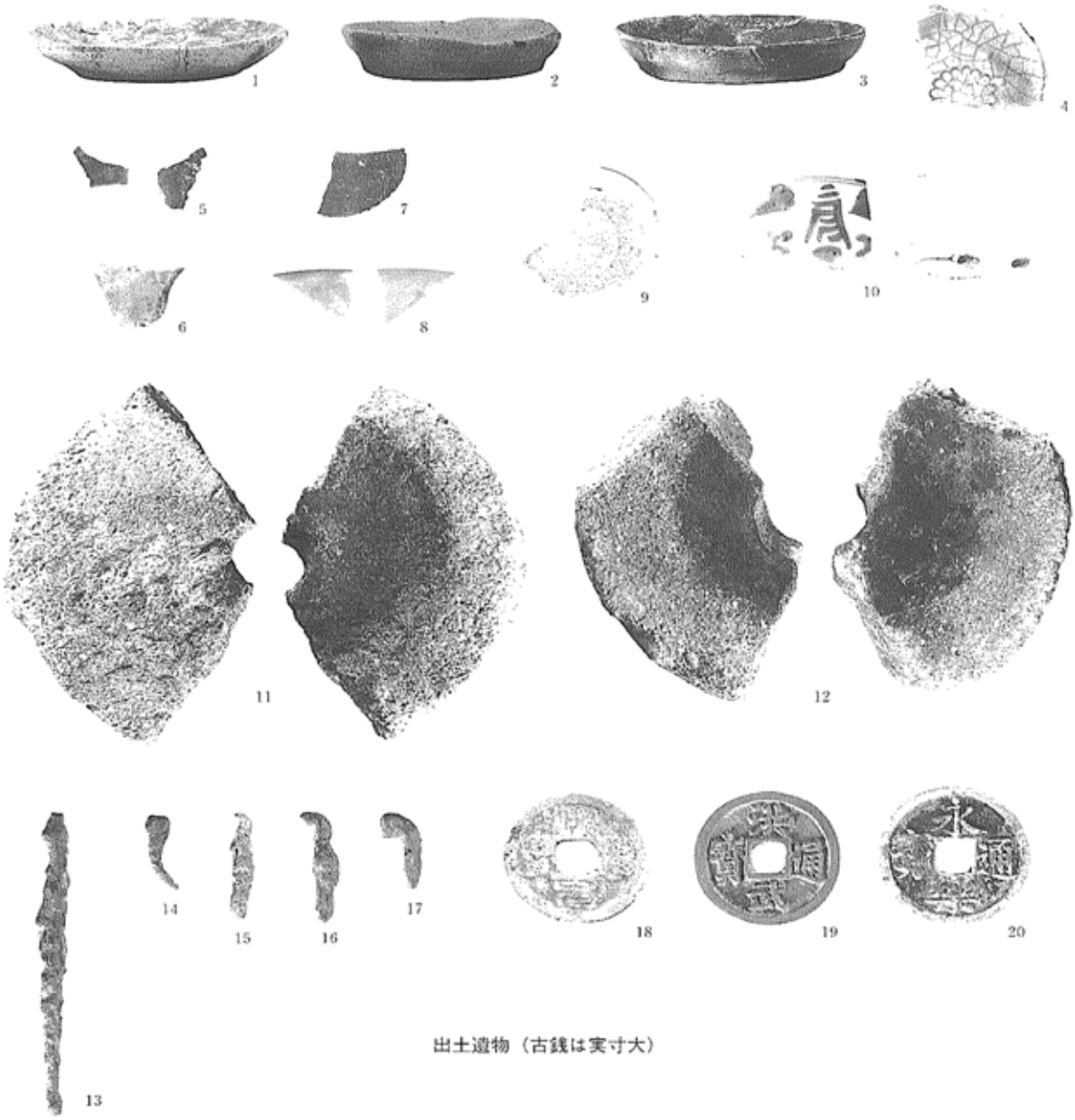
SE2069 断面（北から）

SX2081 通路跡（南から）

H区・I 区全景（東から）

L区・M区全景（南東から）

図版 5



出土遺物（古銭は実寸大）

図版 6

寺　下　遺　跡

目　　次

調査要項
1　はじめに 117
2　発見された遺構と遺物 119
3　ま　と　め 123
写真図版

調査要項

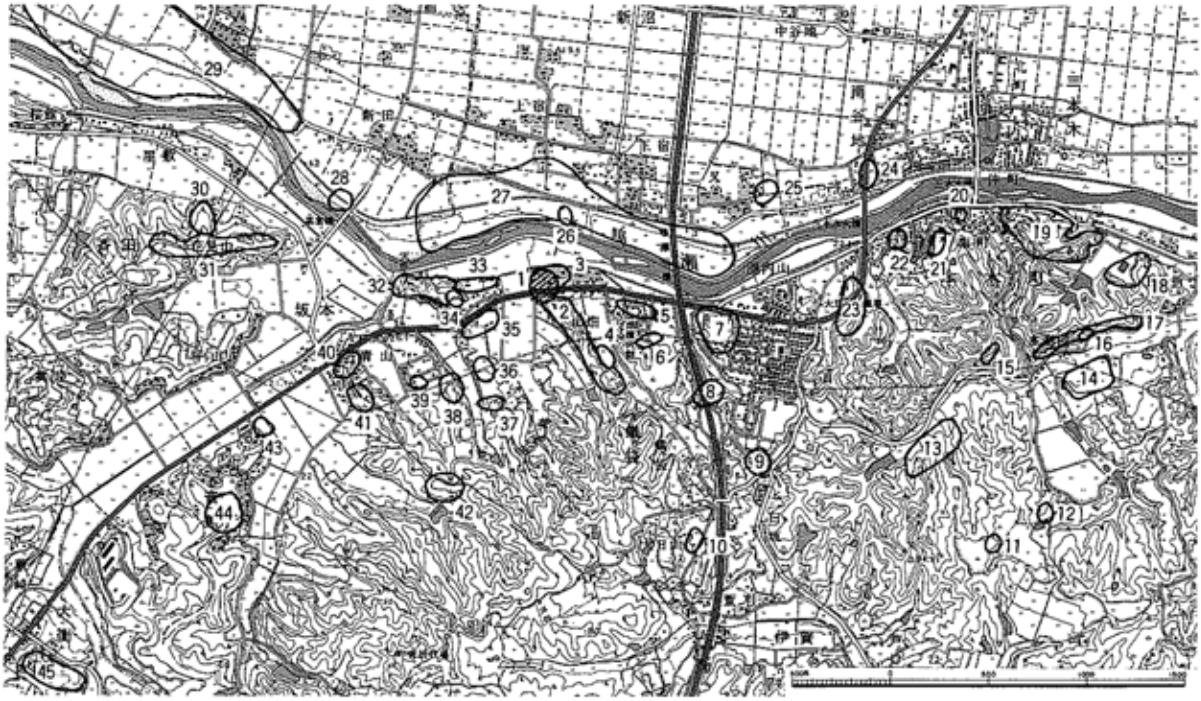
遺　跡　名：寺下遺跡（てらしたいせき）
　　宮城県遺跡地名表記番号 33047
遺跡記号：ＴＲ
遺跡所在地：宮城県志田郡三本木町蟻ヶ袋字山畑
調査原因：個人住宅の宅地造成に伴う事前調査
調査面積：124 ㎡
調査期間：確認調査　1997 年 4 月 22 日
　　本調査　　1998 年 5 月 11 日～5 月 19 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　後藤秀一、吉野　武、西村　力
調査協力：三本木町教育委員会
調査参加者：鎌田　隆

1　はじめに

寺下遺跡は県北部、志田郡三本木町蟻ヶ袋字山畑に所在する（第１図一１）。遺跡は、大崎低地を臨む、大松沢丘陵から派生した舌状の低丘陵上の端部に立地し、すぐ北側には鳴瀬川が流れる。標高は25～37mで、周囲の沖積面との比高は約12mである。

遺跡の周辺には、縄文時代から近世まで、多くの遺跡が分布する。縄文時代の遺跡は舌状に張り出した低丘陵上に立地することが多く、三本木遺跡（22）では縄文時代中期末の大木10式土器が、青山Ｃ遺跡（42）では縄文時代後・晩期の土器が採集されている。調査例としては、4.2㎞南の同丘陵上に位置する上深沢遺跡があげられ、縄文時代中期末の大木９式期の竪穴住居跡が20軒以上発見されている（分布図外、後藤ほか1978）。縄文時代以降の遺跡では、古墳時代後期の横穴墓や、古代から近世にかけての窯跡、中世の城館などが多く見られる。特に、東に近接する国史跡山畑横穴古墳群（5）は北限の装飾古墳として著名である。

今回の調査は、個人住宅の宅地造成に伴う事前調査である。調査地点は、本遺跡を南北に分断する国道の南側法面頂部付近で、東西が急斜面、南北が切通しとなった丘陵尾根上である(第２図)。現在



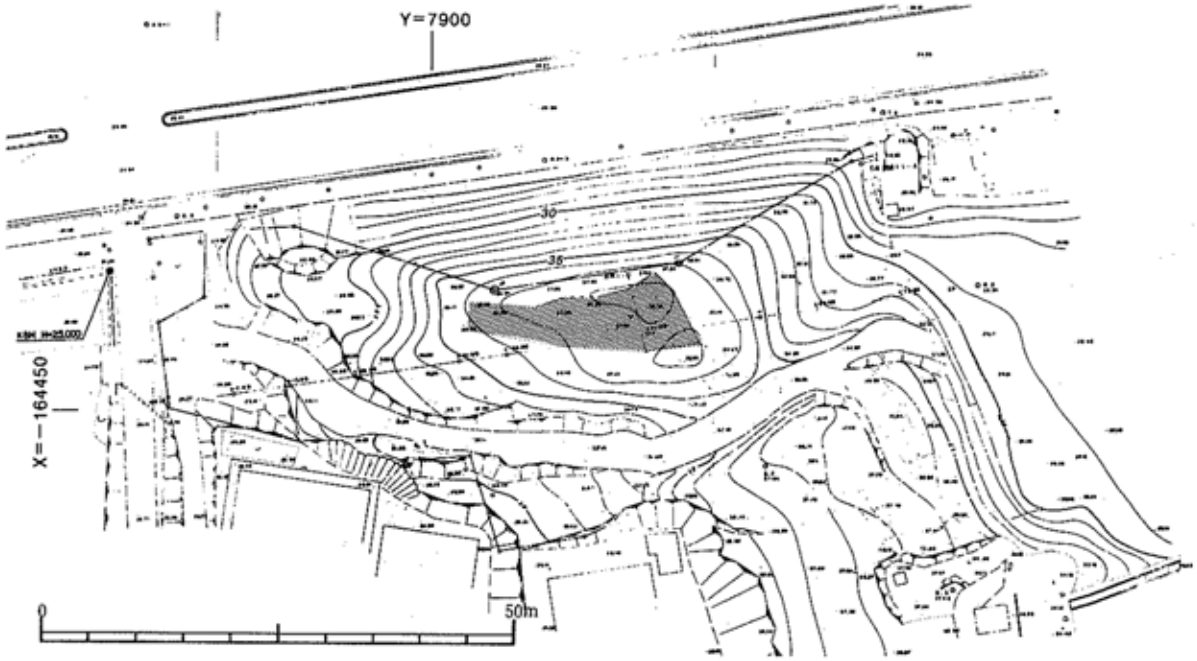
No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	寺下遺跡	集落	縄文中・古墳～古代	16	多高田Ｂ遺跡	散布地	古代	31	花見山古墳群古墳	古墳	
2	寺下横穴墓群	横穴墓	古墳後	17	多高田横穴墓	横穴墓	古墳後	32	坂本城跡	城館	鎌倉
3	蟻ヶ袋館跡	城館	中世	18	蛇沼山遺跡	集落	古代	33	坂本館山横穴墓群	横穴墓	古墳後
4	山畑遺跡	散布地	縄文	19	桑折館跡	城館	中世	34	坂本経塚群	経塚群	縄文・中世
5	国史跡　山畑横穴墓群	横穴墓	古墳後	20	八坂神社古墳	円墳	古墳	35	青山横穴墓Ａ群	横穴墓	古墳
6	館内山横穴墓群	横穴墓	古墳後	21	蟻袋古墳	円墳	古墳後	36	坂本Ｂ遺跡	散布地	縄文
7	千貫森館跡	城館	中世	22	三本木遺跡	散布地	縄文前・中	37	青山横穴墓Ｂ群	横穴墓	古墳後
8	館内山遺跡	散布地	縄文早・前・晩・平安	23	三本木Ｂ遺跡	散布地	縄文・古代	38	坂本Ｃ遺跡	散布地	縄文
9	御殿森古墳	円墳？	古墳後	24	西浦遺跡	散布地	古代	39	坂本Ａ遺跡	散布地	縄文
10	伊賀一里塚	一里塚	近世	25	七曜塚	塚	安土桃山	40	青山Ａ遺跡	散布地	縄文
11	芦ノ口山窯跡	窯跡	中世	26	敷玉早部玉神社跡	神社	平安	41	青山Ｂ遺跡	散布地	古墳
12	多高田窯跡	窯跡	鎌倉後	27	舟場遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世	42	青山Ｃ遺跡	散布地	縄文後・晩
13	多高田近世窯跡	窯跡	近世	28	中沢遺跡	散布地	古墳中	43	跡不足増遺跡	塚	
14	多高田遺跡	散布地	縄文	29	堀越遺跡	散布地	古墳中・古代・中世	44	音無城跡	城館	安土桃山
15	桑折遺跡	散布地	古代	30	花見山遺跡	散布地	縄文・弥生・古代	45	吹付窯跡	窯跡	古代

第１図　寺下遺跡の位置と周辺の遺跡

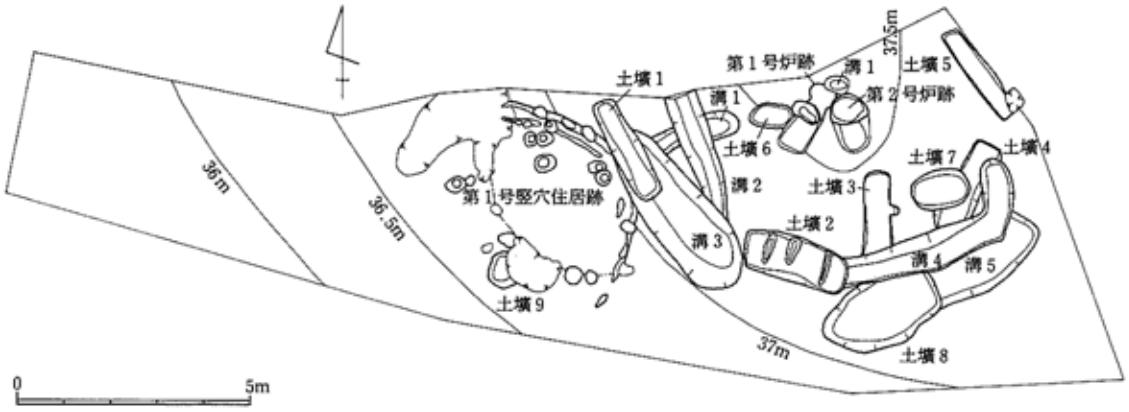
は笹薮となっている。調査は、平成9年度におこなった確認調査で遺構の存在が確認された比較的平坦な尾根上に、東西25m、南北9m程の調査区を設定して行った（第2図）。

調査区内の層序は、表土直下が遺構検出の地山面となっている。

検出された遺構については、1/20平面図・断面図を作成し、調査区の範囲については1/100平板測量図を作成した。また、35㎜白黒・カラースライド写真による記録も合わせて行った。



第2図　遺跡周辺の地形と調査区



第3図　遺構全体図

2　発見された遺構と遺物

遺構は、縄文時代の竪穴住居 1 軒、炉跡 2 基、古墳時代～古代の土壙 5 基、時期不明の溝跡 5 条、土壙 4 基が検出された。遺物は縄文土器、石器、土師器が出土した。

縄文時代の遺構より順に概要を記述していく。

Ⅰ　縄文時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

【第 1 号竪穴住居跡】

調査区の中央北寄りで検出された（第 4 図）。斜面上方にあたる住居北東部分、全体の約 1/3 のみが残存し、斜面下方にあたる南西側では、壁や周溝、床の大半が削平されているなど、残存状況は悪いが、周溝が 2 条同心円状に検出され、炉・柱穴もほぼ同位置で重複していることから、本住居は拡幅されていることがわかる。

平面形は、径約 5mのやや不整な円形とみられる。

壁は、ほぼ直立しており、残存壁高は、北東部分の最も残りの良いところで、20㎝程である。

床は、地山を床としている。

炉は、住居中央部で検出された。地床炉である。上部は削平され、東部は一部攪乱に壊されている。一度ほぼ同位置で作り替えられており、新しい炉は古い炉を埋め戻して構築されている。

平面形は、古い炉が長径 40㎝以上、短径 25㎝以上、新しい炉が長径 40㎝以上、短径 30㎝程の楕円形とみられる。断面形は皿状で底面はいずれも全体的に火熱を受けて赤変している。床面からの深さは古い炉が 15㎝、新しい炉が 10㎝程である。

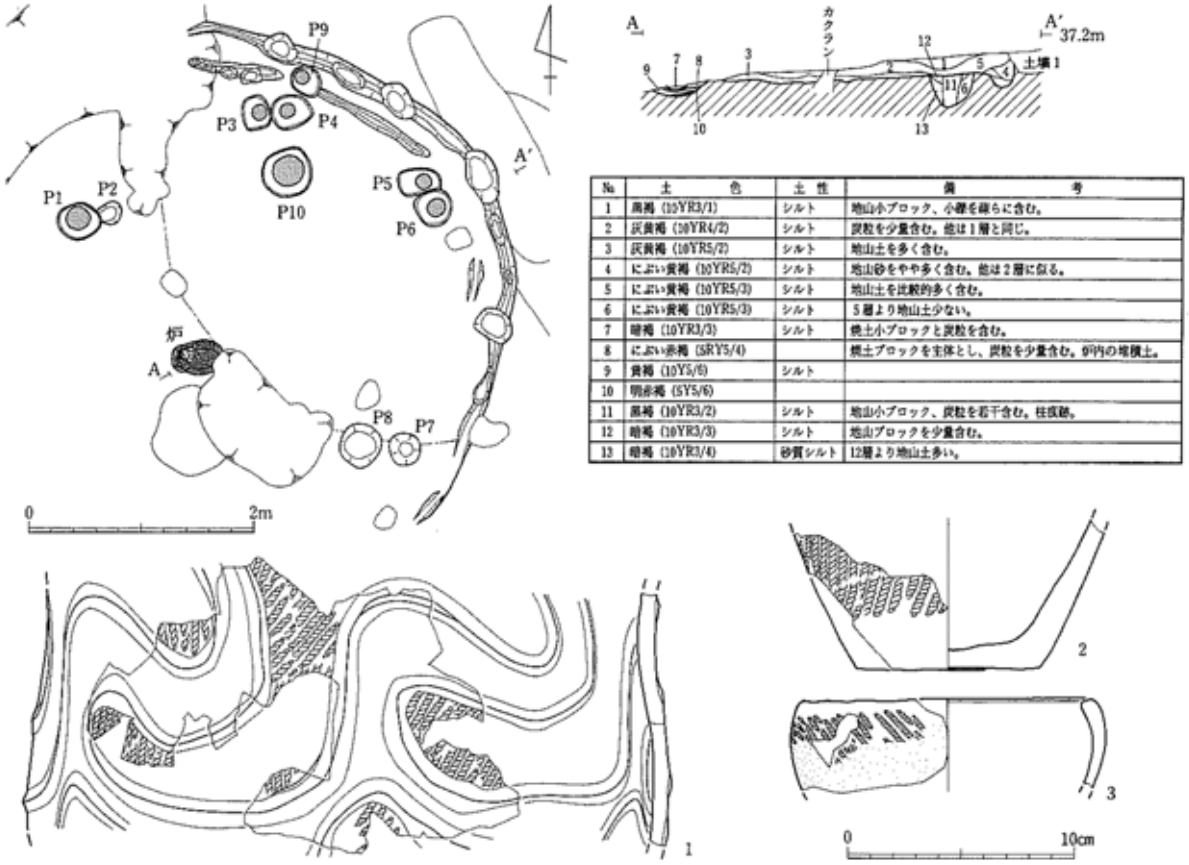
柱穴は、P1～10 が検出された。このうち P1・3～6・9・10 には柱痕跡が認められた。掘方の形態・規模は、平面形が概ね径 30～40㎝の不整な円形ないし楕円形、深さ 35㎝程で、柱痕跡の太さは 15～20㎝前後である。埋土は地山土を多く含む暗褐ないし灰黄褐色シルトである。柱穴のうち P1～8 は、炉と、 P4 と P5 の間を通る直線に対してほぼ対称に並んでいることから主柱穴と考えられる。また、P1 と P2、P3 と P4、P5 と P6 はほぼ同位置で重複しており、P1・3・5 がそれぞれ P2・4・6 へと作り替えられている。P7・8 は重複はしないが、P1～P6 との位置関係から見て、これらも作り替えられた柱穴もしくは主柱の抜き穴と考えられる。 P9・10 については、柱痕跡が認められるため柱穴であると考えられるが、柱構成上の位置付けは不明である。

周溝は、内側のものは幅約 10㎝、深さ 10～15㎝である。外側のものは幅約 15㎝、深さ 5～10㎝である。堆積土はにぶい黄褐色シルトで自然流入土である。

堆積土は、黒褐～灰黄褐色シルトで、いずれも自然流入土である。

遺物は、新旧の炉の堆積土及び P9 から出土した。

古い炉のものは深鉢の胴部である(第 4 図－1)。胴部が僅かにふくらみ、頸部以上がやや外反する器形で、体部径は約 29㎝である。胴部から頸部にかけて、隆帯で区画されたＳ字状の文様の内部に縄文を充填したものが横に展開するものと推定される。縄文はＲＬ縄文が縦回転で施されている。これと



№	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR3/1)	シルト	地山小ブロック、小礫を疎らに含む。
2	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	炭粒を少量含む。他は1層と同じ。
3	灰黄褐 (10YR5/2)	シルト	地山土を多く含む。
4	にぶい黄褐 (10YR5/2)	シルト	地山砂をやや多く含む。他は2層に似る。
5	にぶい黄褐 (10YR5/3)	シルト	地山土を比較的多く含む。
6	にぶい黄褐 (10YR5/3)	シルト	5層より地山土少ない。
7	暗褐 (10YR3/3)	シルト	焼土小ブロックと炭粒を含む。
8	にぶい赤褐 (5RY5/4)		焼土ブロックを主体とし、炭粒を少量含む。炉内の堆積土。
9	黄褐 (10YS/6)	シルト	
10	明赤褐 (5YS/6)		
11	黒褐 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロック、炭粒を若干含む。柱痕跡。
12	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを少量含む。
13	暗褐 (10YR3/4)	砂質シルト	12層より地山土多い。

第4図　第1号竪穴住居跡と出土遺物

類似した文様を持つ土器は福島県飯舘村上ノ台A遺跡Ⅳ群土器4類の中に認められ（鈴鹿1984）、大木10式第Ⅱ段階に位置付けられる（丹羽1981）。新しい炉のものは深鉢の底部である（第4図―2）。底部径は約8㎝である。ＲＬ縄文が縦回転で施されている。

P9 のものは、頸部でくびれ口縁部が強く内湾する平口縁の小形の深鉢の口縁部で、口縁部径は約13㎝である（第4図―3）。ＬＲ縄文が縦回転で施されている。

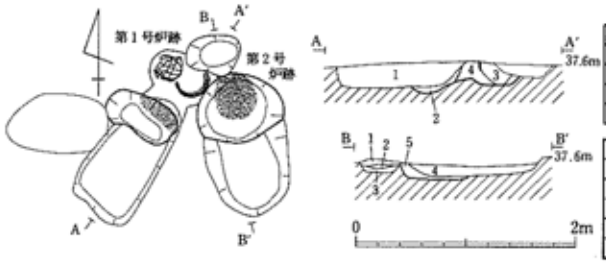
住居の時期については、住居に伴う土器が出土していないため確定はできないが、古い炉堆積土出土土器から大木10式期頃と考えられる。

炉　跡

発掘区の北東部の最も高い地点で2基重複して検出された（第5図）。ともに土器埋設部・掘り込み部からなる複式炉と考えられる。第2号炉の方が新しい。また、いずれも掘り込み部の大半は壊されている。

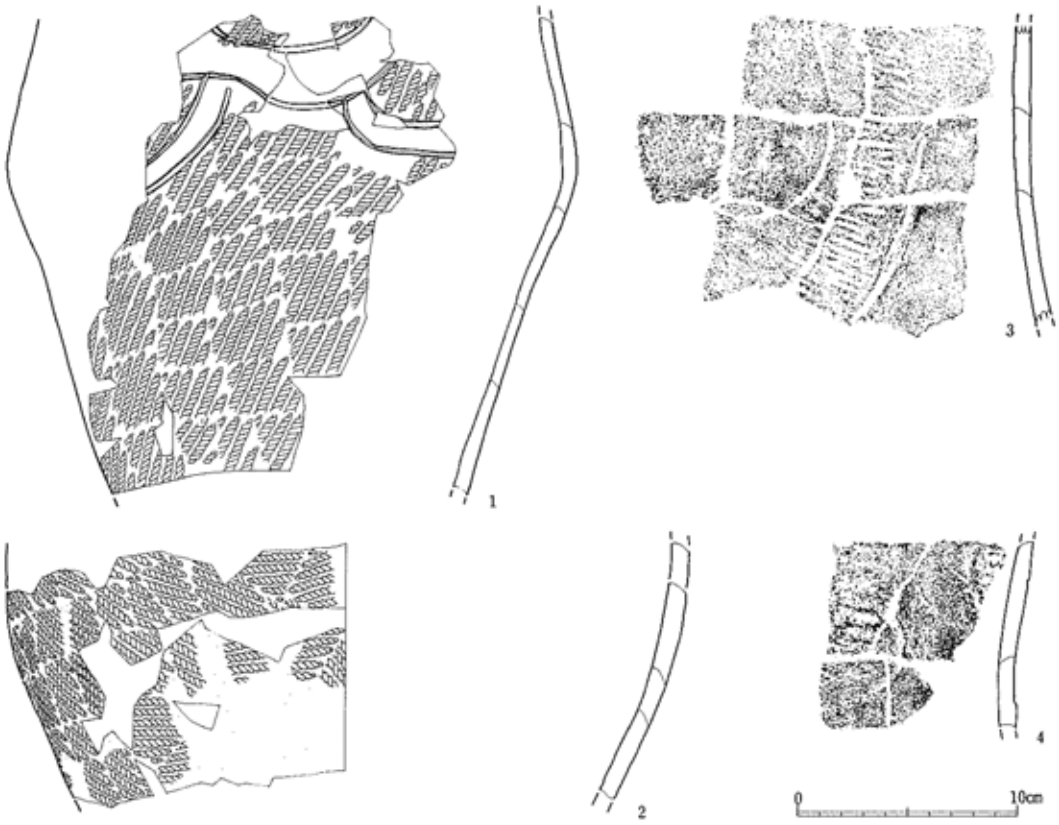
【第1号炉跡】

長軸方向は北北東である。土器埋設部と掘り込み部とで共通する掘方の北東端に土器を据えて、その周囲を埋め戻すと同時に掘り込み部も形成している。掘方の平面形は、残存状況で長さ90㎝、幅70



No	土色	土性	備考	
1	暗褐 (10YR5/3)	シルト	張り？	地山小礫・炭化物を疎らに含む。
2	褐 (10YR4/4)	シルト		地山土を含む。
3	灰褐 (7.5YR4/2)	砂質シルト		焼土小ブロック・炭化物・土器片を含む。
4	にぶい黄褐 (10YR5/4)	シルト		地山土を含む。炭化物を微量に含む。炉掘方埋土。

No	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	抜き？	地山ブロックを含む。炭粒を少量含む。
2	褐 (7.5YR4/3)	砂質シルト		焼土小ブロックを含む。
3	にぶい赤褐 (5YR4/4)	砂質シルト		焼土小ブロックを含む。
4	明褐 (7.5YR5/6)	砂質シルト		
5	暗褐 (10YR3/3)	シルト		炭粒、地山土粒を少量含む。焼土小ブロックを含む。



第5図　第1・2号炉跡と出土遺物

cm の不整形であり、深さは土器埋設部で 20cm、掘り込み部で 28cm である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

土器埋設部には 2 個体の土器が埋設されており、東側のものは正位に、西側のものはほぼ横位に据えられていた。いずれも底部ははずされており、また全体に赤褐色を呈し、かなり脆く、火熱を受けていたとみられる。

掘り込み部は、幅約 70cm である。土器埋設部側の側壁には火熱を受けた痕跡が認められる。堆積土は褐色シルトで自然流入土である。

遺物は埋設土器の他、埋設土器内の堆積土中から出土している。

埋設土器の西側のものは、胴部がやや張り、頸部以上がやや外反する深鉢の胴部で、体部径は約 26

㎝である。胴部から頸部にかけて、横方向に展開する、細い沈線で区画された磨消縄文が施され、胴下部は縄文のみとなる（第5図−1）。縄文は縦回転のＲＬ縄文である。文様構成は、楕円ないしU字状文の下部と下部の間を上に張り出す弧で連結しながら横に展開する文様の下に、それに接してさらにU字状文が横にずれて展開するものと考えられる。この文様は、白石市菅生田遺跡の深鉢A第3ａ類の玉抱文様に類似しており（丹羽ほか1982）、大木10式第Ⅱ段階に位置付けられると考えられる（丹羽前掲）。

東側のものは、胴央部が僅かに脹らみ胴下部ですぼまる深鉢の体部で、径31㎝である。縦方向のＲＬ縄文のみが施されている（第5図−2）。またこの埋設土器の内側の堆積土中からも縄文土器が出土している（第5図−3）。

【第2号炉跡】

長軸方向は北北西である。埋設土器は抜き取られており、掘り込み部の一部だけが残存していた。掘り込み部の平面形は、残存状況で長さ65㎝、幅80㎝の不整円形で、深さは16㎝である。土器埋設部側の側壁から底面にかけては、火熱を受けた痕跡が認められる。堆積土は暗褐色のシルトの自然流入土である。

埋設土器の抜き取り穴は、径45㎝程で、堆積土中には焼土ブロックが認められた。

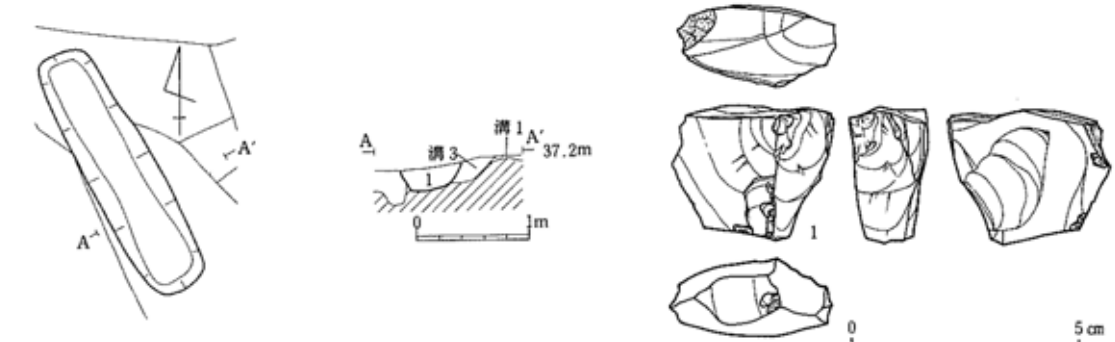
遺物は、掘り込み部の堆積土中から縄文土器が出土した（第5図−4）。沈線で区画され、縄文が充填ないし磨消されている。第2号炉の時期は、第2号炉が第1号炉と隣接してつくられていることや、土器も第1号炉のものと類似していることから、大木10式期であると考えられる。

なお、1号炉の掘り込み部の堆積土中からは火熱により赤変した長径25㎝の円礫が、2号炉の埋設土器抜き取り穴の堆積土直上には火熱を受けた小形の角礫が見つかっていることから、これらの炉にはなんらかの石組みが存在していた可能性がある。また、掘り込み部を壊しているピットは、炉石の抜き取り穴の可能性も考えられる。

Ⅱ　古墳時代〜古代の遺構と遺物

土　壙

土壙1〜5は、形態・規模・堆積土などの点で共通性がみられる。いずれも長さが2.2〜2.4m、幅



No	土色	土性	備考
1	黒（7.5YR2/1）	シルト	締まり・壁際に地山土を少量含む。

第6図　土壙1と出土遺物

0.6～0.9㎝の長方形で、断面形は逆台形を呈し、深さは残りの良いもので30㎝である。堆積土は自然流入の黒色土である（第6図）。これらは時期的にも性格的にも近い関係にあると推定される。しかしながら、方向や位置関係など、これらの点以外には特に規則性は認められず、性格は不明である。

土壙1からは土師器片が出土している。保存状態が悪く詳しい時期はわからないが、このことからこれらは古墳時代～古代のものであると考えられる。

なお、同土壙からはこの他に縄文時代のものとみられる玉髄製の石核も出土している（第6図1）。

III　その他の遺構

溝　跡

溝1・2は幅0.6m程でおおよそ東西及び南北方向に延びる。溝4は幅0.6m程で東西方向に延び東端で北に折れる。溝3・5は幅1.2m程で北西から南東方向及びおおよそ東西方向に延びる。これらの深さは、浅いもので10㎝、深いもので15～25㎝である。堆積土は黒色ないし黒褐色シルトである。これらからは遺物は出土せず、時期、性格ともに不明である。

土　壙

土壙6は長径0.9m、短径0.6m、深さ10㎝で、堆積土は暗褐色シルトで自然流入土である。土壙7は長径1.3m、短径0.9m、深さ20㎝で、堆積土は暗褐色シルトで自然流入土である。側壁が焼けており、土壙底面上に炭化物から成る層が認められる。土壙8は長径2.6m、短径1.5m、深さ40㎝で、堆積土は主に黒色シルトで自然流入土である。土壙9は長径0.8m短径0.7m、深さ25㎝で、堆積土は黒色シルトで自然流入土である。側壁の一部に火熱を受けた痕跡がみられる。土壙7・9については何らかの焼成遺構の可能性も考えられるものの、これらからは遺物が全く出土していないため、時期・性格ともに限定できない。

3　ま　と　め

1．本遺跡からは縄文時代中期大木10式期及び古墳時代以降の遺物が出土した。
2．大木10式期頃ないし大木10式期には住居や炉がつくられ、集落が営まれていたと考えられる。
3．古墳時代～古代のある時期には、土壙がつくられる場所として利用されたと考えられる。

引用・参考文献

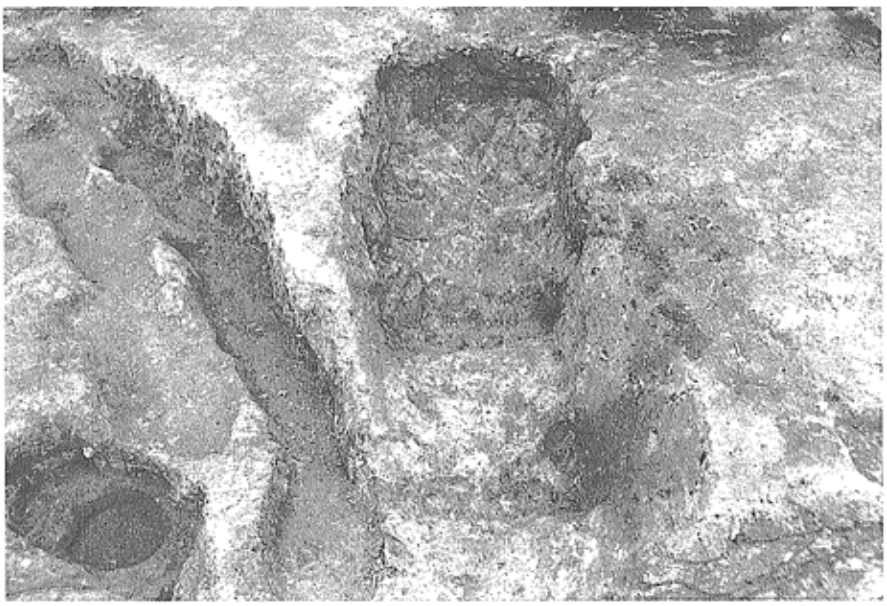
後藤ほか（1978）『上深沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第52集
鈴鹿良一（1984）『上ノ台Ａ遺跡（第1次）－真野ダム関連遺跡発掘報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第128集
丹羽　茂（1981）「大木式土器」『縄文文化の研究　4』pp.43-60
丹羽・阿部・小野寺（1982）『菅生田遺跡－東北自動車道発掘調査報告書Ⅶ』

写 真 図 版

第１号竪穴住居跡（西から）

第１号竪穴住居跡炉
（北西から）

第１号炉跡土器埋設部
（北東から）



土壙1（東から）

1

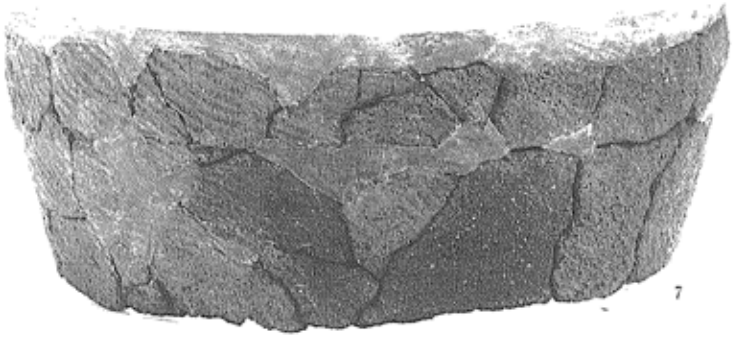
2

3

4

5

6



7

8

出土遺物
1～7:S=1/3
8:S=2/3

写真図版2

白　石　城　跡

目　　次

1　遺跡の位置と環境 …… 131
2　白石城の歴史 …… 132
3　調査の方法と経過 …… 134
4　調査成果 …… 137
5　まとめ …… 141

調 査 要 項

遺 跡 名：白石城跡（宮城県遺跡地名表搭載番号 02197）
遺跡記号：ＪＳ
所 在 地：宮城県白石市益岡町　本丸巽櫓跡三等三角点
（北緯　37 度 59 分 55 秒 571）（東経　140 度 37 分 16 秒 992）
（標高 76.03m）
調査原因：白石高校第二屋内運動場建設工事
調査面積：約 800 ㎡
調査期間：第一次確認調査　平成 9 年 11 月 26 日
第二次確認調査　平成 10 年 3 月 5 日
事　前　調　査　平成 10 年 6 月 22 日～6 月 30 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：真山悟、後藤秀一、古川一明

白 石 城 跡

1　遺跡の位置と環境

白石城跡は、宮城県南部の白石市益岡町に所在する近世の城跡である。城跡のある益岡は、白石盆地のほぼ中央に南北に横たわる標高75m前後の分離丘陵北端部に位置し、城跡の本丸からは北東の平野部に広がる白石市中心部の市街地を俯瞰することができる。城下の市街地は、白石盆地を南北に縦貫する旧奥州街道（現国道4号線）と、奥羽山脈七ケ宿峠越えの山形県米沢地方と角田・丸森経由の太平洋岸福島県相馬地方とを結ぶ東西横断路（現国道113号線）とが交わる場所であり、古くから陸奥南部の軍事・交通の要衝として政治・経済的に発展してきた。白石城は、そうした地理的要衝を押さえる位置に築城された平山城である。

第1図　白石城跡位置図

周辺地域の歴史を概観すると、城跡の東約 800mの丘陵上には、古墳時代中期の前方後円墳である瓶ケ森古墳が所在する。また、城跡の東約 300mには古代の刈田郡の郡衙跡に比定されている白石市大畑遺跡が位置している。こうした古代の主要遺跡が集中する城跡北東部の地域一帯が、刈田郡の中核をなす地域であったと推定される。

後三年の役の後、刈田左兵衛尉経元が刈田・伊具両郡を領有することになり白石に居を構えた。その後、刈田氏の同族が白石氏と名を改め、天正十四年（1586 年）に塩松に移るまで、十五代、四百年にわたって白石に居住した。白石氏の移封後は、伊達家の家臣、屋代勘解由兵衛が城代として白石に置かれた。これら、白石氏（刈田氏）、屋代氏の居所は現白石城の両側の丘陵地にあったものと推定されているが、具体的な居所に関する記事や考古学的な資料はなく、その所在は不明である。

2　白石城の歴史

近世城郭としての白石城を築城したのは、天正 19 年（1591 年）に豊臣秀吉から刈田郡を与えられた蒲生氏郷である。刈田郡を領することになった氏郷は、郡域の支配拠点として、鉄砲に対する備えを有する白石城を益岡の地に築き、城代として家臣の蒲生郷成を置いた。

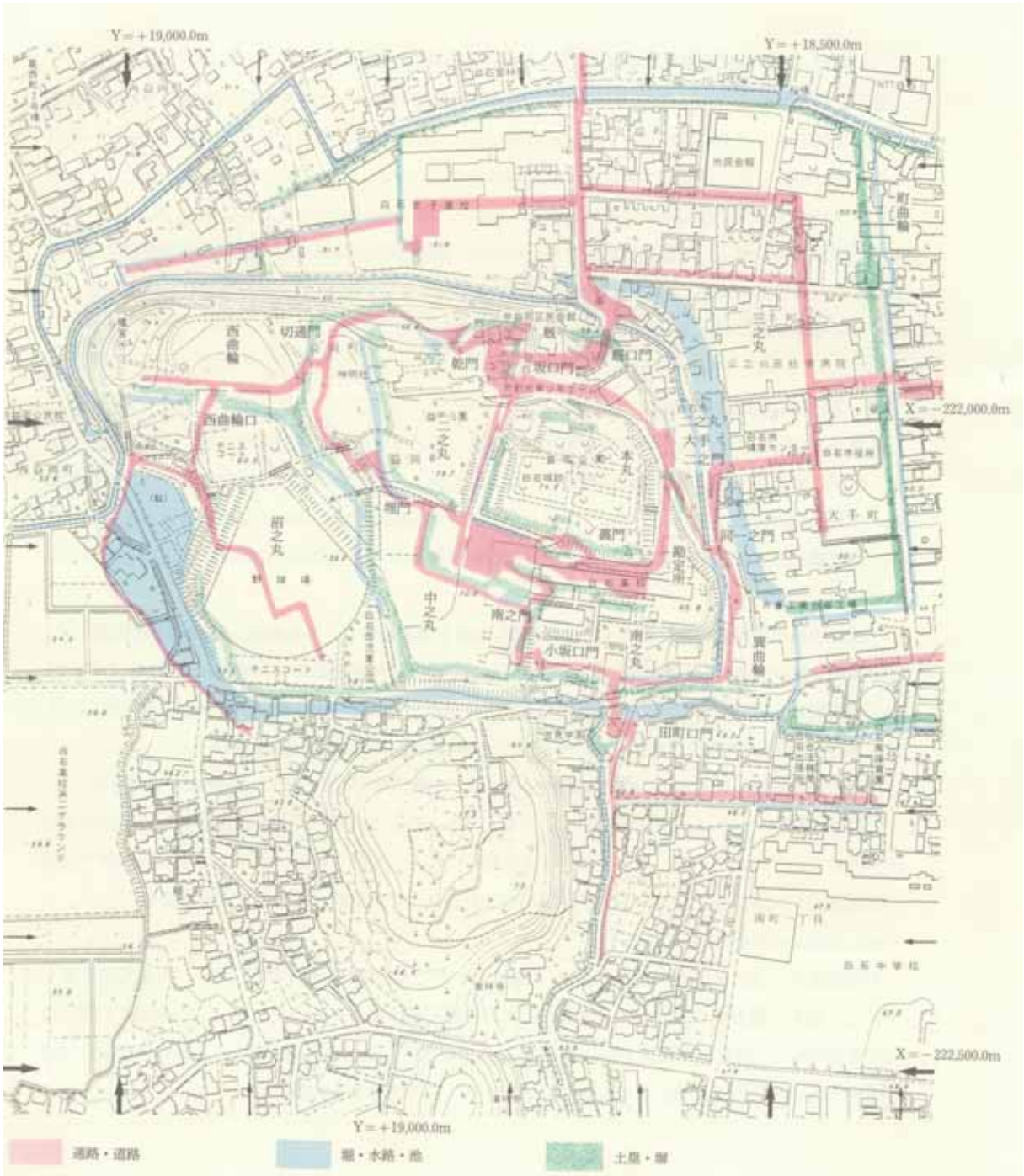
その後、慶長三年（1598 年）、家中の内訌により蒲生氏が宇都宮に移封されると、上杉影勝が刈田郡域の領宿権を受け継ぐことになり、白石城城代として上杉家家臣の甘糟影継が置かれた。しかし、同年に秀吉が病没し、上杉氏が石田三成方についたため、慶長五年（1600 年）、関ヶ原の戦いに先立ち、徳川家康の命を受けた伊達政宗が白石城を攻め落とし、石川昭光を城代として置いた。その後、白石城は仙台城の支城として位置付けられることになり、慶長七年（1602 年）には、伊達家の重臣である片倉小十郎影綱が入城し、幕末に至るまで片倉氏が代々居城することになった。

白石城は、天和元年（1615 年）の一国一城令の発布後も他の地方城郭のように破却されることなく、城としての存続を許され、江戸時代を通して全国的にも例のない領国内の支城として整備が進められた。

城主がめまぐるしく交代した戦国末期、軍事的要衝に位置した白石城は近世城郭として整備が進められていったと推定される。城の縄張りや施設などに関する絵図や考古学資料は無いが、慶長五年の伊達政宗の白石城攻めの頃には、本丸を中心とした輪郭式の城郭構造や、城下町の前身となる町曲輪（まちくるわ）が形成されていこたとが「片倉家代々記」の戦記から読みとれる。

幕藩体制下での白石城跡の姿については、城内の施設改修等に際して、その都度、仙台藩から幕府に提出された絵図や文献とその控えが残されており、それらによって城の縄張りや施設の変遷を推定することができる。これらによれば、正保 3 年（1646 年）の大地震、文政 2 年（1819 年）の火災などの復旧に際して、石垣や建築物の大規模な再建補修工事が行われたが、基本的な縄張りや施設の配置には変更がなかったことがわかる。

第 2 図は、白石市教育委員会所蔵の「白石城下絵図」（白石市教育委員会：1990）を参考にして、縮尺 1/2500 の白石市都市計画図に城郭施設の位置を落としたものである。この絵図は宝暦 11 年（1761 年）調整の絵図を幕末の安政 3 年に写したものであるが、この絵図に見られる主な平場、土塁、門の位置


Y＝＋19,000.0m
Y＝＋18,500.0m
X＝－222,000.0m
X＝－222,500.0m
Y＝＋19,000.0m
西曲輪
切通門
乾門
坂口門
西曲輪口
二之丸
本丸
大手二之門
大手町
町曲輪
三之丸
沼之丸
中之丸
南之門
小坂口門
南之丸
寅曲輪
田町口門
通路・道路
堀・水路・池
土塁・塀

第２図　白石城全体図

については、江戸時代を通して大きな変化がなかったようである。

幕末、白石城は慶応4年（1868年）、奥羽越列藩同盟締結の舞台となったが、戊辰戦争での敗北により、片倉家中は北海道に移封され、城は新政府に召し上げられた。明治七年（1874年）城跡は、民間に払い下げ処分となり建造物・石垣等が逐次解体されていった。明治32年、本丸南側の中之丸から南之丸にかけての部分が白石高校の敷地となり、城跡としての旧状が失われたが、本丸、二之丸、中之丸の一部は益岡公園として整備され、さらに近年は三層櫓が復元されたため多くの観光客が城跡を訪れるようになった。現在、白石城は地元では「益岡城（ますおかじょう）」とも呼ばれ、市民の憩いの場としても親しまれている。

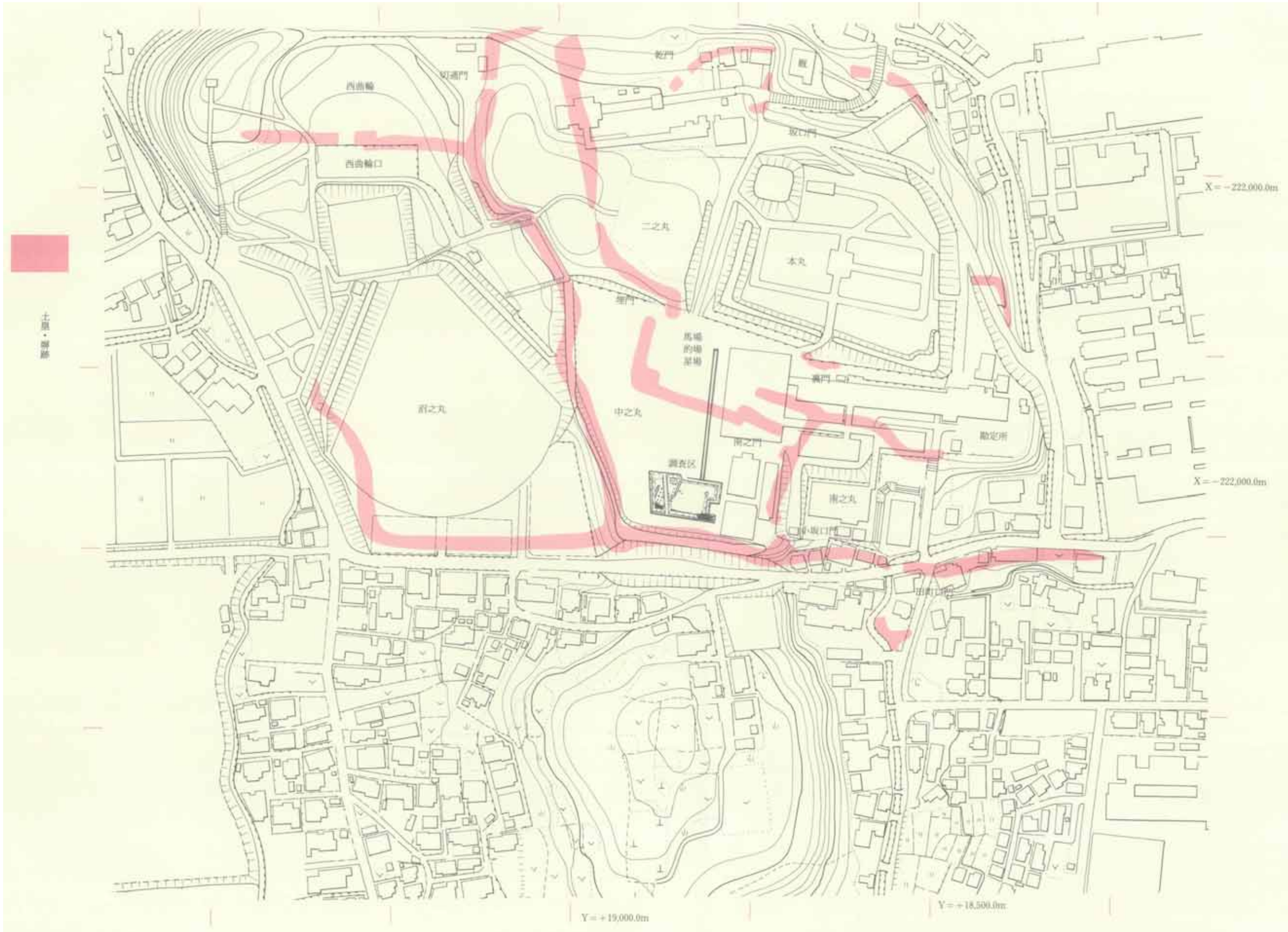
3　調査の方法と経過

宮城県立白石高等学校は明治32年の創立以来、白石城の「南之丸」部分に所在している。平成9年度、白石高等学校の創立百周年記念事業の一環として第二屋内運動場の建設が計画された。地形的制約から運動場の建設地は白石城跡の「中之丸」にあたる現校庭部分に求めざるを得なかった。このため、校庭部分の確認調査を実施し、遺構の残存状況を確かめた上で建設予定地選定の協議を進めることにした。

平成9年11月に校庭東側に幅2m、長さ150mの南北方向のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、校庭北半部は、昭和40年から46年にかけて校舎・体育館建設と同時におこなわれた校庭造成工事の際に大きく削平されていることが確認された。一方、校庭南半部は、北側から削り出した土砂や岩が1m前後の厚さで客土され、その下に遺構面が残っていることが確認された。

以上の確認調査の結果から、運動場建設予定地は「遺構がすでに失われている校庭北側が望ましい」との結論を得た。しかし、校庭北側の二之丸公園にかかわる公園法との調整がはかられ、建設地を校庭南側にすることになった。このため、平成10年3月にあらためて校庭の南半に位置する建設予定地の確認調査を実施した。その結果、予定地部分での遺構の分布は疎であることが確認されたため、6月にこの部分の事前調査を実施した。

事前調査では遺構検出面が地表下約2mと深かかったため、調査範囲を広めに取り、安全勾配で掘り下げた。なお、調査区の西寄りに、南北方向に走る暗渠排水施設があったため、この施設の下部は調査できなかった。調査の記録は平板による縮尺1/100の調査区全体測量図、簡易やり方による縮尺1/10の遺構平面、断面図を作成し、35㎜リバーサルフィルムで写真を撮影した。



西曲輪
切通門
乾門
西曲輪口
二之丸
本丸
坂口門
馬場
的場
屋場
中之丸
沼之丸
調査区
南之門
南之丸
勘定所
X＝－222,000.0m
X＝－222,000.0m
Y＝＋19,000.0m
Y＝＋18,500.0m

第３図　調査区位置図

4　調査成果

今回事前調査を実施した運動場建設地は、東西約 40m、南北約 20mの範囲で、白石高校校庭の南半に位置する。現在、校庭の南縁から西縁にかけて比高 1m前後の土塁状の高まりがみられるが、これらは位置的にみて絵図に描かれた「中之丸」の南縁から西縁にかけて巡っていた土塁の名残りとみられる。本調査区は、この南縁の土塁の北側約 7～8mに位置しており、このことから本調査区が「中之丸」の南端に位置していることが確認される（第 3 図参照）。

遺構検出面は標高 69m前後のほぼ平坦な地山面で、丘陵の南西向き斜面を削り出して造成された平場の一部である。遺構検出面直上は近世～近代の陶磁器、瓦、ガラス破片等を含む畑の耕作土で覆われ、その土を厚い客土が覆っている。

発見された遺構

調査区内で発見された遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、井戸跡 2 基、石組み遺構 1 基、溝跡 2 条である。このうち主な遺構の分布は西側に偏より、調査区中央部から東側にかけてはピットが散漫に分布するだけの遺構の空白地が広がっている。以下、主な遺構について記述する。

［S B5 掘立柱建物跡］

調査区の西端で検出された。建物の北西隅から南西隅の対角線上に暗渠排水施設が重なっていたため、その部分は調査できなかった。また、ＳE2 石組み遺構・ＳE3 井戸跡と重複し、ＳE3 井戸跡に切られている。

桁行 5 間、梁行 3 間の掘立柱建物跡で、棟方向がＮ－20 °－Ｅの南北棟である。桁行総長 10.5m、梁行 6.2mで、柱間寸法は桁行が 2.1m等間、梁間が 4.2mで、西側に縁もしくは庇とみられる約 1mの出がある。柱穴は径 30㎝ 前後、深さ 60㎝ 前後で、柱材はいずれも抜き取られている。建物跡の東西両側に幅 1.5m、深さ 10㎝ 前後の雨落ち溝がみられる。また、南側の梁行方向がＳD4 溝跡の方向とほぼ一致している。本遺構に伴う出土遺物はない。

［S E1 井戸跡］

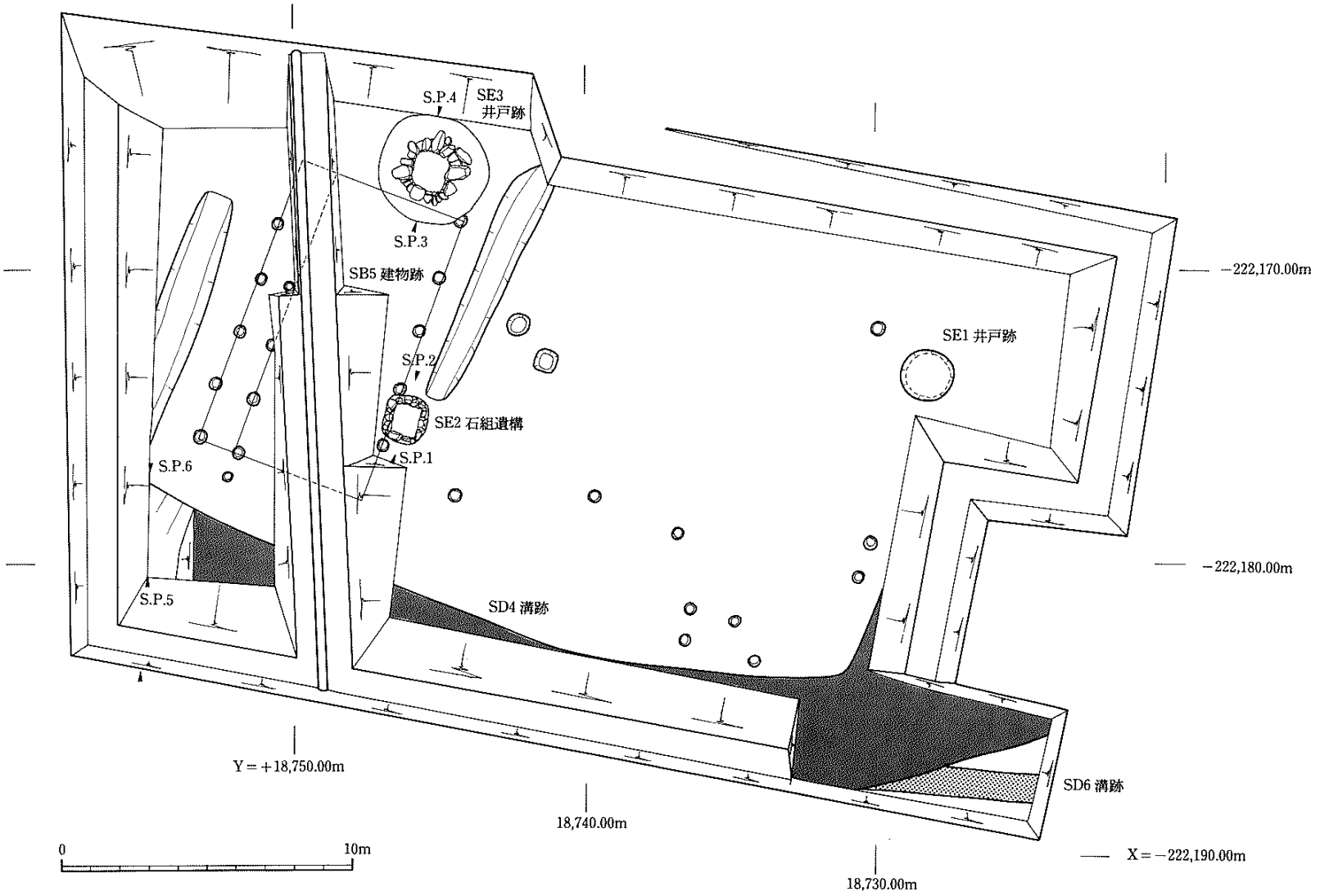
調査区の北東隅で検出された素掘りの井戸跡である。平面形が径約 1.8mの円形で、深さ 1m以上ある。下層は湧水が激しく掘り下げられなかった。堆積土はグライ化した暗褐色土で、陶器碗・鉢の破片が出土している。陶器碗（第 6 図 1）は唐津産で 17 世紀初頭の年代が想定される。

［S E3 井戸跡］

調査区の北辺西よりで検出された石組みの井戸跡である。平面形が内法で一辺約 1mの方形で、深さは 1.5m以上ある。下層は湧水が激しく掘り下げられなかった。径約 3mの掘り方の中央に人頭大の河原石をほぼ垂直に積み重ねて井戸の側壁としたものである。掘り方埋め土は黒褐色土、井戸枠内堆積土は上層約 1mが腐食の進んだ腐葉土、その下は粘土質の暗褐色土層である。暗褐色土層上部から陶器鉢が出土している。陶器鉢（第 6 図 2）は 19 世紀前半の年代が想定される。

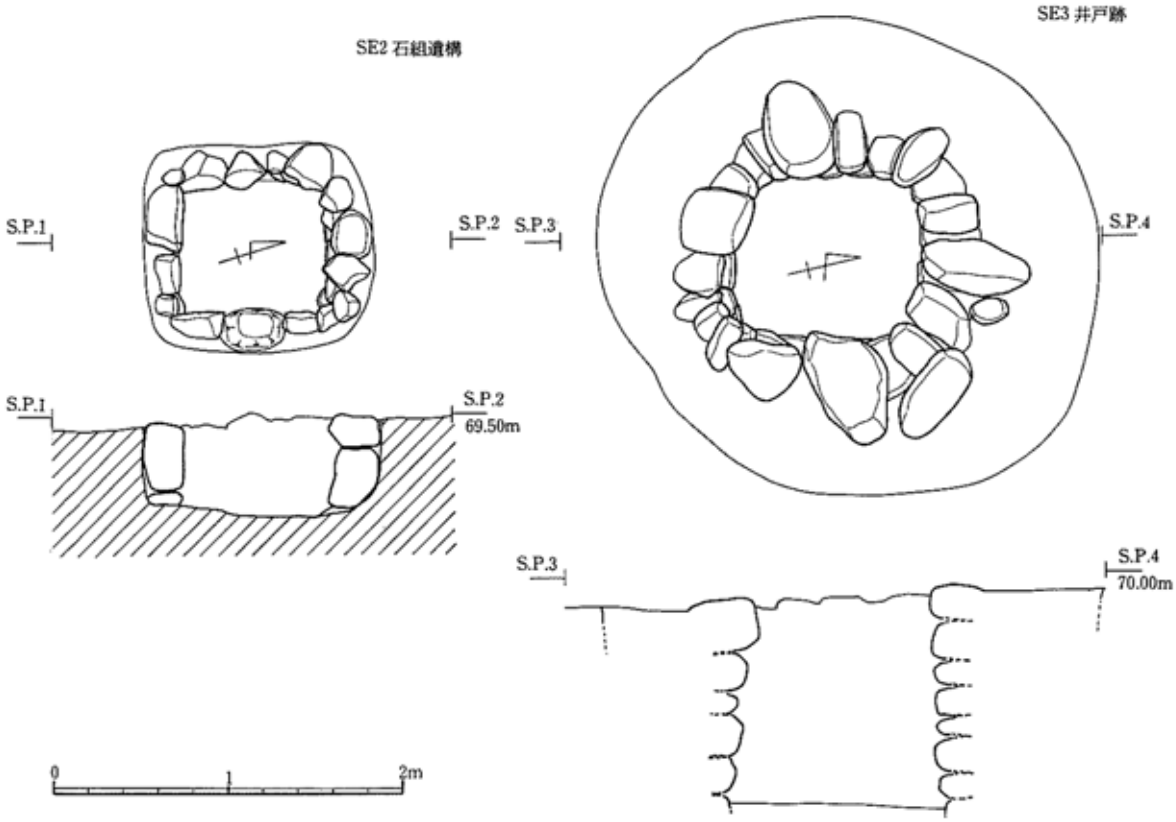
［S E2 石組み遺構］

調査区の中央西よりで検出された石組み遺構である。平面形が内法で一辺約 0.8mの方形、深さ 0.6 mである。掘り方の内壁に亜角礫を張り付けたもので、四周の壁は一段もしくは二段積みの石で構成

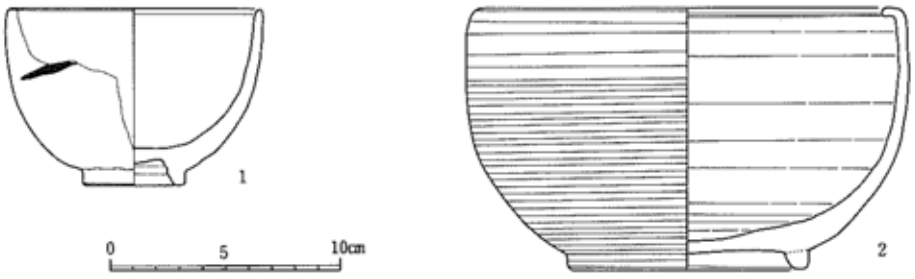

S.P.4
SE3
井戸跡
S.P.3
SB5 建物跡
S.P.2
SE2 石組遺構
S.P.1
S.P.6
S.P.5
SE1 井戸跡
SD4 溝跡
SD6 溝跡
−222,170.00m
−222,180.00m
Y＝＋18,750.00m
18,740.00m
18,730.00m
X＝−222,190.00m
0
10m

第 4 図　調査区全体図

され、平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は明褐色土で人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。



第 5 図　SE2 石組遺構・SE3 井戸跡　平面図・断面図



No.	器種	出土遺構	特徴	口径	底径	器高	残存率	産地	年代	図版
1	碗	SE 1 井戸跡	長石釉、高台部露胎。外面上部に鉄釉による掛線。	11.0	4.5	7.7	1/3	唐津	17世紀	4
2	鉢	SE 3 井戸跡	無釉、全面にカンナ痕。	17.5	10.5	11.4	2/3	白石？	19世紀	4

第 6 図　SE1・SE3 井戸跡出土遺物

［ＳＤ4 溝跡］

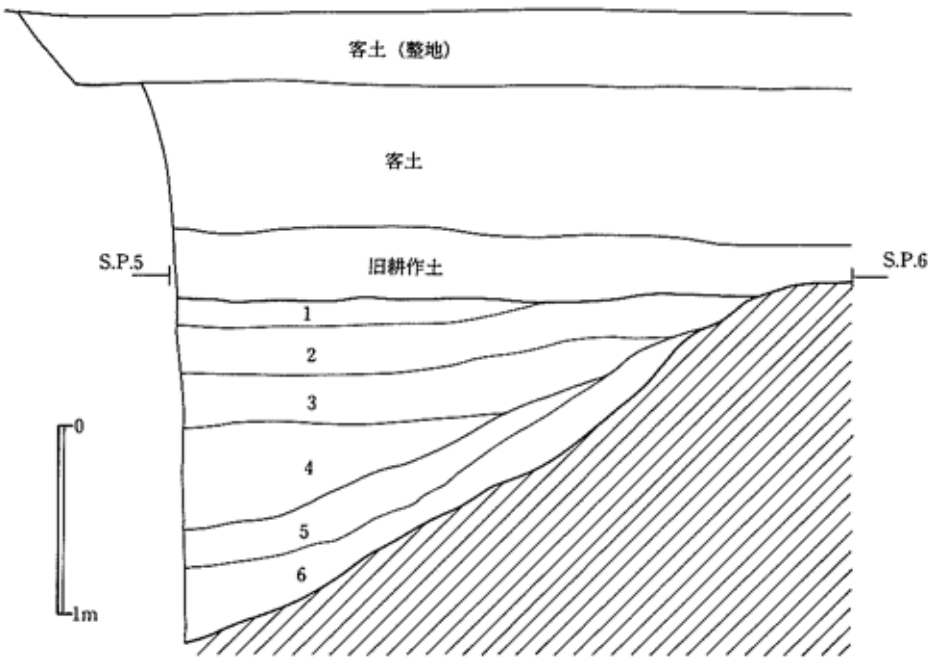
調査区の南辺で検出された東西方向の溝跡である。断面形「V」字状をなし、上幅約 4m、深さ 2.3 m、検出した部分の総延長はおよそ 30mで、緩い弧を描きながらさらに東西に延びている。堆積土は、下層が北側から流入した黒褐色土の自然堆積、上層が人為的に埋め戻された褐色土である。遺物は出土していない。

［ＳＤ6 溝跡］

調査区の南東隅で検出された東西方向の溝跡で、西側はＳＤ4 に切られている。上幅約 1mで、検出した部分の総延長はおよそ 5mで、直線的に東西に延びている。堆積土は褐色土の自然堆積である。遺物は出土していない。

出土遺物

遺構確認面直上の畑耕作土から陶磁器、瓦、ガラス破片等が出土している。いずれも小破片であるが、産地や年代の推定できる陶磁器破片の中には、17 世紀代の唐津産の碗・鉢、19 世紀代の大堀相馬とみられる碗、その他産地不明のすり鉢、磁器では 19 世紀代の有田の染め付け碗なども含まれている（写真図版 4）。瓦の破片はいずれも燻焼の本瓦で白石城に使用されていたものと考えられる。平瓦、丸瓦、軒平瓦の破片があり、この中には火を受け赤変した平瓦破片も 1 点含まれる（写真図版 4）。この他、鉄製角釘、近代のガラス瓶類などがある。



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	人為堆積	4	褐色（10YR4/3）	シルト	人為堆積
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	人為堆積	5	黒色（10YR2/1）	シルト	自然堆積
3	褐色（10YR4/4）	シルト	人為堆積	6	黄褐色（10YR6/1）	シルト	自然堆積

第 7 図　SD4 溝跡断面図

5　まとめ

「白石城下絵図」によれば、今回調査をおこなった白石高校の校庭は、その南半が白石城の「中之丸」に、北半が「馬場･的場･星場」にそれぞれ相当する。「中之丸」は四方を土塁で囲まれた不整形な平場で、絵図では、その南半部に南北に細長い家中屋敷の敷地が三区画描かれている。一方、「馬場･的場･星場」は、馬・弓・鉄砲の各武術の練習場であり土塁で囲まれた細長い敷地である。「中之丸」よりも一段高く、「中之丸」との間は鍵の手状の土塁によって隔てられ、その土塁の北西端には「埋門」、南東端には「南之門」が開いていた（第２・３図参照）。

以下では、これら絵図から推定される城郭施設の位置関係と、今回の発掘調査成果を照合し整理してみたい。

まず、確認調査のトレンチの位置は、「馬場･的場･星場」と「中之丸」にまたがり、両者を隔てていた東西方向の土塁のほぼ中央に直交する位置で設定されたものと推定される。ここでの調査の結果、校庭北半の「馬場・的場・星場」は校庭造成工事の際に大きく削平され失われていることがあらためて確認された。その一方で、校庭南半の「中之丸」は客土下に埋まり良好に保存されていることも確認された。「埋門」、「南之門」については今回の調査で位置を特定できなかったが、その下部構造が残存している可能性があり、今後も検討が必要である。

次に、本調査対象地についてみてみる。本調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基、石組み遺構１基、溝跡２条であり、城郭内の平場における遺構分布としては散漫である。ここでの遺構確認面は、畑の耕作による以外は大きな削平を受けていないと考えられることから、この場所が、もともと遺構分布の散漫な場所だったと考えられる。

調査区の位置をあらためて絵図でみると、「中之丸」の内部は細線で南北方向に細長く区画され、北辺の土塁沿いには通路が描かれている。細線による表現は家中屋敷の敷地の境界を表現したものであり、各区画の出入り口は通路に接する北側にあったとみられる。したがって、今回の調査区は、これらの南北方向に細長い屋敷地の奥手にあたる。調査区内で、遺構の分布が散漫であるのはこうした屋敷地での位置が関係しているものかもしれない。

最後に、発見された遺構の時期と性格について検討しておきたい。まず、調査区内は、廃城後校庭造成工事がおこなわれるまでの間、畑地として利用されていたことが出土遺物から確認できた。耕作土の下から発見された遺構のうち、19 世紀代の陶器碗が出土したＳＥ3 井戸跡は、幕末まで機能していた井戸であり、絵図に描かれた白石城「中之丸」の家中屋敷の敷地奥に掘られた井戸であったと考えられる。一方、17 世紀代の陶器磁が出土したＳＥ1 井戸跡は江戸時代初期の遺構とみられる。また、ＳＥ3 井戸跡に重複しこれに先行するＳＢ5 掘立柱建物跡は、建物の棟方向が絵図にみられる敷地の区画線とほぼ平行することから、幕末以前、家中屋敷の敷地内に所在した建物の一つであったとみられる。

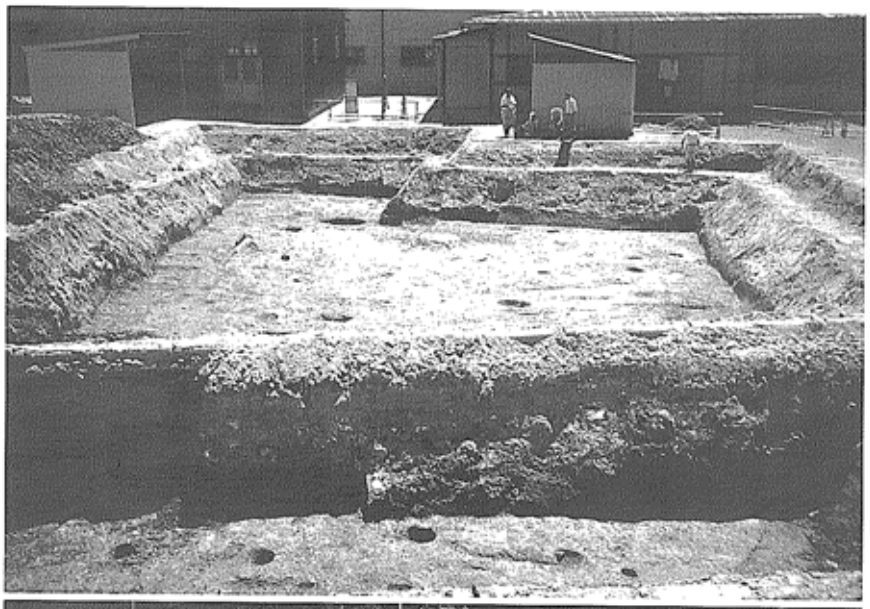
この他、石組み遺構、溝跡については、遺物が出土しておらず、時期・性格を特定できない。ただし、規模の大きなＳＤ4 溝跡は、近世初頭以降の白石城に関わる絵図の中には描かれていない施設であることから、近世初頭以前の遺構と考えられる。さらに、「中之丸」南縁の土塁のすぐ内側にあることや人為的に埋め戻されていることなどから、土塁が構築される以前の遺構である可能性が高い。遺構

の性格については、規模や方向からみて、南側に丘陵尾根が続く城域の南端を区画するもので、堀切などの防衛的な機能をもつ施設であった可能性が考えられる。

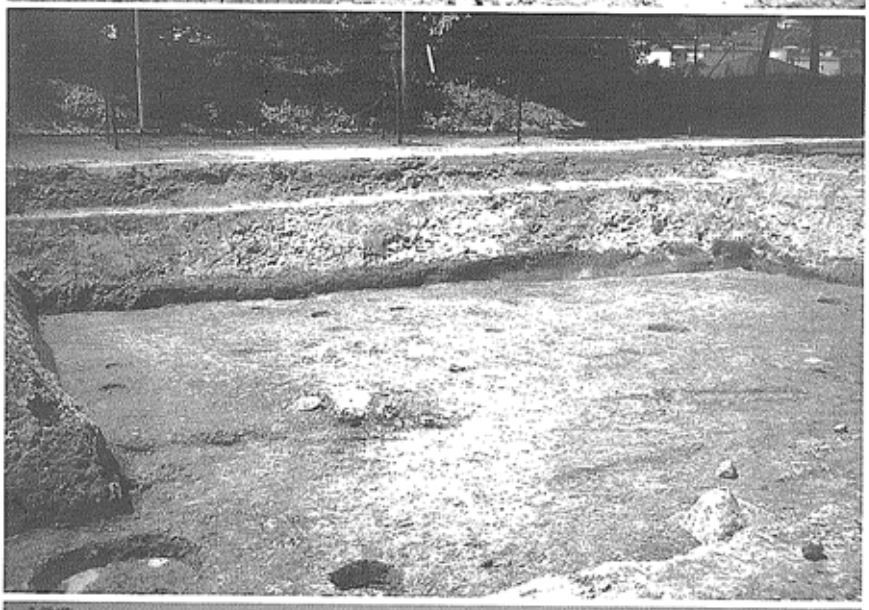
参考文献

中橋・遠藤・清野：1979：「白石城」白石市文化財調査報告書第 3 集　白石市教育委員会
藤沼　邦彦　　：1981：「宮城」『日本城郭体系　第 3 巻』新人物往来社
白　石　市　　：1990：「白石城下絵図」　白石市教育委員会

写 真 図 版



調査区全景
（西より）

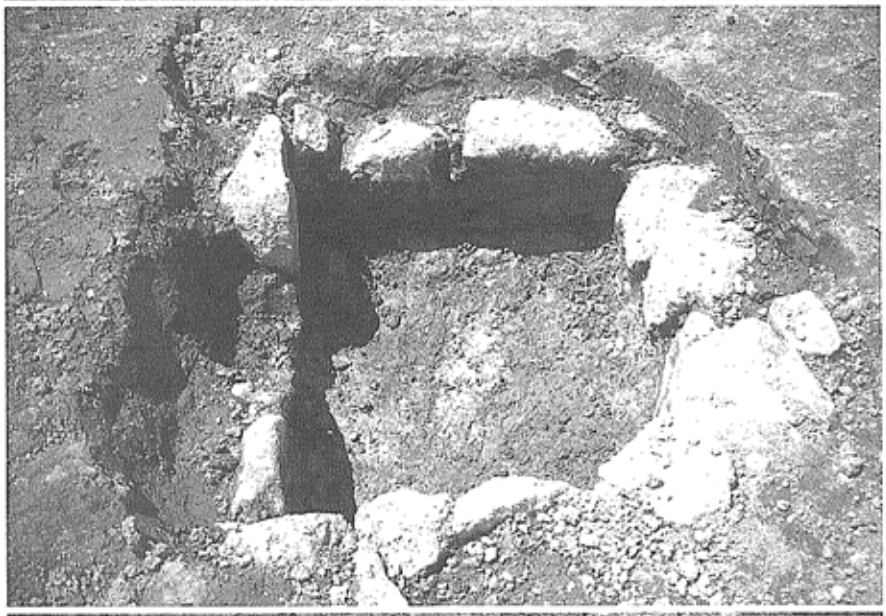


南方の土塁方向
を望む
（北より）

北方の二之丸を
望む
（南より）

写真図版 1

SE1 井戸跡
（南より）



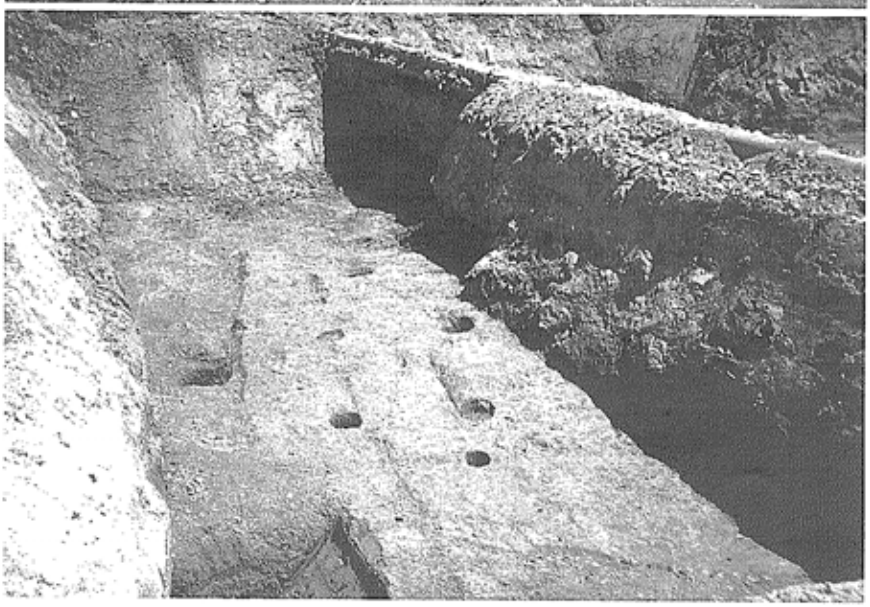
SE2 石組遺構
（北より）

SE3 井戸跡
（西より）

写真図版 2

SE2 石組遺構
SE3 井戸跡
（南より）

SD4 溝跡
土層断面
（東より）



SB5 掘立柱
建物跡
（南より）

写真図版 3

SE03　出土遺物

SE01　出土遺物

旧表土出土遺物

写真図版 4

報告書抄録

ふりがな	みょうだていせき・しもくさこじょうほんまるあとほか
書名	名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第181集
編著者名	天野順陽、西村　力、藤村博之、古川一明
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980　仙台市青葉区本町三丁目8－1　　TEL　022-211-3685
発行年月日	西暦　1999年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みょうだていせき 名生館遺跡	ふるかわしひがしおおさき 古川市東大崎 あざみょうだて 字名生館	042048	042048	38度 36分 34秒	140度 53分 27秒	19981019～ 19981218	6,000	ほ場整備に伴う事前調査
しもくさこじょう 下草古城 ほんまるあと 本丸跡	くろかわぐんだいわちょう 黒川郡大和町 つるすしもくさ 鶴巣下草	044211	23068	38度 25分	140度 52分 40秒	19980824～ 19981024	3,340	ほ場整備に伴う範囲確認調査
てらしたいせき 寺下遺跡	しだぐんさんぼんぎまち 志田郡三本木町 ありがふくろあざやまはたけ 蟻ヶ袋字山畑	044628	33047	38度 31分 10秒	140度 54分 50秒	19980511～ 19980519	124	個人住宅の宅地造成に伴う事前調査
しろいしじょうあと 白石城跡	しろいししますおかまち 白石市益岡町	042064	02197	37度 59分 55秒	140度 37分 16秒	19980622～ 19980630	800	運動場建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名生館遺跡	集落跡 墳墓	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代 中近世	Tピット 竪穴住居跡1 円形周溝6 土壙墓5 土器埋設遺構6 粘土採掘跡3 甕棺1、土壙3 溝跡	石器荒屋型彫器 縄文土器 天王山式土器 南小泉式土器、須恵器 鉄製品 土師器、須恵器 石製品、土製品、陶磁器	 中世名生城の堀跡
下草古城本丸跡	集落・城跡	中近世	掘立柱建物跡16 門跡1、塀跡1 井戸跡9、土壙23、溝跡24	陶磁器、かわらけ 石鉢、古銭 、鉄釘	下草古城本丸
寺下遺跡	集落	縄文 古代	竪穴住居跡1 炉跡2、土壙8 溝跡5	縄文土器、石器 土師器	
白石城跡	城跡	近世	掘立柱建物跡1 井戸跡2、 石組遺構1 溝跡2	陶磁器 瓦	白石城跡　中之丸